

秋田県文化財調査報告書第527集

才ノ神遺跡

—河川改修事業(芋川)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩鏡」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7 cm、凝灰岩。

さい の かみ
才 ノ 神 遺 跡

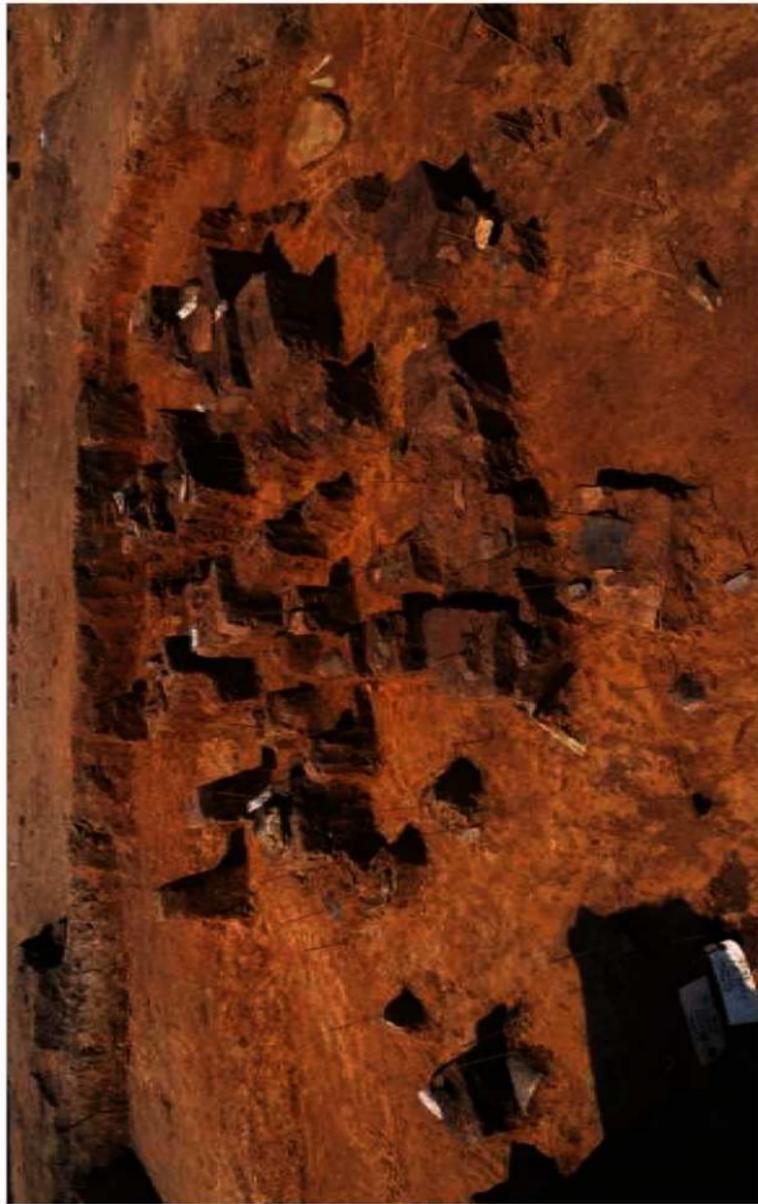
—河川改修事業(芋川)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023・3

秋 田 県 教 育 委 員 会



才ノ神遺跡全景（南側上空から）



旧石器時代の石器集中部 (1) (南から)

序

本県には、これまでに発見された5,100か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は、県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、芋川流域においては度重なる浸水被害への対策として、堤防整備を推進する河川改修事業が行われています。秋田県教育委員会では、こうした災害対策事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、河川改修事業（芋川）に先立って、令和元年度と2年度に由利本荘市において実施したオノ神遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、約3万年以上前に遡る旧石器時代の石器集中部や、縄文時代前期の捨て場、縄文時代中期の竪穴建物跡などが見つかり、旧石器時代から縄文時代にかけて、芋川沿いで暮らした人々の営みの一端が明らかとなりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県由利地域振興局建設部、由利本荘市教育委員会などをはじめ関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

秋田県教育委員会

教育長 安田 浩 幸

例 言

1 本報告書は、河川改修事業（芋川）に伴い、令和元年と令和2年度に調査した、由利本荘市所在のオノ神遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺 跡 名 オノ神遺跡（さいのかみいせき）

遺 跡 略 号 6SNK

遺跡所在地 秋田県由利本荘市徳沢字オノ神63-2外

調査期間 令和元年7月1日～9月26日、令和2年5月12日～9月30日

調査面積 1,250㎡

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 巴 亜子（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主任）令和元年・2年度

赤上 秀人（秋田県埋蔵文化財センター調査班 学芸主事）令和2年度

大上 立朗（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）令和元年度

総務担当者 柴田 卓也（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和元・2年度

川本健太郎（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和3・4年度

柴田 優（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和2・3年度

高橋 皇司（秋田県埋蔵文化財センター総務班 副主幹）令和4年度

武藤 靖（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）令和元年度

皆川 哲（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主任）令和3・4年度

渡部 昂（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主事）令和元・2年度

調査協力機関 秋田県由利地域振興局建設部、由利本荘市教育委員会

3 第5図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「本荘」（平成21年発行）、第2図は、秋田県建設部提供の1/1,000工事用図面をそれぞれ元に作成した。

4 発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。

水準測量及び方眼杭設置業務：令和元年度 株式会社 藤和測量設計

令和2年度 有限会社 村上測量事務所

遺跡空中写真撮影：令和元年度・2年度 株式会社 みどり光学社

土器実測及びトレース（一部）：令和4年度 株式会社 シン技術コンサル

石器三次元モデル・実測及びトレース（一部）：令和4年度 株式会社 ラング

5 理化学的分析は以下の業者に委託した。

令和元年度 株式会社バレオ・ラボ 放射性炭素年代測定（1）・炭化材樹種同定（1）

令和2年度 パリノサーヴェイ株式会社 放射性炭素年代測定（2）・炭化材樹種同定（2）・

花粉分析・黒曜石産地推定分析・テフラ分析

6 本書の執筆は、巴亜子、大上立朗、吉川耕太郎、赤上秀人、赤星純平、小松和平、村上義直が担当し、編集は村上義直、赤星純平が担当した。分担は以下の通りである。

巴亜子・大上立朗：第1章、第3章第3節遺構

吉川耕太郎：第3章第2節・第3節1（1）2、第5章1旧石器

赤上秀人：第2章第1節・2節

赤星純平：第3章第3節遺構出土遺物（石器）、第3章第4節5遺構外出土遺物（石器）、第5章2縄文時代石器

小松和平：第3章第3節遺構出土遺物（土器）、第3章第4節5遺構外出土遺物（土器）、第5章2縄文時代土器

村上義直：第5章2縄文時代使用領域の変遷

遺物の写真撮影は、赤星純平、小松和平が行った。

- 7 発掘調査及び整理作業において、ご指導・ご助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。

石川恵美子、神田和彦、小松正夫、佐川正敏、中村由克、長谷川潤一、三原裕姫子（五十音順）

凡 例

- 1 本報告書に掲載した平面図（遺構実測図）の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標北を示す。座標北から磁北の偏角は西偏7°5"である。

- 2 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査と整理作業の過程で変更や欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は次のとおりである。

（遺構）

S I：竪穴建物跡 S K I：竪穴状遺構 S K：土坑 S N：焼土遺構

S D：溝跡 S R：土器埋設遺構 S T：土器集中範囲 S X：性格不明遺構

S K P：柱穴様ビット

（遺物）

K n：ナイフ形石器 B u：彫刻刀形石器 D r：錐状石器

S e：削器 R F：二次加工ある石刃・剥片 M F：微細剥離ある石刃・剥片

C o：石核・残核 B L：石刃 F：剥片 C i：碎片 R m：原石

- 3 遺跡基本層序はローマ数字で、遺構内層位はアラビア数字で表記した。また土色記述には農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。

- 4 遺構の法量について、()内の数値は、それぞれ残存値・復元推定値を表す。

- 5 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を表示した。

- 6 遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方向及び距離を示している。それぞれEWSNは東西南北を示し、例えば「MA50+W20m」であれば、MA50杭から真西に2mの地点であることを示す。

- 7 遺構図・遺物図の網掛け等の凡例は各頁に設けた。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 整理作業の経過	7
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 遺跡の立地と外観	8
第3節 歴史的環境	11
第3章 調査の方法と成果	16
第1節 調査の方法	16
第2節 遺物の分類	18
第3節 基本層序	23
第4節 検出遺構と遺物	27
1 概要	27
2 旧石器時代	27
3 縄文時代の遺構と遺物	93
(1) 竪穴建物跡	93
(2) 竪穴状遺構	111
(3) 土坑	120
(4) 土器埋設遺構	133
(5) 焼土遺構	134
(6) 溝状遺構	140
(7) 性格不明遺構	140
(8) 土器集中範囲	152
(9) 柱穴様ピット	162
4 近世の遺構と遺物	162
(1) 土坑	162
5 遺構外出土遺物	165
第4章 理化学的分析	205
第1節 放射性炭素年代測定(1)	205
第2節 炭化材樹種同定(1)	208
第3節 放射性炭素年代測定(2)	211
第4節 炭化材樹種同定(2)	212
第5節 花粉分析	213
第6節 黒曜石産地推定分析	214
第7節 テフラ分析	216
第5章 総括	219

図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	工事計画と調査範囲	2
第3図	地形区分図	9
第4図	オノ神遺跡周辺の表層地質図	10
第5図	オノ神遺跡と周辺遺跡位置図	15
第6図	グリッド配置図	17
第7図	オノ神遺跡基本土層位置図・基本土層図(1)	25
第8図	オノ神遺跡基本土層図(2)	26
第9図	オノ神遺跡遺構配置図(Ⅳ層)	28
第10図	オノ神遺跡遺構配置図(Ⅶ層)	29
第11図	接合個体1-1(1)	33
第12図	接合個体1-1(2)	34
第13図	接合個体1-1(3)	35
第14図	接合個体1-1(4)	36
第15図	接合個体1-2(1)	37
第16図	接合個体1-2(2)	38
第17図	接合個体1-2(3)	39
第18図	接合個体1-2(4)	40
第19図	接合個体1-2(5)	41
第20図	接合個体2(1)	42
第21図	接合個体2(2)	43
第22図	接合個体3(1)	44
第23図	接合個体3(2)	45
第24図	接合個体4	46
第25図	接合個体5(1)	47
第26図	接合個体5(2)	48
第27図	接合個体5(3)	49
第28図	接合個体5(4)	50
第29図	接合個体6(1)	51
第30図	接合個体6(2)	52
第31図	接合個体6(3)	53
第32図	接合個体6(4)	54
第33図	接合個体8(1)	55
第34図	接合個体8(2)	56
第35図	接合個体8(3)	57
第36図	接合個体9(1)	58

第37図	接合個体9 (2)	59
第38図	接合個体9 (3)	60
第39図	接合個体9 (4)	61
第40図	接合個体9 (5)	62
第41図	接合個体10 (1)	63
第42図	接合個体10 (2)・14・15・16・17・18	64
第43図	接合個体19 (1)	65
第44図	接合個体19 (2)・20・21	66
第45図	接合個体22・23・24	67
第46図	接合個体26 (1)	68
第47図	接合個体26 (2)	69
第48図	接合個体28	70
第49図	接合個体30	71
第50図	接合個体33・34・37・39・40	72
第51図	出土石器 (ナイフ形石器①)	77
第52図	出土石器 (ナイフ形石器②)	78
第53図	出土石器 (ナイフ形石器③)	79
第54図	出土石器 (ナイフ形石器④)	80
第55図	出土石器 (ナイフ形石器⑤・彫器・残核・二次加工・微細加工・石刃)	81
第56図	ナイフ形石器・石刃長幅比散布図	82
第57図	器種別石器分布図	83
第58図	器種別石器分布・地形図	84
第59図	接合別石器分布・地形図	85
第60図	各種接合個体別石器分布図	86
第61図	各種器種別石器分布図	87
第62図	SI22竪穴建物跡 (1)	94
第63図	SI22竪穴建物跡 (2)	95
第64図	SI22竪穴建物跡出土遺物 (1)	96
第65図	SI22竪穴建物跡出土遺物 (2)	97
第66図	SI28竪穴建物跡 (1)	99
第67図	SI28竪穴建物跡 (2)	100
第68図	SI28竪穴建物跡出土遺物 (1)・遺構外出土土器 (1)	101
第69図	SI28竪穴建物跡出土遺物 (2)	102
第70図	SI28竪穴建物跡出土遺物 (3)	103
第71図	SI28竪穴建物跡出土遺物 (4)	104
第72図	SI40竪穴建物跡 (1)	105
第73図	SI40竪穴建物跡 (2)	106
第74図	SI40竪穴建物跡出土遺物	107
第75図	SKI29竪穴状遺構	108

第76図	SKI29竪穴状遺構出土遺物 (1)	109
第77図	SKI29竪穴状遺構出土遺物 (2)	110
第78図	SKI29竪穴状遺構出土遺物 (3)	111
第79図	SKI33竪穴状遺構	112
第80図	SKI33竪穴状遺構出土遺物	113
第81図	SKI37竪穴状遺構	114
第82図	SKI37竪穴状遺構出土遺物	115
第83図	SKI39竪穴状遺構	116
第84図	SKI41竪穴状遺構	117
第85図	SKI43竪穴状遺構	118
第86図	SKI43竪穴状遺構出土遺物	119
第87図	SK02・12・13・15土坑	125
第88図	SK19・26・36土坑、SKP1074柱穴様ビット	126
第89図	SK38・42・46土坑	127
第90図	SK50・51・52・53土坑	128
第91図	SK56・63・64・65・66土坑	129
第92図	SK02・12・13・19・26・52・64土坑出土遺物	130
第93図	SK42・46土坑出土遺物	131
第94図	SR16土器埋設遺構、SN06・20・21・27焼土遺構	136
第95図	SN30・32・44・47・48焼土遺構	137
第96図	SN55・58・59焼土遺構、SD61溝状遺構	138
第97図	SR16土器埋設遺構・SD61溝状遺構出土遺物	139
第98図	SX67性格不明遺構	141
第99図	ST62土器集中範囲	142
第100図	ST62土器集中範囲出土遺物 (1)	143
第101図	ST62土器集中範囲出土遺物 (2)	144
第102図	ST62土器集中範囲出土遺物 (3)	145
第103図	ST62土器集中範囲出土遺物 (4)	146
第104図	ST62土器集中範囲出土遺物 (5)	147
第105図	ST62土器集中範囲出土遺物 (6)	148
第106図	ST62土器集中範囲出土遺物 (7)	149
第107図	ST62土器集中範囲出土遺物 (8)	150
第108図	ST62土器集中範囲出土遺物 (9)	151
第109図	ST62土器集中範囲出土遺物 (10)	152
第110図	柱穴様ビット (1)	154
第111図	柱穴様ビット (2)	155
第112図	柱穴様ビット (3)	156
第113図	柱穴様ビット (4)	157
第114図	柱穴様ビット (5)	158

第115図	SKP1022・1060・1093・1118・1121・1128・1132・1133柱穴様ビット出土遺物	159
第116図	SK03・04土坑	163
第117図	SK05・07土坑	164
第118図	遺構外出土土器 (1)	168
第119図	遺構外出土土器 (2)	169
第120図	遺構外出土土器 (3)	170
第121図	遺構外出土土器 (4)	171
第122図	遺構外出土土器 (5)	172
第123図	遺構外出土土器 (6)	173
第124図	遺構外出土土器 (7)	174
第125図	遺構外出土土器 (8)	175
第126図	遺構外出土土製品	176
第127図	剥片石器層位別分布図	181
第128図	残核・礫石器分布図	182
第129図	遺構外出土石器 (1)	184
第130図	遺構外出土石器 (2)	185
第131図	遺構外出土石器 (3)	186
第132図	遺構外出土石器 (4)	187
第133図	遺構外出土石器 (5)	188
第134図	遺構外出土石器 (6)	189
第135図	遺構外出土石器 (7)	190
第136図	遺構外出土石器 (8)	191
第137図	遺構外出土石器 (9)	192
第138図	遺構外出土石器 (10)	193
第139図	顕微鏡写真	193
第140図	暦年較正結果	207
第141図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真	210
第142図	暦年較正結果	212
第143図	黒曜石産地一覧	216
第144図	炭化材・花粉化石	218
第145図	テフラ	218
第146図	遺跡内使用領域の変遷 (1)	222
第147図	遺跡内使用領域の変遷 (2)	222
第148図	層位別石材利用	225
第149図	遺構内時期別石材利用	225

表目次

第1表	オノ神遺跡周辺の遺跡一覧表(1)	13
第2表	オノ神遺跡周辺の遺跡一覧表(2)	14
第3表	オノ神遺跡旧石器組成表	88
第4表	旧石器観察表(1)	89
第5表	旧石器観察表(2)	90
第6表	旧石器観察表(3)	91
第7表	旧石器観察表(4)	92
第8表	柱穴様ピット一覧表(1)	160
第9表	柱穴様ピット一覧表(2)	161
第10表	出土石器一覧	178
第11表	各種石器分類別一覧(1)	179
第12表	各種石器分類別一覧(2)	180
第13表	出土石器石材一覧	195
第14表	遺構内出土土器観察表(1)	196
第15表	遺構内出土土器観察表(2)	197
第16表	遺構内出土土製品観察表	198
第17表	遺構内出土石器観察表(1)	198
第18表	遺構内出土石器観察表(2)	199
第19表	遺構内出土石器観察表(3)	200
第20表	遺構外出土土器観察表(1)	200
第21表	遺構外出土土器観察表(2)	201
第22表	遺構外出土土製品観察表	202
第23表	遺構外出土石器観察表(1)	203
第24表	遺構外出土石器観察表(2)	204
第25表	遺構外出土石器観察表(3)	204
第26表	測定試料及び処理	205
第27表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	206
第28表	樹種同定結果一覧	208
第29表	放射性炭素年代測定・樹種同定結果	212
第30表	花粉分析結果	213
第31表	黒曜石原産地試料一覧	214
第32表	スペクトル強度と判別指標値	216
第33表	黒曜石判定結果	216
第34表	テフラ分析結果	216
第35表	層位別石材利用一覧	225
第36表	遺構内時期別石材利用一覧	225

図版目次

巻頭図版1 遺跡全景 オノ神遺跡全景

巻頭図版2 旧石器時代の石器集中部(1)

図版1	旧石器時代の石器集中部(2)	227
図版2	旧石器時代の石器集中部(3)	228
図版3	接合個体1	229
図版4	接合個体2・3・4	230
図版5	接合個体5・6	231
図版6	接合個体8・9・10・19	232
図版7	接合個体14~18・20~24・26・28・30・33・34・37・39・40、ナイフ形石器(1)	233
図版8	ナイフ形石器(2)・彫器・残核	234
図版9	縄文時代の遺構 竪穴建物跡・竪穴状遺構	235
図版10	縄文時代の遺構 竪穴状遺構・土坑	236
図版11	縄文時代の遺構 土坑	237
図版12	縄文時代の遺構 土坑・土器埋設遺構・焼土遺構	238
図版13	縄文時代の遺構 焼土遺構	239
図版14	縄文時代の遺構 焼土遺構・溝状遺構	240
図版15	縄文時代の遺構 土器集中範囲	241
図版16	縄文時代の遺物 竪穴建物跡出土遺物(1)	242
図版17	縄文時代の遺物 竪穴建物跡出土遺物(2)	243
図版18	縄文時代の遺物 竪穴建物跡出土遺物(3)・遺構外出土遺物(1)	244
図版19	縄文時代の遺物 竪穴建物跡出土遺物(4)	245
図版20	縄文時代の遺物 竪穴状遺構出土遺物(1)	246
図版21	縄文時代の遺物 竪穴状遺構出土遺物(2)・土坑出土遺物(1)	247
図版22	縄文時代の遺物 土坑出土土器(2)・土器埋設遺構・溝状遺構出土遺物	248
図版23	縄文時代の遺物 土器集中範囲出土遺物(1)	249
図版24	縄文時代の遺物 土器集中範囲出土遺物(2)	250
図版25	縄文時代の遺物 土器集中範囲出土遺物(3)	251
図版26	縄文時代の遺物 土器集中範囲出土遺物(4)・柱穴様ビット出土遺物	252
図版27	縄文時代の遺物 土器集中範囲出土遺物(5)	253
図版28	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(2)	254
図版29	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(3)	255
図版30	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(4)	256
図版31	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(5)	257
図版32	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(6)	258
図版33	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(7)	259
図版34	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(8)	260
図版35	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(9)	261
図版36	縄文時代の遺物 遺構外出土遺物(10)	262

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

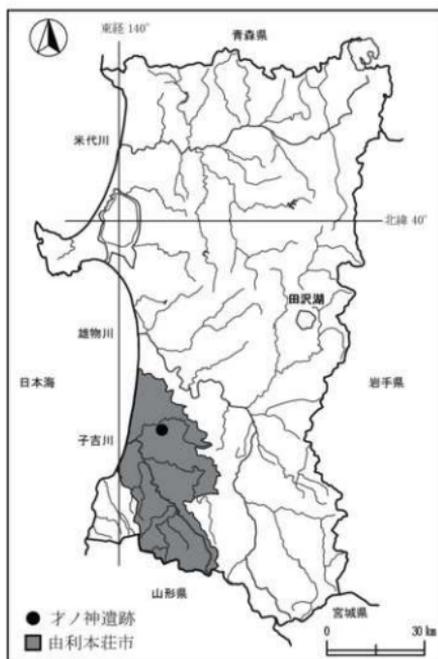
オノ神遺跡は、昭和51年から52年にかけて行われた県の出羽丘陵開発に伴う遺跡詳細分布調査で旧大内町域を担当した小松正一氏により発見された。これまで昭和54年と平成29年に発掘調査が行われており、昭和54年には国道105号線バイパス工事に伴い県教育委員会により、平成29年には本荘消防署大内分署建設事業に伴い由利本荘市教育委員会により事前発掘調査が行われている。

今回の発掘調査は、芋川の河川改修工事に伴う緊急発掘調査として実施された。子吉川の支流である芋川は、大規模で広域的な浸水被害が恒常的に発生する河川で、氾濫による道路冠水により流域を通る国道105号が通行止めとなり、住民生活に多大な影響を及ぼす事例が度々発生している。近年では、平成29年7月の梅雨前線の活性化に伴う豪雨で遺跡の所在する徳沢地区近隣の松本地区において、数十軒の床上・床下浸水や道路冠水などの被害が生じている。

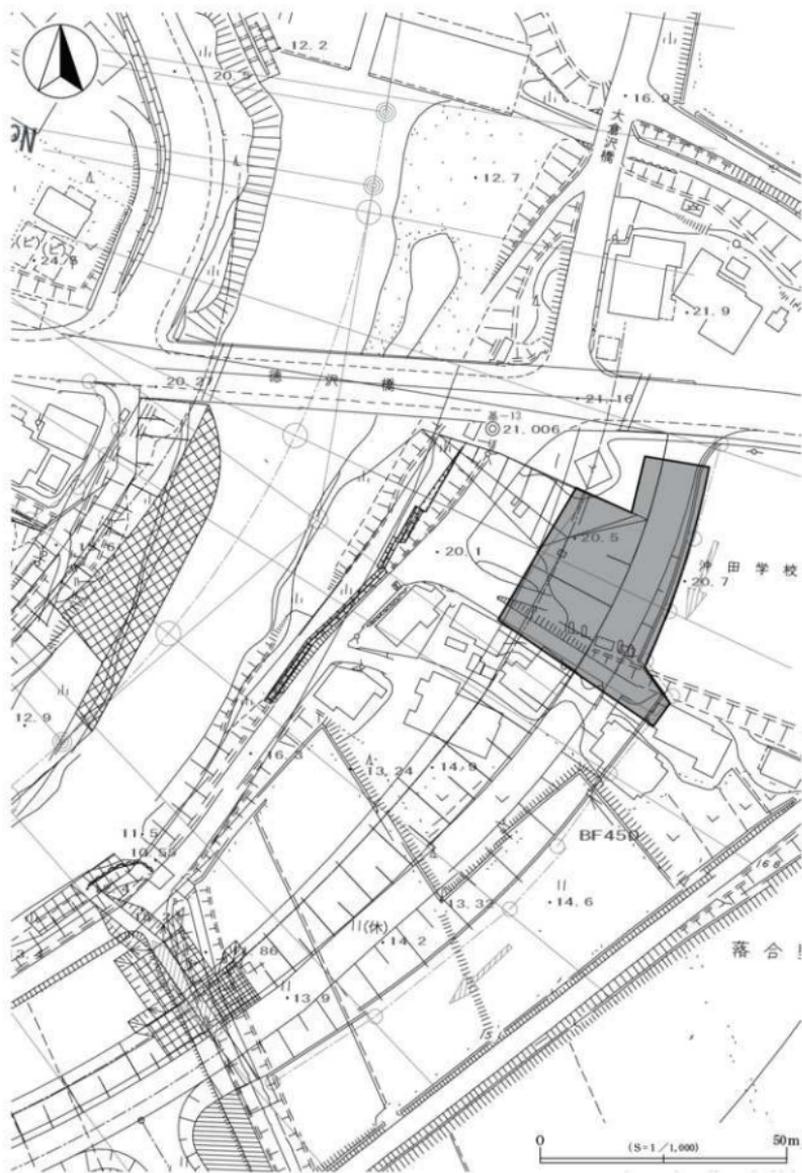
以上のような状況から、秋田県では芋川の堤防整備や河川改修といった緊急災害復旧事業を行うこととなった。

事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、由利地域振興局より秋田県教育委員会に調査の依頼があり、工事主体者である秋田県建設部と県教育庁生涯学習課文化財保護室との間で協議を行い、連絡調整していくこととなった。

秋田県教育委員会では、平成28年度に芋川河川改修工事に伴う遺跡分布調査を行い、平成29年秋に4,450㎡を対象に遺跡確認調査を実施した。結果、1,250㎡が本発掘調査の必要な範囲と判断され、事業計画との関連から令和元年度から2カ年にわたり発掘調査を行うこととなった。



第1図 遺跡位置図



第2図 工事計画と調査範囲

第2節 調査の経過

オノ神遺跡の発掘調査は、令和元年7月1日から9月26日までと、令和2年5月12日から9月30日までの期間で行われた。調査の経過は、以下の通りである。

(令和元年度)

【第1週】7月1日～7月5日

機材搬入、ベルトコンベアの調査区搬入等の環境整備。

3日、調査区上段の壁立てを行い、東端断面の写真撮影、分層、記録を作成。深掘りではI～IVb層まで確認。確認調査トレンチの埋土除去。遺構および遺物を確認。

【第2週】7月8日～7月12日

LT47IVa層よりSK02を検出。9日、調査区上段西部の表土除去。表土直下で黒褐色土の遺物を含む方形の広がりを確認。

【第3週】7月16日～7月19日

MB45、MC45付近の黒褐色土上の盛土を除去。盛土中より多数の石器とともに環状土製品が出土。MC45付近の黒褐色土範囲の盛土直下より暗褐色土の広がりを確認。SK02の完掘、写真撮影。石器が斜めに埋設されている様子を確認。

【第4週】7月22日～7月25日

SK02精査終了。

【第5週】7月29日～8月2日

調査区上段西側攪乱の掘り下げを行い、MA49、LT49付近から環状土製品が出土。

確認調査1トレンチ掘り下げを行い、縄文中期の赤彩土器を検出。LR43、LQ43、LR42付近でもIVb層中より赤彩土器を検出。LQ42・43、LR42・43、LP42・43付近IVb層より大木7b式土器が出土。LQ43付近IVb～c層よりSR16を検出、半蔵した結果、大木7～8式土器であることが判明。

【第6週】8月5日～8月8日

確認調査1トレンチ、V層掘り下げ。SR16遺物取り上げ。深鉢が逆位に据えられていることを確認。大木7b～8式と推察。土器中から頁岩剥片が出土。

【第7週】8月19日～8月22日

調査区上段東部北側のIVc層は、南東側に向かって緩やかに傾斜していることを確認。SK19を完掘後、写真撮影。

【第8週】8月26日～8月30日

IVb層の掘り下げが9割終了し、IVc層で遺構と思われる円形や溝状のプランを確認。同じIVc層中から、磨製石斧や石錘が出土。また、MA44・45より焼土を検出。周辺に立ち上がりなどは認められ

ないが竪穴建物跡の可能性を視野に検討。

【第9週】 9月2日～9月6日

調査区全体をIVc層までの掘り下げの結果、竪穴住居、焼土などを複数検出。SI22では炭化物が多く、焼失住居の可能性を確認。

SKI29は南東側で概ね底面を検出。LR43付近では土器が横倒しの状態でまとまって出土。土器の時期は大木7～8式と推察。現地見学会の資料を作成し、現地見学会のチラシを配布。現地見学会で展示する土器の接合、遺物の選別を実施。

【第10週】 9月9日～9月13日

焼失住居の可能性のあるSI22で炭化物検出状況図を作成に着手。LO45・46付近でSI40を確認。床面から円礫が円弧状に並んで出土し、内側に焼土が確認できることから石囲炉と判断。SI28・40では石囲炉と考えられる円礫が出土。

【第11週】 9月17日～9月21日

SI22では引き続き炭化物の出土状況図作成を行い、作成後、取り上げ実施。SI28では、中央付近からは石囲炉を検出。SKI33では炉を検出し、断ち割りにより、土坑状の掘り込みを持つことが判明。大木8b式土器が出土。SI40では土器埋設石囲炉を検出。SI28では当初床面と判断していた面より下層から石囲炉が出土。

※21日 現地見学会実施 県民参加人数54名

【第12週】 9月24日～9月26日

炉の検出されている竪穴建物跡で炉の精査を行い、北側からは地床炉を中心に柱穴が分布する竪穴建物跡を確認。SI22では再度床面の検出を行い、範囲が広がることが判明。複式炉の精査を行い、土器埋設部の土器は大木10式期の土器であることが判明。SI28床面で方形の石囲炉を確認。また、埋土中位の壁際から赤彩土器と思われる土器片や小型の土器が出土。SI40の土器埋設石囲炉に使用されている土器は大木8b式期の土器であることが判明。

※24・25日 空中写真撮影（24日は強風により途中で断念）

（令和2年度）

令和2年6月2日から同年9月30日まで実施。5月18日から5月22日にかけてバックホウによる表土除去、5月25日から29日にかけて測量用杭打設等の諸準備を経て、6月2日から人力による発掘調査を開始した。

【第1週】 6月2日～6月5日

発掘機材の搬入と、事務所ならびに調査区周辺の環境整備、ベルトコンベアの設置等を実施。主な調査内容では、調査区境界の断面精査後、基本層序を確認。

【第2週】 6月8日～6月12日

北側西壁断面写真撮影、断面より理化学分析用のサンプル採取。LT43より焼土遺構SN55を確認。また、LT44より緑色岩（アオトラ石）製の磨製石斧が出土。11日、雨天により待機。午後、作業中止。

【第3週】6月15日～6月19日

各断面の分層を行い、基本土層を決定。16日、由利地域振興局建設部工藤氏来跡。菊池建設来跡。今年度、造成した駐車場についての説明及び現況確認。

【第4週】6月22日～6月25日

調査区全体のⅦa層除去及びⅦc層の検出状況の全景写真撮影。Ⅶ層の掘り下げ中に、石楡や石筍が出土。気温の差が大きいため、作業員の体調に気を配り無理のない調査を行う。

【第5週】6月29日～7月3日

調査区西側で、Ⅶa層及びⅦc層の掘り下げ。Ⅶa層は斜面の肩に厚く堆積しており、LS49で遺物が集中。下位のⅦc層でも遺物が集中するため、捨て場の可能性が考えられる。MB44より異形石器が出土。Ⅸ層黒色土から頁岩の石核が出土。

7月2日、雨天により安全確保が困難なため、午前中で作業を中断。午後からは、遺物洗浄、草刈りや機材の手入れなどの環境整備を行う。

【第6週】7月6日～7月10日

MB44からは縄文施文上に、沈線で格子状に文様を描く縄文時代前期と考えられる土器が出土。連日の降雨により、調査区内の環境が悪化。安全に配慮しながら、慎重に調査を進める。

【第7週】7月13日～7月17日

調査区西側のST62の遺物出土状況の写真撮影、写真実測・レベリングを行い、順次取り上げ。ST62以外では、Ⅶc層の掘り下げと、Ⅷ層もしくはⅨ層の検出。また、調査区北側で、Ⅸ層を検出。Ⅸ層上面では、剥片が複数まとまって出土しており、デポの可能性。調査区中央付近ではⅦc層の掘り下げを実施。中央付近が厚く堆積しているため掘削に時間がかかる状態。LS43よりSK63を確認。埋土中から人頭大の頁岩原石を含む。LT51より出土した石皿に赤色顔料の付着を確認。

【第8週】7月20日～7月22日

調査区西側で、ST62の遺物の取り上げ。遺物は土器が主体であり、剥片石器も含む。SK63から、頁岩の原石以外にも複数の礫を埋土中から確認。

【第9週】7月27日～7月30日

調査区中央にⅦc層及びⅧ層の掘り下げ。27日、雨天により15時で作業終了。28日、芋川の増水により作業員駐車場までの道路で氾濫が起きたため午前で作業中止。降雨による天候不順がしばらく続いている状況。

【第10週】8月3日～8月7日

調査区全域でⅪ層（地山）を広く精査。Ⅺ層上面での遺構は少なく、僅かに北側と西側に柱穴様ビットを確認。SK63では、埋土中の頁岩の原石を確認した。Ⅺ層中からは、SK63と同様に頁岩の原石を確認（SK65）。SK65は、僅かに埋土が残存し、土坑の中心で原石を確認した。LR45の地山検

出面より10cm深い地点で頁岩の剥片数点が出土。

【第11週】 8月18日～8月21日

Ⅸ・Ⅹ層の掘り下げ。調査区北側及び西側のⅨ・Ⅹ層の掘り下げは終了し、地山であるⅪ層を検出。北側では、Ⅸ・Ⅹ層を掘り下げ地山であるⅪ層を検出。Ⅺ層上面では遺構は認められず、調査終了。LS45Ⅺ層より、石刃等が出土。石刃を含む石集中範囲はLS45の西側に広がっていることを確認。周辺で、地山を掘り下げた結果、基盤である女川層上面までは、約20cmあることが判明。気温が連日30℃以上の真夏日が続く。熱中症対策に留意しながら調査を進める。

【第12週】 8月24日～8月27日

LS45付近の石刃を含む石器ブロックの掘り下げを進める。LS45で確認した石刃を含むブロックは、記録を取り遺物の取り上げ。自然面を持つ剥片やチップ、石刃等が含まれる。調査区中央周辺及び南側のⅨ層黒色土、Ⅹ層の掘り下げを行い、LQ48、LT43より剥片やチップが出土。

石刃ブロックの南側に設定した地山断面観察用のトレンチ断面で、周水河現象を確認。調査区の西側でⅨ層（早期黒色土）の下に灰白色粒を多量に含む褐色土層が堆積していることを確認。この褐色土層は、上流からの再堆積層であると考え、次週以降、バックホウで掘削する予定。

LQ45・48では、地山層から剥片やチップが出土しており、別のブロックが広がる可能性。残暑が厳しいため熱中症に注意しながら、調査を進める。

【第13週】 8月31日～9月4日

バックホウにより、調査区東側の沢埋土の掘り下げと併せて重機で調査区北側のⅪ層（地山）の掘り下げを行う。旧石器時代の遺物等は認められず。遺物の有無を見極めるためにLN50にトレンチを設定し、断面及び底面を確認。

調査区東側では縄文時代早期より古い沢を確認しており、バックホウによる掘り下げの結果、芋川の氾濫によるものと考えられる沢部の侵食と氾濫性堆積物を確認。沢の東断面では複数回の侵食痕を確認。東西の土層観察ベルトでは、沢埋土の下に黄褐色の再堆積層が存在することが明らかになる。

調査区西側では、Ⅹ層（漸移層）、Ⅺ層（地山）を掘り下げ遺物の出土の有無とその広がりを確認。LR48・49で漸移層及び地山から剥片等が数点出土しているが、石刃は含んでいない。調査区中央では、Ⅸ層（黒色土）とⅩ層（漸移層）の掘り下げを行う。LR45の漸移層及び地山上面より石刃等を確認。LS45に広がる石集中範囲の広がりに関連したものと思われる。

残暑が厳しいため熱中症に注意し、随時休憩を挟みながら作業を行う。

【第14週】 9月7日～9月11日

8日に空中写真撮影を行う。撮影終了後、旧石器ブロックの広がりをつかむために、ベルトコンベアを西側に移動し、調査区中央南側に残存するⅨ層（黒色土）、Ⅹ層（漸移層）の掘り下げと中央のLS45付近のⅪ層（地山）の掘り下げを進める。

調査区中央の旧石器集中出土範囲では、LS45に残されていた遺物取り上げ後の土柱の掘削を行い、その中からナイフ形石器が出土。また、LS46でもⅪ層の掘り下げ。

LR43のⅪ層より頁岩の原石の取り上げ。重量は70kg以上あり、周辺に掘り込みは認められず。

【第15週】9月14日～9月18日

調査区南側のⅫ層の掘り下げを行い、縄文時代の調査はすべて終了。石器ブロックであるLS45に隣接するグリッドの掘り下げを行い、石器ブロックは標高の低い東側に広がることを確認。調査区東側、沢の深部の掘り下げをバックホウで行う。

調査区南端と南西側に残存していた、Ⅸ層の掘り下げを実施。Ⅸ層中からは剥片が出土。LS45を中心とする石器ブロックの広がりを確認するために、隣接するグリッドのⅫ層の掘り下げを行う。LT46では、基盤層上面まで掘り下げたが旧石器時代の遺物は出土しなかったが、標高の低い東側では、石刃や石刃核、剥片が出土。また、基盤に近い砂質～砂利質土の直上からも遺物が出土し、遺物の広がりから、等高線に平行ではなく、直交するようなブロックと考えられる。

【第16週】9月23日～9月25日

LS45を中心とする旧石器時代の石器集中範囲は、周辺のグリッドの掘り下げが終了。石器ブロックは、LS・LR45に絞られることが明らかになる。LR45は、西側に遺物が多く分布する傾向が認められる。石器ブロックの北側では砂層中に頁岩が含まれていることが明らかになる。

※9月23日から遺跡見学会を3日間実施。23日56名、24日28名、25日5名、合計89名。

【第17週】9月23日～9月30日

LR47付近で地山下層より、頁岩の原石を多く含む礫群を確認。LR45では、剥片と石刃が出土。LR46の礫の間より炭化物が出土。地山層のサンプルを採取。遺物類は記録作成後、取り上げ。調査区中央に東西方向のトレンチを設定し、バックホウで掘り下げ。基盤の女川層が西から東にかけて傾斜していることを確認。30日、調査区南側に進入防止のロープを設置等及び片付け、発掘器材等のトラックへ積み込み等を行い、発掘調査の全工程を終了。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和元年10月から令和5年3月まで実施した。

調査の記録画像は、調査終了後速やかに台帳化した。また、必要に応じて現像を行い、図版作成に備えた。実測図等記録図面は、調査終了後に調査見解と併せて点検・検討を行った。問題や不備があるものは、第2原因作成の段階で図や俯瞰画像等を基に修正を施した。完成後の第2原因図は、デジタルトレースを行い、版組に備えた。

遺物洗浄と注記作業は各年度の調査終了後速やかに行い、遺物の分類や接合・復元等作業を行った。接合作業にあたり、脆弱な土器に対しては樹脂含浸による強化後に作業を行った。土器の接合は令和3年度にはほぼ終了した。旧石器の接合は令和2年度後半から3年度まで断続的に行い、令和4年度初頭までに分類作業を終えた。接合作業では、素材を作出する工程を整理し、剥片剥離技術の復元を目的とした。接合作業をもとに個別別分類を行い、同一母岩中に帰属する製品や残滓を整理することで、母岩ごとに剥片剥離の目的を理解することを狙いとした。

遺物の実測作業は令和3年度から本格的に開始し、令和4年度にかけてデジタルトレースや挿図・図版の版組を行った。令和4年度は旧石器時代の遺物の集計作業や、報告書の執筆・編集を中心に作業を行い、2月上旬に入稿した。整理取壊作業は、主に年度後半から3月下旬にかけて行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

オノ神遺跡が所在する由利本荘市は秋田県の南西部に位置し、北は秋田市、南はにかほ市、山形県酒田市、遊佐町、真室川町、東は大仙市、横手市、湯沢市、羽後町と接し、西は日本海に面している。南に標高2,236mの烏海山、東に出羽丘陵を背し、烏海山麓に源を発し芋川・石沢川等の支川をもつ子吉川が、本荘地域のほぼ中央部を北西に向かって流れ、河口部に本荘平野を形成している。遺跡の西側を流れる芋川は、保呂羽山北麓を水源とし、激しく蛇行しながら出羽丘陵を東から西に流れ、小関川等を併合し子吉川下流部右岸に合流する。流域面積約234km²で子吉川水系の1級河川である。

オノ神遺跡はJ R羽越本線羽後岩谷駅から東方約4kmに位置し、上川大内丘陵地の北麓、芋川左岸の河岸段丘上に立地する。調査地の標高は20~21mである。

遺跡の西側を南流する現河道は、元文5(1740)年、新田開発に伴い開削されたもので、本来の流れは、遺跡の西側に近接地から東に向けて舌状に延びる段丘を迂回するように流れていたようである。

遺跡周辺の地形を大まかに見ると、東から権現山山地(Ia)、鬼倉山山地(Ib)・出羽丘陵に連なる中央丘陵地(IIc)、子吉川、芋川低地(IIIa・IIIc)、北由利・子吉川丘陵地(IIb・II d)があり、その西に本荘・西目砂丘地(IIIg・IIIh)があって海岸線に至っている。遺跡周辺の地質は、主として新第三紀中新世の船川層、女川層、権現山層、本荘地域に鮮新世の天徳寺層、笹岡層、第四紀更新世の段丘堆積物、その上に完新世の沖積層、砂丘堆積物で構成されている。この内、遺跡は女川層を構成する酸性凝灰岩・砂岩を伴う硬質泥岩で未固結の砂・シルト質層上に立地する。女川層は主として硬質泥岩からなり、全地域にわたり酸性凝灰岩をはさみ、ときに砂岩がはさみ、硬質泥岩と互層をなしている。硬質泥岩は珪質明瞭な板状層理を有し、特徴ある岩相を示す。発掘調査前の現況は、旧秋田県立本荘高等学校大内分校グラウンド跡地で、現況は荒蕪地である。調査区南側に芋川の蛇行に伴って形成された小さい盆地上の谷底平野に水田が広がっている。

第2節 遺跡の立地と概観

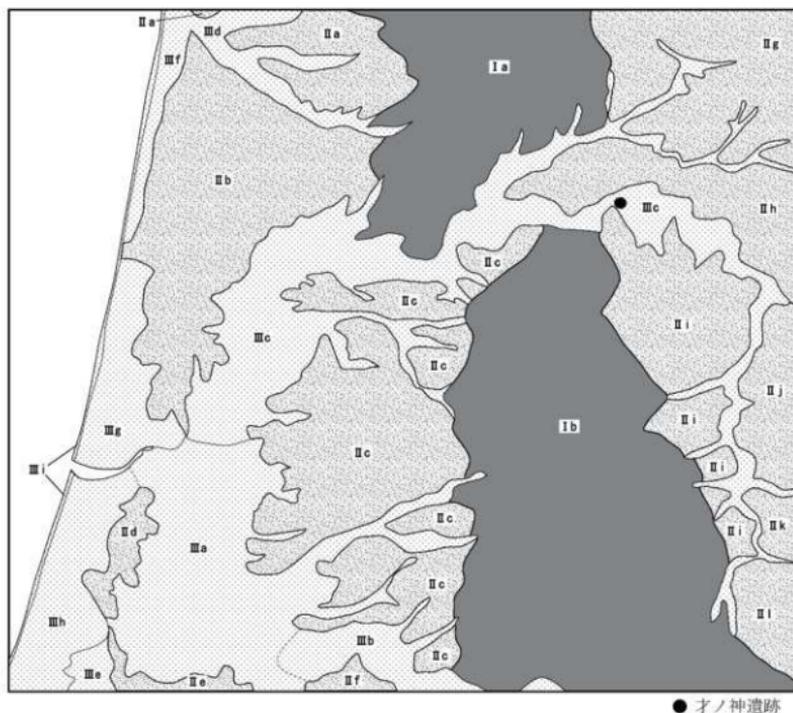
オノ神遺跡は、既述のように子吉川の支流芋川左岸の河岸段丘上に立地する。昭和54(1979)年の国道105号線バイパス工事に伴う調査では、竪穴建物跡11棟、土坑3基などが検出され、縄文時代前期及び中期の集落跡であることが分かった。平成29(2017)年の本荘消防署大内分署建設事業に伴う調査では、前期の竪穴建物跡や土器埋設遺構のほか、早期の焼土遺構なども検出されている。

令和元年度の調査では、縄文時代中期の竪穴建物跡3棟、竪穴状遺構6基、土器埋設遺構1基、焼土遺構12基などが見つかった。令和2年度の調査では、約3万年前の旧石器時代の石器ブロック3カ所、縄文時代前期の捨て場1カ所、焼土遺構、土坑などを確認した。

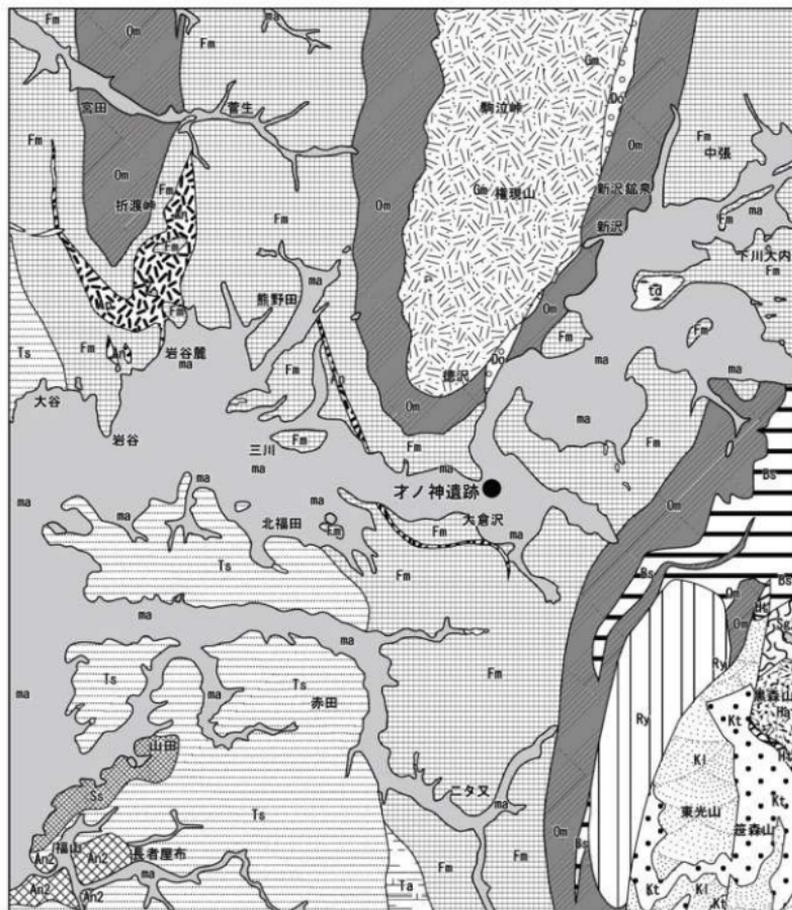
遺跡の西側を流れる芋川は、江戸時代中期に新田開発のため開削され現在の流路となっている。それ以前の流路は、遺跡のある舌状台地の北縁を巡って東端を大きく蛇行して南流していたと考えられる。

今次調査地の調査前の状態は、標高20~21mの平坦面であったが、これは現代の大規模な盛り土によるもので、盛り土が行われる前の地形は、西の丘陵地から東に延びる舌状台地の南側(縁)に形成

された緩斜面で、その下から調査地中央部において北から南に下傾する埋没沢が確認された。埋没沢は地山を侵食したもので、旧石器時代以降に形成されたものであることが調査によって明らかになったが、緩斜面自体は舌状台地の縁から南側の沖積地へ向けて下傾する谷地形に基づくものである。



第3図 地形区分図



未固結堆積物 ma: 泥がち堆積物 td: 泥・砂および礫

半固結堆積物 Ss: 砂岩（シルト岩および礫岩を伴う） Ts: シルト岩 Ta: 砂岩・シルト岩および酸性凝灰岩

固結堆積物 Fm: 暗灰色泥岩（砂岩を伴う） Om: 硬質泥岩（酸性凝灰岩および砂岩を伴う） Gm: 泥岩（酸性凝灰岩を伴う） Sg: 砂岩 Hr: 酸性凝灰岩・火山礫凝灰岩および砂岩（泥岩および重灰を伴う）

An: 複輝石安山岩凝灰角礫岩・火山角礫岩および火山礫凝灰岩

An2: 角閃石複輝石安山岩熔岩・凝灰角礫岩・火山角礫岩など

Bz: 流紋岩熔岩

Bs: 玄武岩凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・火山角礫岩および凝灰岩

Hs: 輝石安山岩凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・火山角礫岩・凝灰岩および熔岩

Kt: 安山岩凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・火山角礫岩および凝灰岩

Kl: 輝石安山岩熔岩および変質輝石安山岩熔岩（玄武岩熔岩および安山岩火山砕屑岩を伴う）

Do: 普通輝石粗粒玄武岩

第4図 オノ神遺跡周辺の表層地質図

第3節 歴史的環境

オノ神遺跡は、旧石器時代から縄文時代の複合遺跡である。以下に、オノ神遺跡周辺の遺跡について概観する。

由利本荘市では13か所で旧石器時代遺跡が確認されており、いずれも後期旧石器時代の遺跡と考えられている。これらのうち、発掘調査された遺跡は、オノ神遺跡の北西8.3kmの衣川流域にある岩城地区の龍門寺茶畑遺跡のみである。その他の主な遺跡として、オノ神遺跡と同じ大内地区の岩洞河原遺跡（12）、西目地区の新林遺跡、四角井戸遺跡、鳥海・矢鳥地区では国見遺跡、桃野遺跡、石刃が採集された前森遺跡がある。これらの遺跡は現在の集落や河川からの比高が大きい丘陵地か、もしくは鳥海山の裾野に立地しており、子吉川水系で採取できる珪質頁岩を素材とし、石刃技法により製作された石器が出土している。発掘調査が実施されたオノ神遺跡では、後期旧石器時代の特徴的な石器の一つであるナイフ形石器が数点出土している。子吉川水系には石器の材料となる良質の珪質頁岩を含む層が広がっているため、今後、さらに旧石器時代遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代の遺跡としては、早期の菖蒲崎貝塚（34）、前期の家ノ前遺跡（17）・土谷白山遺跡（44）・オノ神遺跡（1）、中期のオノ神遺跡（1）・家ノ前遺跡（17）、後期の大浦遺跡（32）・熊野神社遺跡（48）・上谷地遺跡（45）、晩期の大浦遺跡（32）・小友金山遺跡（49）が確認されている。

菖蒲崎貝塚は本遺跡の南南西13kmの子吉川と芋川の合流点、芋川河口左岸に所在する。平成12・13年度の調査で貝層および貝層西側の礫面上で早期末葉の尖底深鉢形土器・石器が出土している。また、平成14年の調査では、最大厚1.4mの貝層の広がり800m以上あることを確認し、貝層の直上と直下で縄文時代早期末葉の土器片が出土している。貝層の99パーセントを汽水性のヤマトシジミが占め、他にウガイ等の魚類、ガン・カモ類に属する鳥類遺体も確認され、日本海沿岸における稀少で大規模な貝塚として重要な遺跡である。南に隣接する子吉川には、子吉川底遺跡がある。ほかに早期の遺跡としては、市北部の松ヶ崎海岸にある神沢遺跡が知られている。

大内地区に所在する家ノ前遺跡は、前期と中期を主体とする遺跡である。平成17年の調査では、前期のフラスコ状土坑17基や中期の竪穴建物跡5棟が検出され、集落跡であることが明らかとなった。このうち中期の集落は、大木10式期のもので、床面の広範囲にわたり炭化材や焼土を検出した焼失家屋と考えられる竪穴建物跡も含まれる。

前期、中期の集落跡であるオノ神遺跡からは、発掘調査により竪穴建物跡、土坑等が検出され、多くの土器や石器が出土している。オノ神遺跡の少し上流側、北東約2kmの小関川と芋川の合流点付近には前期の猫屋敷遺跡がある。山並みから西に延びる舌状台地の先端部分に広がる平坦地にあり、縄文土器と石鏃、石匙などが出土している。このほかに子吉川右岸の土谷白山遺跡では、前期の大木式土器と円筒下層式土器が出土している。

上谷地遺跡は本遺跡の南南東6km、子吉川の右岸、芋川の下流域にある。平成12・13年度の調査で、トチのアク抜きを行った後期の水さらし場遺構が県内で初めて検出された。縄文時代の河川跡からは、早期末から後期に至る各期の土器が出土している。

東由利地区の湯出野遺跡では、後期から晩期の土坑墓を検出し、広範囲に及ぶ捨て場が発見され、人面を掘り込んだ男根型岩偶も出土した。遺跡は昭和53年に「県指定史跡」に指定されている。

弥生時代の遺跡については、西目地区の宮崎遺跡や根子ノ沢遺跡、猿田遺跡、由利地区の上の台遺跡などで弥生土器が採集されている。

古墳時代の遺跡は、沼田遺跡・宮崎遺跡等が確認されている。特に、宮崎遺跡では5～6世紀の古

墳時代に使用された北陸や北海道、近畿地方と関わりのある遺物が出土しており、西目潟周辺域における人的・物的交流を窺わせる。

古代の遺跡としては、大浦遺跡(32)・菖蒲崎貝塚(34)・土谷遺跡(40)・新漆畑遺跡(20)・中ノ目遺跡(21)・新ウキノ遺跡(28)・横山遺跡(29)・大覚遺跡(31)・上谷地遺跡(45)・新谷地遺跡(37)・新谷地西遺跡(55)・岩瀬堤遺跡(39)・大坪遺跡(22)・芋種坂Ⅲ遺跡(24)・堤沢山遺跡(36)・樋ノ口遺跡(27)等が確認されている。これらの遺跡は子古川の右岸にあり、芋川流域とその周辺の丘陵地に分布している。

横山遺跡は、由利本荘市北東の沖積地に所在し、10世紀の水田跡が住居跡とともに発見されている。十和田a火山灰の堆積状態からこの水田跡は、915年以前に営まれたと考えられる。古代の水田跡は、県内では初の発見例で、平成15年、県史跡に指定されている。

芋種坂Ⅲ遺跡では平成15年度の調査でフイゴ座を持つ製鉄炉跡、樋ノ口遺跡では平成15・16年度の調査で炉型やフイゴの羽口、椀形鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓、炭素質などの鍛冶生産に係わる遺物・遺構が検出している。

上谷地遺跡は古代の遺跡でもある。県と市によってそれぞれ発掘調査が行われており、平成14年には隣接地を同時に調査し、同一の古代の河川跡を検出した。河道周辺の広範囲で、柱根を残す掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡が検出され、突き刺した状態の斎串や、墨書土器を含む大量の土器などの遺物により、水辺で営まれた祭祀場であることが判明した。土器のほかにも、曲物や挽物などの豊富な木製品が大量に出土している。上谷地遺跡周辺は、大正年間に多数の角材が発見されたという記録から由理柵の推定地の1つにもあげられており、民間調査団による学術調査が精力的に行われている。新谷地西遺跡(55)はその調査によって発見された遺跡である。

中世の遺跡には、大坪遺跡(22)・大浦遺跡(32)・土花遺跡などの集落跡や鑄造遺跡の堤沢山遺跡(36)の他、数多くの城館跡がある。大浦遺跡は芋川河口から900m上流の右岸に位置する。13世紀～15世紀の陶磁器や銭貨とともに、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡、道路跡が検出された。大坪遺跡は鍛冶生産が行われた集落跡で、渥美焼や、常滑焼と見られる大甕の胴部が出土した。堤沢山遺跡では、梵鐘や磬などの仏具を生産した鑄造施設が検出されている。

館跡は、川口館(33)・岩倉館(30)・館前館(46)・株切館(47)・樋ノ口遺跡(27)・元館(9)・古館(14)・岩谷古館(15)・岩谷麓古館(11)・中館(16)等多くが確認されている。岩倉館跡では郭を10か所、堀切4条、空堀3条などの防御施設を検出し、15世紀中頃を中心とする中世陶磁器などが出土している。由利本荘地域において、「由利十二頭」の時代は1590(天正18)年の豊臣秀吉による奥州仕置・太閤検地で終焉を迎え、由利五人衆が置かれることになり、その後1600(慶長5)年の関ヶ原の戦い後の国替えにより、1602(慶長7)年に最上義光の支配領域となる。

近世の遺跡には本荘城がある。本荘城は、最上氏家臣の楯岡氏が、1610(慶長15)年に尾崎山に本荘城を築いたが、1622(元和8)年の最上氏の改易に伴い、本荘城は破却された。最上氏に代わって、当地を支配した本多氏は翌1623(元和9)年に改易となり、その以後、六郷氏2万石の領地となった。六郷氏は尾崎山に改めて城を築き、本荘城とした。平成15・16年度の調査では、近世の城郭遺構のほか中世の掘立柱建物跡、竪穴状遺構、井戸跡、空堀などの遺構や遺物が出土し、本荘城築城以前の城館の存在が明らかになった。このように中世より本荘城のあるこの地は、時代とともに変遷を遂げていく。そして、近世における本荘は領主の交代を見るものの、江戸期を通じて近代城下町としての発展を遂げていくことになる。

参考文献

- 秋田県農政部農地整備課1980「土地分類基本調査 本荘」
 秋田県教育委員会 1980「オノ神道跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第71集
 秋田県教育委員会 1983「秋田県の中世城館」秋田県文化財調査報告書第86集
 本荘市 1984「本荘市史資料編・I上」
 大内町 1990「大内町史」
 秋田県教育委員会 2001「秋田県遺跡地図（由利地区版）」
 塩谷順耳・富樫泰時・熊田亮介・渡辺英夫・古内龍夫 2001「秋田県の歴史」山川出版社
 秋田県教育委員会 2002「大浦遺跡」秋田県文化財調査報告書第336集
 秋田県教育委員会 2003「横山遺跡」秋田県文化財調査報告書第363集
 本荘市教育委員会 2003「上谷地遺跡 新谷地遺跡」本荘市文化財調査報告書第19集
 本荘市 2003「本荘の歴史 普及版」
 秋田県教育委員会 2004「高蒲崎貝塚」秋田県文化財調査報告書第371集
 秋田県教育委員会 2004「龍門寺茶畑遺跡」秋田県文化財調査報告書第373集
 秋田県教育委員会 2005「上谷地遺跡 新谷地遺跡」秋田県文化財調査報告書第395集
 秋田県教育委員会 2007「家ノ前遺跡」秋田県文化財調査報告書第418集
 秋田県教育委員会 2008「湯水沢遺跡」秋田県文化財調査報告書第431集
 由利本荘市 2015「由利本荘市誌」
 秋田県教育委員会 2016「上谷地遺跡（第2次）」秋田県文化財調査報告書第506集
 由利本荘市教育委員会 2017「遺跡詳細分布調査報告書」由利本荘市文化財調査報告書第24集
 由利本荘市教育委員会 2017「本荘消防署大内分署建設事業に伴うオノ神道跡発掘調査（概報）」
 秋田県教育委員会 2018「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第511集
 由利理榎・釈家研究会 2022「上谷地地区発掘調査報告書」由利理榎・釈家関連遺跡発掘調査報告書 第12集

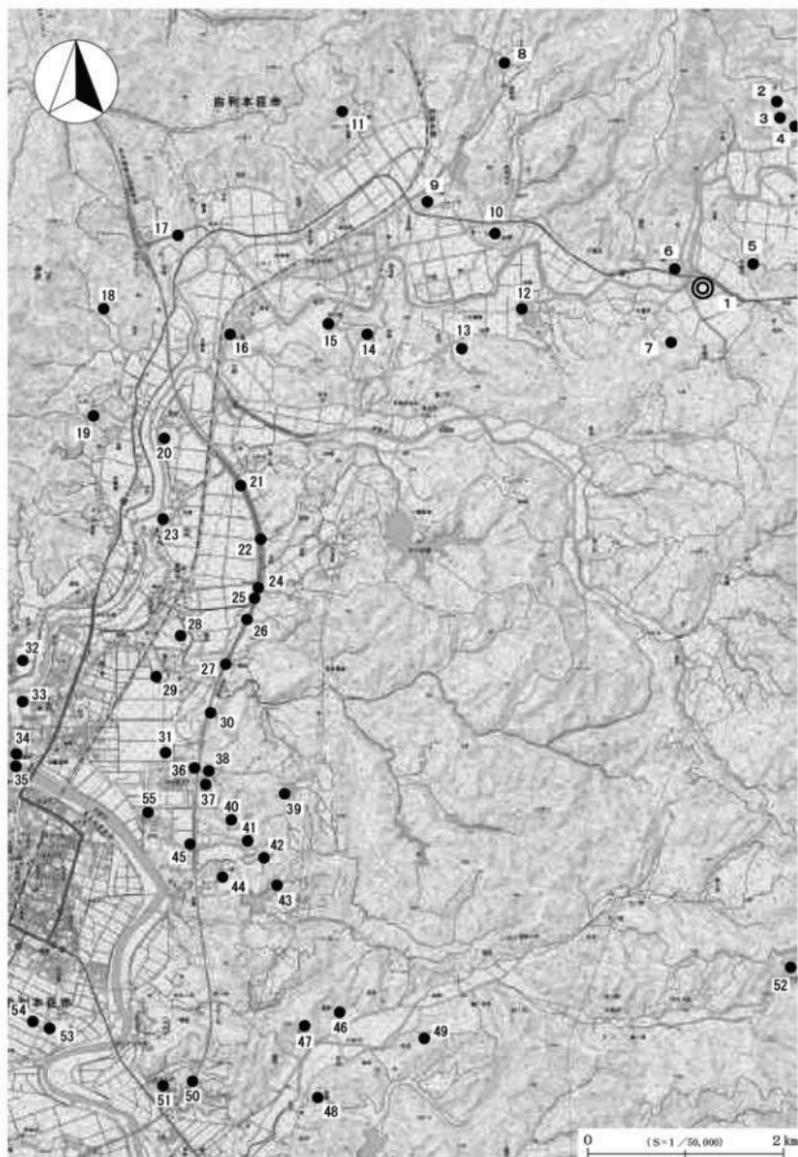
第1表 オノ神道跡周辺の遺跡一覧表（1）

番号	遺跡名	遺跡地図番号	主な時代	種別	主な遺構・遺物
1	オノ神	210-44-30	旧石器・縄文	集落跡	竪穴建物跡、土坑、縄文土器、土製品、石鏃、石棒等
2	小坂A	210-44-26		遺物包含地	縄文土器片、石鏃、石斧、石匙
3	小坂C	210-44-45		遺物包含地	石器片
4	小坂B	210-44-44		遺物包含地	石器片
5	山館	210-44-29		館跡	空堀
6	オノ神II	210-44-42		遺物包含地	石器片
7	徳沢館	210-44-31		館跡	
8	熊野田	210-44-36		遺物包含地	石槍
9	元館	210-44-35	中世	館跡	空堀
10	天童山	210-44-34	縄文	遺物包含地	縄文土器、石鏃、石匙、打製石斧
11	岩谷麓古館	210-44-39	中世	館跡	
12	岩洞河原	210-44-32	旧石器	遺物包含地	須恵器、石斧、石鏃、石刀
13	飛川	210-44-33	縄文	遺物包含地	縄文土器、石器（石鏃・石匙）
14	古館	210-44-37	縄文	遺物包含地	石鏃、石匙、磨製石斧
15	岩谷古館	210-44-38	中世	館跡	空堀、腰郭
16	中館	210-44-40	中世	館跡	
17	家ノ前	210-44-46	縄文	集落跡	竪穴建物跡、焼土遺構、陥し穴、石鏃、石槍、石匙、磨製石斧、縄文土器（前期：大木式・円筒下層式、中期：大木式）
18	蜂長根	210-44-41	縄文	遺物包含地	石槍、石鏃、石匙
19	黒瀬館	210-5-7	中世	館跡	腰郭（空堀、堀切、井戸跡）
20	新漆畑	210-5-61	平安	遺物包含地	竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土師器、須恵器、須恵器系陶器、土製品
21	中ノ目	210-5-62	平安	遺物包含地	須恵器片

第2表 オノ神遺跡周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	遺跡地図番号	主な時代	種別	主な遺構・遺物
22	大坪	210-5-102	縄文・平安・中世	集落跡 生産遺跡	掘立柱建物跡、溝跡、鍛冶炉、縄文土器、土師器、須恵器、須恵器系陶器、常滑、澁美、青磁・白磁、硯、鉄滓、炉壁、羽口
23	平岡館	210-5-8	中世	館跡	空堀、土塁
24	幸種坂Ⅲ	210-5-91	平安	製鉄	掘立柱建物跡、フイゴ座跡、縄文土器(後期)、鉄滓、炉壁、羽口
25	幸種坂Ⅰ	210-5-86	平安	遺物包含地	土師器、須恵器
26	幸種坂Ⅱ	210-5-88	平安	遺物包含地	須恵器片
27	樋ノ口	210-5-85	縄文・平安	集落跡・館跡・生産遺跡	槽跡、空堀、堅穴建物跡、掘立柱建物跡、鍛冶炉、縄文土器、土師器、須恵器、鉄滓、炉壁、木製品(刀形等)
28	新ウレイノ	210-5-65	平安	遺物包含地	土師器片
29	横山	210-5-66	縄文・平安・中世	集落跡 生産遺跡	堅穴建物跡、掘立柱建物跡、水路跡、水田跡、土師器、須恵器、木製品
30	岩倉館	210-5-15	縄文・平安・中世	館跡	腰郭、土塁、掘立柱建物跡、堅穴状遺構、縄文土器、陶磁器、卒塔婆、五輪塔、鉄製品
31	大覚	210-5-67	平安	遺物包含地	土師器、須恵器
32	大浦	210-5-13	縄文・平安・中世・近世	集落跡	掘立柱建物跡、堅穴状遺構、井戸跡、鍛冶炉、縄文土器(後期・晩期)、石器、土師器、須恵器、木器
33	川口館	210-5-14	平安・中世	館跡	空堀、須恵器
34	葛藤崎貝塚	210-5-16	縄文・平安	貝塚・集落跡	縄文土器(早期・前期)、石鍾、石筵、シジミ貝、魚骨
35	子吉川底	210-5-17	縄文	遺物包含地	縄文土器片
36	堤沢山	210-5-101	中世	铸造遺跡	鍛冶炉、炭窯、炉壁、鉄滓、鋳型(仏具)、青磁、銭貨、木製品
37	新谷地	210-5-69	平安・中世	遺物包含地	土師器、須恵器、鉄滓、木製品
38	堤沢山Ⅱ	210-5-93	縄文・平安・中世	集落跡	縄文土器(早期)、石器、炭窯
39	岩瀬堤	210-5-70	古代	遺物包含地	須恵器片
40	土谷	210-5-18	中世・近世	铸造遺跡	製鉄炉跡、珠洲系陶器、唐津焼、羽口、鉄滓
41	土谷田ノ沢	210-5-71	中世	遺物包含地	須恵器系陶器、鉄滓
42	土谷場下	210-5-72		遺物包含地	
43	土谷堂ヶ沢	210-5-73		遺物包含地	
44	土谷白山	210-5-74	縄文	遺物包含地	堅穴建物跡、縄文土器(前期)、石器、土師器
45	上谷地	210-5-68	縄文・平安・中世・近世	食料生産遺跡 集落跡 祭祀場	水さらし場遺構、掘立柱建物跡、井戸跡、縄文土器、石器、土師器、須恵器、木製品
46	館前館	210-5-32	平安・中世	館跡	腰郭、堀切、須恵器系陶器
47	殊切館	210-5-50	中世	館跡	
48	熊野神社	210-5-51	縄文	遺物包含地	縄文土器(後期)
49	小友金山	210-5-52	縄文	遺物包含地	縄文土器片(晩期)、石斧、石鏃
50	三条山	210-5-35	縄文	遺物包含地	縄文土器
51	根木田	210-5-92	平安	散布地	土師器、須恵器
52	大原田	210-5-76	縄文	遺物包含地	石器片
53	薬師堂上野	210-5-84	平安・中世	集落跡	堅穴状遺構、掘立柱建物跡、井戸跡、土師器、須恵器、磁器、木製品、漆製品、鉄滓
54	薬師堂一番塚	210-5-106	平安・中世	集落跡	井戸、土坑、溝、柱穴、土師器、須恵器、陶磁器(青磁、播鉢)、木製品
55	新谷地西	210-5-105	平安	散布地	土師器、須恵器、曲物

※遺跡地図番号：210-○-△の210は山利本荘市、○のうち5は日本荘市、41は黒田町、44は黒田内町、△は遺跡番号を表す。



第5図 才ノ神遺跡と周辺遺跡位置図

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

遺跡の位置や遺物の出土地点等の記録に不可欠な方眼杭打設業務は専門技術者に委託した。方眼原点 (MA50) は世界測地系平面直角座標第X系のX=-61956.000、Y=-60068.000とし、ここから座標北方向の南北線及びこれに直行する東西線により、4m区画の方眼を組んだ。南北線は東から西に向かって…LS・LT・MA・MB・MC…と昇順になるアルファベットA～T20文字による2文字の組み合わせで、東西線は南から北に向かって…48・49・50・51・52…と昇順となるアラビア数字でそれぞれ呼称した。この4m区画 (以下グリッド) を、南東角を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせで「MA50」のように呼んだ (第6図)。

確認調査によって、調査区内には、旧耕作土と、直下に遺物包含層が残存していることが確認されていた。調査は、概ね旧耕作土の除去、包含層の掘り下げ、遺構確認、遺構精査の順で行った。排土は調査区南側隣接地の排土置き場に運搬した。掘り下げは、スコップ・ジョレン・移植ゴテを用い、人力で行った。

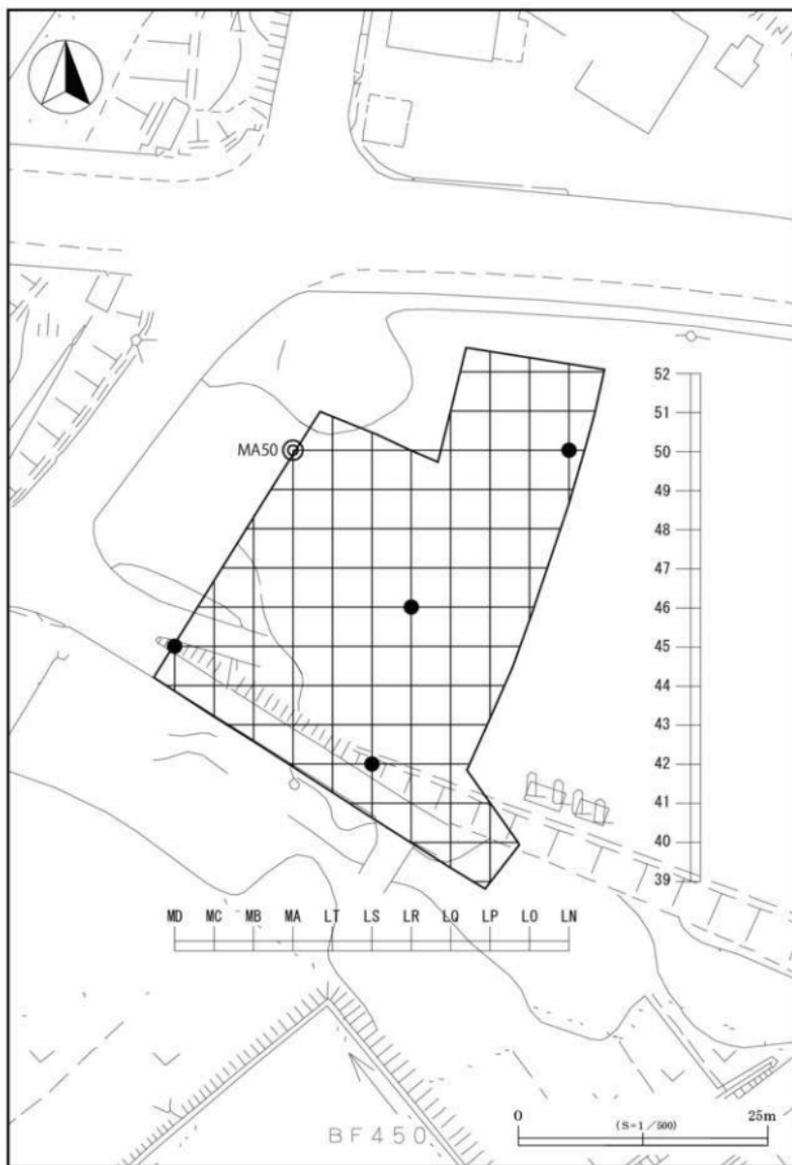
遺構は、種別を表すアルファベットの記号と検出順を表す通し番号を組み合わせで「SA01」のように呼称した。調査は、基本的に検出状況・土層断面・遺物出土状況・発掘状況を写真撮影し、実測・図化し、遺構調査カードに特徴を記述した。形態や規模によっては必要に応じて追加記録をとった。旧石器時代の遺物は出土したグリッド毎にXY座標を設定し、レベリングして取り上げた。遺物は、遺構名、出土グリッド名と層位及び出土年月日を記録して取り上げた。縄土器などの遺物は、グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。調査の記録は、断面図・平面図および写真を用い、図に記録する際は縮尺1/20を原則とした。また、密集して出土した場合や、取り上げた位置から遺構が検出される可能性が考えられる場合は、遺物用の通し番号を付して、写真撮影し、出土地点を計測して取り上げた。

図面作成は、人力で行った。写真は、フルサイズ一眼レフレックスデジタルカメラによって撮影し、予備や作業過程等の撮影はコンパクトデジタルカメラを用いた。遺跡の立地や周辺の地形を上空から記録するため、ドローンを使用した空中写真撮影を委託により実施した。

2 整理作業

遺構図の作成は、現場で図化した平面図・断面図から第2原図を作成し、デジタルトレースして挿図を作成した。遺物は洗浄・注記の後、接合・復元をし、実測図・拓影図を作成した後、写真撮影を行った。出土した遺物は、洗浄・乾燥の後、軟弱な土器片に対しては有限会社新成田総合社の表面コート剤「ナチュラルコート」を塗布し、強度を補強した。遺構内出土遺物は、通常の注記内容に付け加えて黄色点を、ナチュラルコートを塗布した遺物には注記文字と同じ色の点を書き加え、区別した。

調査で得た火山灰・炭化物サンプルについては、地山及び遺構の形成年代や遺構の性格解明のため、理化学分析の専門機関に委託した。



第6図 グリッド配置図

第2節 遺物の分類

1 旧石器時代の石器

ナイフ形石器 一次剥離によって生じた鋭利な縁辺と刃潰し加工により整形された石器。素材とその用い方、二次加工とその部位の特徴から次のように分類する。

I類 石刃を素材として、打面を下位に用い、二側縁に急斜度な刃潰し加工が施され、全体形が柳葉形を呈するもの。

II類 石刃を素材として、打面を上位に用い、基部側に急斜度な刃潰し加工が施されるもの。

III類 石刃を素材として、打面を下位に用い、微細な加工が施されるもの。

削器 剥片を素材として、連続的な二次加工により刃部が作出されているもの。

彫刻刀形石器 一端を打面として槌状剥離を施し彫刀面が作出されているもの。

錐状石器 錐状の先端部が二次加工により作出されているもの。

二次加工ある石刃・剥片 石刃もしくは剥片を素材として縁辺の一部に不連続な二次加工が認められるもの。

微細剥離ある石刃・剥片 石刃もしくは剥片の縁辺に断続的・部分的に微細剥離痕を有するもの。

縦長剥片 長幅比が2：1以上の縦長を呈する剥片。

横長幅広剥片 長幅比が1：2以上の横長を呈する剥片。

矩形剥片 長幅比が1：1前後の略方形を呈する剥片。

貝殻状剥片 剥片素材石核から剥離された貝殻状の剥片で、背面に石核のポジティブ面を残すもの。

石刃 長幅比が2：1以上の縦長剥片のうち、稜線が側縁と平行し、背面構成の剥離方向が主要剥離面と同一方向もしくは180度方向の剥離面で構成されるもの。なお、背面の稜線が自然礫面によるものも含める。また、石刃には次のⅢ種がある。

一稜石刃 背面の主要稜線（石刃の断面形態を決定づける稜線のことで、多くの場合、先行する一次剥離によって打面側と末端側を結ぶように形成されるもの）が器体中央付近を通る石刃。末端形状は尖鋭となり、断面は三角形を呈するものが多い。末端形状と合わせて一稜尖鋭石刃とも称する。

二稜石刃 背面の主要稜線がほぼ平行する二本によって構成される石刃。末端形状は平ら（矩形）となり、断面は台形を呈するものが多い。末端形状と合わせて二稜矩形石刃とも称する。

三叉稜石刃 三叉状（Y字状）の稜線が走り、末端は平ら（矩形）でウートラバッセとなる場合も散見される。断面は三叉状をなす稜線交点より上部では台形、下部では三角形を呈する。末端形状と合わせて三叉稜矩形石刃とも称する。

剥片 二次加工・微細剥離痕が認められない上記の縦長・横長幅広・矩形・貝殻状剥片の総称。

砕片 二次加工・微細剥離痕が認められない剥片のうち剥離長軸1cm未満のもの。

石核 剥片や石刃が剥離される母材。このうち、残核は、剥片剥離が完全に終了したと判断された石核として用語的に区別しておく。

個体 同一母岩に帰属すると推定される資料群。一般的に接合作業と肉眼観察により識別するが、ここでは接合するものに限定して個体（接合個体）とした。

2 縄文土器の分類

今回の調査では縄文時代早期後葉、前期初頭～後葉、中期中葉～末葉、晩期後葉の各時期の土器が合わせて18㍁コンテナ71箱分出土した。出土土器は、時期ごとにⅠ～Ⅳ群に大別し、また、底部資料をⅤ群、赤彩資料をⅥ群とした。Ⅰ～Ⅳ群については、文様等の特徴から以下のように細分した。

Ⅰ群：早期

A類：内面にも縄文が認められるもの。

Ⅱ群：前期

A類：原体側面圧痕文や絡条体圧痕文が施されるもの。

B類：口縁部または底部に数条の連続刺突文が施されるもの。

C類：地文上に刺突文のみ施されるもの。

D類：半葎竹筥による平行沈線文が施されるもの。

E類：隆帯が貼付されるもの。

E 1類：隆帯に刻みを付加するもの。

E 2類：隆帯に指頭押圧もしくは刺突文を付加するもの。

E 3類：隆帯に地文が付加されるもの。

E 4類：付加要素のない隆帯が貼付されるもの。

F類：沈線文が描かれるもの。

F 1類：曲線的な沈線文が認められるもの。

F 2類：直線的な沈線文のみ描かれるもの。

F 3類：格子目状の沈線文が描かれているもの。

F 4類：口縁部から垂下する沈線文が描かれるもの。

G類：沈線文と刺突文が施されるもの。

H類：文様要素が地文のみのもの。

H 1類：ループ文が施されるもの。

H 2類：側面環付原体を回転施文するもの。

H 3類：S字状連鎖沈文が施されるもの。

H 4類：単節縄文が施されるもの。

H 5類：羽状縄文が施されるもの。

H 6類：燃糸文が施されるもの。

H 7類：網目状燃糸文が施されるもの。

H 8類：原体が判然としないもの。

Ⅲ群：中期

A類：渦巻文が施されるもの。

A 1類：沈線によって渦巻文が描かれるもの。

A 2類：隆帯によって渦巻文が描かれるもの。

A 3類：隆沈線によって渦巻文が描かれるもの。

B類：磨消縄文が認められるもの。

B 1類：浅い幅広の沈線で地文を区画するもの。

B 2類：微隆起線によって地文を区画するもの。

- C類：アルファベット文が認められるもの。
- C1類：縄文帯を主文様とするもの。
- C2類：無文帯を主文様とするもの。
- D類：その他のもの。
- D1類：横位の太い隆帯を口縁部に貼付するもの。
- D2類：全体像は不明だが、隆帯が貼付されるもの。
- D3類：地文のみのもの。

IV群：晩期

- A類：沈線文が施されるもの。

V群：底部資料

- A類：上げ底となるもの。
- B類：敷物圧痕が認められるもの。
- C類：その他のもの。

VI群：赤彩資料

3 縄文時代の石器

石鏃 基部の有無や全体の形状から以下のように分類した。

- I類 無茎鏃で基部が凹むもの（凹基無茎鏃）。
 - I a類 基部の挟りが浅いもの。
 - I b類 基部の挟りが深いもの。
- II類 無茎鏃で基部が平坦なもの（平基無茎鏃）。
- III類 基部の作り出しが不明瞭で基部が丸みを帯びるもの（円基鏃）。
- IV類 基部が外側に張り出すもの（凸基鏃）。
- V類 破損品。

石鏃未成品 石鏃の製作途上のもの。先端および側縁、基部のいずれかの加工が認められるもの。

石槍 先端部を有する左右対称で両面調整が施された槍先形の石器である。長さと最大幅の位置から以下のように分類した。

- I類 長さ10cm以上の大型のもの。器体中央に最大幅があり、柳葉形や木葉形を呈する。
- II類 長さ9cm未満の小型のもの。基部側に最大幅があり、平面形は柳葉形を呈する。

両面調整石器 両面調整によって全体の成形が行われているが、定形石器に分類できなかったもの。幅と厚さから以下のように分類した。

- I類 幅が4cm未満で、全体の厚さが薄いもの。
- II類 幅が4cm以上で、全体の厚さが厚いもの。
- III類 破損品。
 - III a類 幅が狭く、全体の厚さが薄いもの。
 - III b類 幅が厚く、全体の厚さが厚いもの。

石匙 つまみ部分を水平にした時の平面形や刃部の位置から以下のように分類した。

- I類 縦型となるもの。
- II類 横型となるもの。
- III類 つまみ部を水平にした際、側縁の刃部が斜めに湾曲するもの。

IV類 破損品。

石匙未成品 つまみの作出や周縁加工の途上にあるもの。

トランシェ様石器 平面形は台形状で、刃部は一次剥離面（素材面）を利用した鋭く直線的な刃部を有する石器。

筥状石器 平面形で大別し、調整加工の範囲から以下のように細分類した。

I類 撥形。（長幅比が2：1～3：1で、最大幅が刃部に位置し、側縁がハの字状を呈するもの）

II類 楕円形。（長幅比が2：1～3：1で、最大幅が中央に位置し、側縁が弧状を呈するもの）

III類 棒状。（長幅比が3：1以上で、側縁が直線的なもの）

IV類 破損品。

V類 再加工品。

筥状石器未成品 平面形が筥状を呈するが、側面や刃部の加工が途中で未加工の素材部分が残るもの。

石錐 加工の範囲と多少で大別し、機能部の形状から以下のように細分類した。

I類 器形全体および機能部に対し、素材形状を修正する加工を施すもの。

I a類 平面形が棒状で、機能部の幅が広いもの。

I b類 平面形がV字状で、機能部の幅が狭いもの。

II類 素材形状を残しつつ、機能部の末端及び側縁の一部にのみ加工を施すもの。

II a類 機能部の幅が狭く、末端の断面が薄いもの。

II b類 機能部の幅が広く、末端の断面が厚いもの。

スクレイパー 刃部の位置と加工の形状から以下のように分類した。

I類 サイドスクレイパーに相当するもの（側縁に刃部が作出されているもの）。

I a類 一側縁に刃部を有するもの。

I b類 二側縁に刃部を有するもの。

I c類 側縁全体（周縁）に刃部を有するもの。

II類 エンドスクレイパーに相当するもの（急斜度の刃部が作出されているもの）。

III類 ノッチドスクレイパーに相当するもの（抉り部分に刃部が作出されているもの）。

IV類 破損品。

二次加工のある剥片（RF） 器体縁辺の一部に二次加工が認められる石器を一括して分類した。

微細剥離痕のある剥片（UF） 連続する微細な剥離痕を有するものを一括して分類した。

剥片（F）と砕片（C） 剥離軸長が1cm以上を剥片、1cm未満を砕片とした。

調整剥片 打面と主剥離面の成す角度が急で、両面調整時の調整加工時に剥離された剥片。

楔形石器 両極打法による剥片剥離の痕跡が認められるもの。

石刃 長幅比が2：1以上の連続して剥離された縦長剥片。

接合資料 遺跡内で連続して剥離された石器が接合した資料。

石核・残核 石核は、剥片を剥離する際に母材となる核のことを示し、残核は最終的に剥離が終了し、結果的に遺跡に残されたものを呼称する。原石の大きさ、素材形状、礫面の有無、剥片剥離の方法を総合的に検討し、以下のように分類した。

I類 大形原石（10cm以上の拳大～掌大程度の原石）。

A類 礫素材（原礫面とネ方面で構成される）。

B類 剥片素材（分割面を有する）。

B a類 分割礫素材。

Bb類 分割礫を素材とした剥片素材。

II類 小形原石（10cm未満の拳大より小さい原石）。

A類 礫素材。

B類 剥片素材。

III類 剥片素材で原石形状が不明なもの。

IV類 主剥離面が確認できず、素材形状が不明なもの。

磨製石斧 平面形が斧形を呈し、全面に研磨加工が施された石器。

敲石・磨石類 拳大～掌大程度の大きさで、敲打および磨耗の痕跡が認められる石器。

石皿 人頭大以上の大きさで平坦もしくは凹む使用面を有し、下石として使用が想定されるもの。

石錘 扁平礫を素材として長軸の両端に剥離痕があり、錘として利用が想定されるもの。

石製品 実利的でない用途に用いられた石器。本遺跡では、石棒、異形石器、有孔石製品、環状石製品を石製品として扱った。

第3節 基本層序

先述したとおり、本遺跡は土地造成に伴い、ほぼ全域が盛り土（Ⅰ～Ⅲ層）に覆われている。盛り土の厚さは旧地形と関連しており、旧地形が低い沢地形となる調査区中央から東部にかけて盛り土は厚く堆積し、現地表面からⅣ層上面までは、深い所で2mに達する。一方、旧地形が高い西側では、現地表面から基盤層までが浅く、盛り土も薄くなる。盛り土が保護層として機能しなくなるため、現代の工事等による攪乱が基盤層にまで及んでいる部分も見られる。以上の概況を踏まえ、オノ神遺跡の層序を以下のⅠ～ⅩⅢ層に区分した。

- Ⅰ 層 10YR4/4 褐色砂質シルト しまり強 粘性弱 亜角礫（1～5cm）40%含む
- Ⅱ 層 10YR3/3 暗褐色シルト しまり強 粘性弱 炭化物（1cm）1%、角礫（1cm）3%含む
- Ⅲ 層 10YR3/2 黒褐色シルト しまり強 粘性弱 褐色土ブロック（10cm）、ビニール含む
- Ⅳ a層 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中
- Ⅳ b層 10YR4/4 褐色シルト しまり強 粘性中 小礫（15mm）1%、土器片、剥片含む
- Ⅳ c層 10YR4/6 褐色シルト しまりやや強 粘性中 炭化粒（1～2mm）1%、焼土粒（1mm）1%含む
- Ⅴ 層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 しまり中 粘性弱 小礫（1mm）40%、小礫（5mm）10%含む
- Ⅵ 層 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 炭化粒（1～5mm）10%含む
- Ⅶ a層 10YR4/4 褐色シルト しまり強 粘性やや強 混入物なし
- Ⅶ b層 10YR4/4 褐色シルト しまり強 粘性やや強 10YR8/6黄褐色粒（1～5mm）3%含む
- Ⅶ c層 10YR4/4 褐色シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化粒（1～3mm）3%、小礫（1～3mm）3%含む
- Ⅶ d層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 炭化粒（3mm）3%、チップ（5mm）1%、10YR5/6黄褐色ブロック（3mm）5%含む
- Ⅷ 層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 しまりやや強 粘性強 10YR5/6黄褐色ブロック20%含む
- Ⅸ 層 10YR2/2 黒褐色シルト しまり強～やや強 粘性やや強 小礫（1～5mm）10%炭化物（5mm）3%含む
- Ⅹ' 層 10YR3/3 暗褐色シルト しまりやや強 粘性やや強 小礫（1～5mm）10%10YR8/6黄褐色粒（径1～5mm）10%含む 小礫（1～5mm）10%含む
- Ⅹ 層 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土質シルト しまり強 粘性中 基盤層由来の10YR8/1灰白色土粒（5mm）5%含む
- Ⅺ 層 2.5Y5/4 黄褐色粘土 しまり強 粘性やや強 小礫（1～5mm）20%含む 地山
- Ⅻ-1層 10YR5/8 黄褐色砂 しまり強 粘性やや弱 10YR8/2灰白色粒（1～5mm）40%、10YR8/2灰白色粒（10～20mm）30% 全体的に混入物を含む
- Ⅻ-2層 2.5Y6/6 黄色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 5YR4/6赤褐色サビ15%含む
- Ⅻ-3層 2.5Y7/4 浅黄色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 炭化物（5mm）10%含む
- Ⅻ-4層 2.5Y7/6 黄色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 小礫（1～5mm）30%含む
- ⅩⅢ層 2.5Y/4 にぶい黄色粘土 しまり強 粘性やや強 礫を多く含む

Ⅰ～Ⅲ層は、現表土および造成土である。調査区全域で確認された。県立本荘高等学校大内分校の

グラウンド造成やそれ以前の整地によるものと考えられる。Ⅰ～Ⅲ層までの厚さは最大で2 mに達する。

Ⅳ層はⅣa～Ⅳc層に細分され、出土遺物から縄文時代中期に所属すると考えられる。遺構は主にⅣc層で確認された。

ⅤおよびⅥ層は河川による堆積層で、複数回にかけて堆積したと考えられる。調査区の東側では確認されなかった。Ⅴ・Ⅵ層の堆積によって沢（埋没沢）の平坦化が進んでいる。

Ⅶ層はⅦa～Ⅶd層にまで細分される。出土遺物からいずれも縄文時代前期と考えられる。Ⅶd層は極めて局所的な堆積層である。調査区中央部分のⅦa層上面では、北から南へ下る沢状地形が確認された。縄文時代前期の土器集中範囲であるST62はⅦc層が主体で、この沢の西側斜面に広がる。層厚は20cm前後である。

Ⅷ層は主に粘土層で、調査区の北側でのみ確認した。

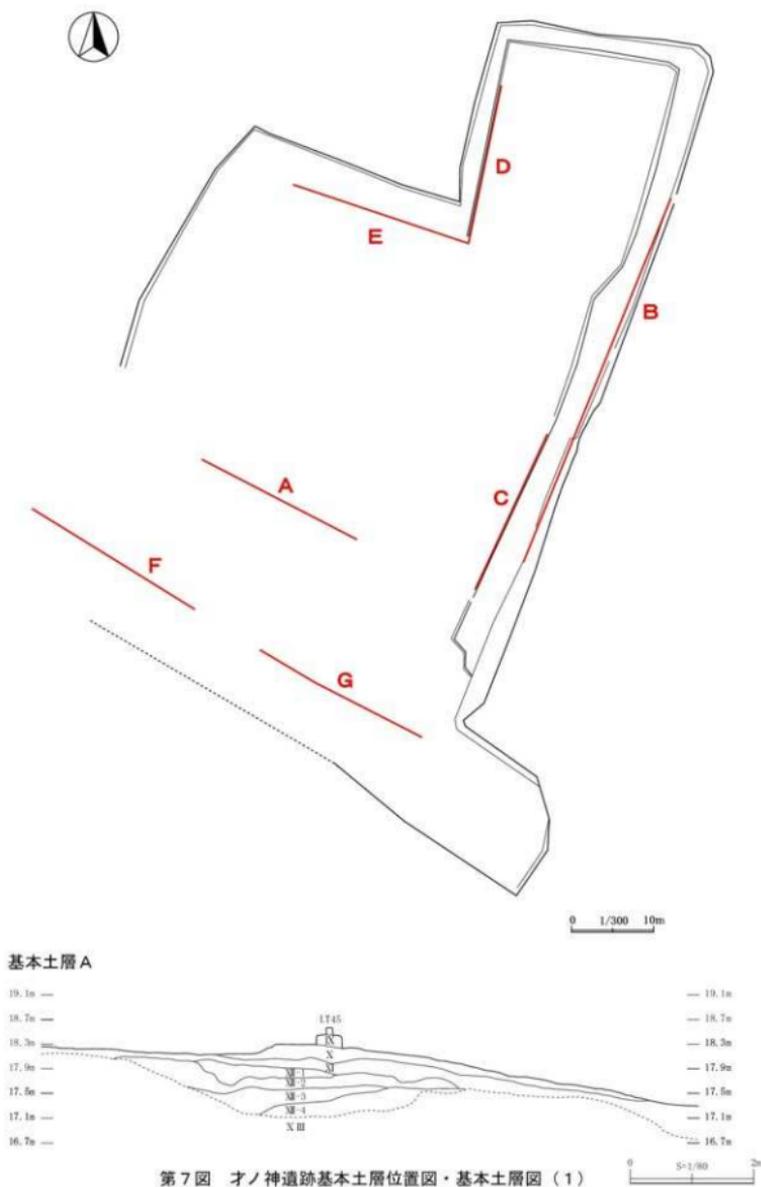
Ⅸ層は調査区の全域で確認された。黒褐色シルト層で、剥片、炭化物等を含む。縄文土器は確認できなかった。平成29年に由利本荘市教育委員会によって行われた本遺跡内東側（現本荘消防署大内分署）の調査で、Ⅸ層に相当する層が確認され、縄文時代早期の遺構が検出されたことから、縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。なお、Ⅸ'層は調査区東よりの埋没沢深部に堆積する層（基本土層C）で、Ⅸ層よりも色調が薄く、炭化物は含まない。

Ⅹ層は漸移層で、調査区全域にて確認した。遺物は剥片や石刃などが出土した。なお、埋没沢に設定した基本土層GのⅩ層とⅪ層の間には、浅黄橙色シルト層と女川層由来の風化礫を主体とする層が互層となって堆積しており、厚い部分では1 m強の中に11層（1～11）確認できる。また、Ⅺ層を侵食した部分（基本土層C）では、黄橙色や黄色褐色の小礫を含む砂層及びシルト層で構成される水性堆積層（①～⑨）を確認した。

Ⅺ層は地山である。LR45区を中心に旧石器時代のナイフ形石器、彫刻刀形石器、石刃などが出土した。基盤層の侵食部分に堆積したⅪ層を覆う層であり、調査区のほぼ全域に堆積している。層厚は20～30cm程度である。埋没沢深部では、水流による侵食を受けている部分がある。

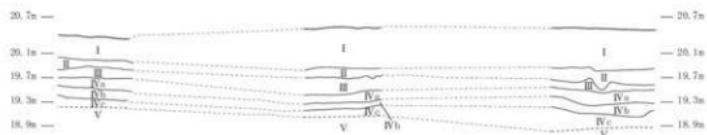
Ⅻ層は、Ⅻ-1～Ⅻ-4層に細分される。基盤層の侵食部分に堆積した層である。

ⅩⅢ層は基盤の女川層の最上部である。層上部には風化した礫が多く含まれている。これらは、埋没沢の堆積層混入礫の給源にもなっていると推測される。

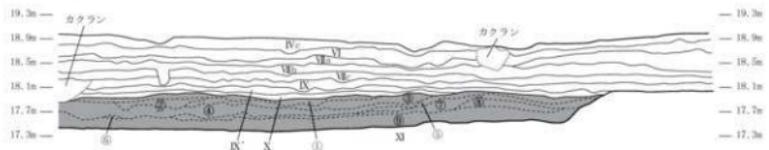


第7図 才ノ神遺跡基本土層位置図・基本土層図(1)

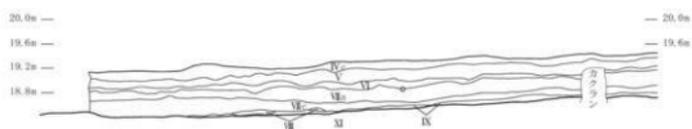
基本土層B



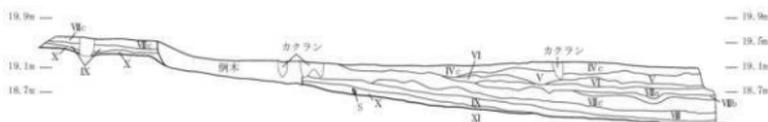
基本土層C



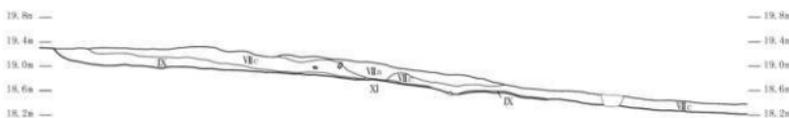
基本土層D



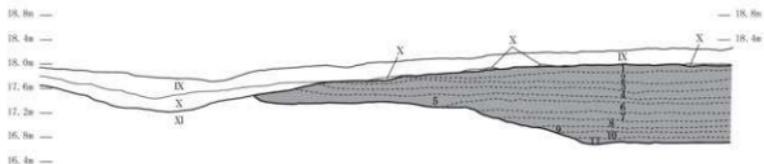
基本土層E



基本土層F



基本土層G



第8図 オノ神遺跡基本土層図(2)



第4節 検出遺構と遺物

1 概要

(1) 旧石器時代

旧石器時代の石器群は、LO～LT48区第Ⅺ層上面、約484㎡で検出された。特にLR～LS44～46区の範囲に石器の密集する分布域が1か所、その北側と北東側に散漫な分布域が各1か所、合計3基のブロックが北から南へと延びる谷状地形の谷頭部を取り囲むように検出された。

(2) 縄文時代

調査区内で検出した遺構は、竪穴建物跡3軒、竪穴状遺構6基、土坑23基、土器埋設遺構1基、焼土遺構12基、溝状遺構1基、性格不明遺構2基、柱穴様ピット120基である。遺物は、縄文土器、土製品、石器、石製品が出土した。遺物は、調査区のほぼ全域から出土したが、遺構を除くと、土器集中範囲からの出土が顕著であった。

2 旧石器時代

石器群全体の石器組成は、ナイフ形石器50点、彫刻刀形石器3点、錐状石器1(3)点、削器1点、二次加工ある石刃・剥片32(36)点、微細剥離痕ある石刃・剥片7(8)点、石核16点、石刃67(73)点、剥片185(206)点、砕片1点、原石4点の合計367(401)点である。()内の数字は、折れ接合前の点数である。石材構成はすべて珪質頁岩(玉髓質を含む)であり、28例の接合資料が得られた。

(1) 遺構(第57～59図・図版1・2)

前述のとおり、3か所の石器分布の集中が検出された。地形、分布状況、接合関係の検討から、それぞれ第1号ブロック・第2号ブロック・第3号ブロックと区分する。

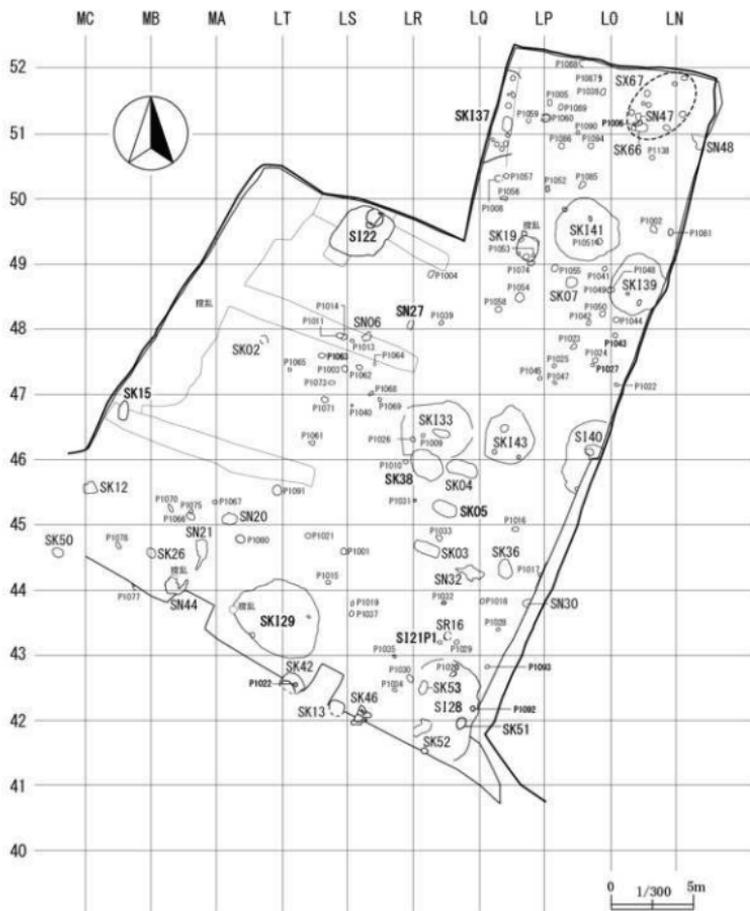
第1号ブロック

LQ～LT43～46区の南北12m×東西10mの範囲で検出された。西から東の谷部に向かう緩斜面地上で、特にLR～LS45区の南北4m×東西4mで密集域が形成される。出土層準は第Ⅺ層上面から下位50cmの範囲に収まる。垂直分布で明らかのように、特に密集域で窪み状に厚みを増す。一方で層上方への分布拡散が認められない点は注意を要する。また、斜面地であるにもかかわらず斜面下方に二次的移動がないことを考え合わせると、自然の窪地か人為的な掘り込みが存在していた可能性が高いが、調査中にそうした認識はなかった。

石器組成は、ナイフ形石器47点、彫刻刀形石器1点、削器1点、二次加工ある石刃・剥片31点、微細剥離痕ある剥片6点、石核16点、石刃66点、剥片178点、砕片1点の計383点である。本石器群の全接合資料28例は全て本ブロックに帰属する。

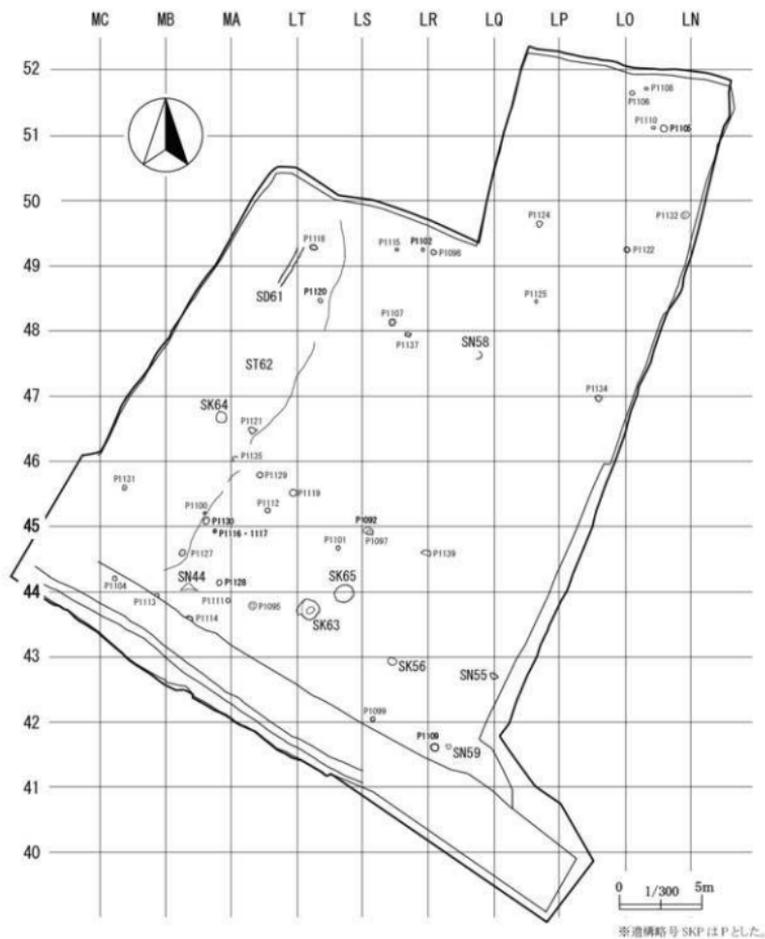
接合個体別に平面分布をみると(第60図)、密集域を中心に北～北東側へ散漫に伸びるが、接合個体1のみ南側へ散漫な広がりを見せ、石刃1点が約6m北西側で出土した。器種別に平面分布をみると、やはり密集域にすべての器種が集中する傾向にある(第61図)。なかでも石核とナイフ形石器の平面分布は、重なりながらもほぼ直径4mの範囲内に収束し、垂直分布では窪み状に分布する石核の上位にナイフ形石器が斜面の傾斜に沿って分布する状況がみられる。石刃・剥片は密集域を中心に、石刃は北西側へ、剥片は北側へ疎らな分布が伸びる。

以上の特徴的な分布のあり方から、本ブロックは石器製作作業の結果を直径2～3mほどの窪みへ一括で投げ入れたことにより形成されたものと推定される。通常、旧石器時代の遺物垂直分布は上下



※遺構略号 SKP は P とした。

第9図 才ノ神遺跡遺構配置図 (IV層)



第10図 才ノ神遺跡遺構配置図（Ⅶ層）

方向へ拡散し凸レンズ状を呈するが、本例は垂直分布上、層の上方に分布が拡散せず、垂直分布上面は斜面の傾斜に沿ってあたかも削平されたかのように直線的である。これは、石器の投入後に強い転圧を伴う埋め戻しにより、上方への拡散が妨げられた可能性を示唆している。この行為が廃棄が保管かという問題が残るが、後述するように、本ブロックに含まれる接合個体は間隙なく原石にまで復元されるものが多く、当地で製作されたと考えられる、ほぼ未欠損のナイフ形石器や石刃がまとまっていることから、使用後の廃棄とは考えにくい。石器製作作業に伴って生じた残滓と製品・素材の選別を行うことなく、窪みに一括保管したものと考えておきたい。

第2号ブロック

LQ~LT46~48区の南北8m×東西11mの範囲で検出された。北西から南東側の谷頭へ向かう緩斜面上で、出土層準は第XI層上位である。

石器組成は、彫刻刀形石器1点、二次加工ある剥片1点、剥片2点、原石4点の計8点である。接合資料は認められず、全て単独個体である。LR47区周辺では長軸15~25cm程度の垂角礫珪質頁岩原石が4点まとまって出土した。これらに伴う掘り込みは検出されていない。

4点の原石は珪化の度合いが進んでおり、節理があるものの良質で、吉川（2017・2020a）の珪質頁岩分類に基づけばB-NS類（珪質頁岩B類/ラミナなし・節理あり）に含まれる。これらを原石の保管域と積極的に評価するとその他4点の石器類とは分布の意味合いが異なり、別ブロックとして捉えなおしたほうが良いかもしれないが、今後の検討に委ねたい。

第3号ブロック

LO~LP46~47区の南北6m×東西7mの範囲で検出された。谷の西側斜面にある第1・2号ブロックに対峙し、谷東側の平坦部に分布する。出土層準は第XI層上位である。平面分布からは、本ブロックは調査区外の東側へと広がる可能性が高い。

石器組成は、ナイフ形石器1点、彫刻刀形石器1点、微細剥離痕ある剥片1点、石刃1点、剥片5点の計9点である。ナイフ形石器（第55図4）は玉髓質の珪質頁岩製である。接合資料は認められなかった。剥片は長軸2~4cm程度の小剥片のみであった。

本ブロックは部分的な検出である可能性が高いため、その性格を議論するには限界があるが、少なくとも第1号ブロックとは様相を異にしており、旧石器時代のブロックとして一般的にみられる石器製作と使用の場と考えられる。

その他の遺構

炭化物集中部や礫集中部については、調査中、検出に努めたが確認できなかった。

以下、ブロックのあり方についてまとめる。

本遺跡では視覚的に3基のブロックを区別した。各ブロック間で接合関係は見られなかった。この点で三者を別時期のものとも捉えうるが、出土層準と石器形態や石質、石器製作技術上の特徴から、同時期の所産と判断した。

第1号ブロックは、検出面上が削平されたかのような鍋底状の垂直分布を示す。旧石器時代のブロックの基本的な垂直分布のあり方は凸レンズ状を示す点で、本例は特殊である。また、東側谷部に向かう緩斜面に立地する点にも注意したい。通常、斜面地に分布するブロックは斜面下方に向かって二次的に移動し、結果として長楕円形のブロック形状を示すことは、能代市縄手下遺跡（秋田県教育委員会2006）や大仙市小出IV遺跡（秋田県教育委員会1991）等で確認されている。以上の特異な出土状況から、これらの一括資料は掘り込みもしくは自然の窪みに纏めて投棄されたものと理解しうる。つまり、石器製作によって生じた残滓類と仕上げられた製品、素材となる石刃・剥片を一括して窪地

もしくは土坑にまとめおいて、将来の利用の便に備えた「デポ」（佐原1985・田中2001）としての性格が強いものと考えておきたい。石核については、資料を見る限り、消費し尽くした残核（残滓）と考えられる。第1号ブロック出土石器群が示す一連の石器製作作業は、おそらく本ブロック外で遂行されたであろう。なお、保管を目的としたと考えられる残滓と製品の一括石器集積遺構は、湯沢市白館跡SK100等の縄文時代遺跡にも認めることができる（吉川2022）。

第2号ブロックは、原石集中を特徴とする。原石が保管されたような状況で出土した事例は、本県の旧石器時代遺跡では初見である。一方で、平坦地に分布する第3号ブロックは、製品もしくは素材剥片・石刃で構成されており、石器製作作業の顕著な痕跡はない。前述したように調査区外へと広がっていく可能性が高く、旧石器時代の居住域の中心は丘陵東側端部と推定される。

すなわち、第3号ブロックから調査区外東側の丘陵東側端部にかけて広がる平坦部が旧石器時代の居住域の中心と考えられ、第2号ブロックは原石保管場所と何らかの作業域、第1号ブロックは丘陵東側で行われたと考えられる石器製作の一括保管場所と推定される。第1号ブロックは人為的に埋められている可能性が高いことから、当時の人々が当地を去る際の行為の結果と考えておきたい。すなわち、移動生活において、将来当地に回帰することを見越した保管行為と推定される。

以上にみたブロック形成の背景に推定される行為からは、原石の獲得保管（第2号ブロック）→石器製作と使用（第3号ブロック以東）→成果物の一括保管（第1号ブロック）というブロックの形成順を推定することも可能であるが、こうした遺跡の構造的検討は今後の課題としたい。

（2）接合個体

接合資料は28例が得られている。本報告ではこれらを「接合個体」とする。個体は、接合作業とともに肉眼観察により礫面や石質などの特徴を捉え、その異同や相似性から識別・分類されるが、その問題点も指摘されている（五十嵐1998・2002）。吉川（2003）では、「識別有効度」による個体識別法が提案されたが、「接合個体」はそのうちの「有効度A」に相当する。本報告では、肉眼観察による個体分類（識別有効度B・C）は行わない。ゆえに、後出の「非接合個体」は、「単独個体」とは分析手続きの上で異なる。

接合個体1（第11～19図）は、石核2点、石刃7点、縦長剥片10点、横長幅広剥片4点、矩形剥片8点、打面作出剥片1点、打面再生剥片1点、ナイフ形石器11点、錐状石器1点、二次加工ある石刃・剥片7点、微細剥離痕ある石刃1点の計53点で構成され、長軸13cmの亜角礫原石にまで還元される資料である。形態分類が可能な石刃のうち、一稜石刃は11点、二稜石刃は5点、三稜石刃は10点である（ナイフ形石器の素材となっている石刃を含む、以下同じ）。打面が作出され（第13図）、単剥離面打面から、原礫面を除去しつつ剥片剥離を進めながら（第14～16図）、徐々に石刃の連続剥離がなされ（第17～19図）、最終的に角錐状の石核（第19図14）が残される。剥離される石刃・剥片は、打面再生・打面調整を経ずに、すべて同一打面から剥離されている。この間の剥離角は常に110度前後に維持されている。作出された石刃を素材としてナイフ形石器Ⅲ類が製作される。接合資料に間隙はほとんどないことから、原石の搬入からナイフ形石器の製作に至るまでの一連の作業がすべて行われ、搬出はほとんどなされていないことが分かる。

接合個体2（第20・21図）は、石核1点、石刃3点、縦長剥片2点、横長幅広剥片1点、打面再生剥片1点、ナイフ形石器1点の計9点で構成され、最終的には扁平な亜角礫原石にまで還元される資料である。形態分類が可能な石刃のうち、一稜石刃は3点、二稜石刃は2点である。剥離過程は、原礫面を打面、小口面を作業面として第20図3が剥離された後、新たに打面が作出される。この際の打面作出剥片は出土していない。この単剥離面打面から石刃・剥片が連続的に剥離され、ナイフ形石

器Ⅲ類（第20図4）が製作される。最後に打面再生剥片（第21図2）が剥離されるものの、以降の石刃・剥片剥離はなされない。

接合個体3（第22～23図）は、石核1点、打面作出剥片2点と横長幅広剥片4点の計7点で構成され、長軸15cmの亜円礫原石にまで還元される資料である。第22図2に先行する打面作出がなされるが、その面を打面とする剥片剥離はなされないまま、改めて2が剥離され打面が作出される。そこを打面として再び新たな打面作出がなされ（第23図1）、横長幅広剥片が連続剥離されるものの、製品の製作はなされていない。接合資料に搬出品を示す欠落部もない。

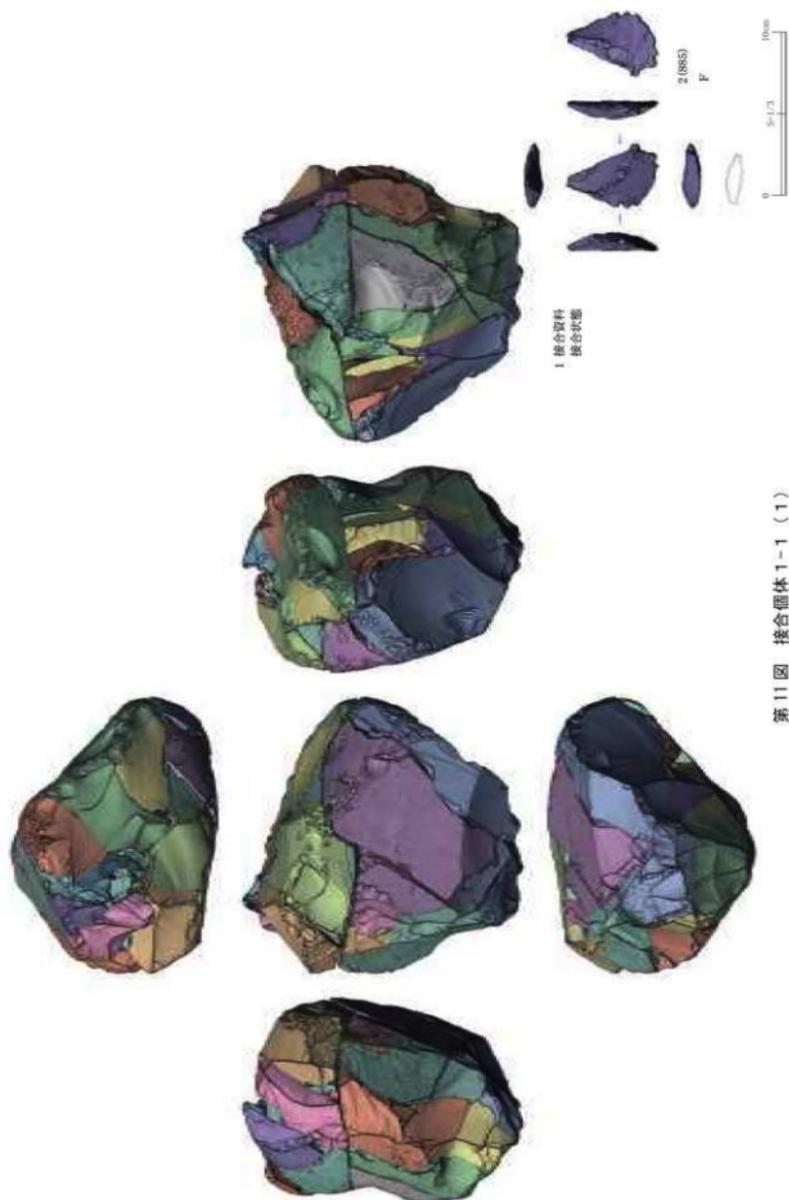
接合個体4（第24図）は、石核1点、石刃6点、打面再生剥片1点、ナイフ形石器2点、微細剥離痕ある剥片2点の計12点で構成される。石質は珪化の度合いが良く油脂光沢が発達する。形態分類が可能な石刃のうち、一稜石刃は7点、三稜石刃は2点である。柱状石核の上下面に打面が作出される。接合資料からは、下面を打面とした石刃の剥離後、打面を再生し（5）、連続的な石刃剥離がなされる。打点を左右に振りながら後退させ、最終的な残核は裏面に礫面を残す有背型（12：吉川2010）となる。石刃からはナイフ形石器Ⅲ類（7・10）が製作される。残された礫面から、原石形状は砲弾状の亜円礫と推定される。

接合個体5（第25～28図）は、石核1点、打面作出剥片2点、矩形剥片5点、縦長剥片4点、石刃15点、ナイフ形石器8点、二次加工ある石刃・剥片3点の計38点が接合し、砲弾状の亜円礫原石にまで還元される資料である。石刃のうち、一稜石刃は19点、二稜石刃は3点、三稜石刃は2点である。長軸面を作業面として下面から作業面にかけて大形部厚な剥片（第26図1）が剥離される。前後関係は不明であるが石核上面にも打面が作出され（第26図3）、矩形剥片・石刃が複数枚剥離されたのち（第26図2・4・5、第27図1）、下面を打面として矩形剥片が2枚剥離される（第27図1・5）。その後、再び打面を上面に移動させ、打点を左右に移動させながら後退しつつ石刃・縦長剥片が連続的に剥離され（第27図2・3・6～12、第28図2～19）、ナイフ形石器Ⅲ類が製作される。最終的な残核（第28図20）は有背型となる。

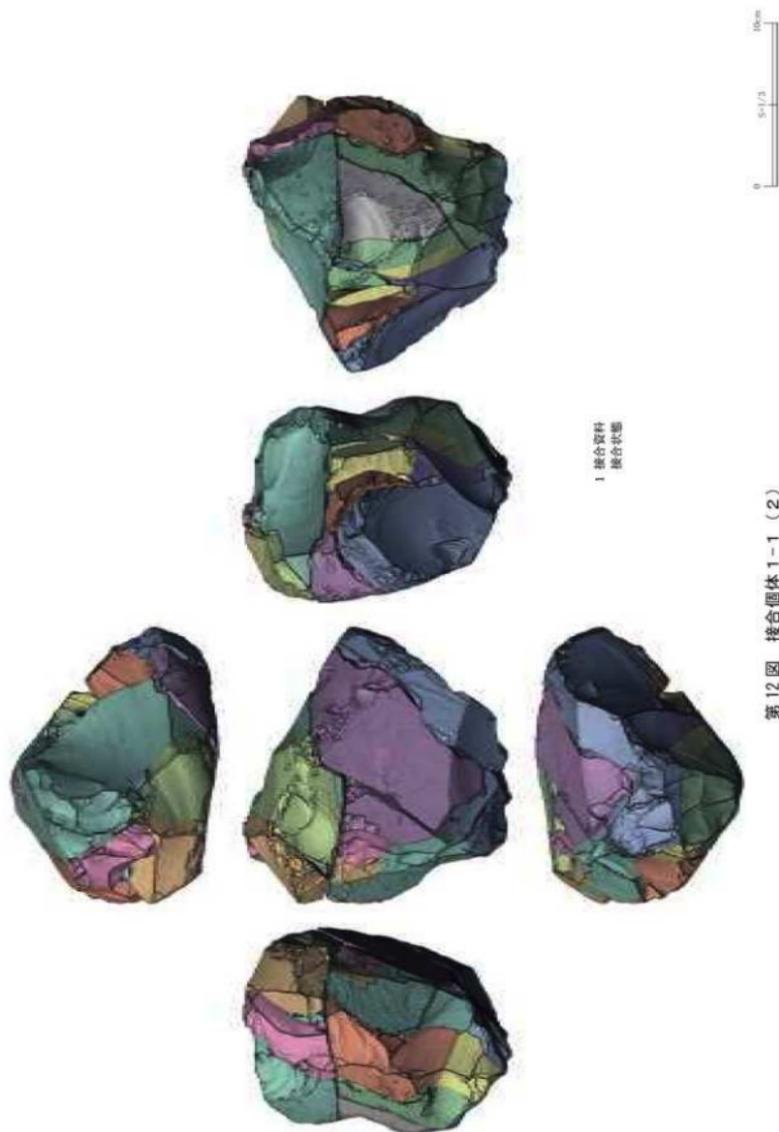
接合個体6（第29～32図）は、石核2点、打面作出剥片3点、横長幅広剥片2点、矩形剥片4点、縦長剥片6点、石刃5点、ナイフ形石器1点、二次加工ある剥片4点の計27点、亜角礫原石にまで還元できる資料である。石刃のうち、一稜石刃は7点、二稜石刃は3点である。原石の長軸を縦位に置き上面を打面とするべく2度の剥離が行われる（第30図3・4）。それにより作出された単剥離面打面から横長幅広剥片、矩形剥片、縦長剥片、石刃が連続剥離される（第30図2・5～12、第31図1～3）。その後、打面転位し、第31図8・6、第32図1を剥離して打面を作出し、横長幅広剥片、矩形剥片、石刃、縦長剥片を連続剥離する（第31図7、第32図2～8）。第32図6の剥離により著しく石核高が減じ、剥片剥離作業は終了する。石核（第32図9）は有背型となる。縦長剥片はウートラパッセとなるものが目立つ。石刃からナイフ形石器Ⅲ類が製作される。

接合個体8（第33～35図）は、石核2点、矩形剥片9点の計11点で構成され、亜角礫原石にまで還元される資料である。欠落部はほとんどない。打面と作業面の角度が45～55度をなす自然面からの剥離を数回繰り返した後、石核を第34図5と第35図1に分割し、前者から横長幅広剥片を剥離して終了する。後者の石核は分割後の剥離は認められない。剥片はほとんど部厚なもので、製品に加工されるものはなく、欠落部もない。剥離意図は不明である。

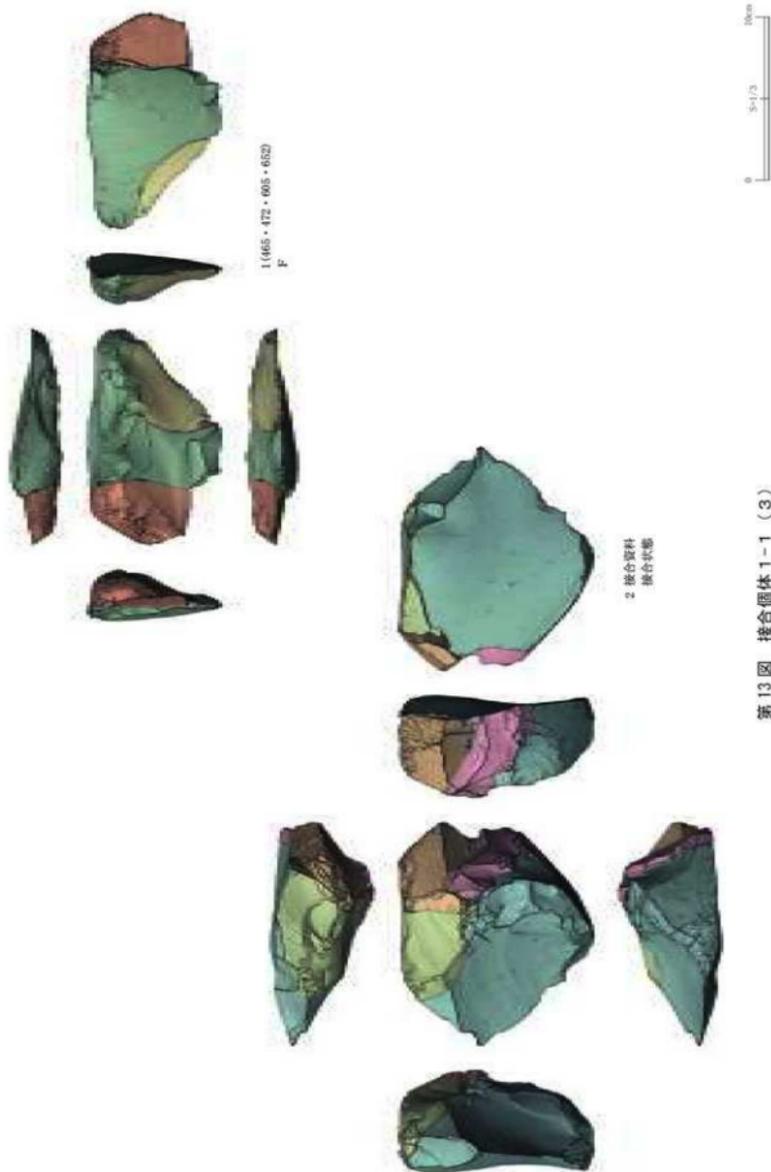
接合個体9（第36～40図）は、石核1点、横長幅広剥片4点、矩形剥片14点、縦長剥片9点、石刃1点、削器1点、二次加工ある剥片1点の計31点で構成され、亜角礫原石にまで還元できる資料である。石刃は一稜石刃である。90度打面転位を繰り返しながら、部厚な横長幅広剥片を剥離するもの



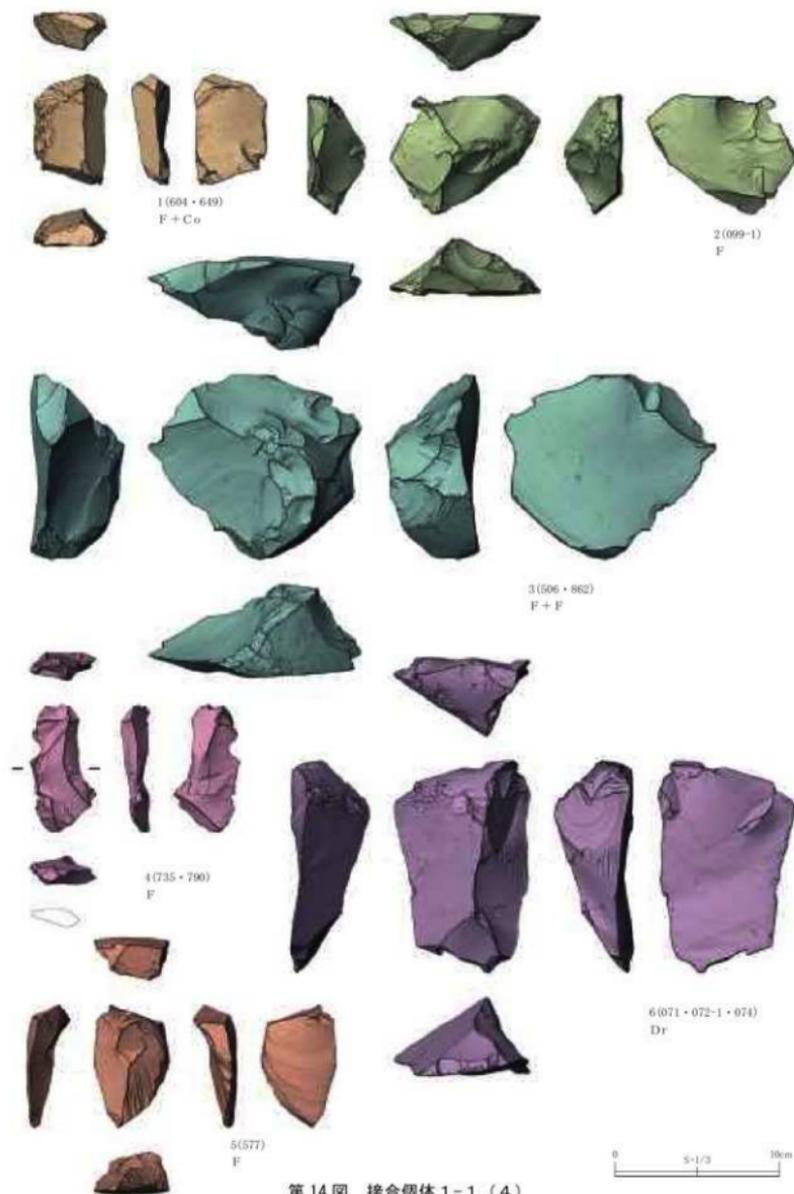
第11図 接合個体1-1 (1)



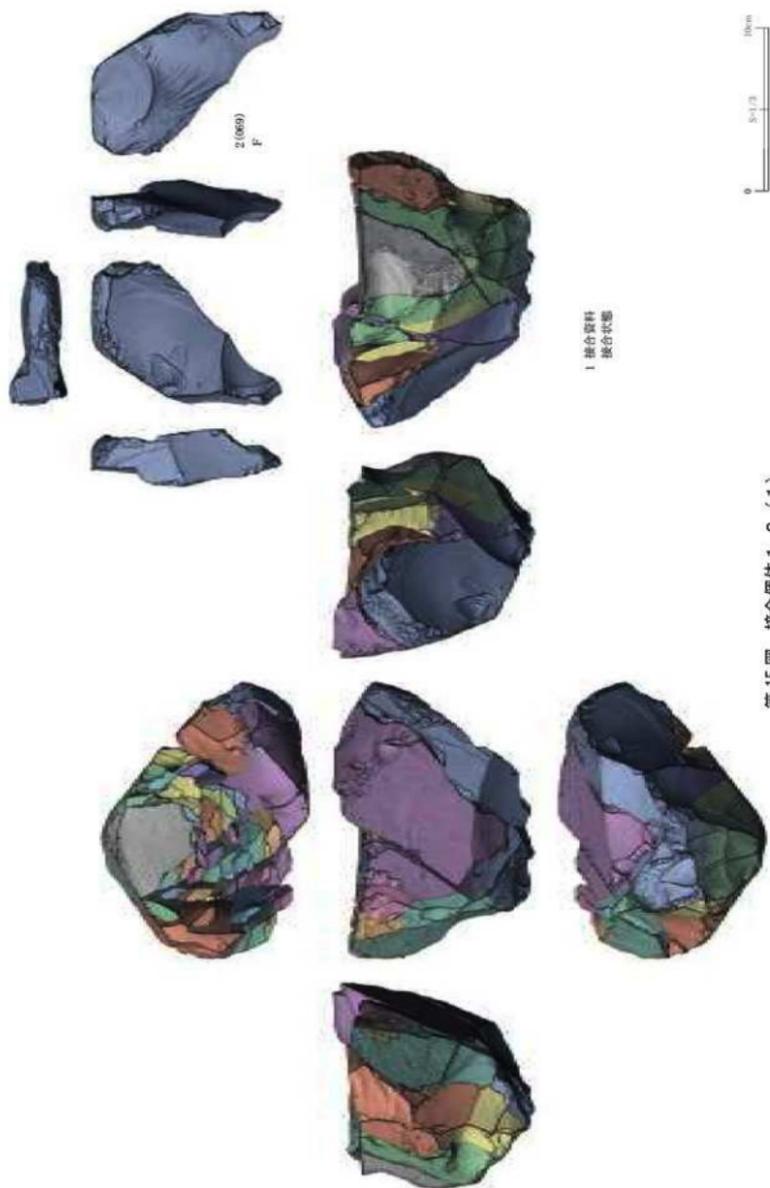
第12図 接合個体1-1 (2)



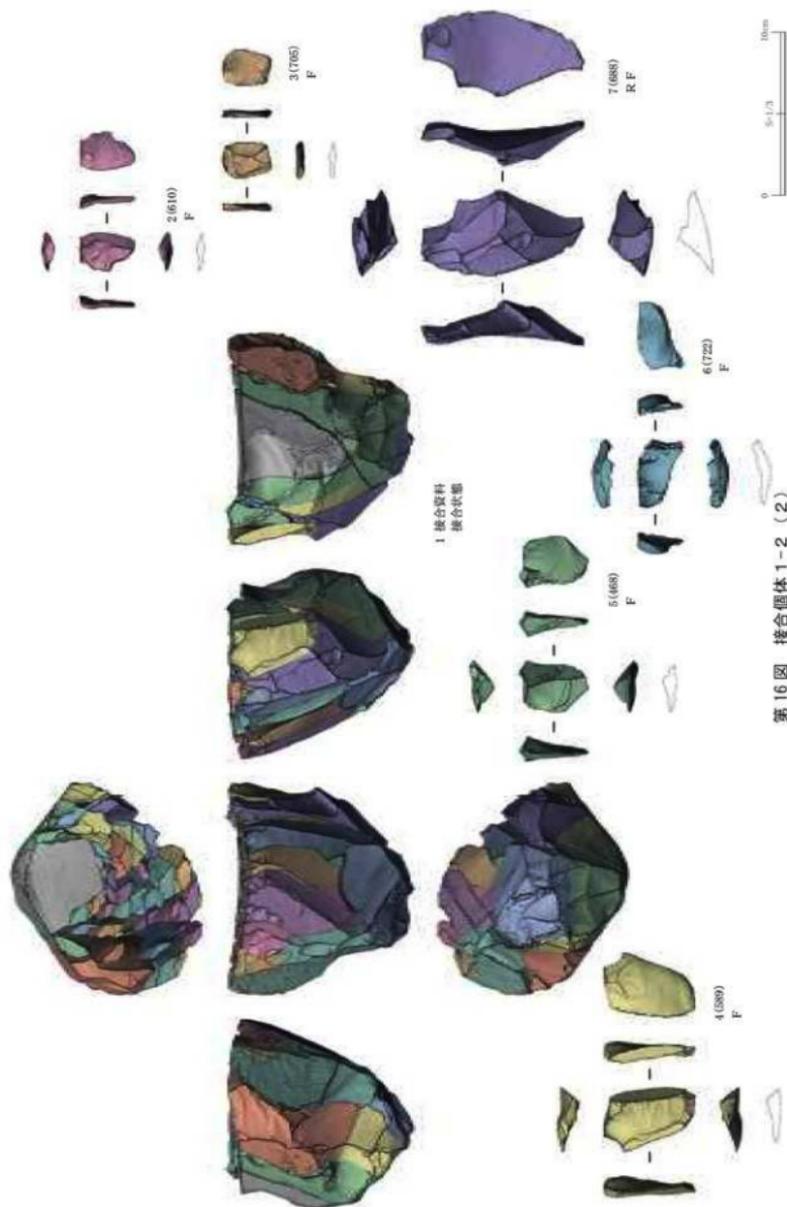
第13図 接合個体1-1 (3)



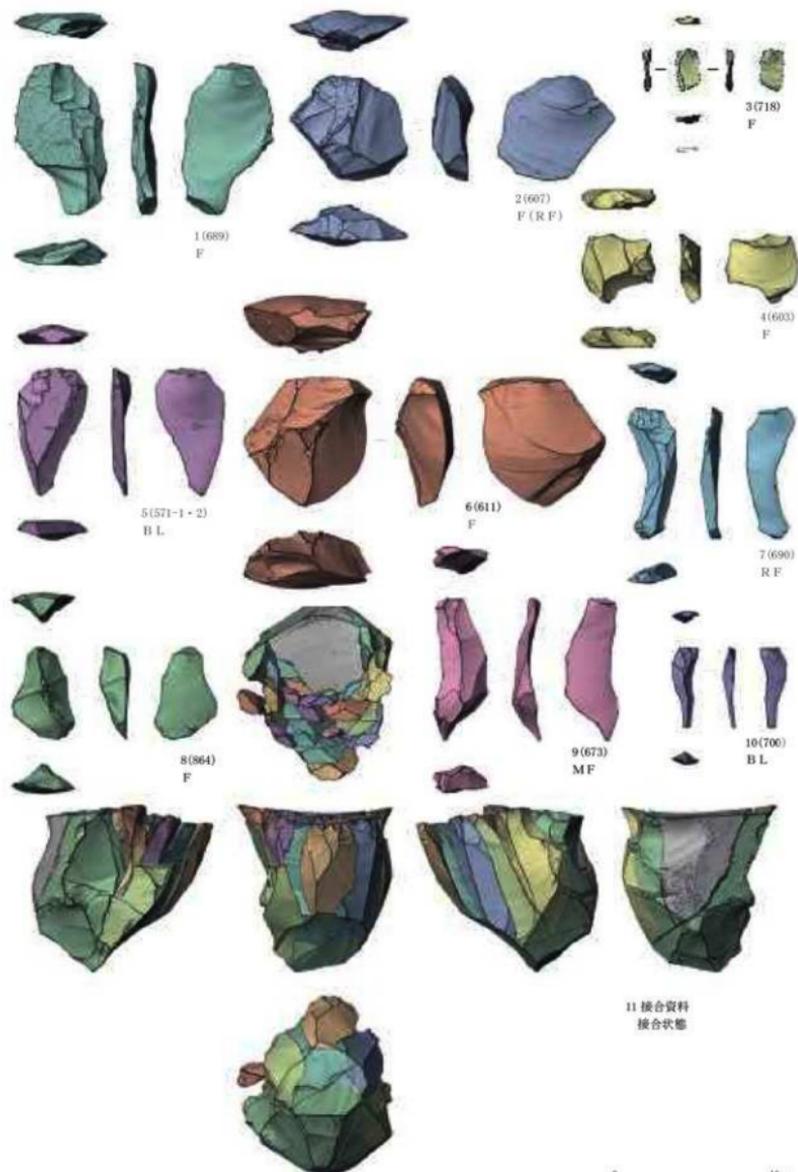
第14図 接合個体1-1(4)



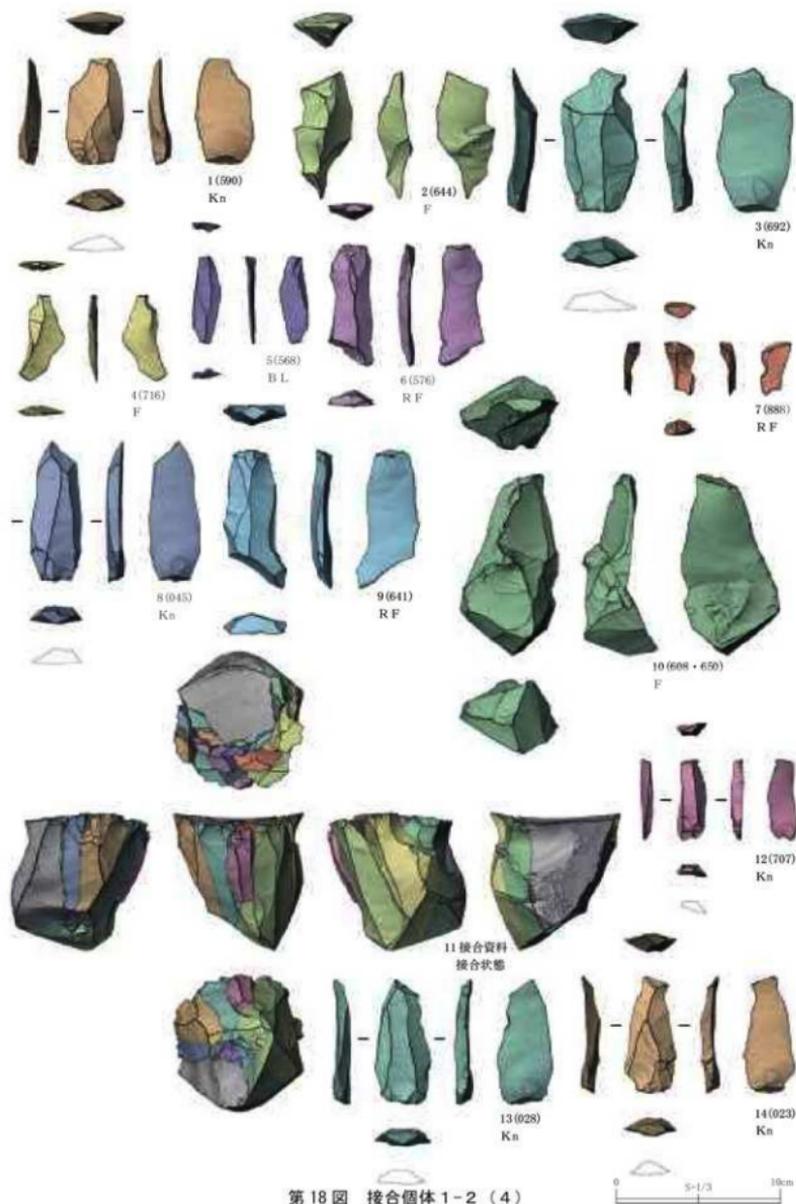
第15図 接合個体1-2 (1)



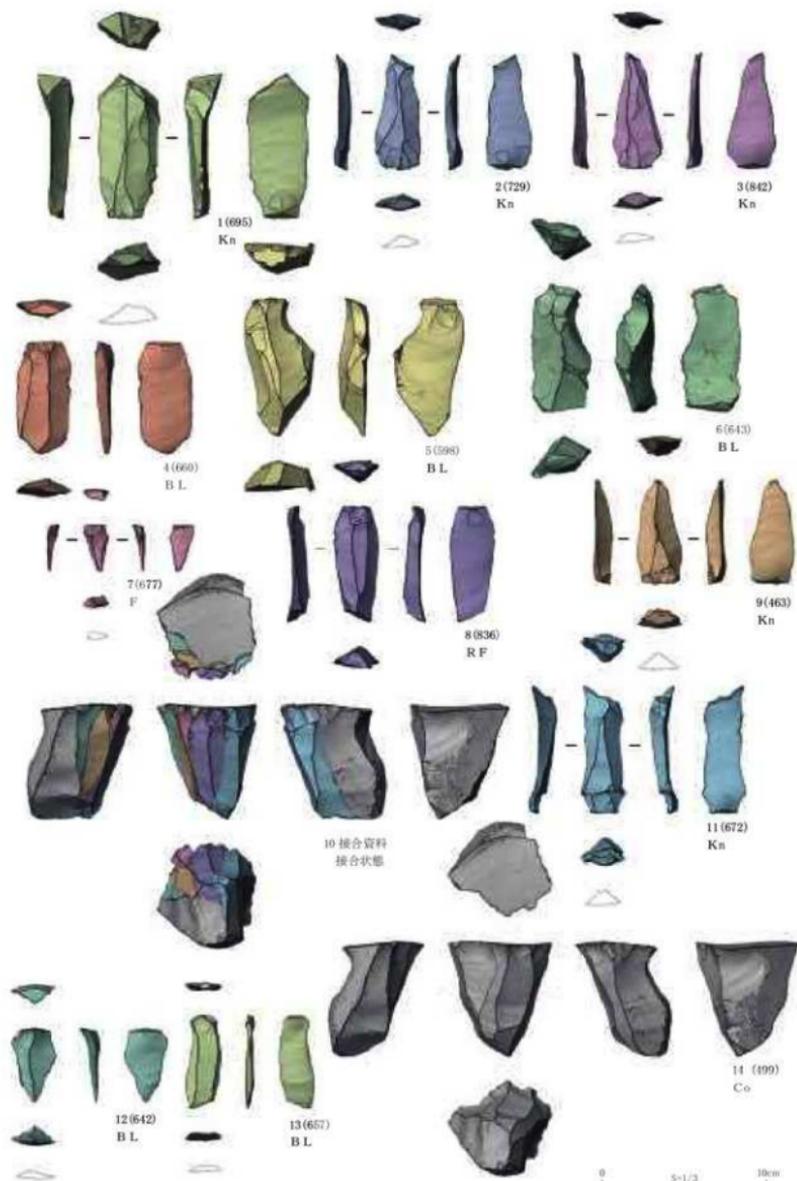
第16図 接合個体1-2(2)



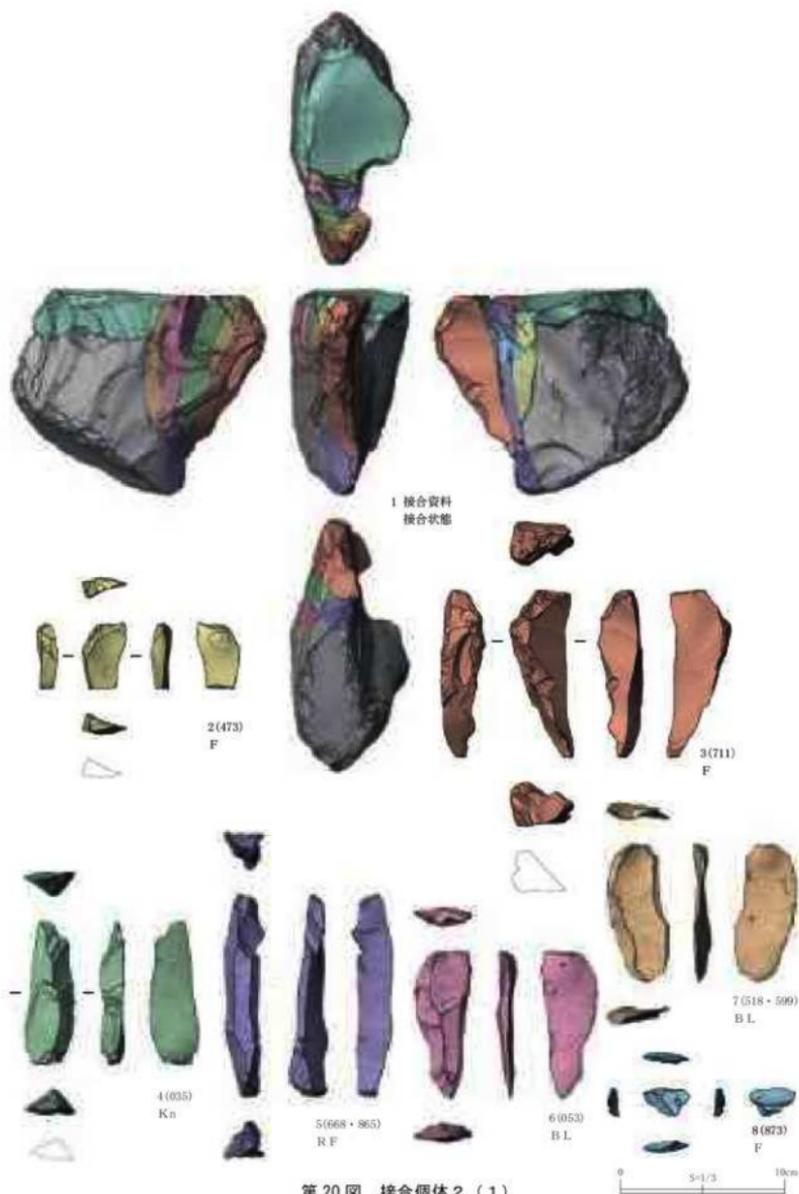
第17図 接合個体1-2 (3)



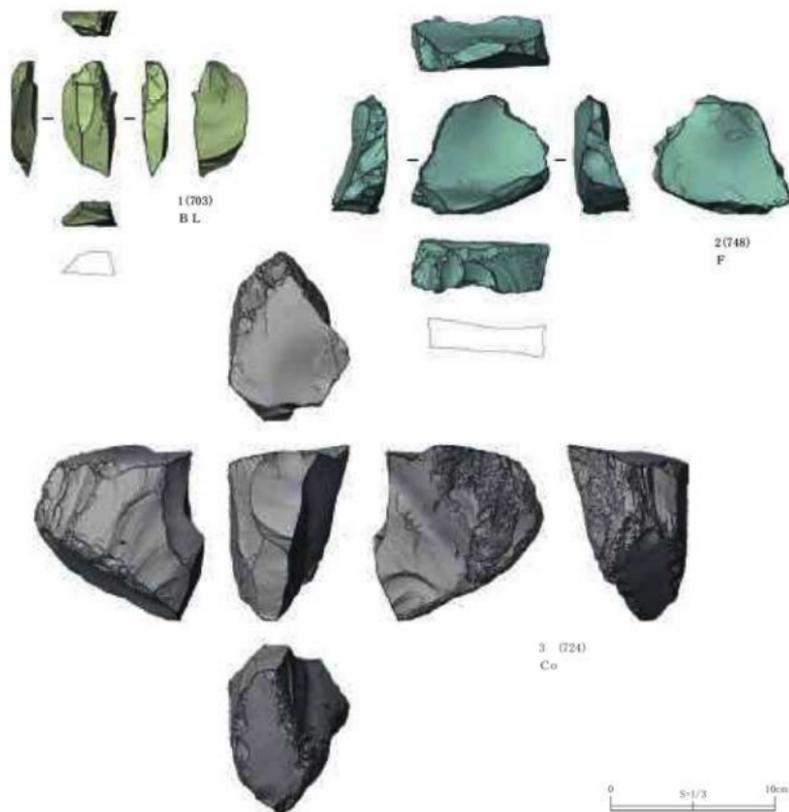
第18図 接合個体1-2(4)



第19図 接合個体 1-2 (5)



第20図 接合個体2 (1)



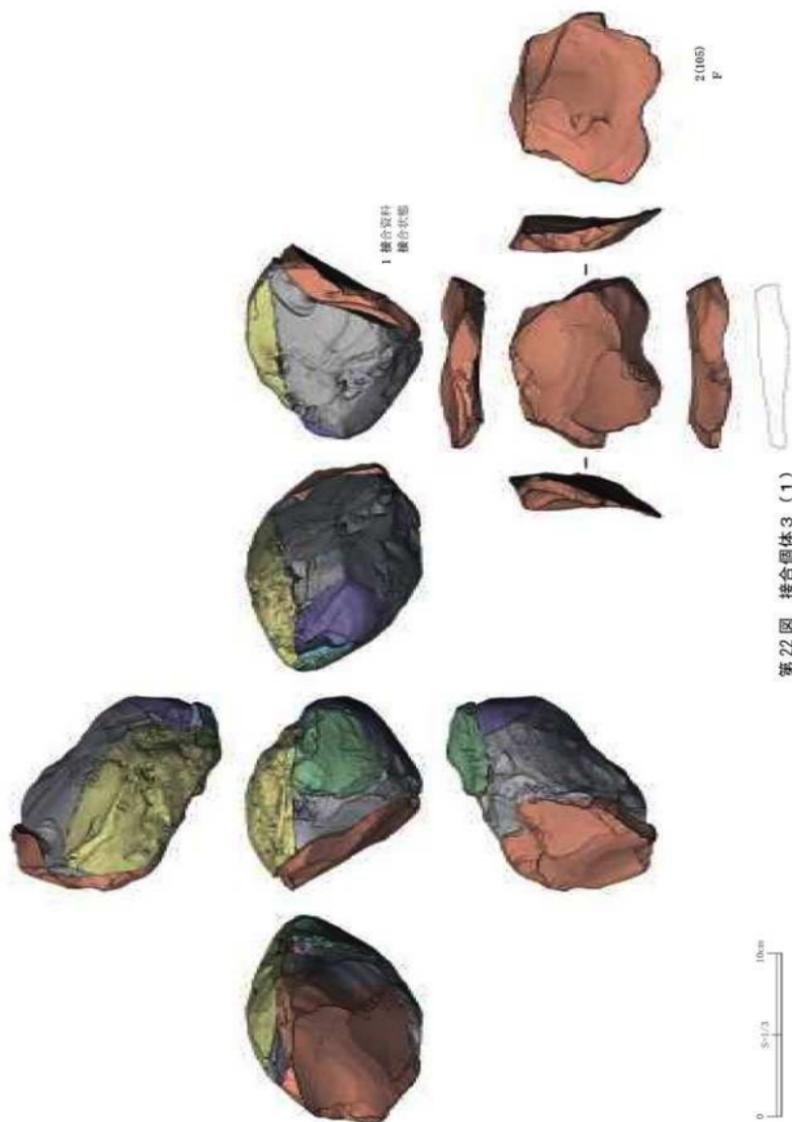
第21図 接合個体2 (2)

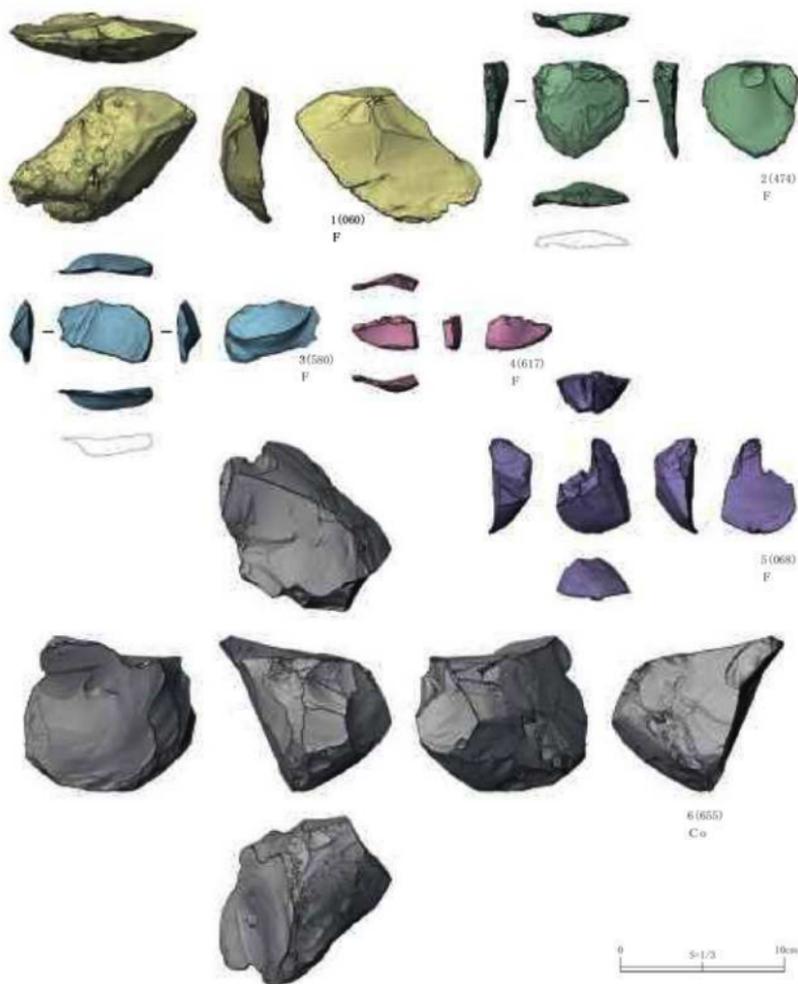
の、接合資料8と同様、石器の素材となりうる形状のものは殆ど作出されず、剥離が終了している。欠落部もほとんど見られない。

接合個体17 (第42図9~14) は、同一の単剥離面打面からの石刃1点、矩形剥片4点の連続剥離を示す資料である。接合資料の背面構成からは、これらに先行して同一打面から少なくとも4回の剥片剥離作業が行われていることが分かる。本来石刃を志向した可能性がある。

接合個体18 (第42図15~18) は、石刃3点の連続剥離を示す資料である。同一打面から16・17が剥離されたのち、打面再生により18が剥離されている。

接合個体19 (第43・44図1~8) は、石核1点、打面作出剥片3点、横長幅広剥片1点、縦長剥片1点、石刃3点、ナイフ形石器2点、微細剥離痕ある剥片1点の計12点で構成され、完全な原石にまでは還元されないが、長軸15cm程度の垂角礫原石が推定される資料である。形態分類が可能な石刃のうち、一稜石刃は2点、二稜石刃は1点、三稜石刃は2点である。原石の長軸を縦位において、上

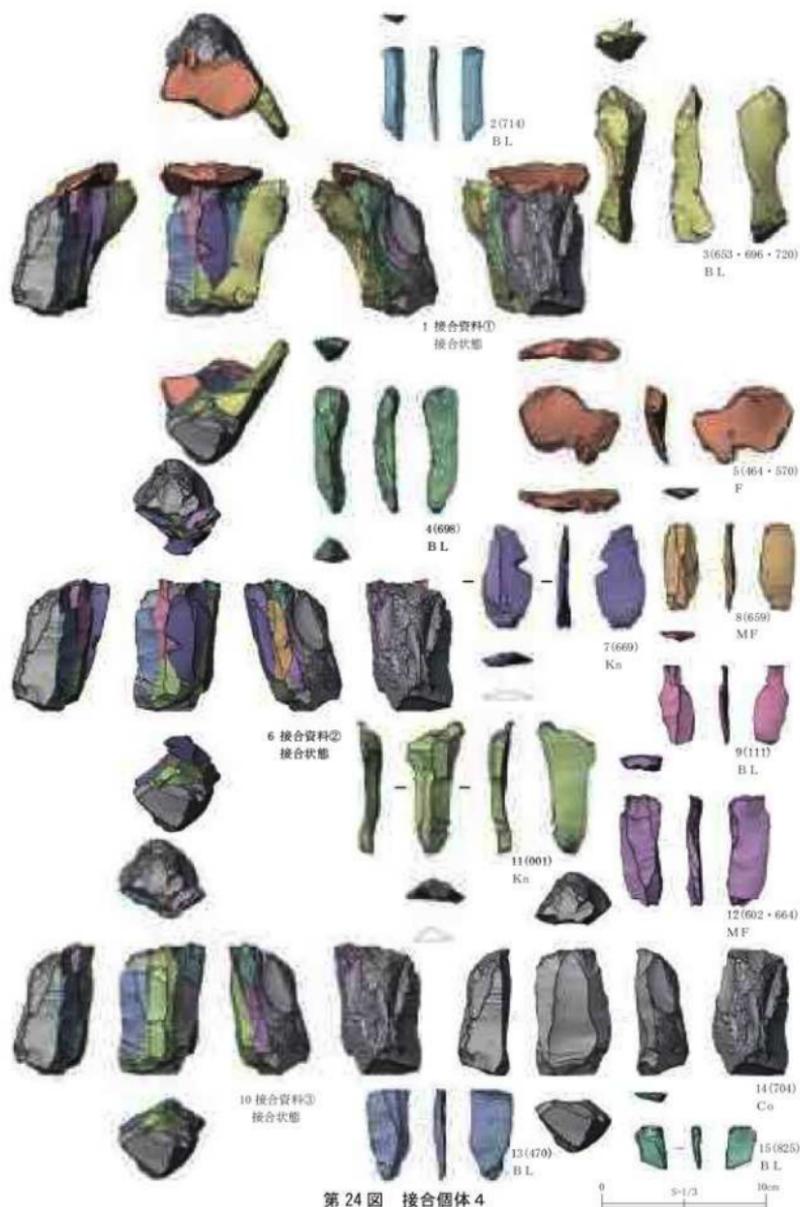




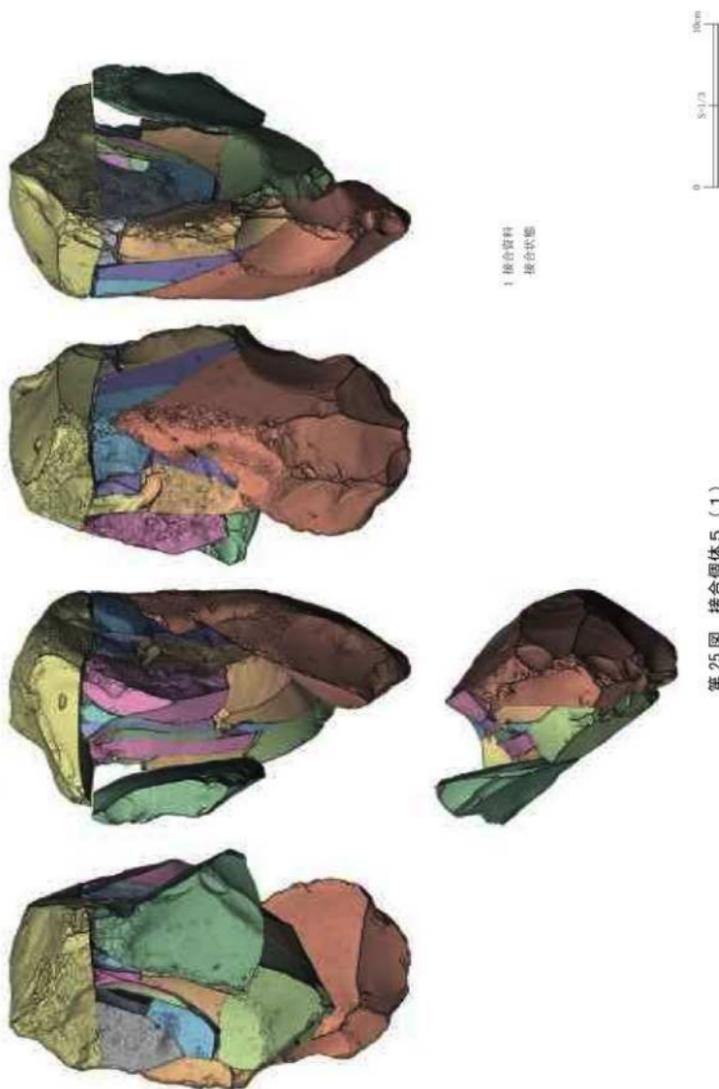
第23図 接合個体3(2)

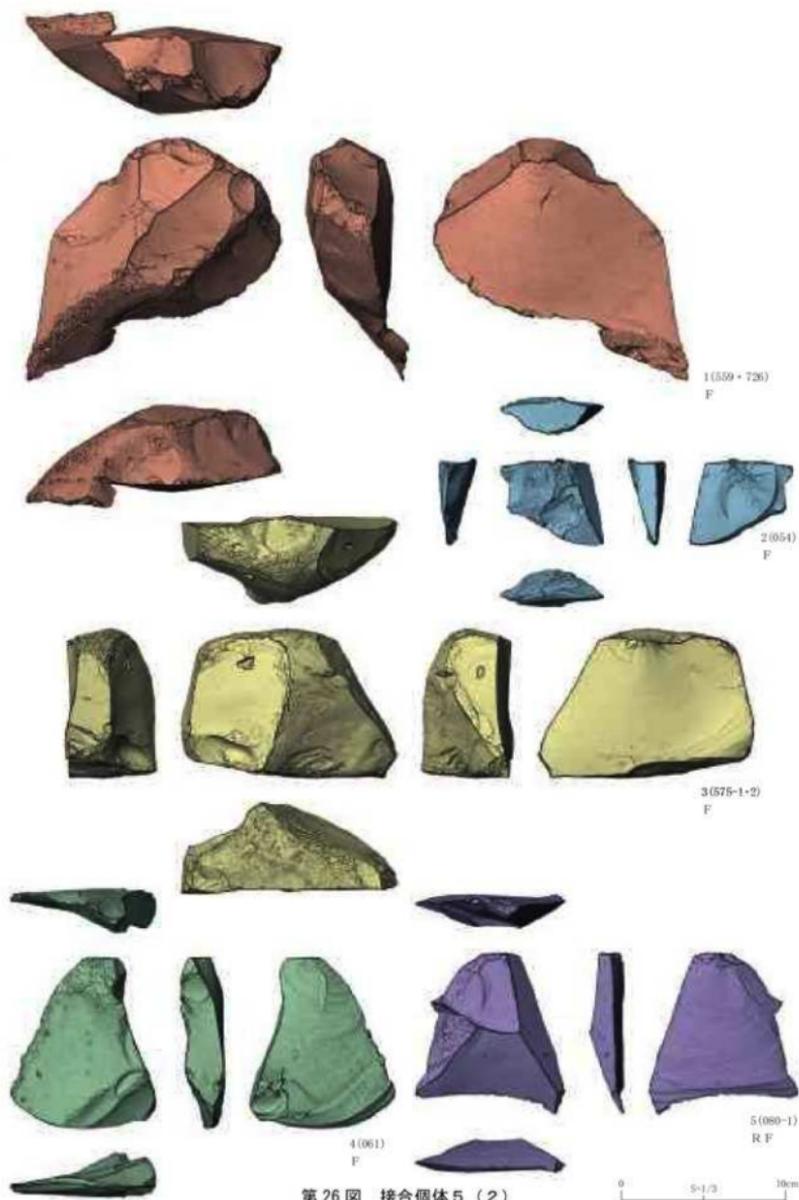
下両端を斜めに剥離し打面を作成、上面の単剥離面打面から打点を左右に移動して後退しながら石刃を連続剥離し、ナイフ形石器Ⅲ類が製作される。結果的に下面を打面とした剥離はなされず、最終的な残核は有背型となる。

接合個体20(第44図9~13)は、石刃3点、縦長剥片1点、二次加工ある石刃1点の計5点で構成される資料である。10・12・13は同一の単剥離面打面から連続的に剥離され、11は打面再生後に剥離されている。石刃は、一稜石刃2点、二稜石刃1点である。

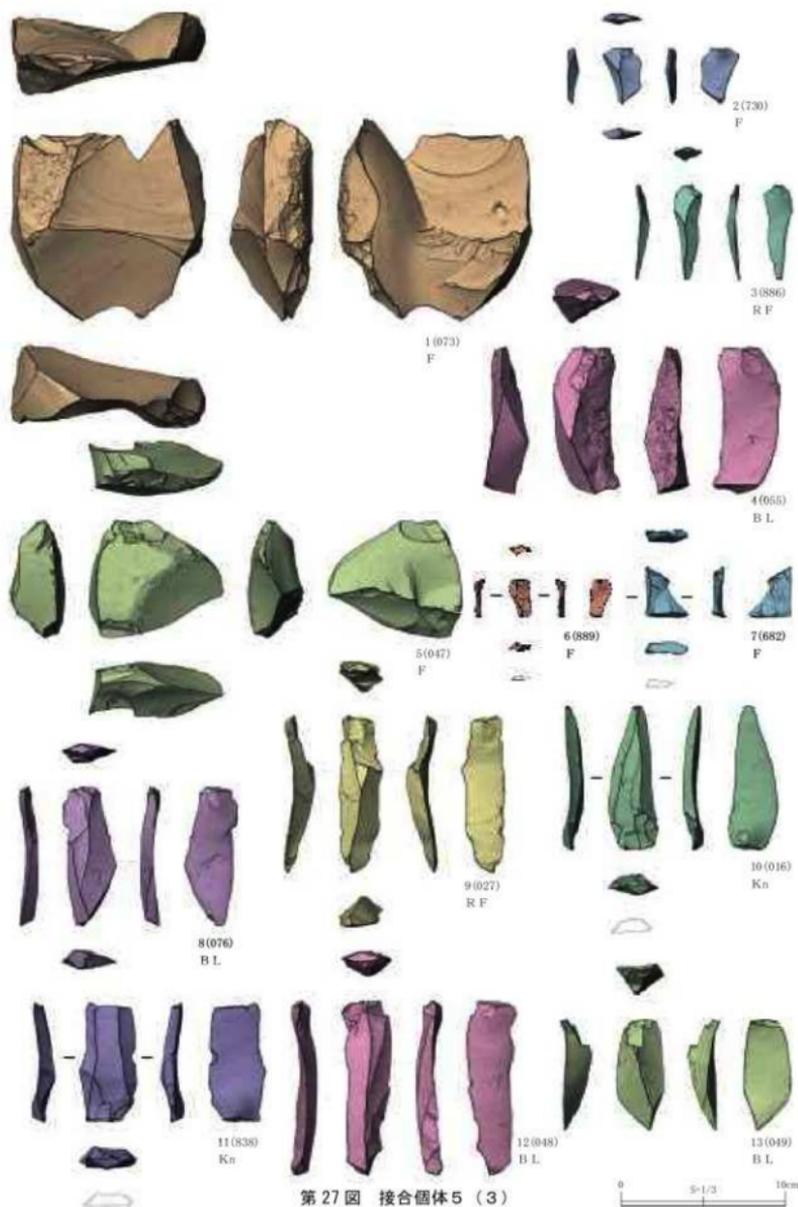


第 24 図 接合個体 4

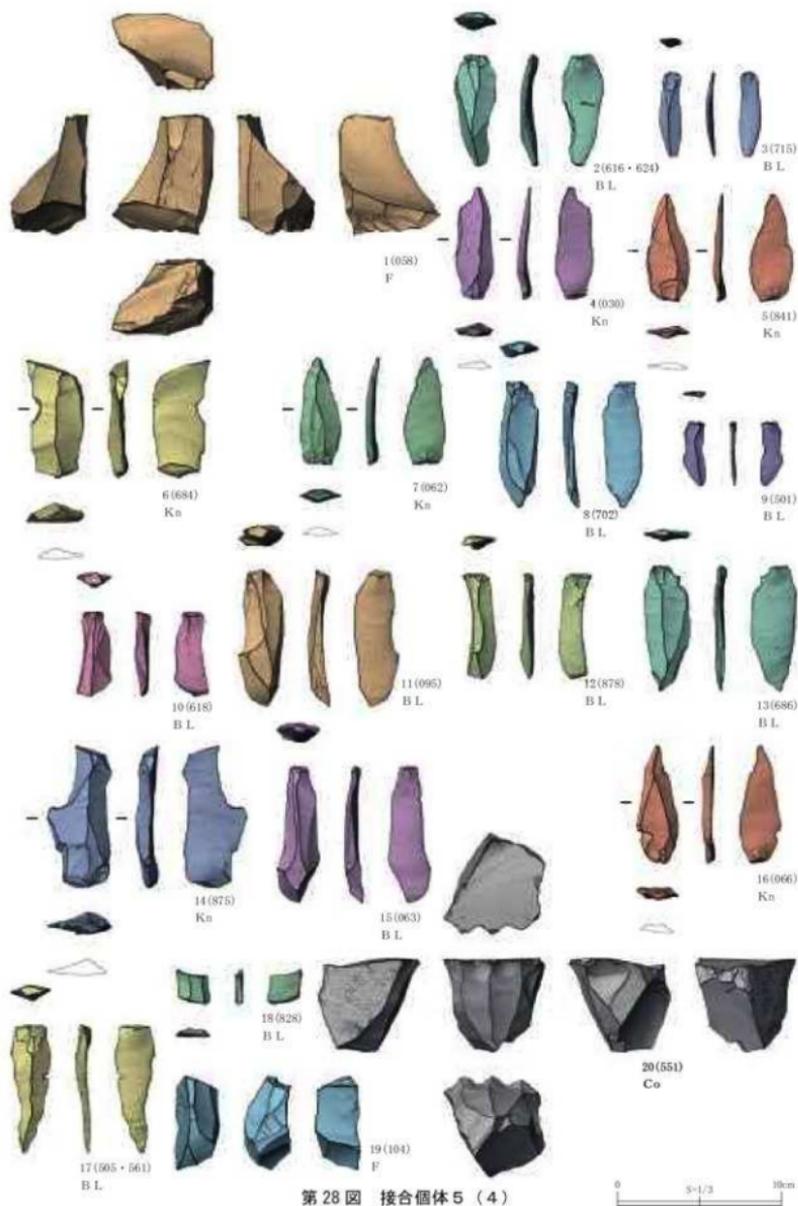




第26図 接合個体5 (2)

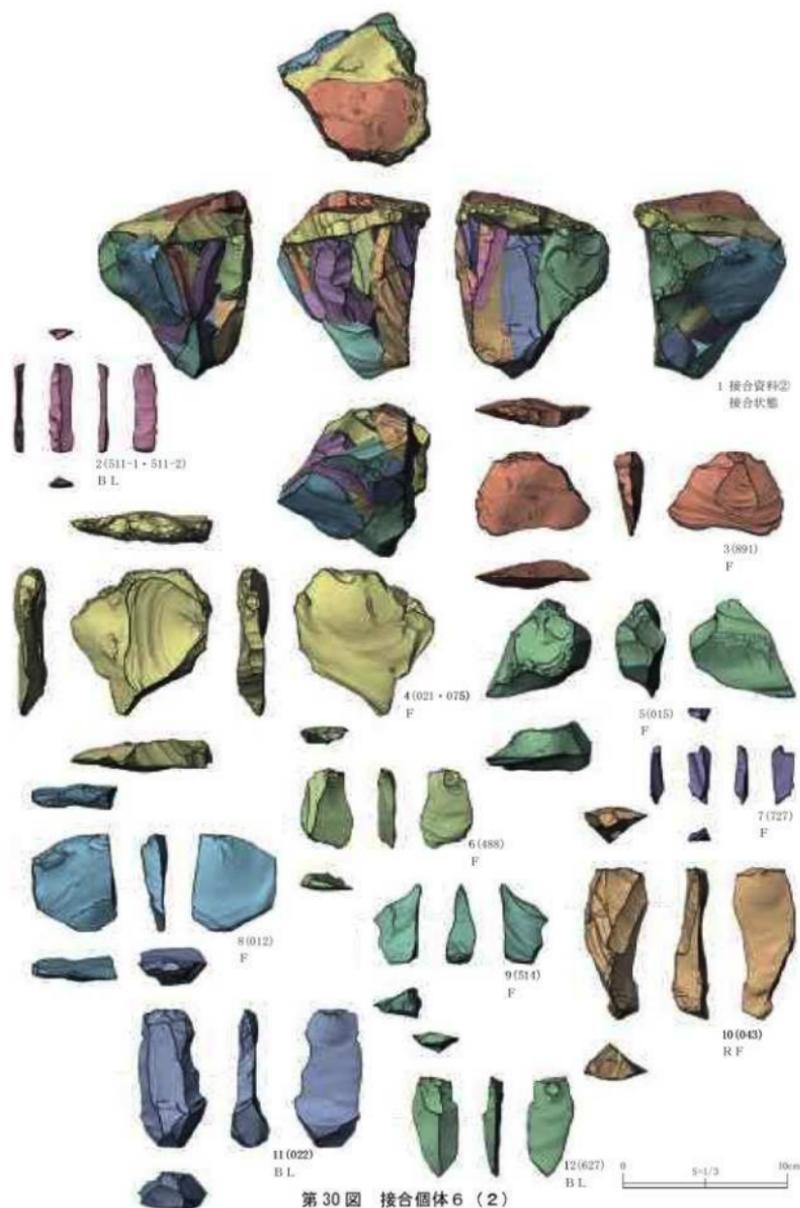


第27図 接合個体5 (3)

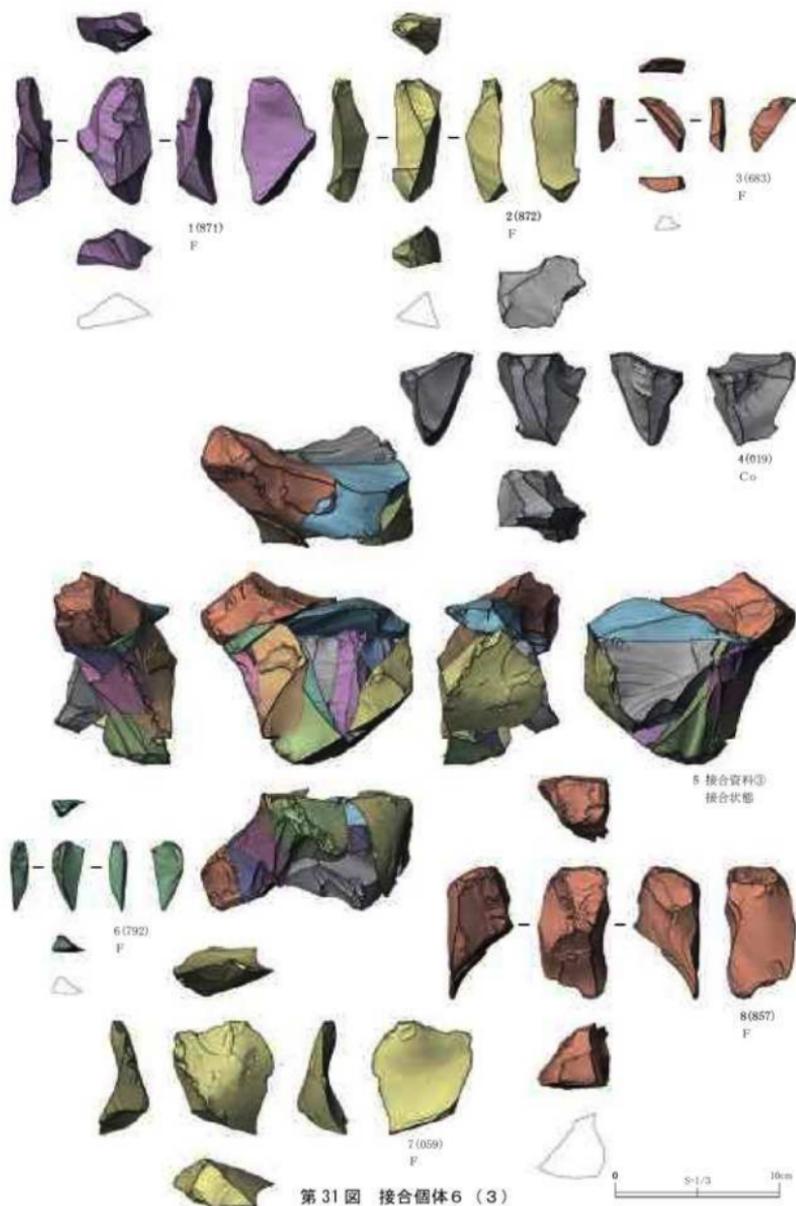




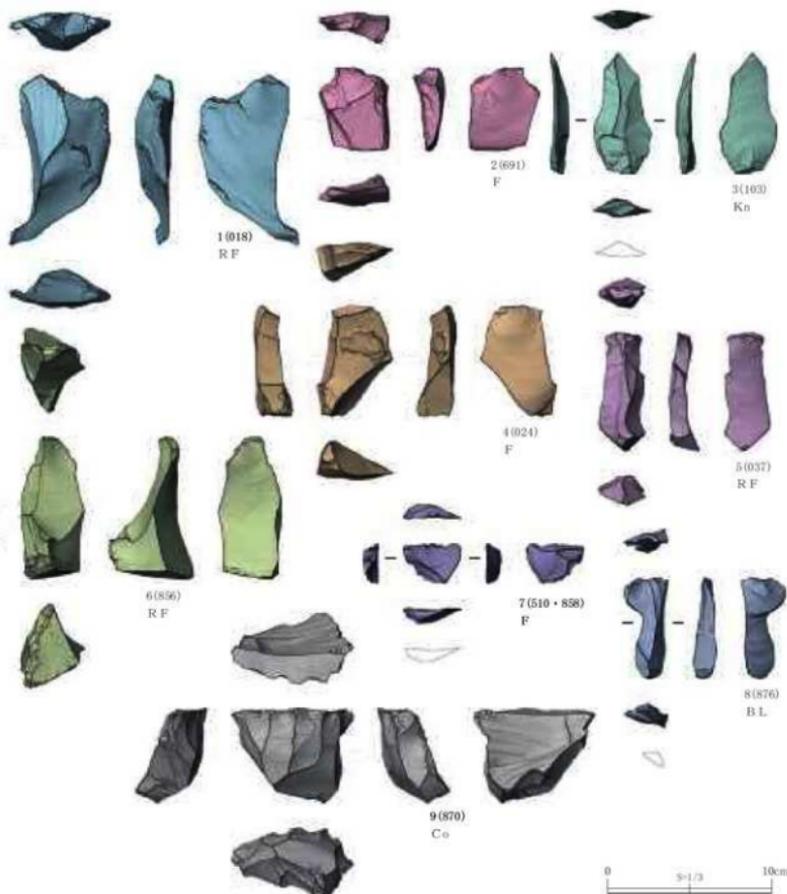
第29図 接合個体6(1)



第30図 接合個体6 (2)



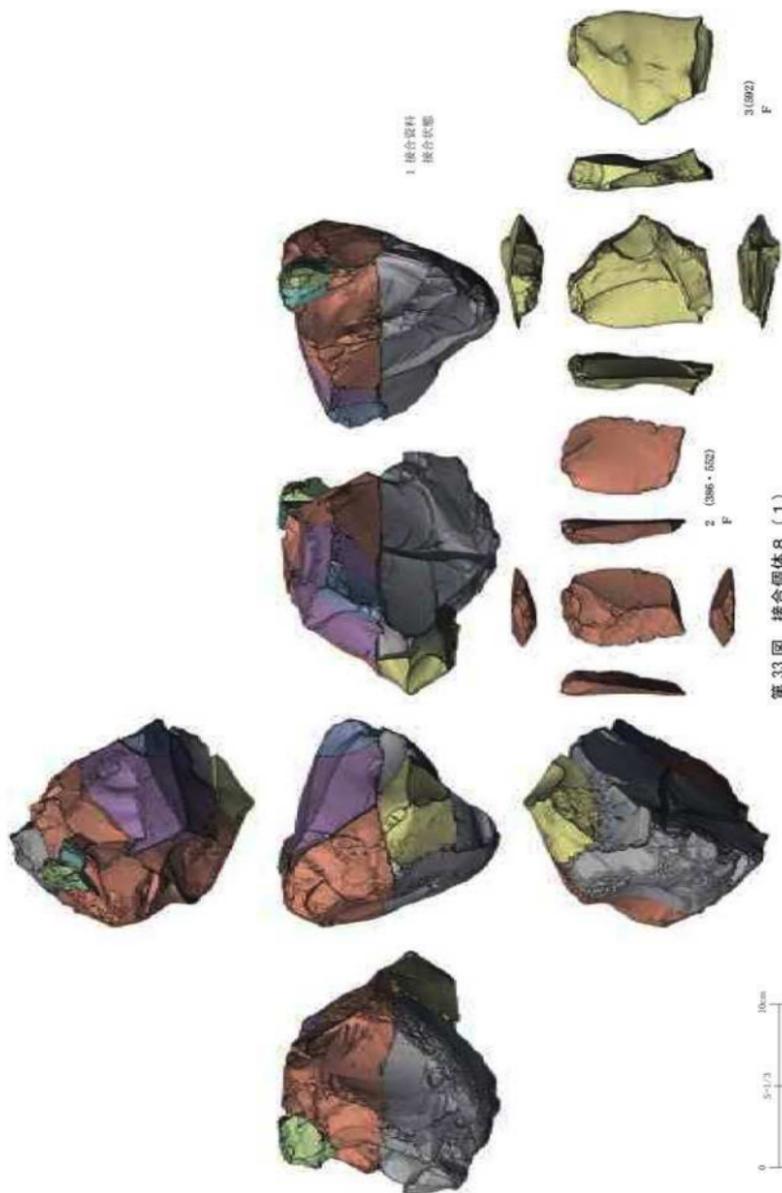
第31図 接合個体6 (3)



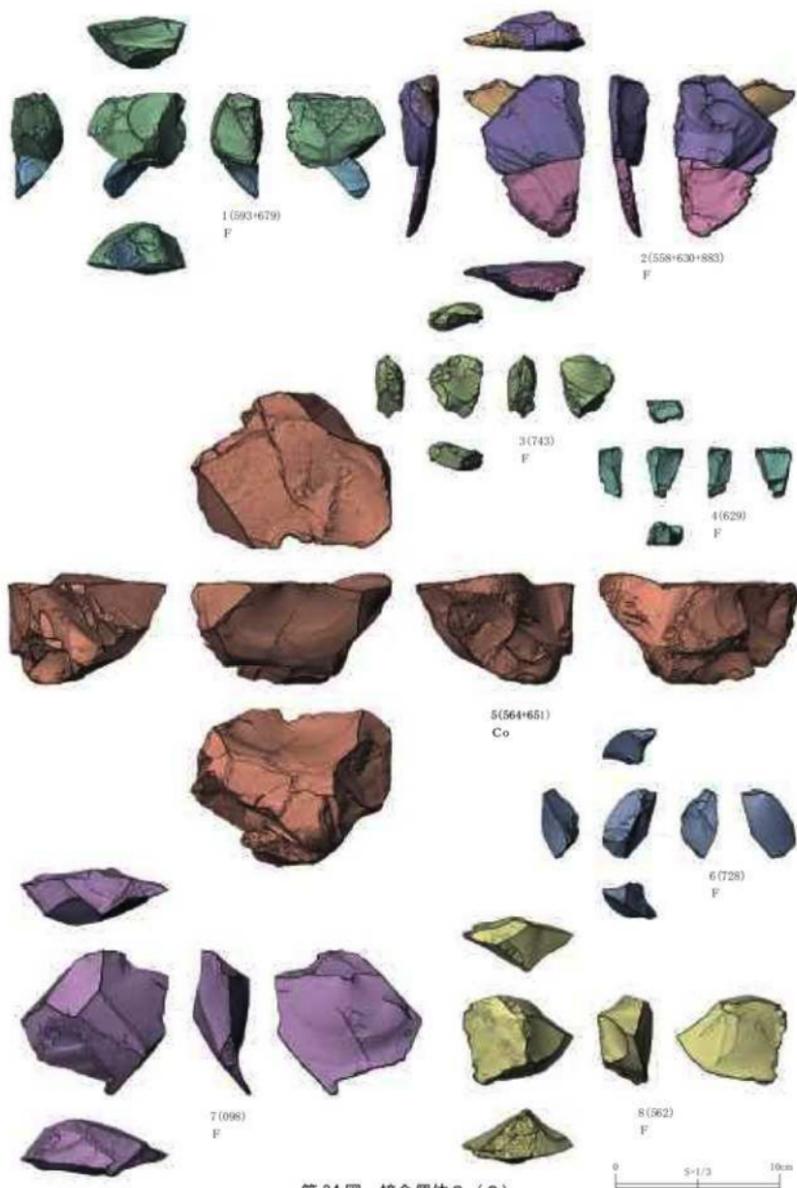
第32図 接合個体6(4)

接合個体23(第45図2~6)は、石核1点、矩形剥片1点、ナイフ形石器1点、彫刻刀形石器1点の計4点が接合した資料である。石質は珪化の度合いが良く油脂光沢が発達する。ナイフ形石器の素材となる石刃の形態は、一稜石刃である。石核下面には打面作出を企図したとみられる斜め方向からの剥離が認められるが、その面を打面とした剥離はなされず、上面の礫打面から剥片・石刃の連続剥離がなされる。得られた石刃はナイフ形石器Ⅲ類に、縦長剥片は彫刻刀形石器に仕上げられる。推定される原石は長軸10cm程度の小形砲弾状亜鉛礫である。

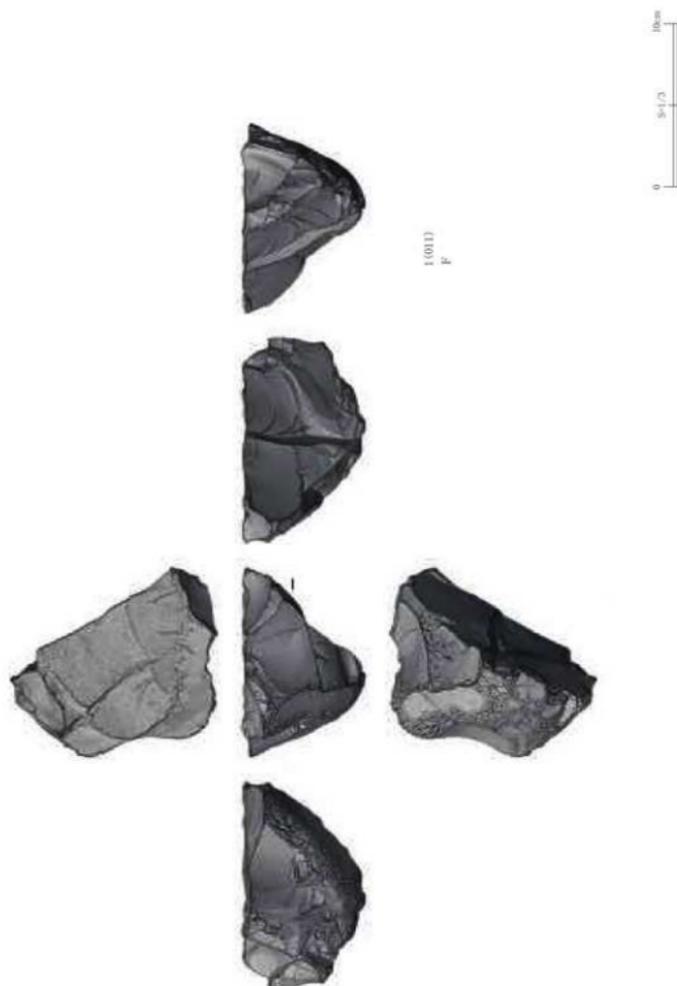
接合個体26(第46・47図)は、石核1点、縦長剥片2点、石刃1点、矩形剥片2点の計6点で構成される。石刃は一稜石刃である。完全な原石にまでは還元されないが、長軸15cm程度の亜角礫と推定



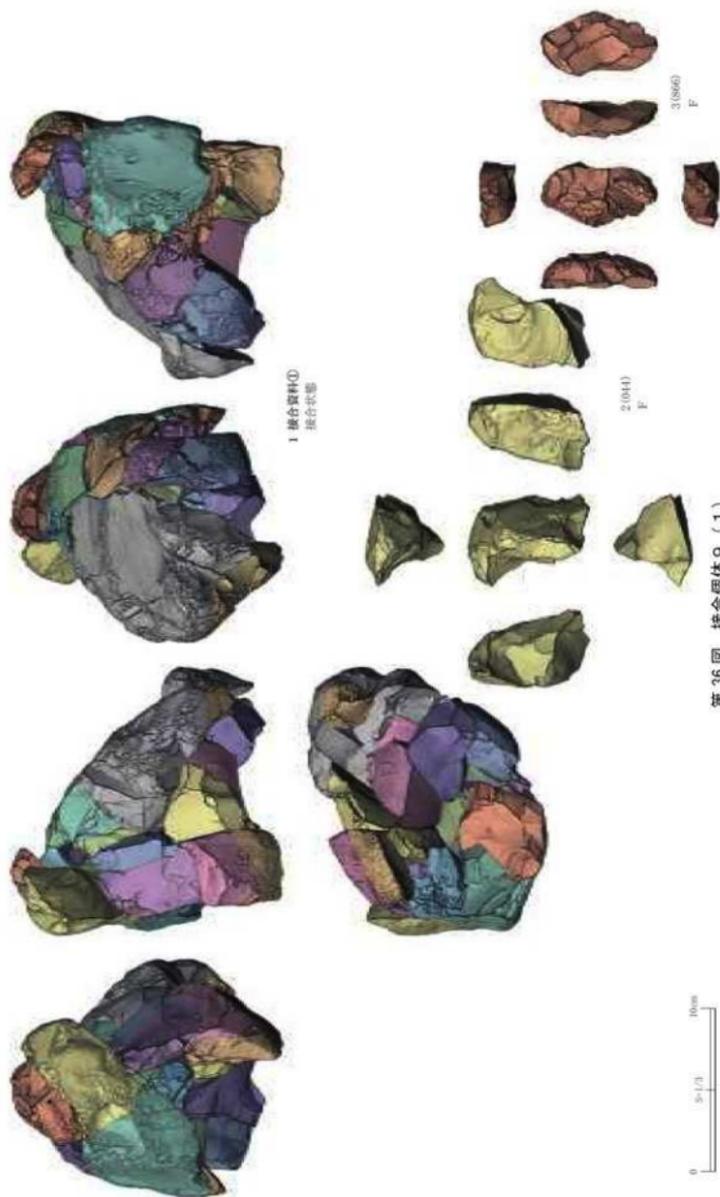
第33図 接合個体8 (1)



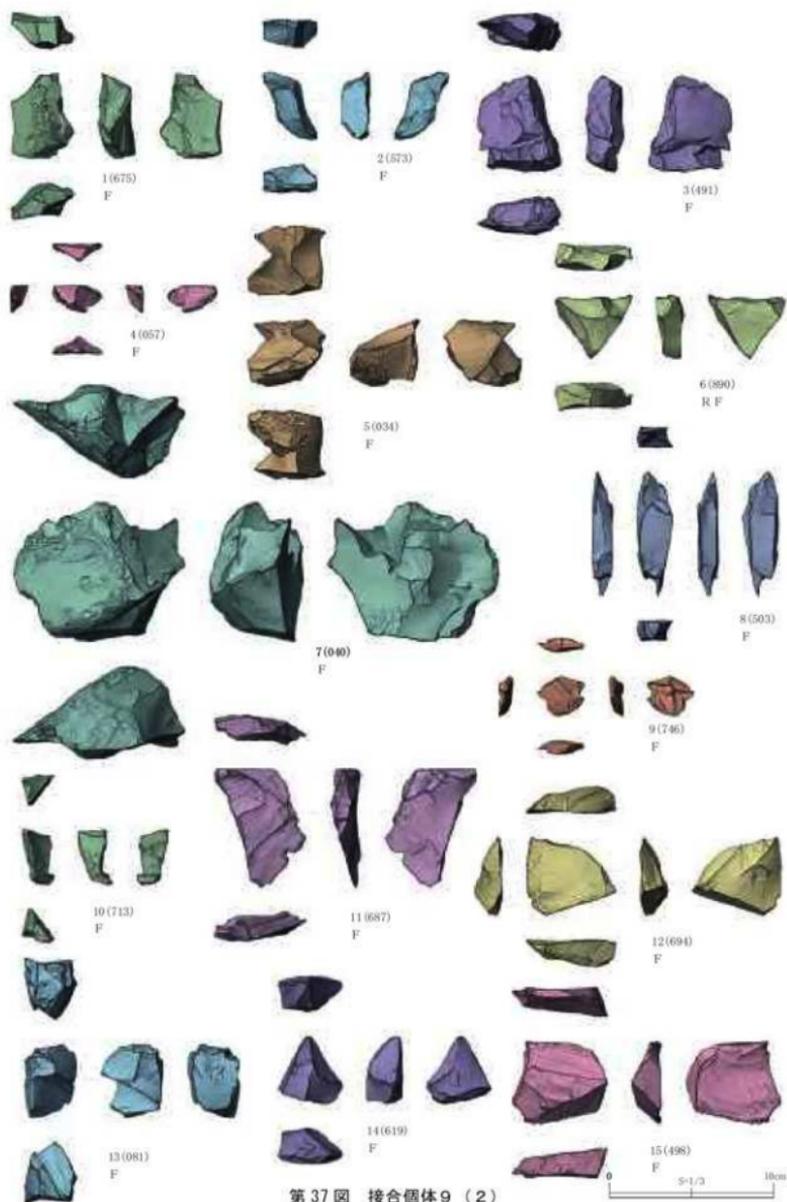
第34図 接合個体8(2)



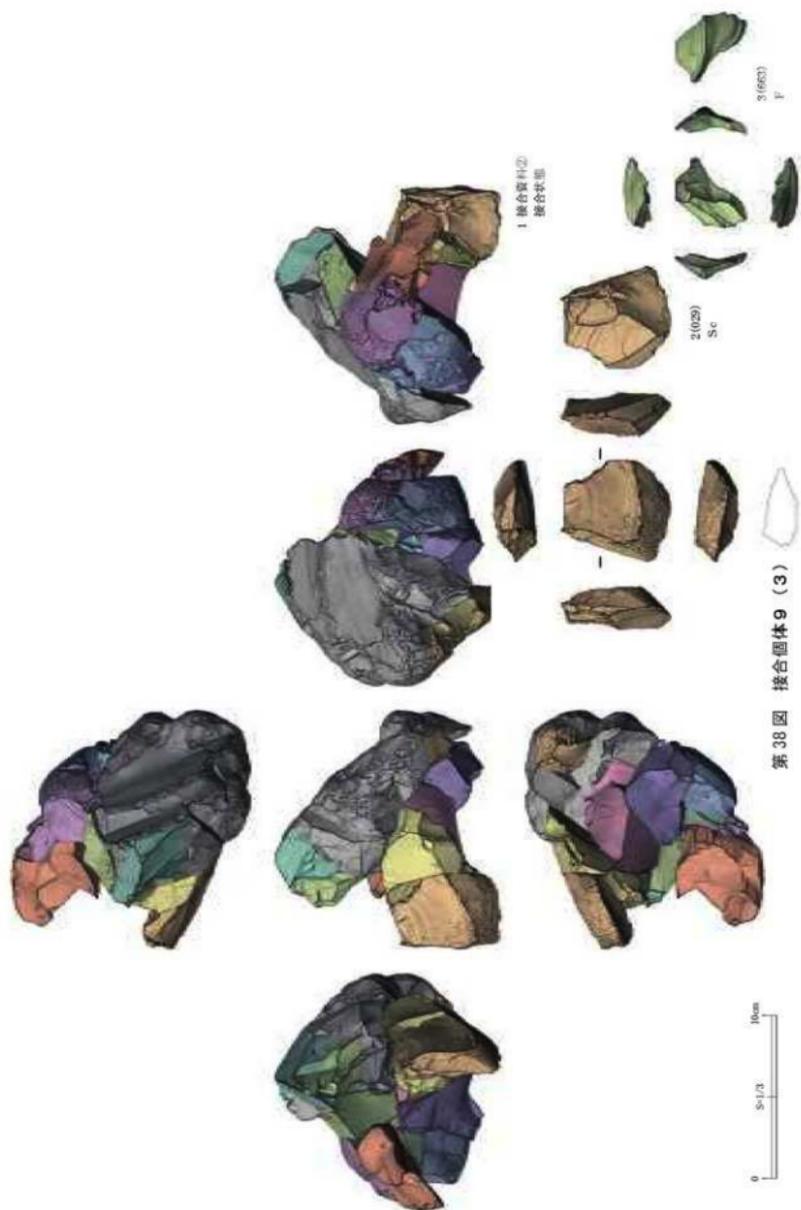
第35図 接合體B(3)



第36図 継合個体9(1)



第37図 接合個体9 (2)



第38図 接合体9 (3)



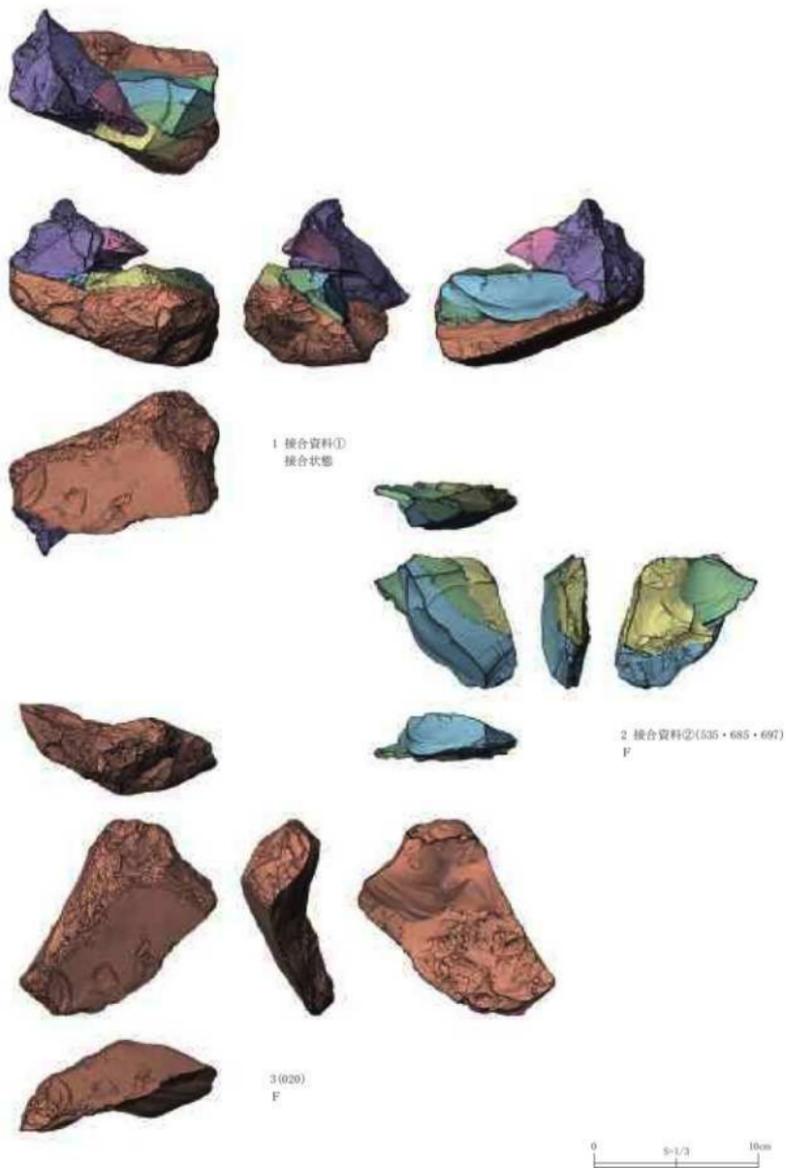
第39圖 接合個体9 (4)



第40図 接合個体9 (5)

される。石核上面に打面が作出され、そこからの連続剥離により剥片・石刃が連続剥離される。最初に部厚な第46図3・4が剥離されたのち、同図2→6→5が剥離される。2は石刃を志向したものと思われるが、力が抜けきらず末端ヒンジフラクチャーとなった結果、矩形剥片が作出されたものと考えられる。ナイフ形石器の素材となりうる石刃が剥離されないまま、剥離作業が完了している。残核は単剥離面打面の有背型となる。

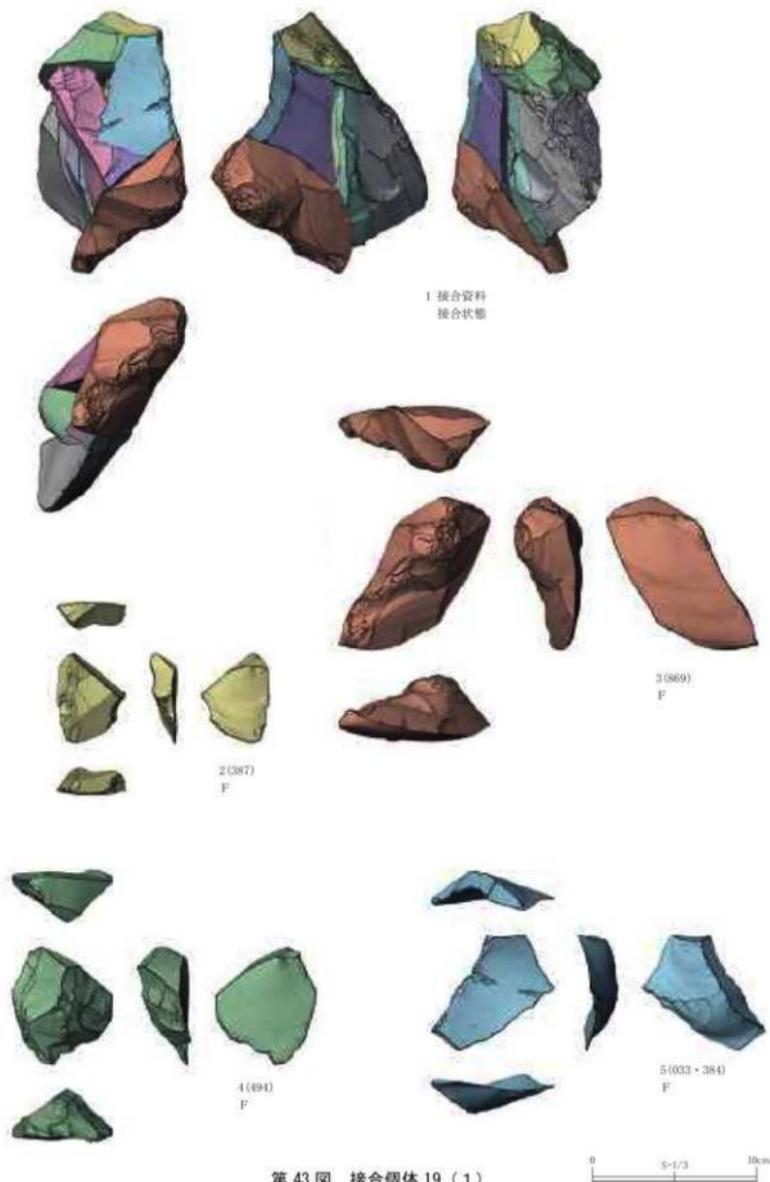
接合個体28 (第48図) は、石核1点、縦長剥片2点、矩形剥片2点、二次加工ある石刃1点の計6点で構成される資料である。接合する剥片類はすべて同一の単剥離面打面から左右に移動しつつ後退



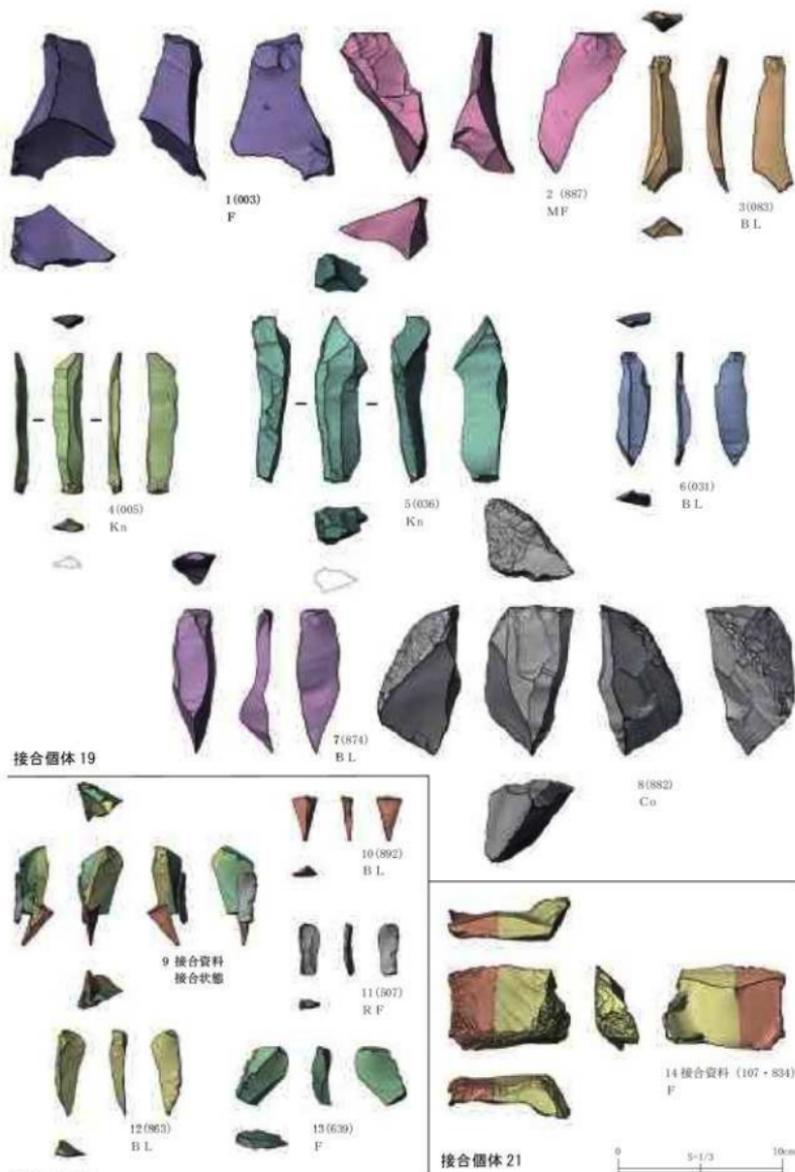
第41図 接合個体 10 (1)



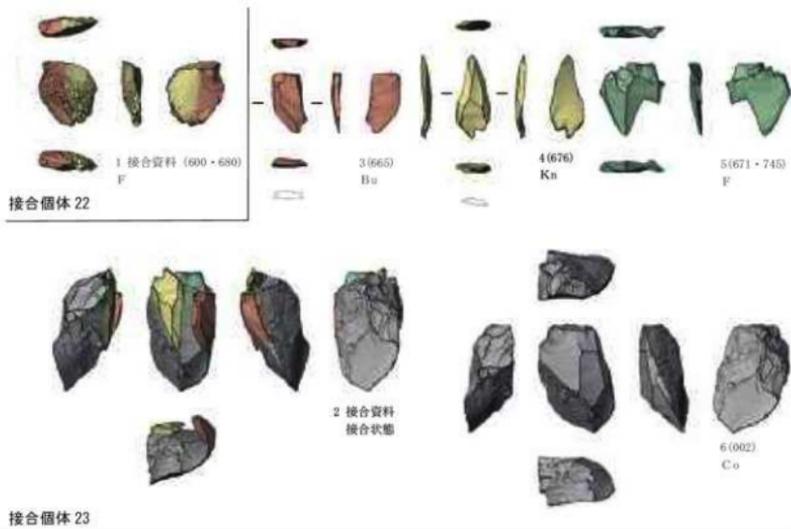
第42図 接合個体 10 (2)・14・15・16・17・18



第43図 接合個体19(1)



第44図 接合体19 (2)・20・21

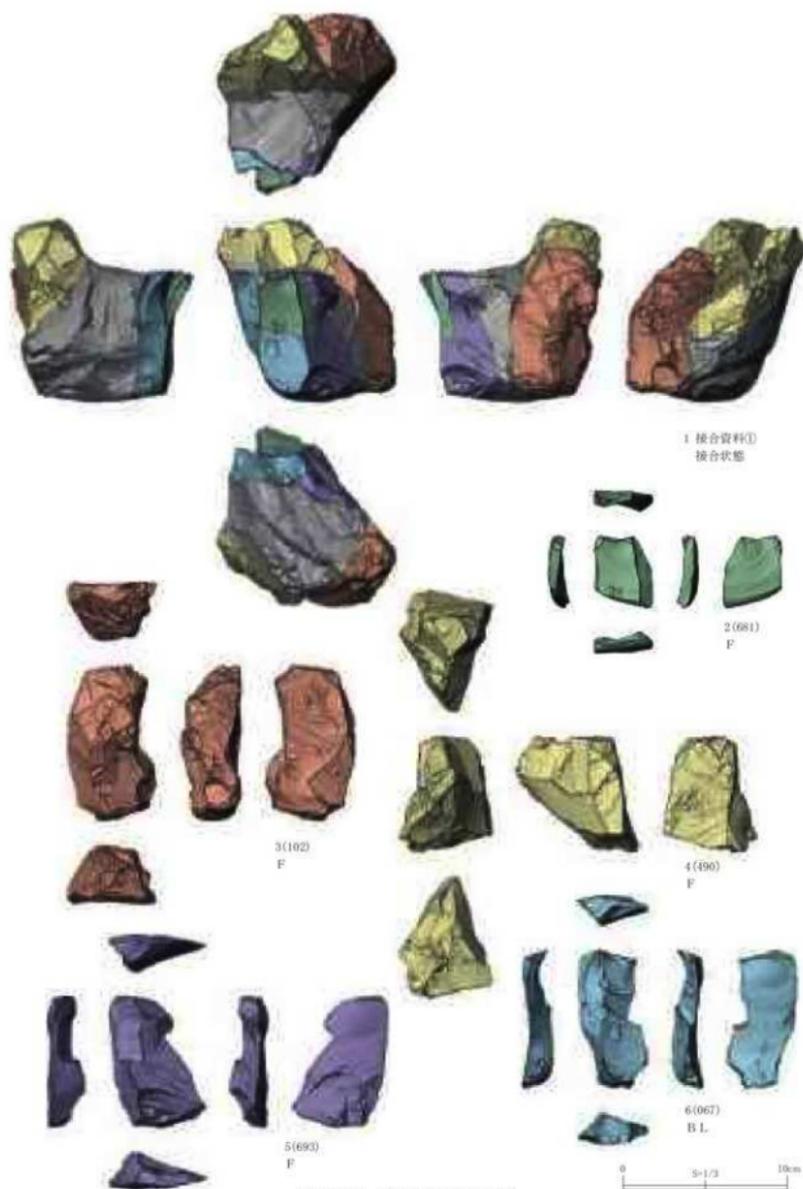


第45図 接合体 22・23・24

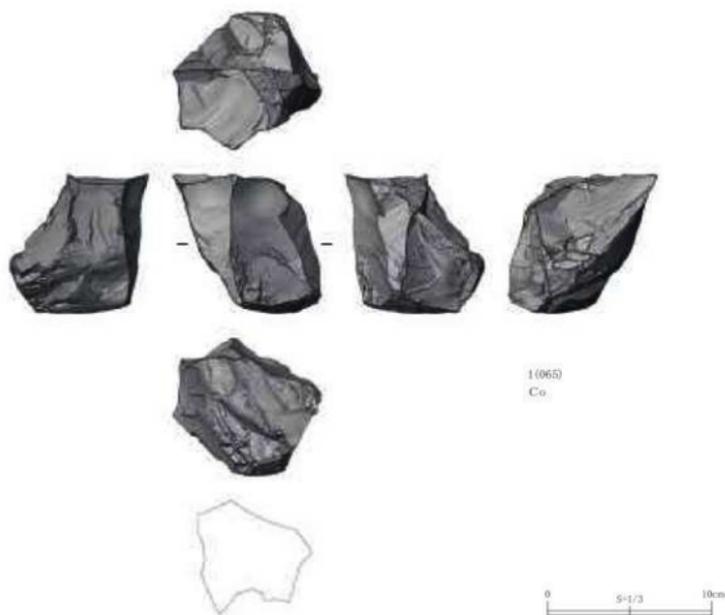
しながら連続剥離される。残核は消費しつくされた有背型となる。

接合体30 (第49図) は、打面作出剥片1点、矩形剥片2点、石刃2点、二次加工ある石刃1点の計6点で構成される資料である。石刃は、一稜・二稜・三稜石刃が1ずつある。原石にまで復元されないが、長軸20cm程度の砲弾状亜角礫原石が推定される。原石長軸を縦位において下面を斜め方向に剥離して打面を作出(3)後、2→5を剥離、打面を180度転位し、上面の単剥離面打面から7→8→6を剥離する。6・7の石刃ともにウトラパッセとなる。石核を含む欠落部が多い。

このほか、少数の接合体として、一〜数回の剥離作業を示すものには、横長幅広剥片間の接合資料10 (第41・42図1)・15 (第42図5〜7)・37 (第50図7〜9)・39 (第50図10〜12)、縦長剥片間の接合資料40 (第50図13〜15)、石刃とナイフ形石器Ⅲ類の接合資料14 (第42図2〜4)・33 (第50図1〜3)がある。また、接合資料16・24 (第42図8・第45図7)は二次加工ある剥片の同時割



第46図 接合個体26(1)



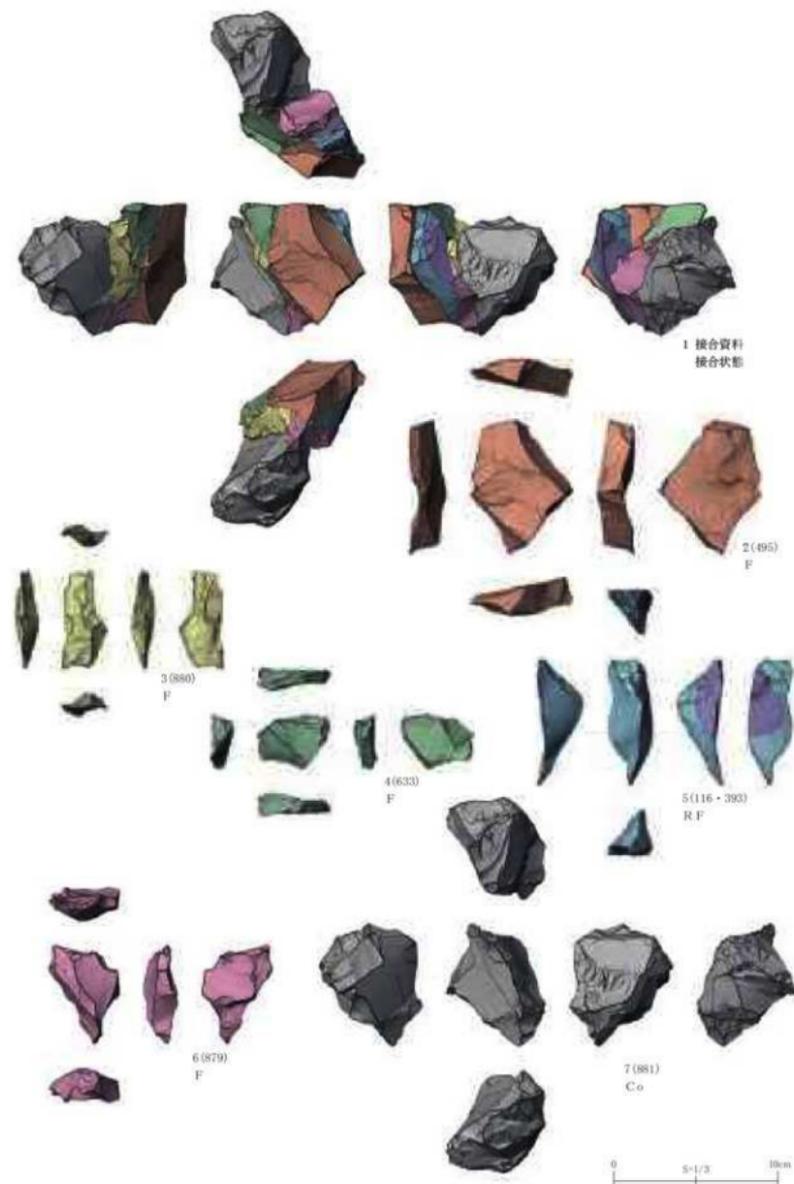
第47図 接合個体26(2)

れ、接合資料21(第44図14)は矩形剥片の同時割れ、接合資料22(第45図1)は横長幅広剥片の同時割れの資料である。

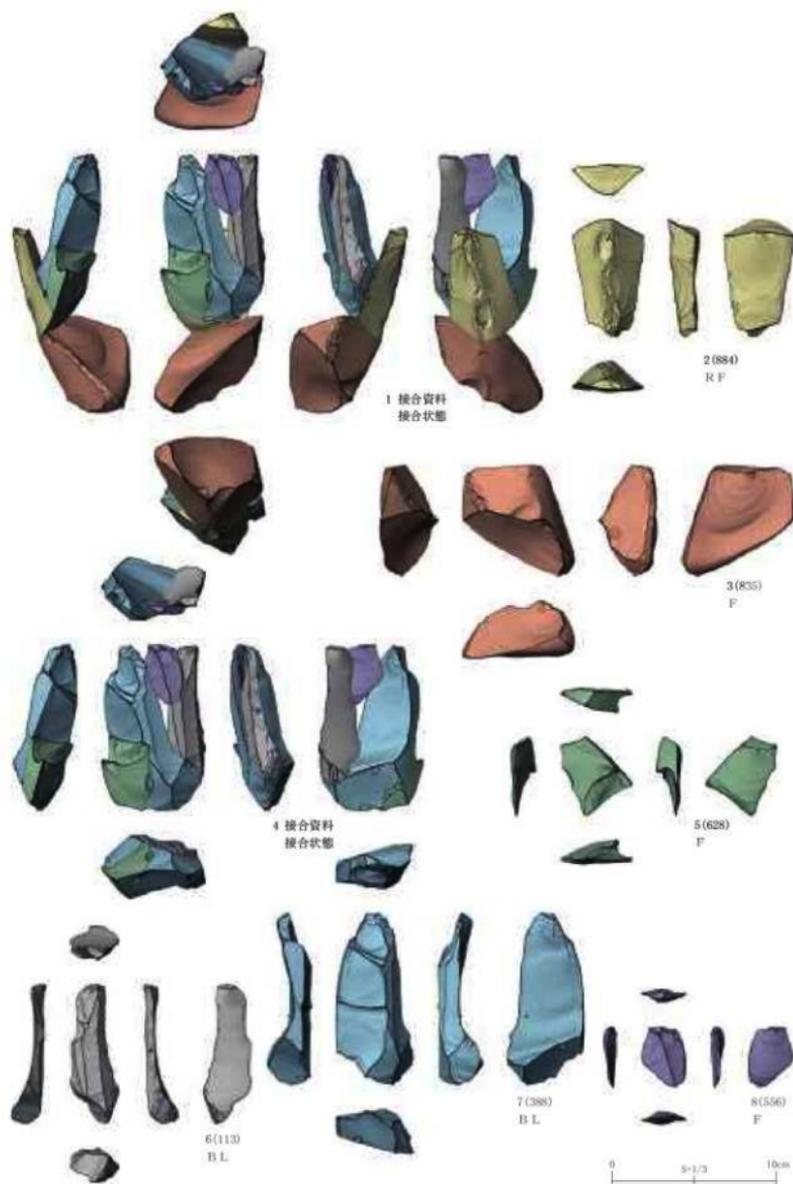
以上のほか、非接合個体として、ナイフ形石器21点、彫刻刀形石器2点、二次加工ある石刃・剥片10点、微細剥離痕ある石刃・剥片2点、原石4点、石核1点、石刃15点、剥片55点、碎片1点の計111点がある。これは石器群総点数の27.75%を占める。なお、接合個体に含まれる石器総数計289点の器種別内訳は、ナイフ形石器29点、彫刻刀形石器1点、錐状石器1点、削器1点、二次加工ある石刃・剥片26点、微細剥離痕ある石刃・剥片5点、石核15点、石刃45点、剥片166点であり、石器群総点数の72.25%である。

以上のように、本遺跡からは豊富な接合資料が得られており、原石にまで還元されるものも9例(接合資料1・3・5・6・8・9・19・26)ある。これらをもとに剥片剥離技術の特徴を見てみると、石刃剥離技術と非石刃剥離技術に区別される。

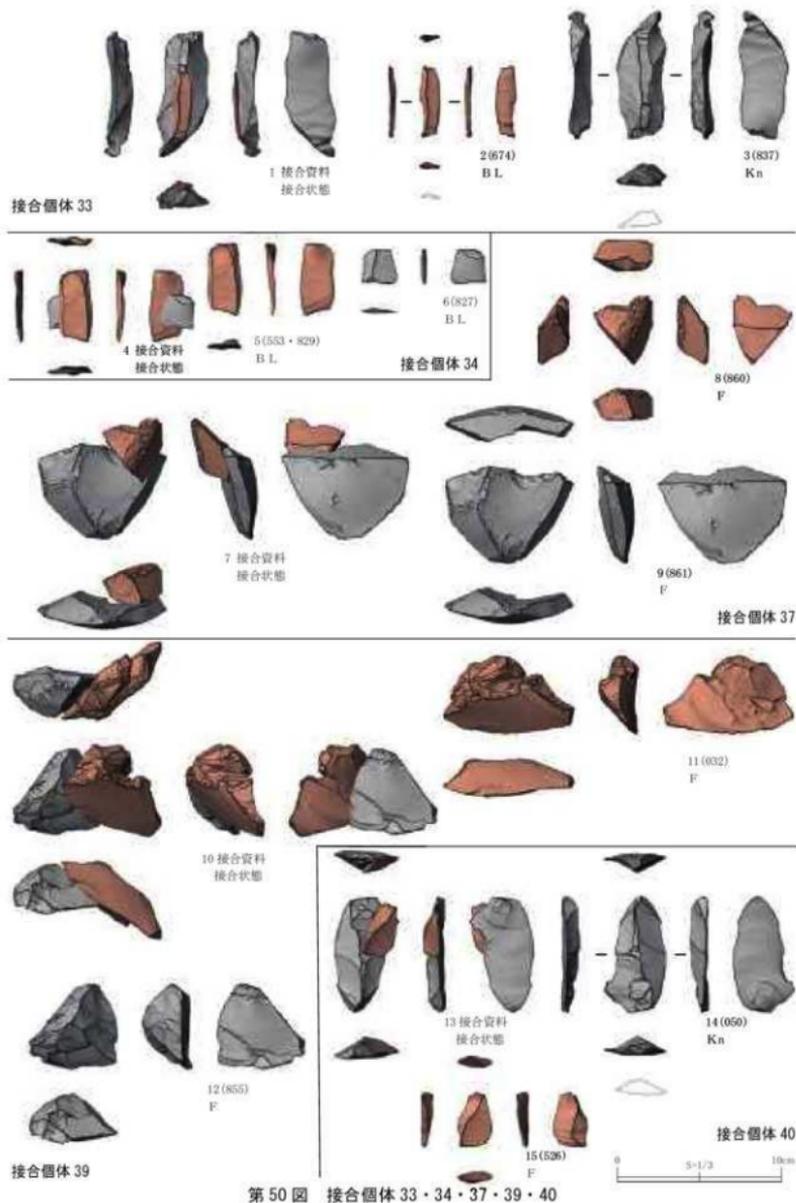
石刃剥離技術(接合個体1・2・4・5・6・19・26・28・30)は、垂角礫原石を分割する等して石核を作り出し、打面を作出後、打点を左右に振りながら後退しつつ石刃を連続剥離する技術で、最終的な残核は有背型となる。単設打面で、打面調整・稜上調整などの石核調整は施されない。これをa類とする(接合個体1・6・26・28)。作出される石刃は一稜石刃を中心としつつ、二稜石刃や三叉稜石刃も見られる。また、両設打面のものもあり、これをb類とする(接合個体4・5・19・30)。



第 48 図 接合個体 28



第49図 接合体30



第50図 接合個体 33・34・37・39・40

作出される石刃は一稜・二稜・三稜石刃を中心とする。もう一つは、扁平垂角礫を素材として小口面を作業面に設定、打面を作出後、打点を後退しながら石刃を連続剥離する技術である。打面調整・稜上調整などの石核調整は施されない。これをc類とする（接合個体2）。作出される石刃は一稜石刃・二稜石刃を中心とする。

非石刃剥離技術（接合個体3・8・9・10等）は、目的剥片が不明瞭であり、無目的に打ち割っている感がある。節理が多いものに偏ることから、本来の石刃剥離が結果的に実現されなかったものの可能性がある。そうした意味では一つの「技術」として分類・把握する意味合いは強くなく、本石器群の剥片剥離技術は石刃剥離技術を中心に検討すればよいということになる。

石刃剥離技術a・b・c類からは小型～大型の一稜石刃・三稜石刃が目的的に剥取され、それらを素材とした微細な基部加工によりナイフ形石器Ⅲ類の製作が行われている。大形品は石刃剥離過程のより初期段階、小形品はより最終段階で得られた石刃を素材としている。なお、矩形剥片や横長幅広剥片なども一定量剥離されているが、それらを素材とした製品は二次加工ある剥片や微細剥離痕ある剥片などで定形的なものはない。

以上のように、本石器群では原石からの連続的な石刃剥離が主軸となり、非石刃の剥離は目的外となる。

（3）出土石器

ナイフ形石器（第51～55図）

ナイフ形石器は50点出土しており、ほとんどのものは加工部位以外の鋭利な縁辺に不連続な微細剥離痕跡を確認することができる。

I類は、第55図4のみで、珪質頁岩の単独個体である。発掘調査排土からの採集品であるため出土位置は不明である。石刃を打面下位に用い、右側縁及び基部左側縁に刃潰し加工が施された二側縁加工形態のナイフ形石器である。平坦剥離による裏面基部加工が認められる。右側縁の加工により打面は除去されている。典型的な茂呂型ナイフ形石器の範疇で捉えられるものである。

II類は、第55図2・7が相当する。2点とも打面を上位に用い、基部が尖鋭となるように二次加工が施される。2は石器集中部外のMB44区第VIIa層で出土、7は縄文時代の竪穴建物跡SI22からの出土である。2は先端部が欠損している。7は左上半部が二次加工後の被熱により破損しており、先端部の形状・二次加工の有無は不明なものの、打面を上位に用いた尖鋭な基部加工のあり方から杉久保系ナイフ形石器の範疇で捉えられるものであろう。

その他のナイフ形石器47点は全てⅢ類に分類される。第55図3は第3号ブロック、その他は全て第1号ブロックからの出土である。器種分類の点からは、いわゆる刃潰し加工と呼べるような、縁辺を断ち切る急斜度な剥離ではなく、側縁に微細な二次加工が施されたもので占められる。そのため、I・II類と違って素材の形状がそのまま石器形態となる。第51図2・5のように二次加工がノッチ状になることもある。

本類は、本来の急斜度な刃潰し加工とは異なることから、ナイフ形石器として分類することに幾分抵抗を感じるが、加工部位に一定の法則性が認められ、明確な刃潰し加工が施される東北地方の基部加工形態ナイフ形石器と、素材・加工部位・形態の共通性が高いことから、本報告ではナイフ形石器として分類する。一般的に石器の二次加工は整形加工とともに刃部作出を目的とするが、ナイフ形石器と台形石器に限っては一次剥離によって生じた鋭利な側縁を刃部とし、刃部以外に二次加工が施される。本類は二次加工以外の縁辺に、おそらく使用に伴うと考えられる微細剥離痕が顕著にみられるものが多い。こうしたことも本類をナイフ形石器と分類する根拠の一つである。将来的には、ナイフ

形石器の定義の問題と絡めて、より適切な器種の設定がなされる可能性がある。

加工部位をみると、「基部右側縁のみ」が32点、「先端部+基部右側縁」が1点、「基部左右側縁」が4点、「先端部片側縁+基部左右側縁」が2点、「基部左右側縁（錯交調整）」が5点、「基部左側縁のみ」が2点、「先端部片側縁のみ」が1点である。こうした加工部位の違いにより細分が可能であるが、本石器群では「基部右側縁のみ」が68%と高率であるため、「基部右側縁のみ」以外の例は、煩雑さを避けるためにも、細分するよりは変異の中で捉えておきたい。

Ⅱ類が基部部に加工が及ぶのに対して、Ⅲ類の加工部位を詳細にみると、基部部まで加工が及ばず、基部のやや上方に加工されるという際立った特徴がある。

素材打面を下位に用いるため素材末端が石器先端部となる。先端部形状から、尖刃形態・平刃形態・斜刃形態に区別される。「尖刃形態」（第52図6・8等）は両側縁がなす平面の先端角が40度内外より小さく尖鋭なもの、「平刃形態」（第51図3・4等）は先端部縁辺が器体長軸に対してほぼ垂直に交わるもの、「斜刃形態」（第51図5・7等）は先端部縁辺が器体長軸に対して45度前後で交わるものとする。ナイフ形石器の基部形態には一般的に平基・尖基・円基があるが、本石器群のナイフ形石器Ⅲ類は幅広の素材打面をそのまま保持しているため、ほぼ平基で占められる。吉川（2010）を参照に、以上の基部形態と先端部形態の組み合わせでナイフ形石器Ⅲ類を捉えなおすと、平基尖刃形態・平基平刃形態・平基斜刃形態が確認される。

背面に礫面を残すものはほとんどなく、ある程度剥離が進行したのちに作出された石刃を素材として本石器が製作されていることが分かる。このことは接合個体の状況からも具体的に確認できる。

ナイフ形石器Ⅲ類の素材には、一稜石刃・二稜石刃・三稜石刃が用いられている。Ⅲ類中、判断しうる資料で見ると、一稜石刃素材は25点、二稜石刃素材は9点、三稜石刃素材は13点である。うち接合個体中では、一稜石刃素材が11点、二稜石刃素材が6点、三稜石刃素材は10点であり、いずれにせよ一稜・三稜石刃素材がほぼ等しく中心的であることが分かる。一般的に、一稜石刃は単設打面石核からの剥離、二稜石刃は単・両設打面石核からの剥離、三稜石刃は両設打面石核からの剥離により生産される傾向にあるが、本石器群では、前項で見たように、同一工程内で三者が剥離される。

以上の石刃形態別にナイフ形石器の細別形態組成を見ると、一稜石刃25点中全てが平基尖刃形態で占められる。二稜石刃は9点中、平基尖刃形態3点・平基平刃形態2点・平基斜刃形態3点（1点は先端部破損のため除外）、三稜石刃は13点中、平基尖刃形態1点・平基平刃形態5点・平基斜刃形態7点となる。一稜石刃は尖刃形態、三稜石刃は斜刃形態との結びつきが強いことが分かる。なお、平刃か斜刃かは、器体長軸に対する素材末端部縁辺の傾き度合いの差で区別したが、意図的な作り分けは本石器群において見出せない。一方で尖刃形態は、石刃石核からの意図的な連続剥離による一稜石刃と結びついていると理解される。そうした意味で三者は対等ではなく、「尖刃」対「非尖刃」（平刃≠斜刃）という関係性が正しい理解かもしれない。そうした理解に立つと、三稜石刃のみならず二稜石刃も非尖刃形態との結びつきが強い（8点中5点）ことが分かる。

ちなみにナイフ形石器Ⅰ類の1点は、二稜石刃素材の尖基尖刃形態である。急斜度な刃潰し加工により「二稜石刃素材=尖刃形態」を実現している点と評価される。第55図2のⅡ類も先端部の二次加工により尖刃形態となっている点で、整形成度がⅢ類より高いと言える。

ナイフ形石器の法量（長さ×幅）からは、大型品（長軸8cm以上）・中型品（長軸6cm以上8cm未満）・小型品（長軸6cm未満）に便宜的に区別される（第56図）。大型品は三稜石刃素材、中型品は一稜・二稜石刃素材、小型品は一稜石刃素材に偏る傾向が指摘でき、ナイフ形石器の法量と素材石

刃形態にも一定の対応関係を認めることができる。大型品はほぼ接合資料に含まれ、中型品は1/4が非接合個体、小型品はほとんどが非接合個体となっている。

以上から、本遺跡では大～中型品の一稜・三稜石刃素材の平基平刃・平基斜刃・平基尖刃形態のナイフ形石器が中心的に製作されていると判断される。一方、中～小型品の一稜石刃素材平基尖刃形態の多くが接合しないという点は、これらが遺跡外で製作され、当該遺跡に搬入されたものであることを示していると推測することができる。ただし、本遺跡は前述のように東側へ広がる可能性があるため、遺跡外での製作かどうかは慎重を期すべきでもある。

以下、Ⅲ類について素材と形態を中心として個別に見る。

第51図1は三稜素材平基平刃形態、先端部欠損。同2は一稜素材平基尖刃形態で基部から先端部にかけて肥厚する。同4は三稜素材平基平刃形態。同5は三稜素材平基斜刃形態で、右側縁上部に表面から、基部側に裏面から二次加工が施されている。同3は二稜素材平基形態で、先端部欠損。同7は三稜素材平基斜刃形態。同6は三稜平基平刃形態。同8は三稜平基斜刃形態。9は二稜素材平基斜刃形態。

第52図1は一稜素材平基尖刃形態。二次加工は非常に微細で、右側縁は表面からの平坦な微細剝離痕である。同2は一稜素材で先端部は素材石刃剝離に同時割れが生じた結果、斜刃形態状になったものと考えられるが、結果的にナイフ形石器に仕上げられているため、斜刃形態に含める。同4は一稜素材平基尖刃形態。中央稜線から右半分は礫面。同3は一稜素材平基尖刃形態で先端部一部欠損。同5は三稜素材平基形態。先端部形態は斜刃状を呈するものの、表面に本素材石刃剝離に先行する一次剝離の打撃による割れ円錐が残り、多分に偶発的な要素を否めないが、同4と同様の理由から斜刃形態とする。同7は二稜素材平基尖刃形態で、先端部欠損。同6は一稜素材平基尖刃形態であるが、先端部の二次加工により尖鋭部がやや鈍る。同8は一稜素材平基尖刃形態で、先端部やや欠損。同9は二稜素材平基形態で上部欠損。10は一稜素材平基尖刃形態。

第53図1は二稜素材平刃形態で基部欠損、左側縁の扱りは発掘中のガジリである。同2は一稜素材平基尖刃形態で先端部やや欠損。同5は三稜素材平基平刃形態。同7は一稜素材平基尖刃形態。同9は三稜平基斜刃形態。同6は二稜素材平基斜刃形態。同3は三稜素材平基斜刃形態で先端部欠損。本石器群の斜刃は器体右側に刃部が置かれるが、本石器は左側に刃部が置かれる。同8は二稜素材平基斜刃形態。同4は一稜素材平基尖刃形態で先端部・基部欠損。同10は一稜素材平基尖刃形態。

第54図1は三稜平基斜刃形態で先端部やや欠損。同2は一稜素材平基尖刃形態。同3は二稜素材平基斜刃形態で先端部やや欠損。同4は一稜素材平基尖刃形態で基部左側縁は裏面から、同右側縁は表面からの錯交調整が施される。同5は一稜素材尖刃形態で基部欠損。素材が薄いこともあって、二次加工は非常に微細である。同6は一稜素材尖刃形態で基部は欠損。同7は一稜素材平基平刃形態。石質は珪化の度合いが進んでおり、肉眼観察からは接合個体14と同一個体の可能性がある。同8は一稜素材円基尖刃形態。同9は一稜素材平基尖刃形態。同10は一稜素材平基尖刃形態。同11は一稜素材平基尖刃形態。基部右側の素材打録部に微細な加工が施され、一見すると頭部調整のようにも見える。同12は一稜素材で平基尖刃形態。基部右側縁に上部から基部側に向けて表面→裏面からの錯交調整が施されている。先端部やや欠損。同13は一稜素材尖刃形態で基部欠損。同14は二稜素材平基尖刃形態。同15は一稜素材平基尖刃形態。

第55図1は一稜素材平基尖刃形態。同3は一稜素材円基尖刃形態で、本石器群のナイフ形石器唯一の玉髓質珪質頁岩製で第3号ブロック出土である。同5は三稜素材円基尖刃形態。同6は三稜素材尖刃形態で基部欠損。

彫刻刀形石器 (第55図8~10)

8は石刃を素材として素材の主要剥離面側→左側縁に極状剥離が施され、彫刀面が作出される。9は接合個体23に含まれる資料で、縦長剥片の打面側折れ面を彫刀面打面として、左側面に極状剥離が一条施される。10は部厚な矩形剥片の礫打面を彫刀面打面として左側縁に極状剥離が少なくとも三条施される。

錐状石器 (第14図6)

6は接合個体1に含まれる資料で、石核の礫面除去過程で生じた大形部厚の矩形剥片を素材とし、末端部に裏面から急斜度な二次加工が施され、錐状の刃部が作出されている。刃部先端は欠損。

削器

図示していないが、石刃や剥片の側縁部に素材主要剥離面側から連続的な二次加工が施され刃部が作出されているものである。

二次加工ある石刃・剥片 (第55図12)

12は石刃を素材とし、ナイフ形石器Ⅲ類のように特定の部位に限定せず、両側縁に断続的な二次加工が施されている。

微細剥離痕ある石刃・剥片 (第55図13)

石刃や剥片の縁辺に微細な剥離痕を持つものを一括した。13は剥片末端縁辺から右側縁下半にかけて断続的な微細剥離痕が表裏面に確認されるものである。

石核 (第55図11)

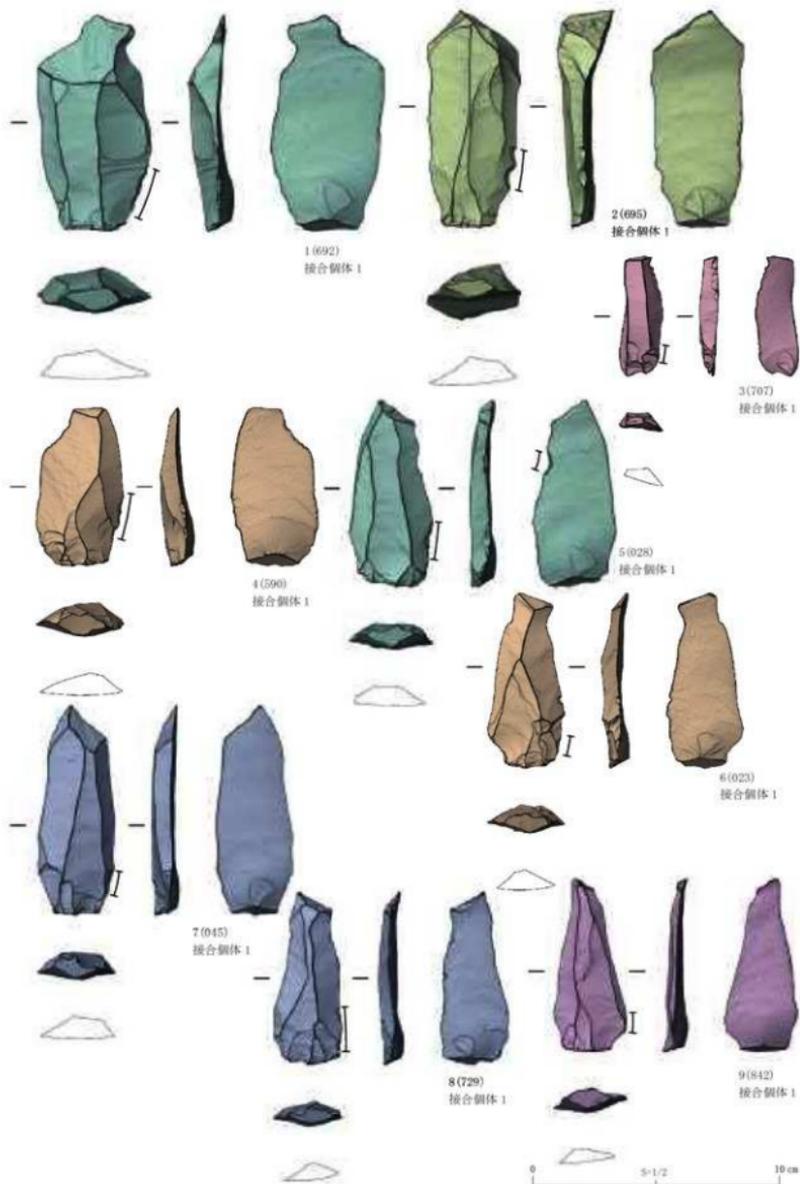
ほとんどが長軸10cm未満のもので、消費し尽くされた残核と推定される。単設打面・両設打面石核・90度打面転位石核があり、打面は単剥離面打面で占められる。打面調整・稜上調整は施されないが、石刃類や接合資料からは打縁調整（頭部調整）が施されていることが分かる。

石刃・剥片

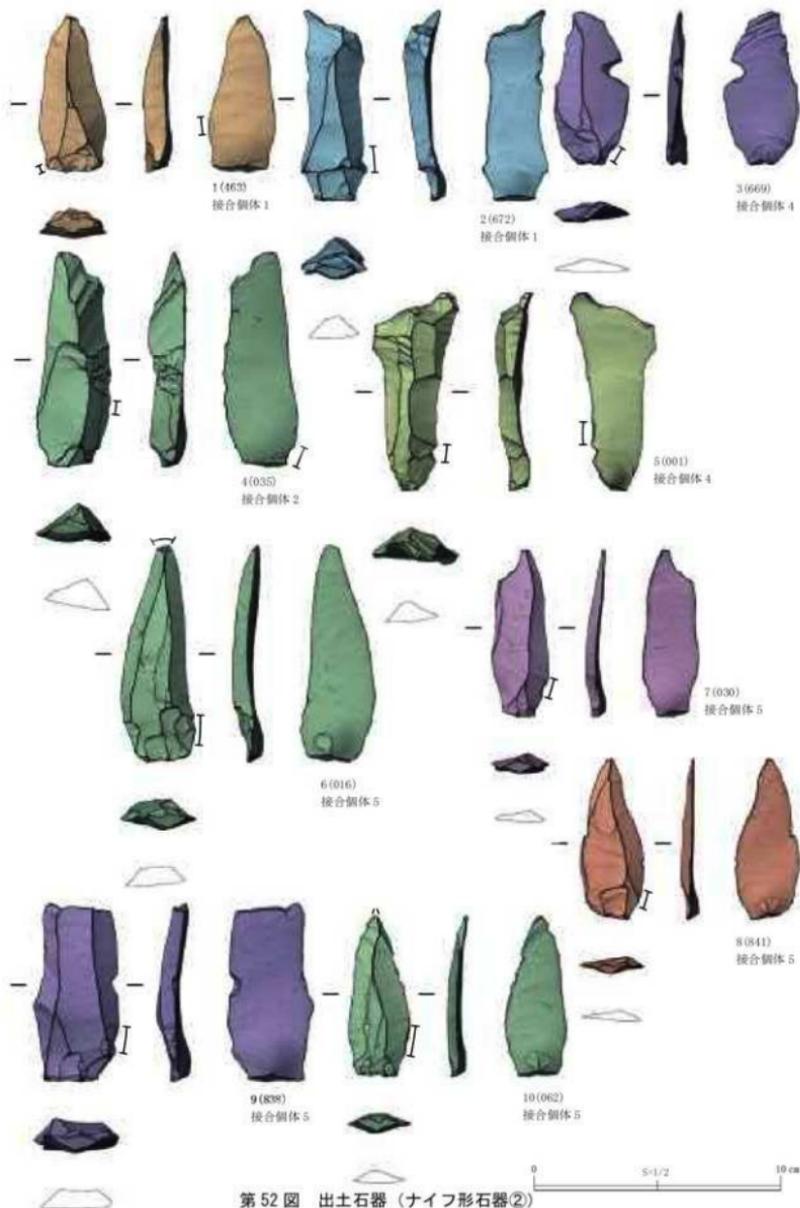
石刃・剥片類は単剥離面打面を有するものがほとんどである。石刃や矩形剥片の背面に礫面を残すものは少なく、同一剥離軸もしくは180度異なる剥離軸を持つ背面構成で占められ、特に前者が多い。剥片のうち横長幅広剥片や縦長剥片には礫面を有するものが一定量存在し、部厚なものも多い。これらは、石核の外皮を除去しつつ進められた剥離作業の結果と考えられる。また、図示していないが、表裏両面にポジティブ面が認められる貝殻状剥片が1点のみ出土したものの、それを剥取したと考えられる剥片素材石核は出土しなかった。

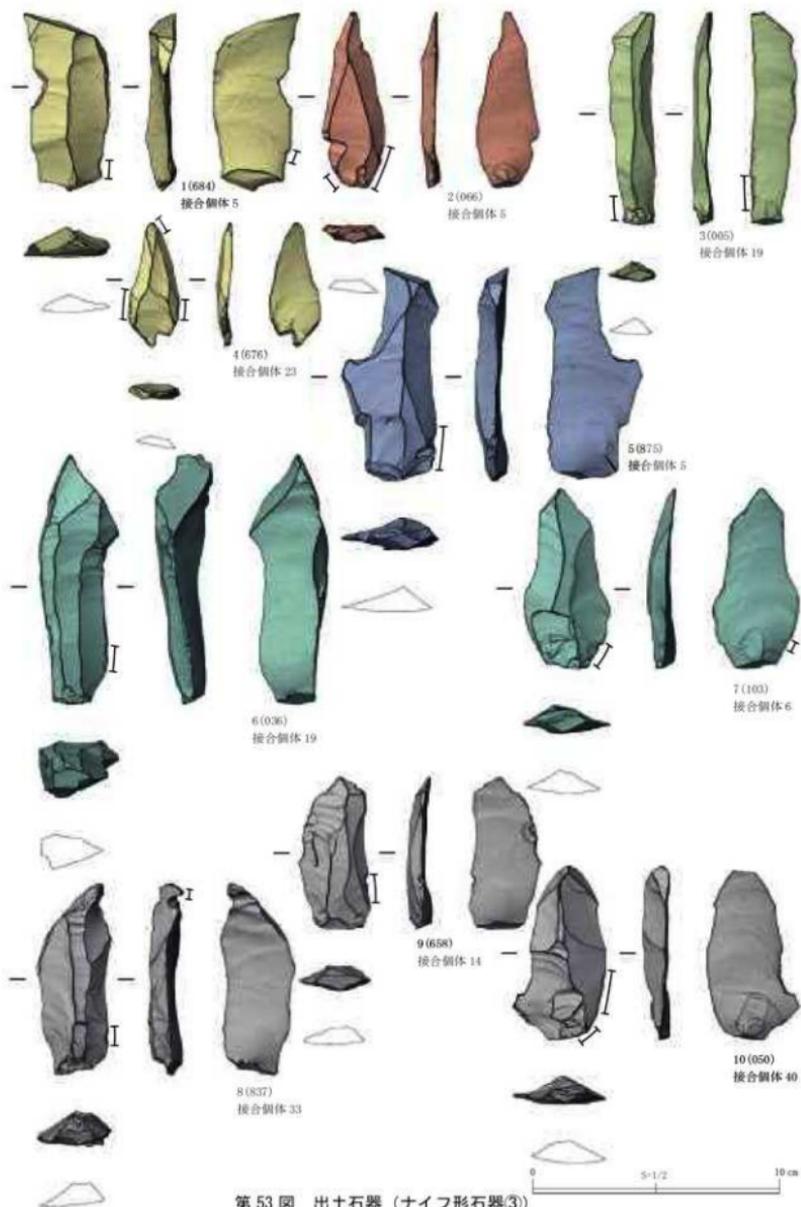
碎片

碎片については、調査中に検出に努め、また、土壌サンプルの水洗・篩選別作業も行ったが、1点のみしか出土しなかった。本石器群では、打縁調整以外の石核調整が顕著ではなく、ナイフ形石器の調整加工は微細剥離を中心とし、その他の製品の製作作業痕跡も見られないことと、碎片の検出点数が非常に少ないこととは無関係ではないと考えられる。碎片の点数は二次加工・調整作業の有無を知る指標となりうるが、本石器群では碎片が生じたとしても殆どが1mmに満たないものと推定され、検出し得なかったものと考えられる。より肌理の細かい水洗篩選別作業が望まれるところであった。

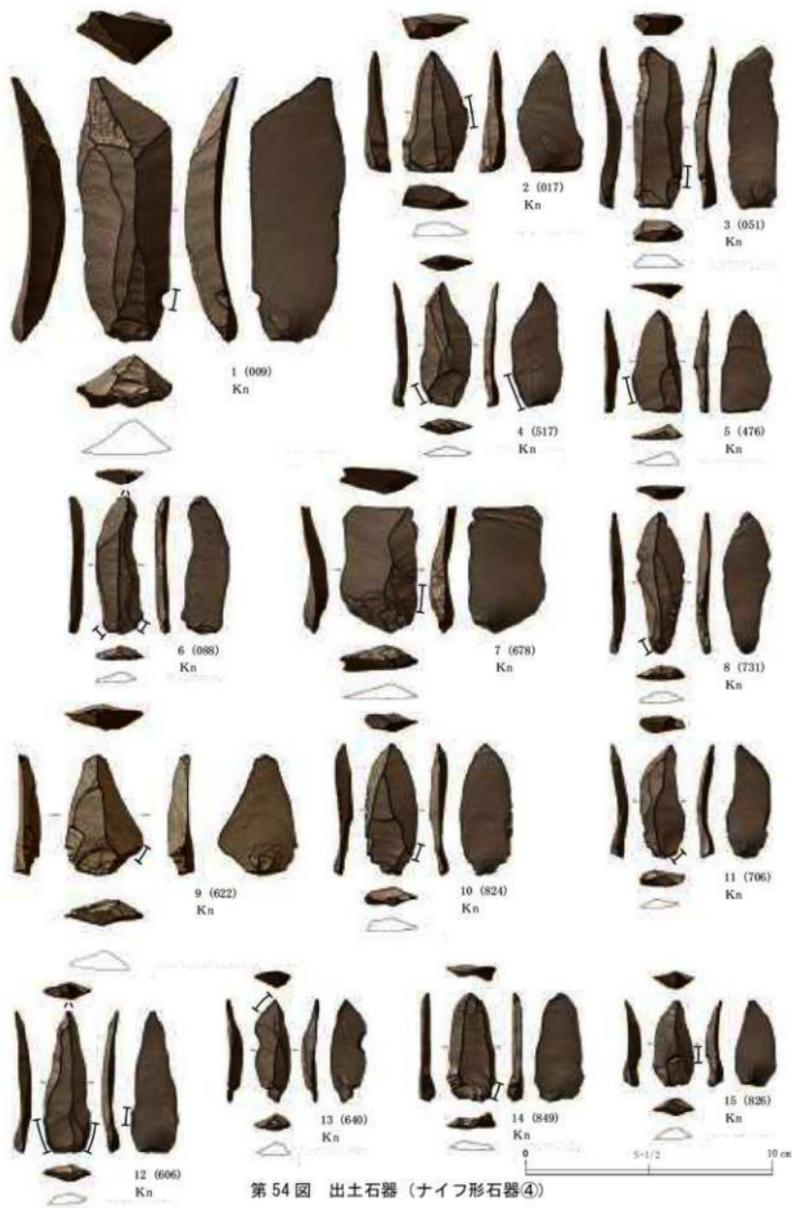


第51図 出土石器 (ナイフ形石器①)

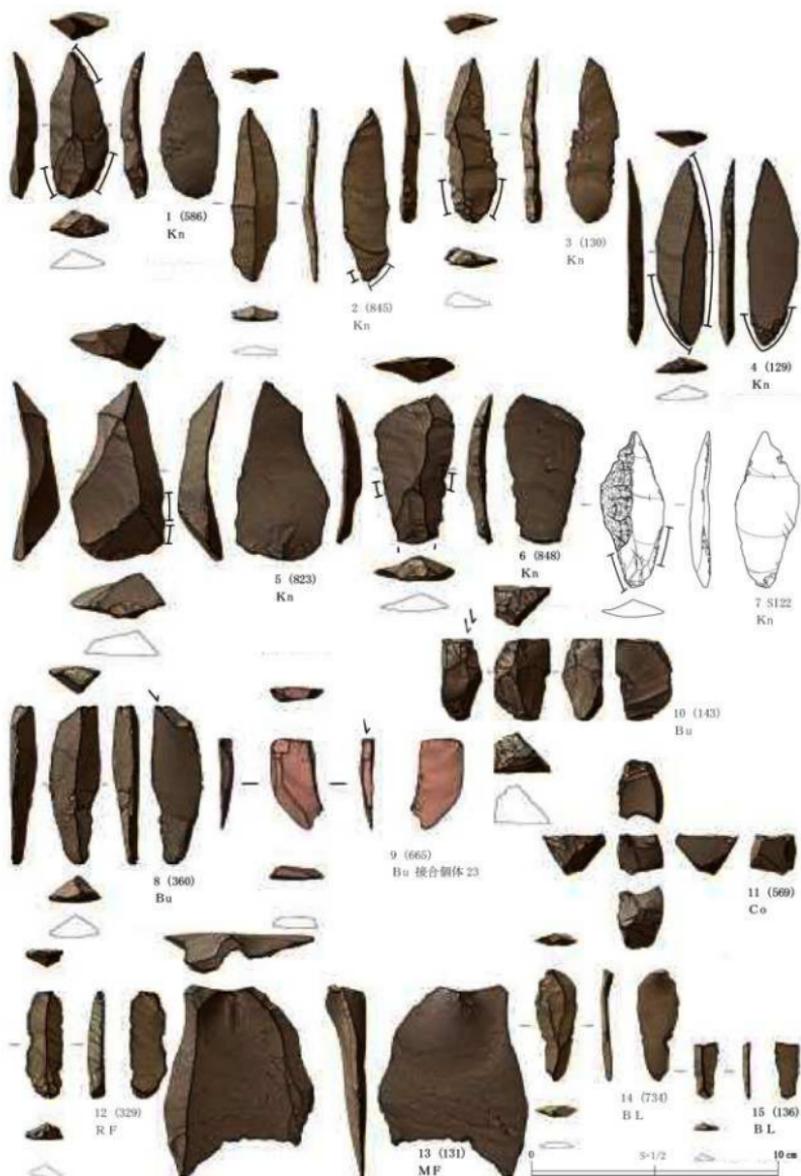




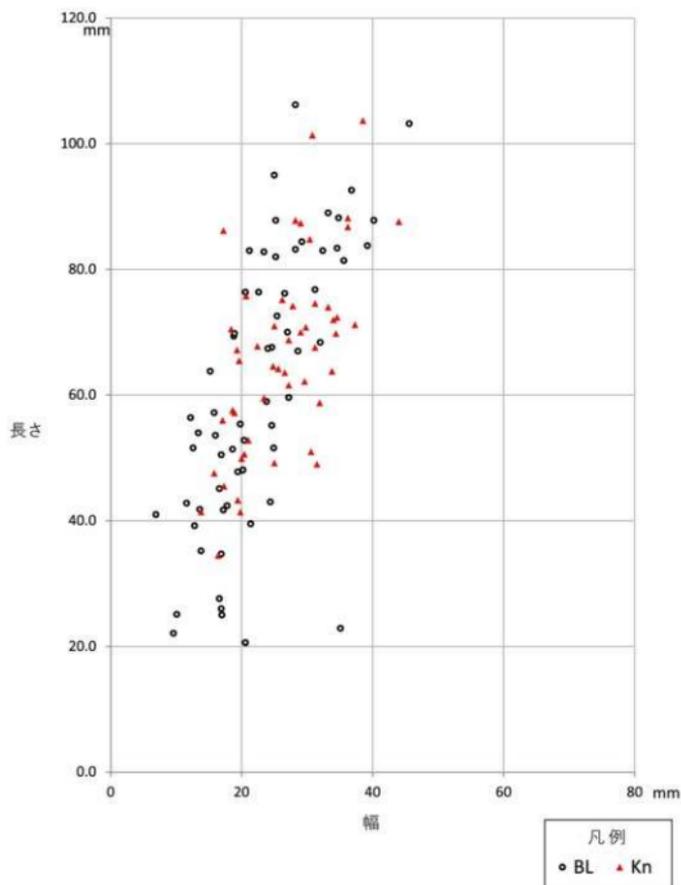
第 53 図 出土石器 (ナイフ形石器③)



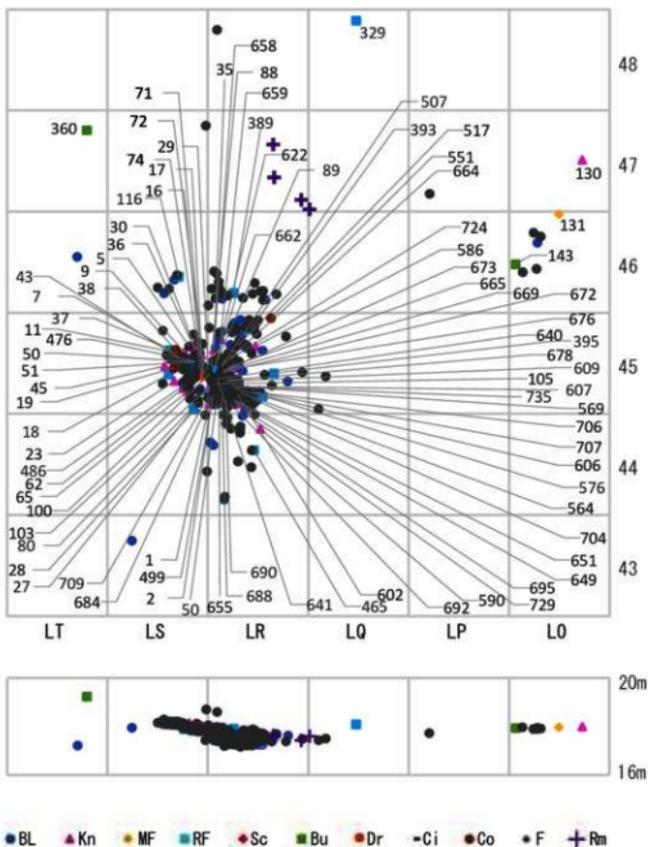
第54図 出土石器（ナイフ形石器④）



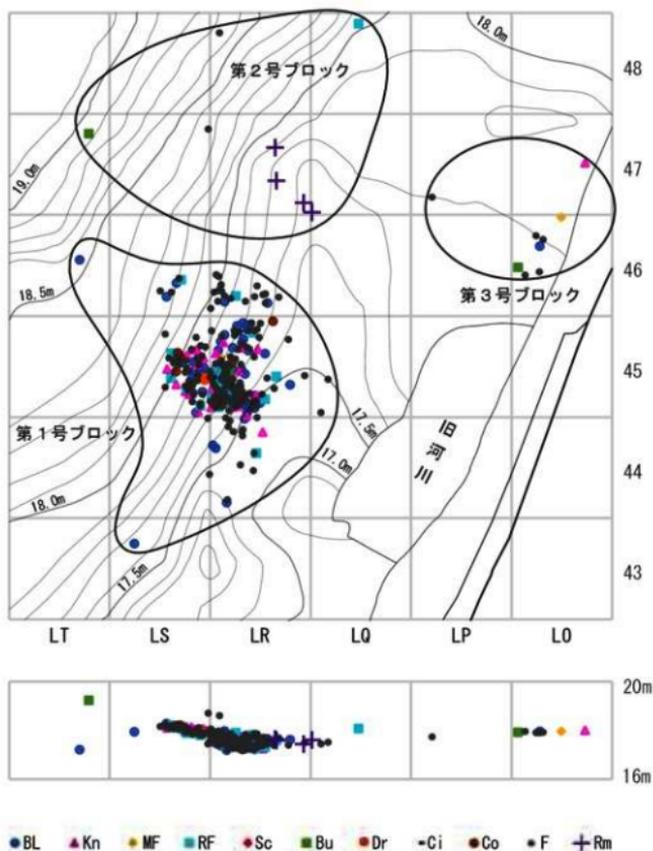
第55図 出土石器（ナイフ形石器⑤・彫器・残核・二次加工・微細加工・石刃）



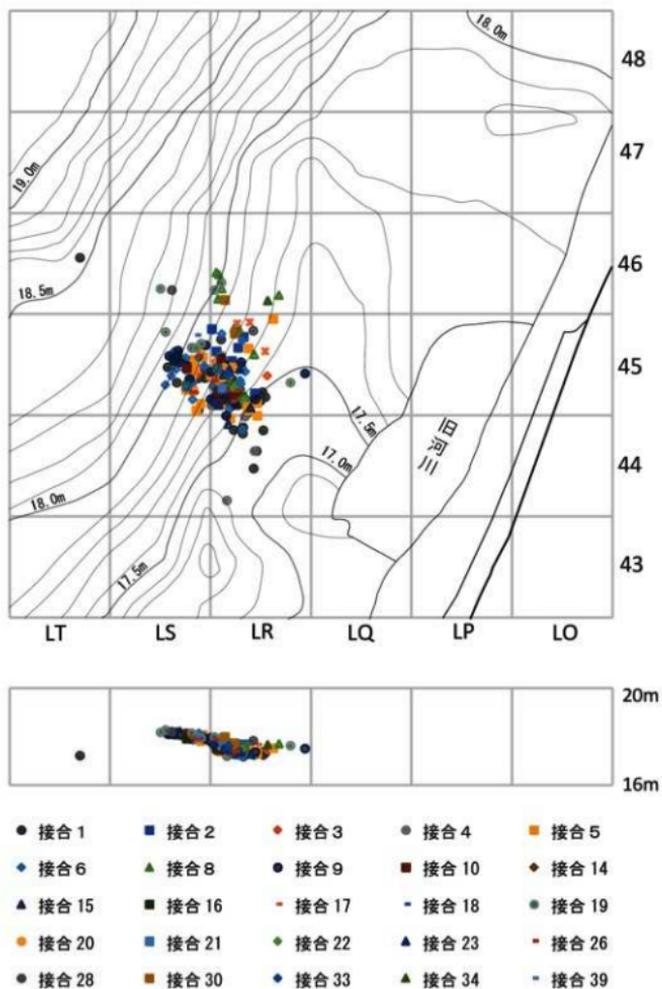
第 56 図 ナイフ形石器・石刃長幅比散布図



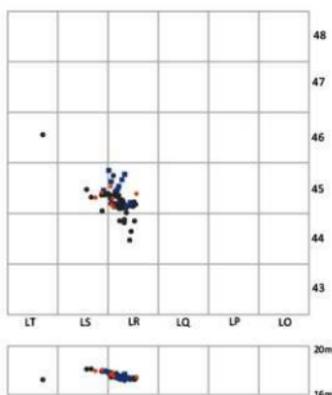
第 57 図 器種別石器分布図



第 58 図 器種別石器分布・地形図

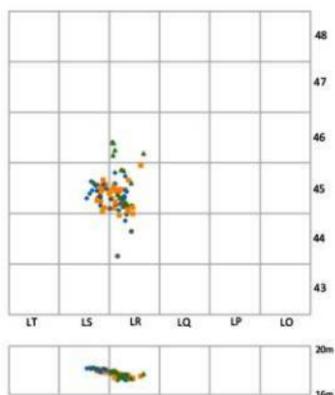


第 59 図 接合別石器分布・地形図



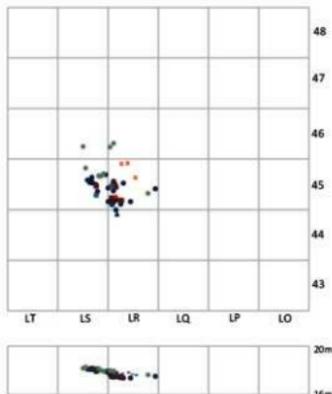
● 接合1 ● 接合2 ● 接合3

接合別分布図（接合1～3）



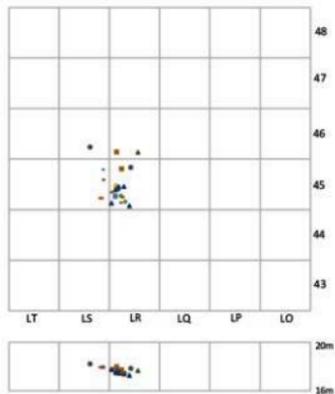
● 接合4 ● 接合5 ● 接合6 ● 接合8

接合別分布図（接合4～8）



● 接合9 ● 接合10 ● 接合14 ● 接合15
● 接合16 ● 接合17 ● 接合18 ● 接合19

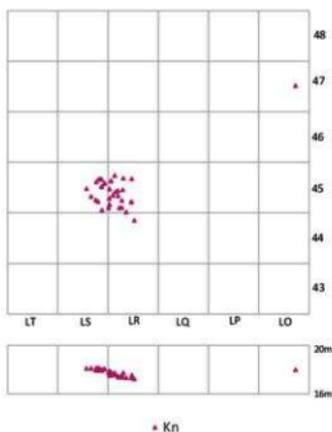
接合別分布図（接合9～19）



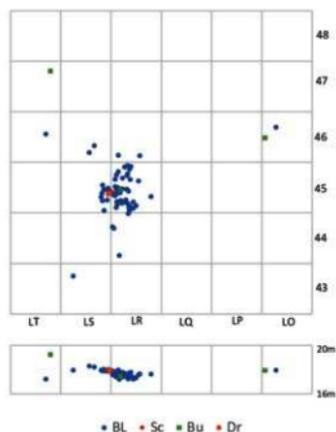
● 接合20 ● 接合21 ● 接合22 ● 接合23 ● 接合26
● 接合28 ● 接合30 ● 接合33 ● 接合34 ● 接合39

接合別分布図（接合20～40）

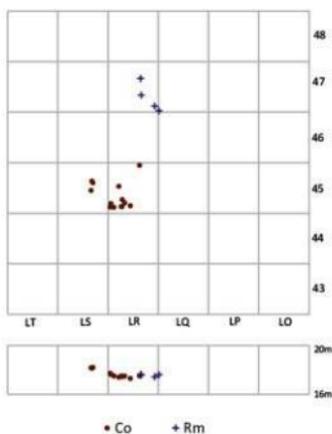
第60図 各種接合個体別石器分布図



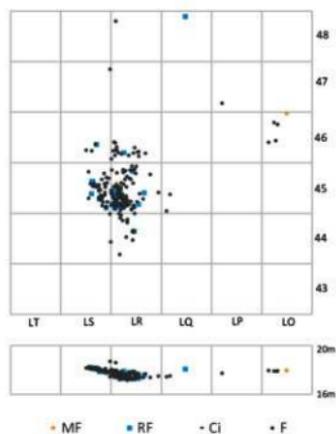
器種別石器分布図 (Kn)



器種別石器分布図 (BL,Bu,Sc,Dr)



器種別石器分布図 (Co)



器種別石器分布図 (RF,MF,F,Ci)

第61図 各種器種別石器分布図

第3表 オノ神遺跡旧石器組成表

	Kn	Dr	Sc	Bu	RF	MF	Co	BL	F	Ci	Rm	小計
接合個体1	11	1(3)			7	1	2	7	24(29)			53(60)
接合個体2	1				1(2)		1	3(4)	4			10(12)
接合個体3							1		6			7
接合個体4	2					2(3)	1	6(8)	1(2)			12(16)
接合個体5	8				3		1	15(17)	11(12)			38(41)
接合個体6	1				4		2	5	15(17)			27(29)
接合個体8							2		9(13)			11(15)
接合個体9			1		1		1	1	27			31
接合個体10									3(7)			3(7)
接合個体14	1								1			2
接合個体15					1				1			2
接合個体16					1(2)							1(2)
接合個体17								1	4			5
接合個体18								3				3
接合個体19	2					1	1	3	5(6)			12(13)
接合個体20					1			2	1			4
接合個体21									1(2)			1(2)
接合個体22									1(2)			1(2)
接合個体23	1			1			1		1(2)			4(5)
接合個体24					1(2)							1(2)
接合個体26							1	1	4			6
接合個体28					1(2)		1		4			6(7)
接合個体30					1			2	3			6
接合個体33	1							1				2
接合個体34								2(3)				2(3)
接合個体37									2			2
接合個体39									2			2
接合個体40	1								1			2
単独個体	21			2	10	3	1	15	54	1	4	111
総計	50	1(3)	1	3	32(36)	7(8)	16	67(73)	185(206)	1	4	367(401)

第4表 旧石器観察表(1)

接合体1

検体 No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石種	長さ(mm)	幅	厚さ	重量(g)
13-2	885	F	LR45	Ⅴb	珪	53.0	37.8	11.0	15.7
13-1	465		LR44	Ⅲ	珪	61.9	39.4	23.6	41.7
13-1	472		LR45	Ⅴ	珪	37.5	48.1	13.3	20.1
13-1	605		LR45	Ⅲ	珪	32.9	40.2	13.3	10.9
13-1	652		LR45	Ⅲ	珪	99.3	107.7	31.1	171.7
13-1	604	F	LR45	Ⅲ	珪	66.4	43.0	22.9	8.2
13-1	649	Co	LR45	Ⅲ	珪	67.9	40.2	21.0	54.6
13-2	099-1	F	LS45	Ⅲ	珪	67.8	81.4	34.4	136.3
13-2	506	F	LR45	Ⅲ	珪	26.3	20.1	4.5	2.1
13-2	862	F	LR45	Ⅴb	珪	129.4	113.4	39.5	259.0
13-1	735		LR45	Ⅲ	珪	76.6	36.0	16.2	31.9
13-1	790		LR41	Ⅲ	珪	55.6	30.6	20.1	18.2
13-5	577	F	LR45	Ⅲ	珪	72.4	45.2	22.8	88.5
13-4	071		LS45	Ⅲ	珪	128.6	81.4	47.4	66.0
13-4	072-1-2	Br	LS45	Ⅲ	珪	55.2	33.7	28.3	54.0
13-4	074		LS45	Ⅲ	珪	112.3	86.6	40.4	227.8
13-2	069	F	LS45	Ⅲ	珪	84.6	77.4	33.0	216.2
10-2	610	F	LR45	Ⅲ	珪	32.8	23.0	6.6	4.0
10-3	705	F	LR45	Ⅲ	珪	29.2	22.0	4.6	2.9
10-4	509	F	LR44	Ⅲ	珪	53.2	36.2	12.4	17.5
10-5	808	F	LR41	Ⅲ	珪	39.8	28.6	14.6	11.2
10-8	722	F	LR41	Ⅲ	珪	22.6	40.4	11.2	7.7
10-7	688	RF	LR45	Ⅲ	珪	95.8	51.6	21.6	67.4
10-7	689	F	LR45	Ⅲ	珪	91.0	53.0	14.6	54.9
10-2	607	RF	LR45	Ⅲ	珪	62.8	67.2	22.8	89.2
10-3	718	F	LR45	Ⅲ	珪	24.8	14.2	4.2	1.4
10-4	603	F	LR45	Ⅲ	珪	41.6	44.4	12.0	20.5
10-5	571-1-2	HL	LR45	Ⅲ	珪	76.4	41.2	11.4	30.0
10-4	611	F	LR45	Ⅲ	珪	78.6	74.0	34.4	172.8
10-7	690	RF	LR45	Ⅲ	珪	79.8	26.2	9.8	16.5
10-8	864	F	LR44	Ⅲ	珪	54.8	35.4	18.0	25.7

接合体2

検体 No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石種	長さ(mm)	幅	厚さ	重量(g)
20-2	473	F	LR45	Ⅲ	珪	39.4	24.8	11.4	10.8
20-2	711	F	LR45	Ⅲ	珪	100.8	33.4	25.4	72.0
20-5	668		LR45	Ⅲ	珪	123.2	21.8	21.2	26.5
20-5	865	RF	LR44	Ⅲ	珪	40.3	26.1	15.0	12.1
20-4	653	HL	LS45	Ⅲ	珪	89.0	33.2	10.0	26.0
20-7	518	HL	LR45	Ⅲ	珪	83.4	34.6	10.0	7.3
20-2	509	HL	LR45	Ⅲ	珪	53.6	36.0	6.0	0.3
20-8	873	F	LR45	Ⅲ	珪	16.4	27.2	6.0	2.2
31-1	703	HL	LR45	Ⅲ	珪	67.2	32.8	15.6	38.5
31-2	748	F	LR45	Ⅲ	珪	74.6	81.4	32.0	168.4
31-5	724	Co	LR45	Ⅲ	珪	103.2	71.0	98.0	736.0
33-1	035	Kn	LS45	Ⅲ	珪	87.4	29.0	15.0	30.3

接合体3

検体 No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石種	長さ(mm)	幅	厚さ	重量(g)
32-2	105	F	LS45	Ⅲ	珪	87.2	103.4	22.8	193.0
23-1	060	F	LS45	Ⅲ	珪	77.4	87.8	26.6	198.2
23-2	474	F	LR45	Ⅲ	珪	58.9	37.4	14.2	40.9
23-3	580	F	LR45	Ⅲ	珪	34.6	55.6	13.4	22.5
23-4	617	F	LR45	Ⅲ	珪	20.8	38.6	10.4	6.5
23-5	068	F	LS45	Ⅲ	珪	58.2	44.2	23.4	48.9
23-6	655	Co	LR45	Ⅲ	珪	71.2	101.6	45.2	828.5

検体 No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石種	長さ(mm)	幅	厚さ	重量(g)
10-9	673	RF	LR45	Ⅲ	珪	86.4	29.8	14.2	23.3
10-10	700	HL	LR45	Ⅲ	珪	48.8	13.6	6.4	2.9
10-2	644	F	LR45	Ⅲ	珪	71.6	34.2	18.4	27.8
10-1	716	F	LR45	Ⅲ	珪	49.0	20.4	5.2	4.4
10-3	568	HL	LR45	Ⅲ	珪	53.6	16.0	5.4	2.9
10-7	888	RF	LR45	Ⅲ	珪	28.6	16.4	7.6	2.8
10-9	641	RF	LR45	Ⅲ	珪	76.8	31.2	11.4	28.8
10-8	576	RF	LR45	Ⅲ	珪	72.0	25.4	7.4	34.5
10-10	608		LR45	Ⅲ	珪	106.8	57.0	40.4	40.8
10-10	650		LR45	Ⅲ	珪	71.8	58.7	40.8	113.5
10-3	657	HL	LR44	Ⅲ	珪	55.4	18.8	5.0	5.5
10-1	660	HL	LR45	Ⅲ	珪	68.4	32.0	10.4	21.8
10-5	598	HL	LR45	Ⅲ	珪	83.8	40.4	17.0	54.2
10-6	643	HL	LR45	Ⅲ	珪	77.8	35.0	22.6	45.9
10-7	677	F	LR45	Ⅲ	珪	28.0	13.6	5.8	18.0
10-9	836	RF	LS45	Ⅴb-X	珪	70.0	27.0	10.2	19.5
10-12	642	HL	LR45	Ⅲ	珪	44.6	24.2	8.6	5.6
10-10	499	Co	LR45	Ⅲ	珪	68.6	62.2	47.4	185.4
31-1	692	Kn	LR43	Ⅲ	珪	87.6	44.0	13.6	53.0
31-2	695	Kn	LR45	Ⅲ	珪	88.2	36.2	19.4	49.3
31-3	707	Kn	LR45	Ⅲ	珪	47.6	15.8	7.2	5.0
31-4	590	Kn	LR44	Ⅲ	珪	63.8	33.8	11.8	22.7
31-5	028	Kn	LS45	Ⅲ	珪	74.0	33.2	9.8	25.7
31-6	023	Kn	LS45	Ⅲ	珪	70.8	29.8	8.4	16.6
31-7	045	Kn	LR45	Ⅲ	珪	84.8	30.4	10.4	26.8
31-8	729	Kn	LR45	Ⅲ	珪	68.8	27.2	8.2	13.2
31-9	842	Kn	LS45	Ⅴb	珪	70.0	29.0	7.8	12.8
32-1	463	Kn	LR44	Ⅲ	珪	63.6	28.6	10.2	16.3
32-2	472	Kn	LR45	Ⅲ	珪	75.2	26.2	11.4	18.9

接合体4

検体 No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石種	長さ(mm)	幅	厚さ	重量(g)
23-2	714	HL	LR45	Ⅲ	珪	36.4	12.2	4.0	2.9
23-3	653		LR45	Ⅲ	珪	92.2	29.6	24.2	34.5
23-3	696	HL	LR45	Ⅲ	珪	35.4	28.6	19.0	8.7
23-3	720		LR44	Ⅲ	珪	38.8	33.8	17.4	14.2
23-4	696	HL	LR44	Ⅲ	珪	76.4	20.6	12.6	38.6
23-5	464	F	LR44	Ⅲ	珪	40.0	50.2	13.2	7.1
23-6	570	RF	LR45	Ⅲ	珪	41.3	41.4	13.0	20.5
23-9	659	RF	LR45	Ⅲ	珪	52.8	20.4	6.2	6.4
23-9	111	HL	LR44	Ⅲ	珪	47.8	19.4	5.2	3.8
23-11	064	RF	LR45	Ⅲ	珪	41.0	6.9	6.9	10.0
23-12	602	RF	LR45	Ⅲ	珪	67.4	24.0	8.8	6.5
23-13	470	HL	LR44	Ⅲ	珪	55.2	23.6	6.2	9.0
23-14	704	Co	LR45	Ⅲ	珪	76.4	43.8	29.4	118
23-15	825	HL	LR45	Ⅲ	珪	25.0	17.0	5.6	2.2
23-3	669	Kn	LR45	Ⅲ	珪	62.2	29.6	8.2	10.4
23-5	001	Kn	LR45	Ⅲ	珪	74.6	31.2	13.8	21.4

第5表 旧石器観察表(2)

接合個体5

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
30-1	550	F	LR04	XI	背	109.4	140.0	32.4	832.5
30-2	726		LR05	XI	背	32.2	55.0	9.4	11.5
30-3	054	F	LS05	XI	背	49.8	54.8	22.0	53.2
30-3	075-1-2	F	LR05	XI	背	90.9	128.2	54.4	86.2
30-4	061	F	LS05	XI	背	104.6	87.4	25.6	170.8
30-5	089-1	BF	LS05	XI	背	87.6	90.8	19.6	124.9
37-1	073	F	LS05	XI	背	113.9	116.6	50.0	533.5
37-2	730	F	LR05	XI	背	33.4	21.2	6.2	3.5
37-3	886	BF	LS06	X	背	57.2	15.9	5.6	3.5
37-4	055	HL	LS05	XI	背	88.2	34.8	22.4	64.2
37-5	947	F	LS05	XI	背	71.6	80.8	33.4	174.5
37-6	889	F	LR05	XI	背	22.6	12.2	5.0	1.1
37-7	682	F	LR05	XI	背	29.4	25.2	6.6	3.9
37-8	076	HL	LS05	X	背	84.4	29.2	8.6	29.2
37-9	027	BF	LS05	X	背	96.0	25.0	12.6	23.9
37-12	048	HL	LS05	XI	背	105.2	28.2	12.0	31.8
37-13	049	HL	LS05	XI	背	67.0	28.6	15.2	21.3
38-1	056	F	LS05	XI	背	73.2	56.2	45.0	128.1
38-2	618	HL	LR05	XI	背	67.6	24.6	8.8	5.5
38-3	024	HL	LR05	XI	背	39.5	21.4	8.6	5.9
38-3	715	HL	LR05	XI	背	51.6	12.6	4.0	2.4
38-8	792	HL	LR05	XI	背	76.6	22.6	7.6	12.4
38-9	591	HL	LR05	XI	背	39.2	12.8	3.4	1.4
38-10	618	HL	LR05	XI	背	51.4	18.6	7.8	342.3
38-11	095	HL	LS05	XI	背	82.0	25.2	9.4	29.9
38-12	878	HL	LR05	VR	背	63.8	15.2	8.0	7.9
38-13	686	HL	LR05	XI	背	76.2	26.6	5.6	11.5
38-16	063	HL	LS05	XI	背	82.8	23.4	9.2	15.9
38-17	505	HL	LR05	XI	背	77.2	23.8	7.2	2.5
38-17	561		LR05	XI	背	34.5	23.9	8.4	6.3
38-18	828	HL	LR05	XI	背	17.2	18.8	4.8	2.5
38-19	104	F	LS05	XI	背	55.4	25.8	27.2	41.9
38-20	551	Co	LR05	XI	背	56.2	60.0	37.0	171.0
32-6	016	Kn	LS05	X	背	87.8	28.2	8.4	21.5
32-7	030	Kn	LR05	X	背	67.8	22.4	6.0	8.8
32-8	841	Kn	LR05	VR	背	64.2	25.6	4.8	6.7
32-9	838	Kn	LR05	VR	背	72.0	34.0	9.8	27.9
32-10	062	Kn	LS05	XI	背	64.6	24.8	6.6	9.0
32-11	684	Kn	LR05	XI	背	67.6	31.2	10.4	22.1
32-12	066	Kn	LS05	XI	背	71.0	25.0	6.4	9.3
32-5	875	Kn	LR06	IX~X	背	86.8	36.2	10.4	2.8

接合個体10

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
31-3	535	F	LR05	XI	背	55.6	65.7	18.9	47.0
31-2	685		LR05	XI	背	51.2	73.2	22.5	29.5
31-3	697	F	LR05	XI	背	50.5	95.4	22.4	71.5
31-3	020	F	LS05	X	背	111.8	92.2	43.4	1436.0
32-1	196	F	LS05	XI~XII	背	92.0	68.6	41.8	147.6
32-1	530		LR05	XI	背	17.4	26.4	17.2	5.6
32-1	646	HL	LR05	XI	背	38.7	41.9	15.7	13.7

接合個体14

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
32-3	647	F	LR05	XI	背	30.6	23.2	6.4	4.0
32-9	658	Kn	LR05	XI	背	61.6	27.2	9.2	15.0

接合個体6

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
30-2	511-1-2	HL	LR05	XI	背	54.0	13.4	5.4	1.5
30-3	891	F	LS05	表接	背	48.0	69.2	17.0	46.1
30-4	021	F	LS05	X	背	86.0	83.2	18.8	94.2
30-4	075		LR05	XI	背	67.3	32.8	16.9	26.7
30-5	015	F	LS05	X	背	53.8	32.2	30.2	37.5
30-8	488	F	LS05	XI	背	46.6	31.2	10.4	14.1
30-7	727	F	LR05	XI	背	34.2	13.0	7.8	2.9
30-8	012	F	LS05	X	背	58.8	50.2	15.2	44.0
30-9	514	F	LR05	XI	背	43.6	26.6	16.6	15.8
30-10	043	BF	LS05	XI	背	92.6	26.8	21.8	52.9
30-11	022	HL	LS05	X	背	83.8	39.2	22.6	56.0
30-12	627	HL	LR05	XI	背	59.6	27.2	10.8	14.2
31-1	871	F	LR05	VR	背	77.2	44.4	21.4	56.7
31-2	872	HL	LR05	IX~X	背	74.2	27.4	21.8	36.6
31-3	683	F	LR05	XI	背	21.2	15.0	9.0	4.2
31-4	019	Co	LS05	X	背	56.0	52.2	41.4	93.8
31-8	792	F	LR04	XI	背	41.0	18.0	10.4	5.8
31-7	059	F	LS05	XI	背	67.2	60.4	25.8	71.2
31-8	857	F	LS05	IX~X	背	80.6	41.0	39.4	123.5
31-1	018	BF	LS05	X	背	97.6	53.4	21.4	93.2
32-2	691	F	LR05	XI	背	30.4	41.2	17.6	32.8
32-4	024	F	LS05	X	背	65.6	40.0	21.0	48.6
32-5	637	BF	LS05	XI	背	71.8	28.0	14.8	22.9
32-8	856	BF	LR05	VR	背	86.6	38.2	48.2	92.7
32-7	510	F	LR05	XI	背	23.0	35.0	8.6	6.6
32-7	858		LR05	XI	背	26.5	17.6	8.0	2.7
32-4	876	HL	LR04	IX	背	61.0	25.6	13.4	12.1
32-9	870	Co	LS05	VR	背	56.2	73.4	30.2	116.2
32-7	103	Kn	LS05	XI	背	72.4	34.6	9.6	18.7

接合個体8

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
32-2	386	F	LR06	XI	背	71.2	47.0	15.0	36.3
32-2	552		LR06	XI	背	28.7	44.9	8.8	11.4
32-3	592	F	LR06	XI	背	87.2	68.2	21.8	122.4
32-1	593	F	LR06	XI	背	43.0	59.2	30.2	90.5
32-1	679		LR05	XI	背	26.6	16.2	20.6	8.4
32-2	558	F	LR06	XI	背	55.6	62.0	23.6	85.9
32-2	630		LR05	XI	背	23.4	25.2	11.6	6.4
32-3	883	F	LR05	IX~X	背	47.8	48.4	8.4	21.0
32-3	743	F	LR05	XI	背	38.0	31.8	17.0	19.9
32-4	629	F	LR05	XI	背	30.2	21.6	13.8	9.1
32-5	564+651	Co	LR05	XI	背	62.6	120.8	96.0	899.0
32-6	728	F	LR05	XI	背	38.2	26.8	21.6	17.6
32-7	098	F	LS05	XI	背	87.8	86.0	33.2	197.3
32-8	562	F	LR05	XI	背	52.4	63.6	32.8	96.2
32-1	011	Co	LS05	XI	背	92.2	135.4	74.0	801.5

接合個体15

標識No.	石器種別	接合	接点名	方位	6H	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
32-8	721	F	LR04	XI	背	25.0	21.6	4.6	1.7
32-7	300	BF	LR05	XI	背	31.8	34.2	6.2	5.9

第6表 旧石器観察表(3)

接合体9

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
36-3	044	F	L545	M	頁	69.4	49.0	42.4	139.7
36-3	866	F	L545	VB	頁	78.4	36.4	21.8	59.2
37-1	675	F	LR45	M	頁	51.0	35.8	20.2	40.9
37-2	573	F	LR45	M	頁	33.4	29.8	16.8	16.2
37-3	491	F	L545	M	頁	58.2	47.6	22.2	62.9
37-4	057	F	L545	不明	頁	16.4	29.0	9.6	3.3
37-5	034	F	L545	IX	頁	38.8	42.2	40.8	61.0
37-6	890	HP	LR45	IX~X	頁	36.4	45.8	16.2	24.6
37-7	040	F	L545	M	頁	84.0	103.2	56.6	387.0
37-9	503	HL	LR45	M	頁	68.4	21.4	12.2	23.9
37-9	746	F	LR45	M	頁	23.6	25.6	8.0	4.9
37-10	713	F	LR45	M	頁	30.8	16.6	16.6	7.3
37-11	687	F	LR45	M	頁	72.0	41.4	15.6	44.0
37-12	694	F	LR45	M	頁	46.0	53.6	16.4	32.1
37-13	081	F	L545	M	頁	42.0	31.0	37.6	51.2
37-14	619	F	LR45	M	頁	39.2	38.4	21.4	30.8
37-15	498	F	LR45	M	頁	49.8	34.6	17.2	46.3
38-2	029	Sc	LR45	X	頁	64.2	59.0	26.0	94.9
38-3	663	F	LR45	M	頁	37.6	35.4	13.6	12.2
39-1	560	F	LR44	M	頁	47.2	45.6	20.4	35.0
39-2	108	F	L545	M~M	頁	47.8	59.6	33.2	75.4
39-3	046-2	F	L545	M	頁	36.2	35.6	43.6	90.1
39-4	056	F	L545	M	頁	80.0	54.4	28.4	78.1
39-5	041	F	L545	M	頁	74.4	52.2	37.8	147.7
39-6	046-1	F	L545	M	頁	16.8	28.6	14.2	6.2
39-7	732	F	LR45	M	頁	21.2	18.6	12.8	4.5
39-8	042	F	L545	M	頁	53.6	49.6	35.0	83.0
39-9	867	F	L545	IX~X	頁	63.4	30.4	41.4	119.7
40-1	645	F	LR45	M	頁	31.0	32.6	23.0	18.5
40-2	039	F	L545	M	頁	57.6	48.2	22.8	82.3
40-3	038	Co	L545	M	頁	115.6	74.6	79.2	636.5

接合体16

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
42-9	486	HP	L545	M	頁	77.9	43.8	24.5	68.7
42-9	662		LR45	M	頁	49.3	25.1	15.1	3.9

接合体17

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
42-10	659	HL	LR45	M	頁	27.6	16.6	4.8	2.6
42-11	555	F	LR46	M	頁	36.8	19.6	4.0	2.7
42-12	385	F	LR46	X	頁	33.6	33.6	8.6	10.7
42-13	524	F	LR45	M	頁	33.0	24.0	5.0	2.8
42-14	877	F	LR45	IX	頁	27.0	24.8	8.4	5.1

接合体18

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
42-16	631	HL	LR45	M	頁	42.4	17.8	6.2	3.9
42-17	394	HL	LR45	M	頁	41.8	13.6	3.8	1.9
42-18	527	HL	LR45	M	頁	35.2	13.8	3.8	1.4

接合体20

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
42-19	892	表探	頁	頁	27.4	14.6	6.2	1.7	
42-11	863		HL	LR43	M	頁	31.2	12.4	4.6
42-12	639	F	LR45	M	頁	52.2	16.2	9.2	5.5
42-13	367	HP	LR45	M	頁	33.8	25.4	10.2	8.3

接合体19

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
43-2	387	F	LR46	M	頁	19.12	4.48	4.48	28.7
43-3	889	F	L545	IX~X	頁	19.12	4.48	4.48	14.24
43-4	404	F	L546	M	頁	4.48	0.90	9.36	96.3
43-5	033	F	L545	M	頁	14.24	9.36	19.12	22.9
43-5	384		LR46	M	頁	2.24	12.90	7.12	13.3
43-1	003	F	L545	X	頁	0.90	14.24	4.48	98.9
43-2	050	HP	L546	IX	頁	4.48	4.48	4.48	19.12
43-3	083	HL	L545	M	頁	0.90	4.48	9.36	7.12
43-9	031	HL	LR45	X	頁	9.36	19.12	9.36	7.7
43-1	874	HL	LR46	IX~X	頁	19.12	4.48	19.12	23.16
43-4	882	Co	L545	IX~X	頁	4.48	9.36	0.90	14.24
43-5	005	Kn	L545	X	頁	4.48	4.48	9.36	10.3
43-6	036	Kn	L545	M	頁	9.36	19.12	9.36	53.6

接合体21

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
43-14	107	F	L545	M~M	頁	53.6	30.5	15.8	24.9
43-14	834		L548	前藤土	頁	53.5	48.8	24.7	46.8

接合体22

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
43-1	680	F	LR45	M	頁	41.6	16.7	12.5	7.5
43-1	680		LR45	M	頁	39.3	21.5	12.5	8.1

接合体23

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
43-3	671	F	LR45	M	頁	43.2	37.6	6.4	1.6
43-3	745		LR45	M	頁	40.4	27.1	62.0	6.3
43-6	002	Co	LR45	M	頁	64.0	42.8	27.0	79.4
43-4	676	Kn	LR45	M	頁	50.6	29.4	5.0	4.0
43-9	665	Hn	LR45	M	頁	36.0	17.8	5.0	4.3

接合体24

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
43-7	832	HP	L546	M	頁	59.3	21.8	7.4	5.9
43-7	833		L546	M	頁	86.4	63.0	16.8	102.1

接合体26

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
46-2	681	F	L545	M	頁	41.4	35.2	9.8	17.5
46-3	102	F	L545	M	頁	93.8	51.2	35.0	200.5
46-4	490	F	L545	M	頁	69.2	55.6	63.2	290.3
46-5	693	F	L545	M	頁	78.6	49.8	22.4	69.5
46-6	067	HL	L545	M	頁	81.4	35.6	15.8	43.4
47-1	065	Co	L545	M	頁	82.0	71.2	77.8	306.5

接合体28

標識No.	目録IDNo.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
48-2	495	F	L546	M	頁	80.8	60.2	18.4	70.0
48-3	880	F	LR45	VB	頁	58.6	24.6	13.2	12.8
48-4	633	F	LR45	M	頁	32.4	42.6	12.0	14.8
48-6	116	HP	L546	M	頁	77.0	32.7	22.5	23.6
48-5	393		LR45	X	頁	42.2	22.9	14.6	10.2
48-8	879	F	LR45	IX~X	頁	55.8	40.8	20.0	23.1
48-7	881	Co	L546	IX	頁	64.6	55.8	59.6	170.9

第7表 旧石器観察表(4)

接合個体30

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-2	835	F	L546	XI	頁	71.2	43.0	17.6	49.7
00-3	884	MP	L545	IX	頁	62.6	60.6	35.0	123.0
00-5	628	F	L845	XI	頁	47.6	36.4	14.4	15.5
00-6	113	HL	L546	X	頁	83.2	38.2	17.0	22.9
00-7	388	HL	L846	X	頁	103.2	45.6	25.8	87.7
00-8	536	F	L846	XI	頁	34.8	26.6	7.4	5.2

接合個体33

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-2	674	HL	L845	XI	頁	42.8	11.6	3.4	1.6
00-8	837	Kn	L845	VIc	頁	74.2	27.8	12.6	25.9

接合個体34

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-5	553	HL	L846	XI	頁	43.2	20.2	5.6	2.1
00-5	829		L845	XI	頁	17.5	18.6	5.2	1.2
00-8	827	HL	L845	XI	頁	20.6	20.6	2.6	1.2

接合個体37

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-8	890	F	L545	IX-X	頁	39.8	35.2	18.8	21.6
00-9	861	F	L845	VIc	頁	57.8	72.4	20.4	78.5

接合個体39

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-11	855	F	L845	VIc	頁	50.2	51.8	28.4	63.4
00-12	932	F	L545	XI	頁	47.4	78.2	22.2	65.5

接合個体40

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-10	526	F	L845	XI	頁	52.6	20.6	7.0	2.9
00-10	930	Kn	L545	XI	頁	69.8	34.4	10.0	20.1

単体資料

標識No.	旧石器No.	器種	地点名	層位	石材	長さ(mm)	幅	厚さ	重さ(g)
00-1	609	Kn	L545	X	頁	103.7	38.5	14.4	66.1
00-2	917	Kn	L545	X	頁	49.2	25.0	9.1	10.2
00-3	951	Kn	L545	XI	頁	65.5	19.6	6.0	9
00-4	517	Kn	L845	XI	頁	49.9	20.0	4.3	3.9
00-5	476	Kn	L545	XI	頁	41.4	19.8	5.5	3.4
00-6	688	Kn	L545	XI	頁	56.0	17.1	4.8	4.5
00-7	678	Kn	L845	XI	頁	51.0	30.6	8.3	10.9
00-8	731	Kn	L845	XI	頁	57.6	18.6	4.7	4.6
00-9	622	Kn	L845	XI	頁	49.0	31.5	9.9	10.5
00-10	824	Kn	L846	IX-X	頁	52.8	21.0	6.2	5.6
00-11	796	Kn	L845	XI	頁	45.0	17.3	5.2	2.8
00-12	666	Kn	L845	XI	頁	57.2	18.9	4.7	4.4
00-13	640	Kn	L845	XI	頁	41.4	33.8	5.1	2.5
00-14	849	Kn	L845	IX-X	頁	43.3	19.4	6.0	3.8
00-15	826	Kn	L845	XI	頁	34.5	16.4	5.5	2.7
00-1	586	Kn	L845	XI	頁	59.5	23.4	8.9	10
00-2	945	Kn	M844	VIc	頁	70.5	18.4	4.5	4.8
00-3	130	Kn	L047	XI	頁	67.2	19.3	6.6	7
00-4	129	Kn	不明	不明	頁	75.8	20.7	6.0	8
00-5	823	Kn	L545	IX-X	頁	71.2	37.3	14.5	29.2
00-6	848	Kn	M844	VIc	頁	58.8	31.9	7.8	11.9
00-8	360	Bu	L388	X	頁	64.2	20.4	10.6	11.4
00-10	143	Bu	L066	XI	頁	33.1	22.7	15.9	12.4
00-11	569	Co	L845	XI	頁	15.7	18.0	24.6	7.4
00-12	329	MP	L468	X	頁	43.5	14.3	6.5	4.1
00-13	131	MP	L047	XI	頁	76.5	60.0	15.9	31.6
00-14	734	HL	L845	XI	頁	45.1	16.6	3.6	2.1
00-15	136	HL	L066	XI	頁	22.1	9.6	2.6	0.5

3 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

SI22竪穴建物跡（第62・63図、図版9）

【位置・検出状況等】LR49・LS49区に位置する。IVc層上面で土器と炭化物を大量に含む黒褐色～暗褐色土の楕円形の広がりとして確認し、その後の精査で竪穴建物跡と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺遺構はない。

【規模・形態】水道管等現代の攪乱により本来の形状は不明であるが、残存形状は、長軸4.03m、短軸3.09m、主軸方位N-15°-Wの東西に長い楕円形状を呈する。攪乱による壁の損失のため、確認面から床面までの深さは最大で0.15mと浅い。床面は平坦であるが、西から東に向けて最大1cm下傾する。立ち上がりは、不明の東側を除き、やや急角度で外傾し立ち上がる。柱穴は確認されなかった。

【埋土】1～2層に分けた。1・2層とも炭化物を多く含むが、2層に顕著である。1層は地山由来の褐色土で焼土粒が含まれる。1・2層中の炭化物は遺構北東側に多く、炉周辺に向かって放射状に分布しており、複式炉上には少ない。炭化物は大小様々で、板状や棒状のものが確認された。

【炉】北側床面で、地山土由来の褐色土に炭化物を含む堆積土の三角形の広がりとその一角に埋設土器を確認した。精査の結果、土器埋設部と前庭部で構成される複式炉と判明した。北端が攪乱を受けている。各部の境界から礫が2点検出された。規模は、前庭部が長軸0.98m、短軸0.90mで、東西方向にわずかに長いダルマ形を呈する。前庭部の底面は平坦であるが、北側がやや低くなる。壁は、やや緩やかな角度で外傾しながら立ち上がる。土器埋設部は長軸0.42m、短軸0.3mの楕円形で、埋設土器よりも一回り大きな掘方をもつ。掘方底面は平坦で、壁は急角度で外傾しながら立ち上がる。

炉埋土は、1～5層に分けた。1～4層は土器埋設部、1・2層は土器内に堆積した褐色土と暗褐色土で、いずれも炭化物を含む。3・4層は掘方埋土である。5層は、前庭部内に堆積する地山由来の暗褐色土で、レンズ状堆積が認められないことから、一括埋め戻し土と考えられる。埋設土器の東側では、強い被熱を受けた焼土と炭化物の集中範囲が確認された。

【出土遺物】（第64・65図、図版16・17）

埋土から、縄文時代前期を含む縄文時代中期を主体とする土器、石器が出土した。1層上部の東側からまとまって出土した。第65図2は複式炉の土器埋設部に用いられていた口縁部を欠く深鉢形土器である。Ⅲ群B2類に該当する。胴部中に波状の微隆起線を貼付し、上半部に微隆起線による楕円区画文を横位に展開する。第64図3・4・5、第65図1はⅢ群C1類に該当し、縄文帯でアルファベット文を描いている。第64図3・4・5は胎土等の特徴から同一個体と思われる。文様の全体像は判然としないが第64図4の縄文帯はS字状文の一部と考える。第65図1は縄文帯で横S字状文が描かれる。第64図6a・6bは無文帯の幅がほぼ一定のため、Ⅲ群C2類と判断した。無文帯の端部が隆起する。

石器は、ナイフ形石器（第65図3）、残核（第65図4）、敲石・磨石類（第65図5、6）、石皿（第65図7）、RF8点、UF10点、剥片8点が出土した。第65図3のナイフ形石器は、先端部に剥片素材の打面側を用いて、基部と先端部を中心に二側縁加工が施されている。背面左側は被熱を受けており、未加工である。全体の形状は、左側がやや肩が張る左右非対称形となっている。

【時期】出土土器の特徴や炭化物の出土状態から大木10式期の焼失竪穴建物跡と考えられる。

SI28竪穴建物跡（第66・67図、図版9）

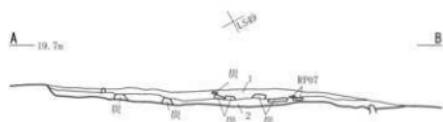
【位置・検出状況】LQ41～42区に位置する。IVc層上面で南北に広がる暗褐色土の楕円のプランを確認し、その後の精査で竪穴建物跡と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】1層直下からSKP1092、SK51・52・53が掘り込まれており、全て本遺構よ

S122



炭化材出土状態



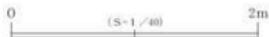
S122

- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
炭化物ブロック (10 cm) 5%、焼土粒 (5 cm) 5%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
炭化物ブロック (1~5 cm) 40%含む

S122



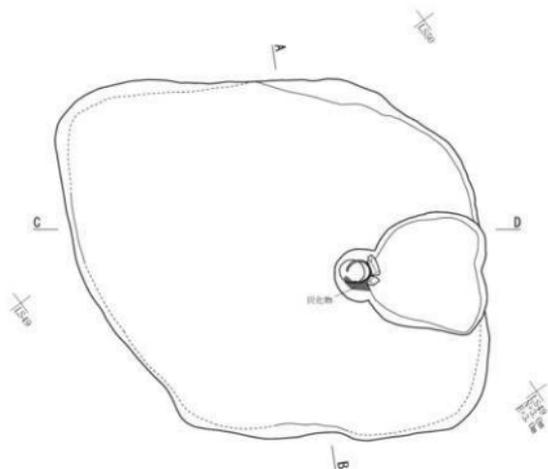
土器出土状態



第62図 S122 竪穴建物跡(1)



S122

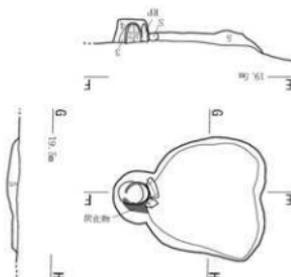


S122

- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化物ブロック (10 cm) 5%、焼土粒 (5 cm) 5%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化物ブロック (1 ~ 5 cm) 40%含む

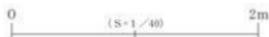


S122



S122 様式炉

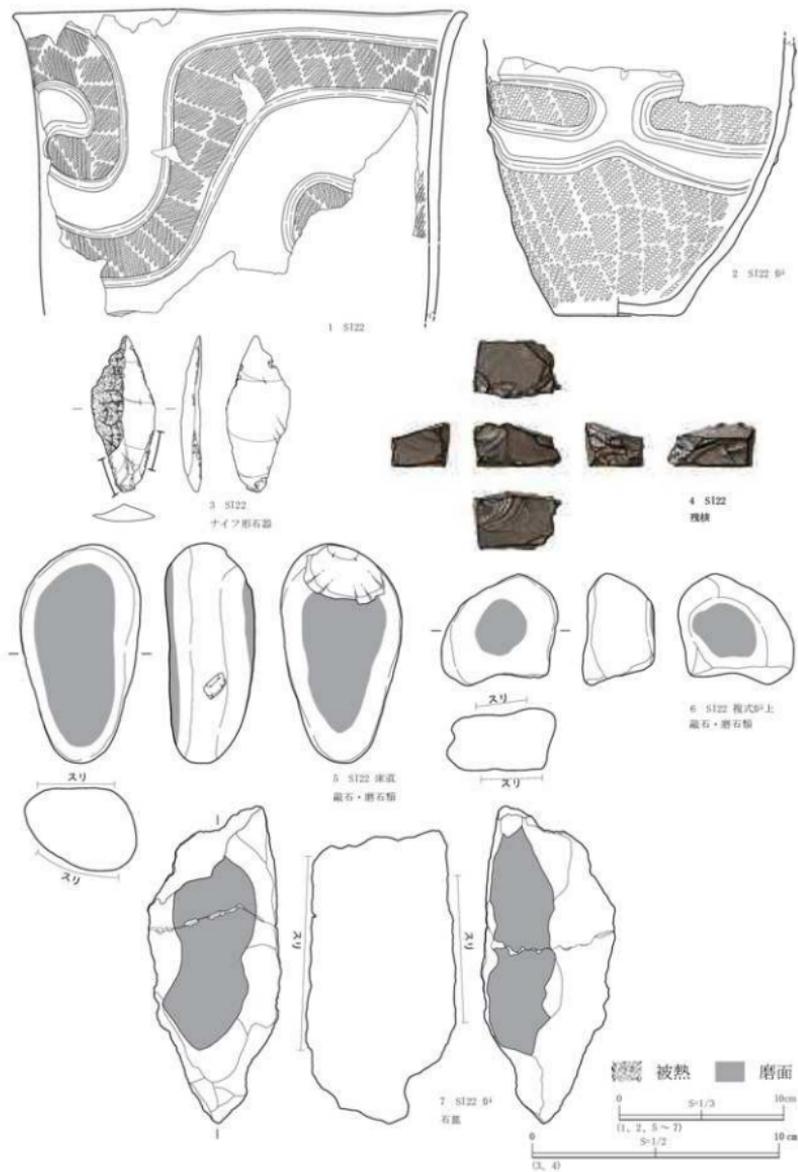
- 1 10YR4/4 褐色シルト しまり弱 粘性弱
炭化物ブロック (1 cm) 5%含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり弱 粘性やや強
焼土粒 (5 mm) 3%、炭化物ブロック (5 cm) 5%含む
- 3 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
10YR4/4 褐色土ブロック (5 cm) 10%、炭化物ブロック 10%含む
- 4 10YR2/2 黒褐色粘土 しまり強 粘性強 炭化物 (1 mm) 1%含む
- 5 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり強 粘性中 含む



第 63 図 S122 竪穴建物跡 (2)



第 64 図 S122 竪穴建物跡出土遺物 (1)



第65図 SI22 竪穴建物跡出土遺物(2)

り新しい。また、SK13・46も本遺構埋土を掘り込んでいる可能性が高い。SN55が北東に近接する。

【規模・形態】調査区境界付近にあることや、トレンチの影響で全容は不明であるが、残存形状は、北-南7.7m以上、東-西3.82m以上、主軸方位は北東-南西方向で楕円形を呈する。確認面からの深さは0.48mである。北壁から東壁にかけては、やや緩やかな角度で外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。東側と南西側にはピットが1基ずつ設けられる。P5は長軸0.50m、短軸0.26mで深さは0.16mであり、西側が深く掘り込まれている。P7は長軸0.28m、短軸0.24m、深さは0.31mである。ともに炭化物を含む単層である。本遺構の中心やや西よりには1基の石囲炉が構築されている。石囲炉の東側には50cm大の礫が置かれているが、床面から7cmほど浮いているため、埋め戻しの際に置かれたものと考えられる。

【埋土】1～5層に分けた。いずれの層もIVc層と酷似するが、IVc層に比べしまりが弱いこと、炭化物を多く含むことを判別ポイントとした。3・4層は南北壁から中心に向かって傾斜しながら堆積しており、3層の一部は炉の北側にかかっている。本遺構の中心付近では、3層の間を埋めるようにして2層が堆積する。C-Dラインでは、2層の堆積は薄いが、堆積の主体部から外れるため、中心付近では厚く堆積していたと考えられる。C-Dラインでは1～5層は東から西へ向かって斜めに堆積している。1層直下からはSKP1092、SK51・52・53が掘り込まれている。1～5層は炭化物、遺物を多く含むことから人為堆積と考えられる。

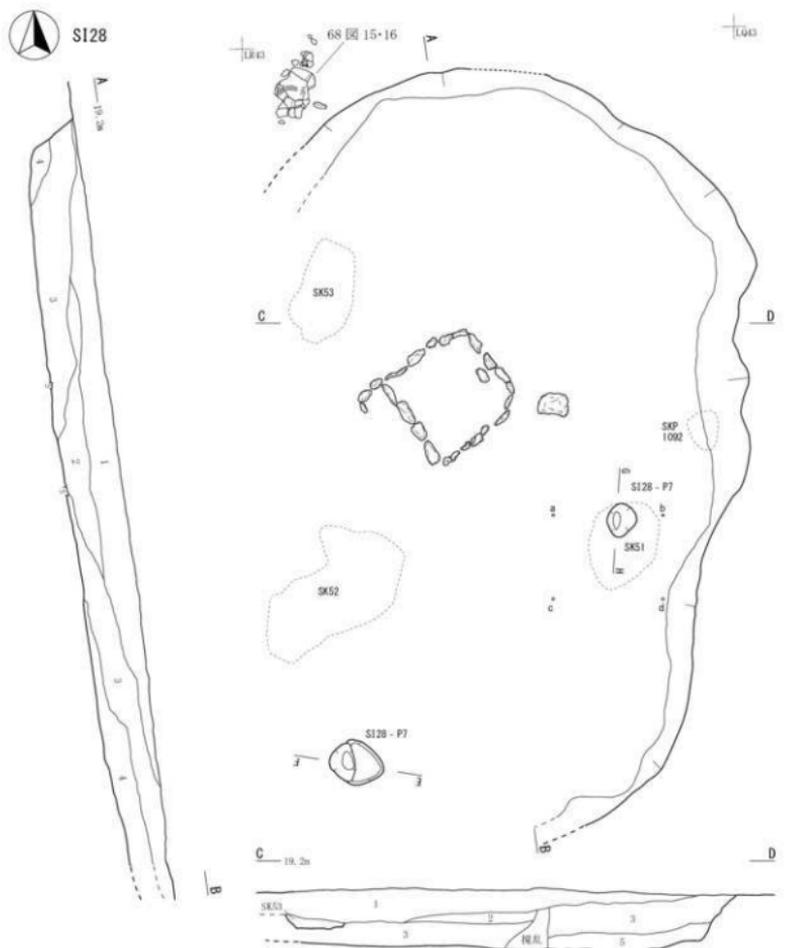
【炉】本遺構の中心やや東寄りから、長軸1.29m、短軸1.05m、主軸方位はN-28.5°-Wで、方形を呈する。西側隅からは3点の礫が鉤手状に延びる。埋土は5層に分層した。石囲炉中心部付近には、1層（暗褐色粘土質シルト）が堆積しており、その周りに2層（焼土）が堆積する。1層は8cmほどの厚さで、その直下には4層（極暗褐色焼土）が約20cmの厚さで堆積する。1層は炉廃絶後の埋め戻し土と考えられる。1層上面には礫が1点置かれていたが、石囲炉を構成するものではなく、廃絶に伴うものであると考えられる。2層は炭化物を多く含むことから炉中心部で生じた炭を掻き出した結果、形成されたと推定する。4層上面からは土器片が集中して検出された。複数個体が混在しており、炉で使用されたものではなく、廃絶に伴う遺物と推定する。南西部には3点の礫が鉤手状に並べられており、そこから南部へかけて浅い掘り込みが確認された。この掘り込みは、礫の抜き取り痕の可能性もある。鉤手状に並べられた礫と掘り込みが前段階の石囲炉の形状と考えれば、本来は、遺構廃絶時の形状よりも南西側に伸びる長方形を呈するものとなる。

【出土遺物】（第68～71図、図版17～19）

埋土から多量の土器、石器が出土した。土器は縄文時代中期が主体で、摩滅し脆弱なものが多い。南東側の壁面から赤彩土器が1点出土した。

Ⅲ群A類が主体となる。第68図12と第69図4は口縁部が屈曲し、頸部無文帯を設ける深鉢形土器である。第68図12の胴部には沈線による渦巻文が施される。第69図4は口縁部に香炉状の把手と上面・側面に沈線による渦巻文が施された突起が付随し、隆沈線による渦巻文等により地文が区画される。第68図15・16は同一個体で、口縁部文様帯を持たず器面全体に2本1組の隆帯による渦巻文が施される。遺構外ではあるが、北壁に近接するため掲載した。

石器は、石鏃（第69図5～7）、石鏃未成品（第69図8）、石槍（第69図9、10）、石匙未成品（第69図11）、両面調整石器（第69図12～13）、篋状石器（第70図1）、篋状石器未成品（第70図2、3）、スクレイパー（第70図4～8）、楔形石器（第70図9）、石刃（第70図10）、接合資料（第70図11～14）、残核（第70図15、16、第71図1～3）、石錘（第71図4）、敲石・磨石類（第71図5）、石皿（第71図6）、RF172点、UF150点、剥片268点、碎片5点、珪質頁岩原石1点、珪化木1点が出土



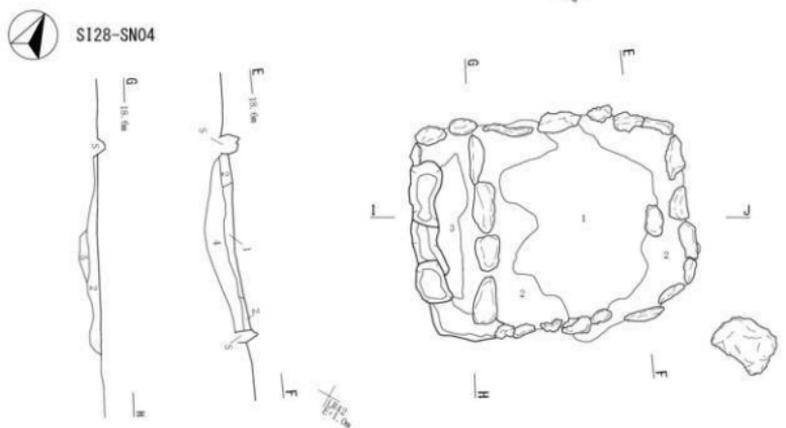
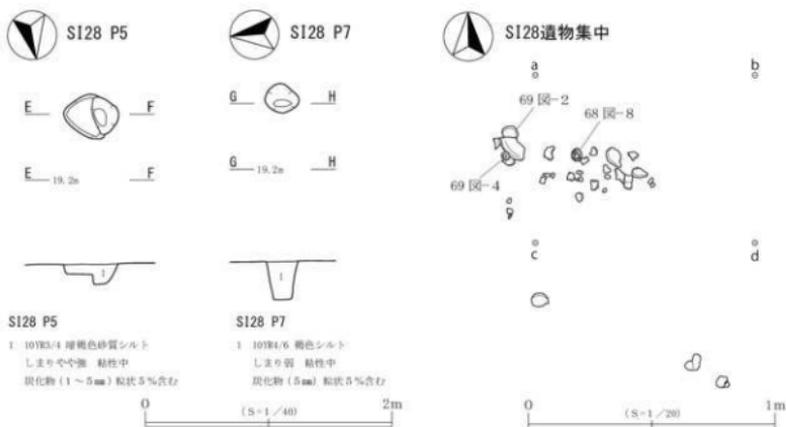
S128

- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト しまり中 粘性弱 炭化物(5~15mm)粒状15%、中礫(4~64mm)粒状5%、礫(2~4mm)粒状5%、極細砂(1~2mm)粒状5%、細砂(0.5~1mm)粒状5%含む
- 10YR2/4 暗褐色シルト しまり中 粘性中 炭化物(5~15mm)粒状30%、中礫(4~64mm)粒状5%、極細砂(1~2mm)粒状5%、細砂(0.5~1mm)粒状5%含む
- 10YR4/6 褐色シルト しまり中 粘性中 炭化物(1~25mm)粒状15%、中礫(4~64mm)粒状5%、極細砂粒状5%、極細砂粒状1%含む
- 10YR4/6 褐色砂質シルト しまり中 粘性弱 炭化物粒状5%、極細砂粒状10%、極細砂粒状30%含む
- 10YR4/3 濃い黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性強 炭化物(1~10mm)5%含む

0 (S=1/40) 2m

第66図 S128 竪穴建物跡(1)

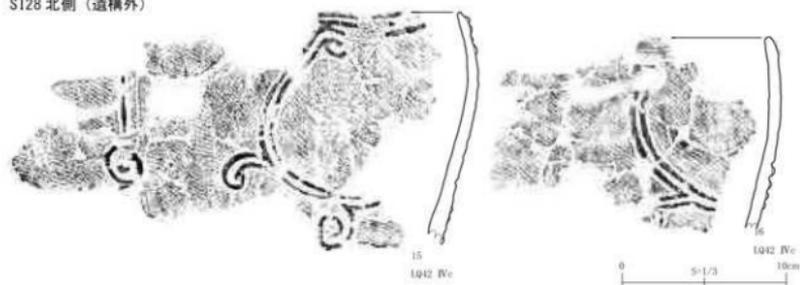
第3章 調査の方法と成果



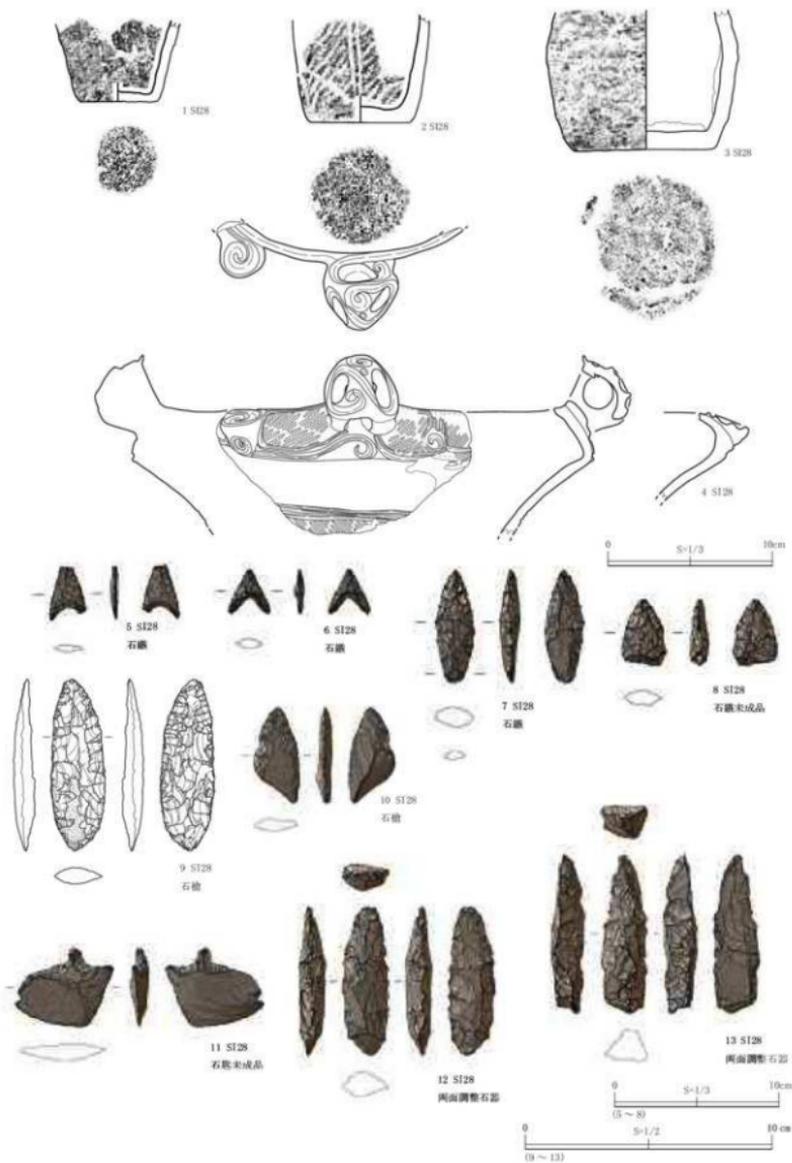
第 67 図 S128 竪穴建物跡 (2)



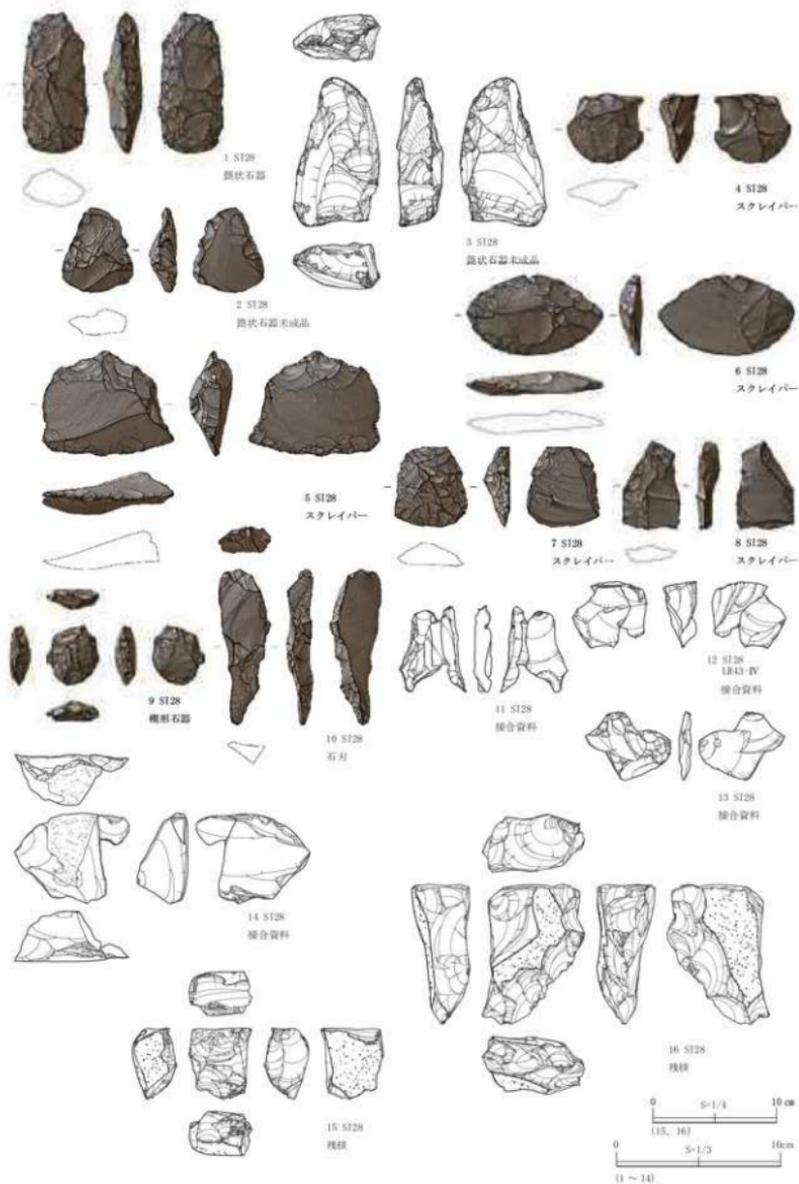
S128 北側（遺構外）



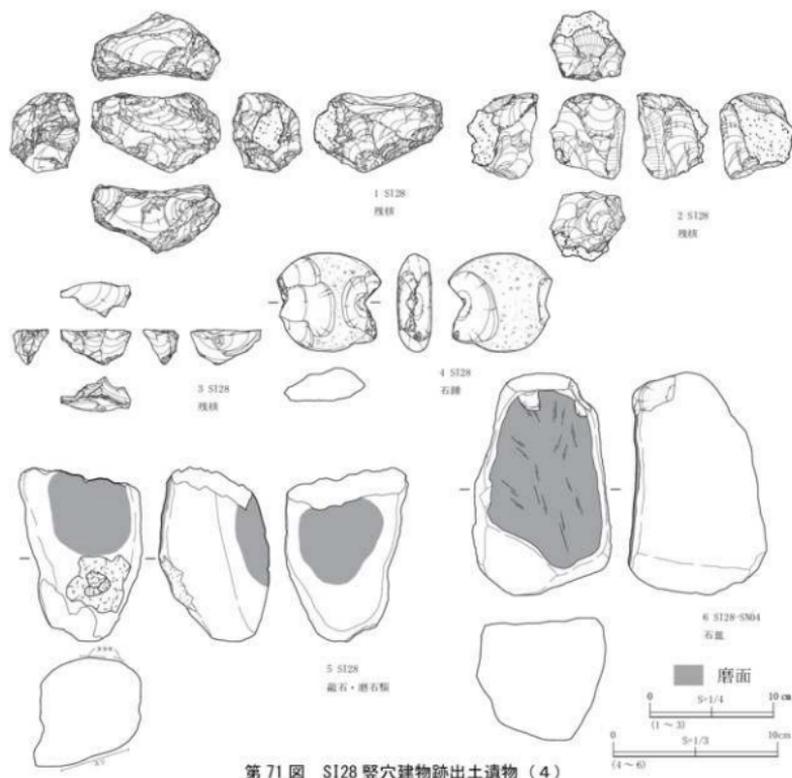
第 68 図 S128 竪穴建物跡出土遺物（1）・遺構外出土土器（1）



第69図 SI28 竪穴建物跡出土遺物(2)



第70図 SI28 竪穴建物跡出土遺物 (3)



第71図 SI28 竪穴建物跡出土遺物（4）

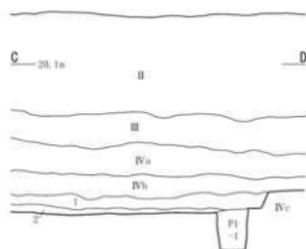
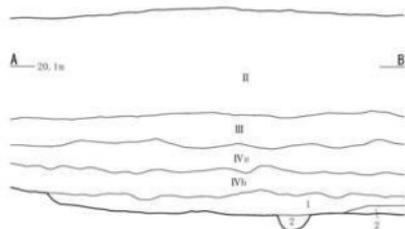
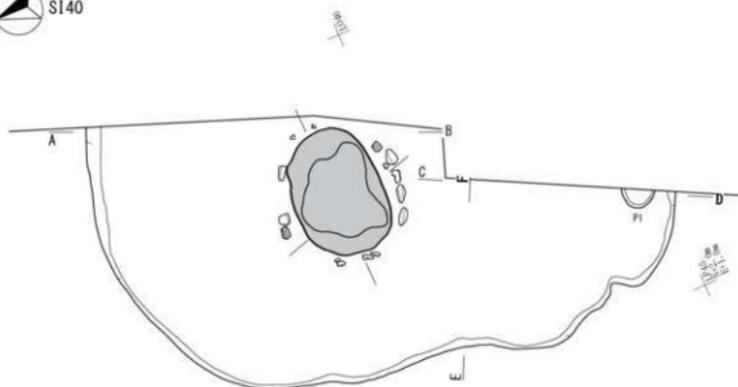
した。第69図5の石鏃の基部には、アスファルトと推定される黒色付着物が認められる。第69図7の石鏃は、厚手の剥片素材を利用し、器体全体を押圧剥離によって整形されている。基部形態は外側に張り出しており、石槍に類似する（凸基鏃）。玉髓質頁岩製。第69図9の石槍は、背面側に礫面を残す剥片素材で、球心状の平坦剥離により器体全体が整形された後、周縁に押圧剥離による調整加工が施されている。形態は先端部が丸く、左方向に傾く左右非対称形。玉髓質頁岩製。

【所見】オノノ神遺跡最大級の竪穴建物跡である。本遺構は埋土の状況から人為堆積と推定される。堆積過程は、はじめに中心の石囲炉を埋め、その上に礫を置く。次に3～5層の土を入れ、中心部に2層を入れていく。7cmほど埋めた段階で石囲炉の東側に礫を置く。その後、引き続き2層で充填していく。2、3層の堆積状況から、この段階では窪地となっていたと推定される。その窪地を掘り込むSKP1092、SK51・52・53がその機能を終えた後、この窪地を平らにするように1層が充填される。本遺構北側およそ2mにはSK16が存在する。検出層位が異なるものの、本遺構との関係性についても考える必要がある。出土遺物から大木8b式に構築・使用された竪穴建物跡と考えられる。

SI40竪穴建物跡（第72・73図、図版9）

【位置・検出状況】LO45・46区に位置する。Ivc層上面で炭化物を含む褐色土の半円状のプランを確

S140

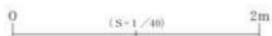


S140

- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
炭化物ブロック (10 cm) 20%、炭化物粒 (1~5 mm) 20%含む
2 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強
炭化物粒 (1 mm) 1%含む

P1

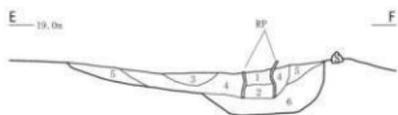
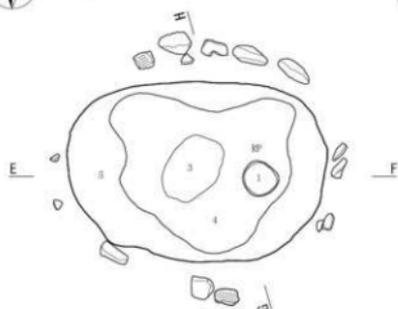
- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや弱 粘性中
炭化物ブロック (10 cm) 3%含む



第72図 S140 竪穴建物跡 (1)

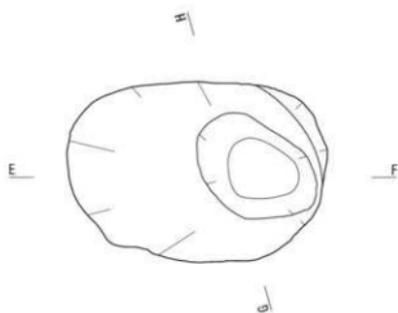


S140炉

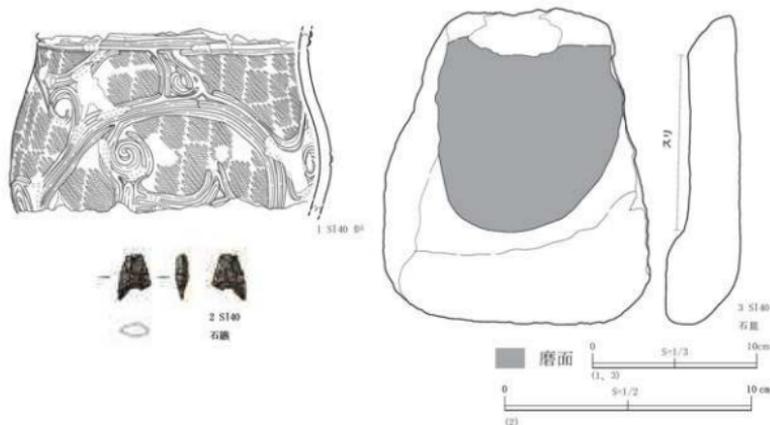


S140 炉

- 1 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中炭化物 (1 cm) 5%含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 炭土5%含む
- 3 10R4/6 赤褐色粘土質シルト しまり強 粘性中 含む
- 4 7.5YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中 10R4/6 赤褐色堆山含む
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややや強 粘性弱 10YR4/4 褐色ブロック (10 cm) 10%含む
- 6 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト しまり中 粘柱やや強炭化物 (1 cm) 3%含む



第73図 S140 竪穴建物跡 (2)



第74図 S140 竪穴建物跡出土遺物

認し、その後の精査で竪穴建物跡と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。西側にSKI43竪穴状遺構が位置する。

【規模・形態】遺構の東側が調査区外に広がる。確認できた範囲では、長軸4.78m、短軸2.24m、主軸方位、 $N-31^{\circ}-E$ の半円状を呈する。確認面から床面までの深さは最大で0.18mである。床面はほぼ平坦で、中心部がわずかに低い。壁は急角度で外傾しながら立ち上がる。

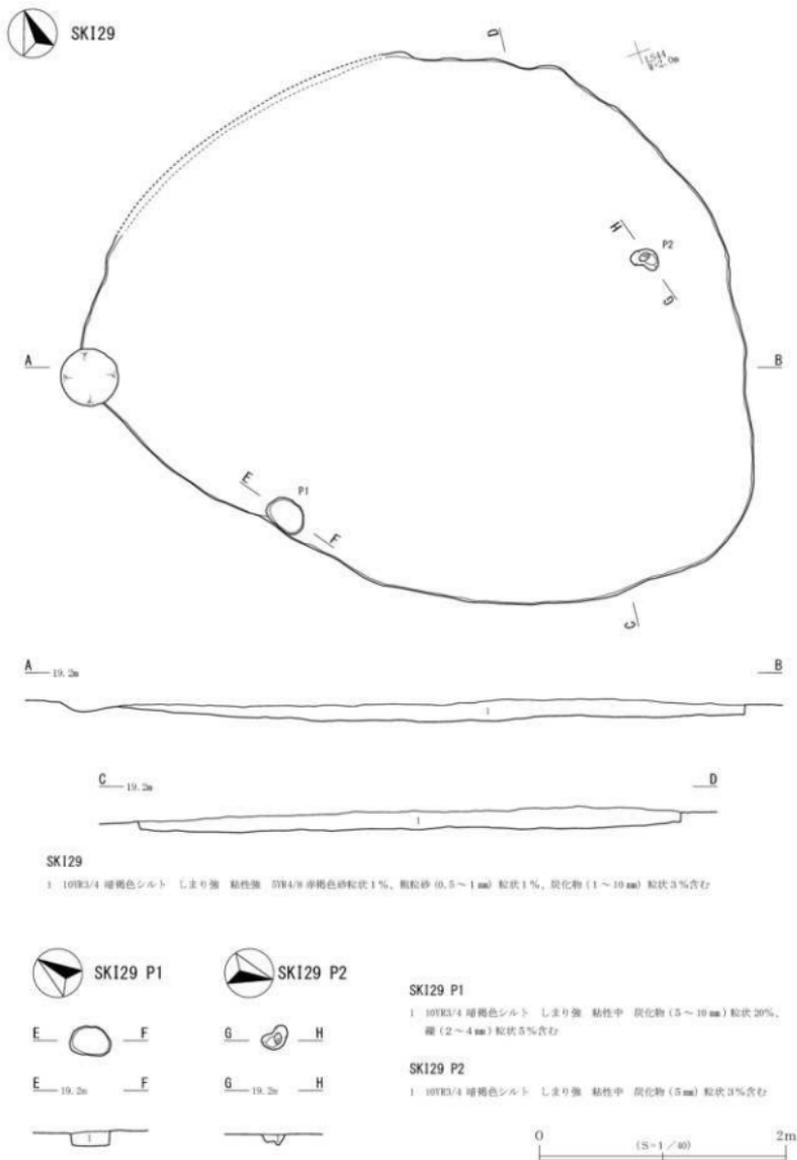
南側床面から柱穴1基（P1）を確認した。東側は調査区外に広がる。規模は、確認できた範囲で長軸0.25m、短軸0.15m、深さ0.35mである。他に柱穴は確認できなかった。

【埋土】1～2層に分けた。2層は南側にしか残存しておらず、地山土を主体としてわずかに炭化物を含む。1層は竪穴内のほぼ全域で確認され、炭化物を多く含む。人為堆積と考えられる。

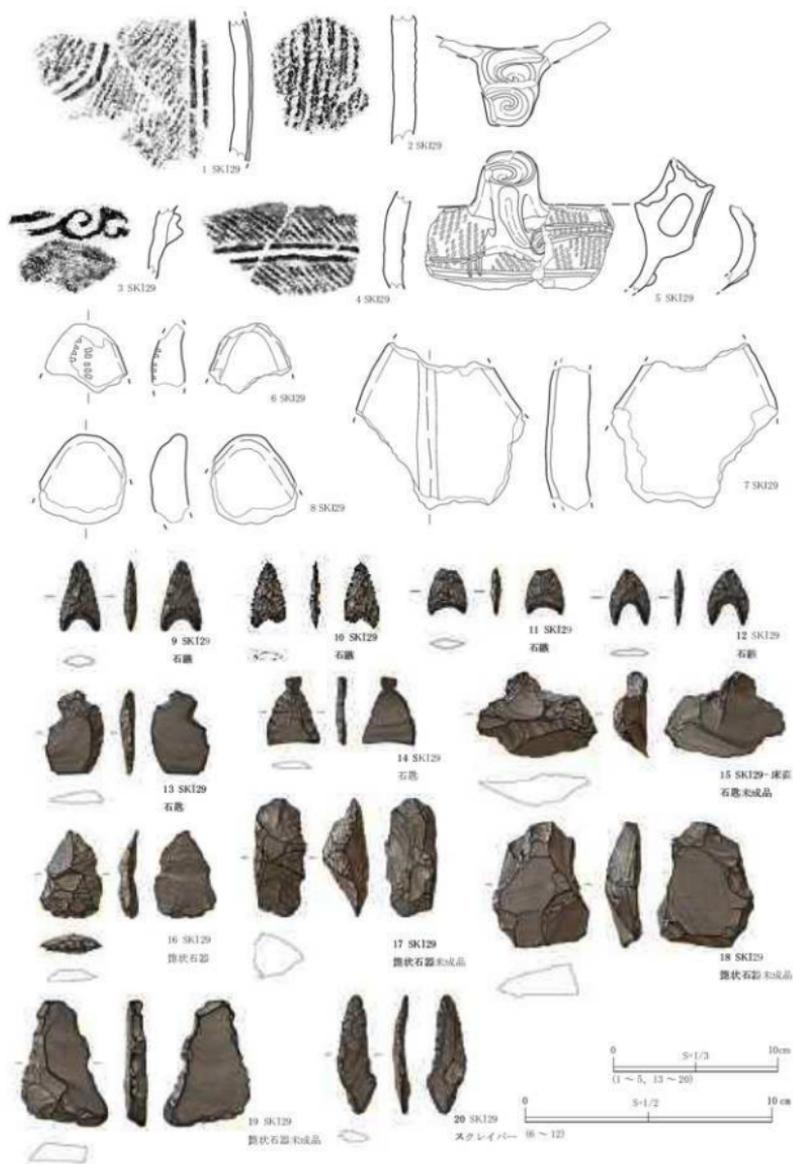
【炉】床面中央東寄りから円形の石組を確認した。石組内には焼土と埋設土器が確認され、土器埋設石皿炉とした。焼土と埋設土器を囲むように楕円状に角礫や亜角礫が大小15個配置されている。炉の南側は礫が密集し、北側は礫の間隔はまばらである。玉髓や真岩、珪化木などの複数種類の礫が使用されている。中には第71図3のように、石皿や凹石として使用された痕跡をもつものもある。埋設土器は、炉の西側に位置し、検出段階では口縁部が露出していた。焼土は炉の中心から東側にかけて広がり、掘り込みを伴う。掘り込みの規模は、長軸1.09m、短軸0.89mで、南北に長く、西側中央が張り出す不整楕円形を呈する。床面からの深さは、最大で0.14mである。壁は、東側では緩やかに外傾しながら立ち上がり、西側では垂直気味に外傾しながら立ち上がる。南北は底面から0.1mまでは外傾しながら立ち上がるが、そこからさらに大きく外傾しながら立ち上がる。掘り方の底面は平坦である。炉の埋土は1～6層に分けた。1～2層は、埋設土器内の堆積層で、炉の機能廃絶後に入られたと考えられる。3層は、炉の機能時に形成された焼土である。4～5層は掘方埋土、6層は、炉に先行する掘り込みに伴う堆積層である。土器は6層上面に据えられ、周囲を4層が抑えている。

【出土遺物】（第74図、図版19）

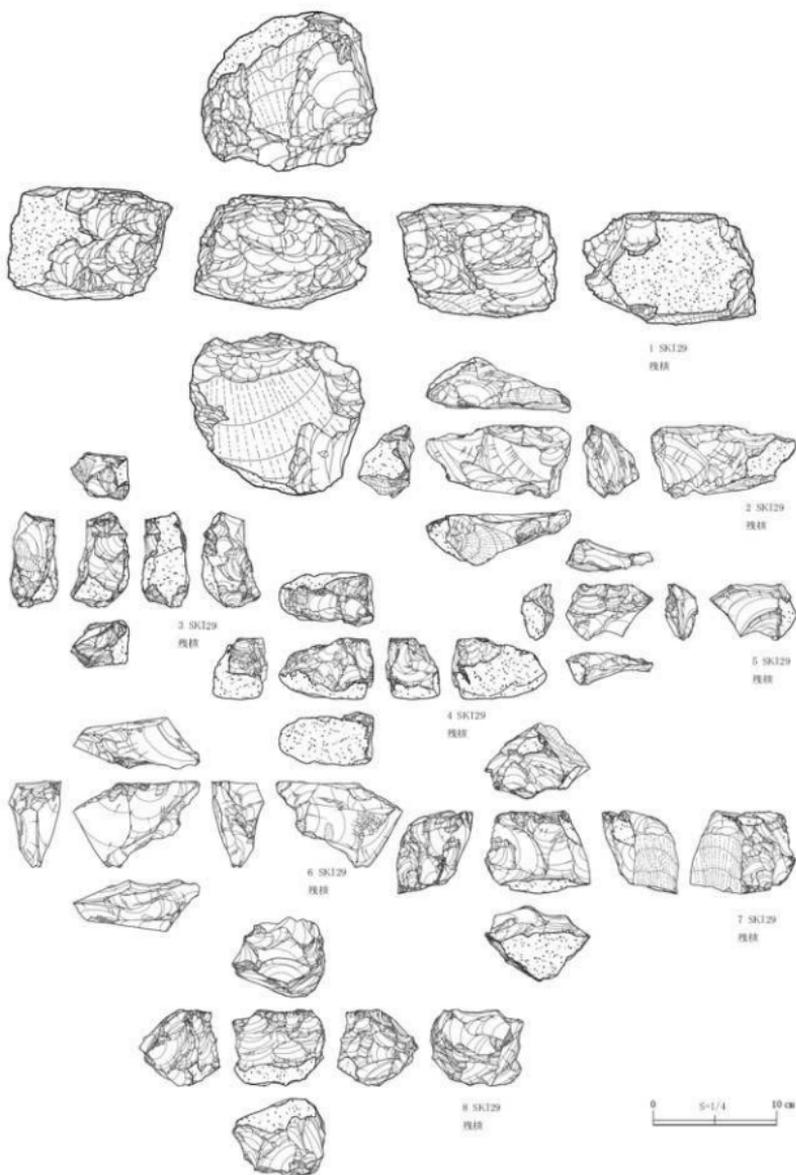
埋土から縄文時代中期を主体とする土器が出土したが、出土量は多くない。第74図1は、炉に埋設



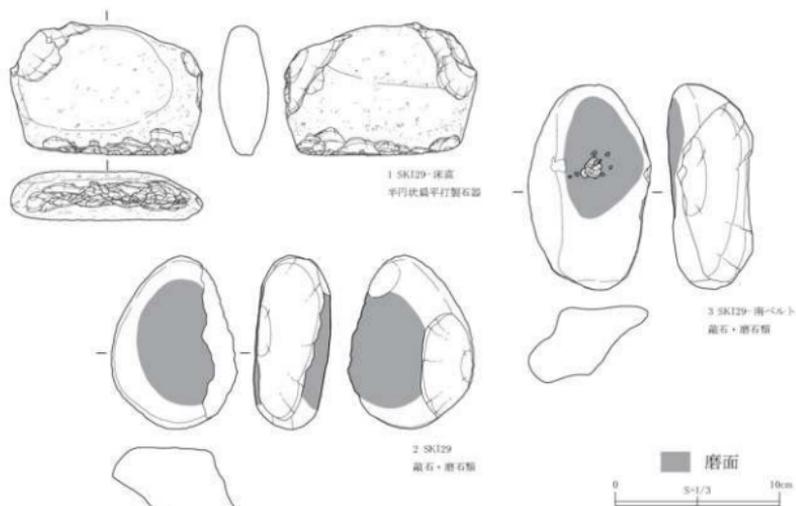
第75図 SK129 竪穴状遺構



第76図 SKI29 竪穴状遺構出土遺物(1)



第 77 図 SK129 竪穴状遺構出土遺物 (2)



第78図 SKI29 竪穴状遺構出土遺物(3)

されていた深鉢形土器である。頸部から上が打ち欠かれている。胴部には地文上に隆帯で渦巻文や剣先状文が描かれる。Ⅲ群A 2類に該当する。

石器は、石鎌(第74図2)、残核1点、珪化木1点、石圓部に使用された石皿(第74図3)、RF 4点、UF 6点、剥片3点が出土した。

【所見】土器埋設石圓炉の土器の特徴から、縄文時代中期中葉の大木8式期と推定される。

(2) 竪穴状遺構

SKI29竪穴状遺構(第75図、図版9)

【位置・検出状況】LS42～44区、LT43・44区に位置する。Ⅳc層上面で暗褐色土の不整楕円形プランを確認し、その後の精査で遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】本遺構下で翌年度SK63を検出した。周辺に遺構はない。

【規模・形態】西端は掘乱で壊されている。長軸5.3m、短軸4.48m、主軸方位はN-78°-Wで楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.18mである。壁は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。底面西側と東側に1基ずつピットが設けられる。P1は長軸0.25m、短軸0.15m、深さ0.09mである。埋土は単層で、炭化物と礫が全体に混じる。P2は長軸0.34m、短軸0.24m、深さ0.24mである。埋土は単層で、全体に炭化物が混じる。

【埋土】単層である。炭化物が混じり、遺物も比較的多く含むことから人為堆積の可能性が高い。

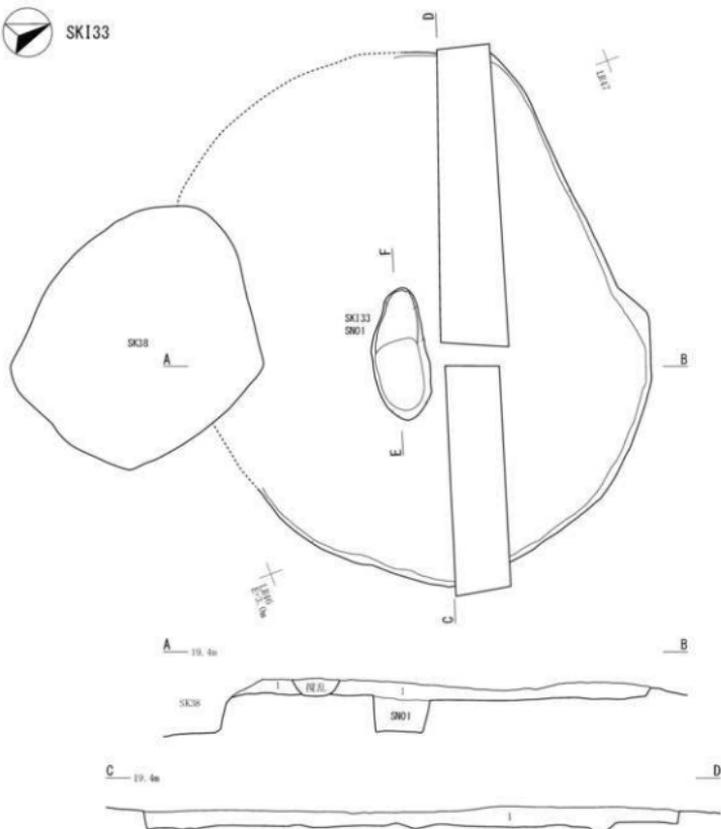
【出土遺物】(第76～78図、図版20)

埋土から土器、石器が多く出土した。出土土器は文様の全体像が判然としない小片もあるが、Ⅲ群A類が主体と思われる。三角形土製品(第76図6～8)も出土している。

石器は、石鎌(第76図9～12)、石匙(第76図13、14)、石匙未成品(第76図15)、篋状石器(第76図16)、篋状石器未成品(第76図17～19)、スクレイパー(第76図20)、残核(第77図1～8)、半円状



SKI33

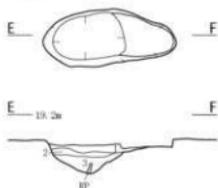


SKI33

1 10YR4/4 褐色シルト しまり強 粘性やや弱 10YR5/6 黄褐色粘土ブロック 10%含む



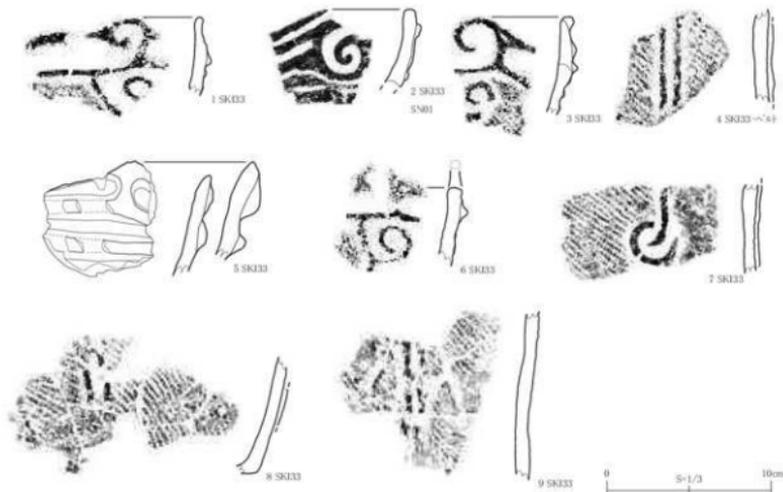
SKI33 SN01



SKI33 SN01

- 1 7.5YR4/4 褐色砂 しまり弱 粘性弱 炭化物(1cm)1%含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色砂 しまりやや強 粘性弱 含む
- 3 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強 土器片、炭化物(1cm)1%含む

第79図 SKI33 竪穴状遺構



第80図 SKI33 竪穴状遺構出土遺物

扁平打製石器（第78図1）、敲石・磨石類（第78図2・3）、RF83点、UF60点、剥片108点が出土した。第76図9の石鐮の基部には、アスファルトと推定される黒色付着物が認められる。第78図1の半円状扁平打製石器は安山岩製で、薄手の扁平礫素材を利用し、下端部には急斜度加工による刃部が作出されている。刃部側縁には、刃部と平行方向に使用痕と推定される擦痕が認められる。

【所見】検出面、出土土器から大木8b式期と考えられる。

SKI33竪穴状遺構（第79図、図版9）

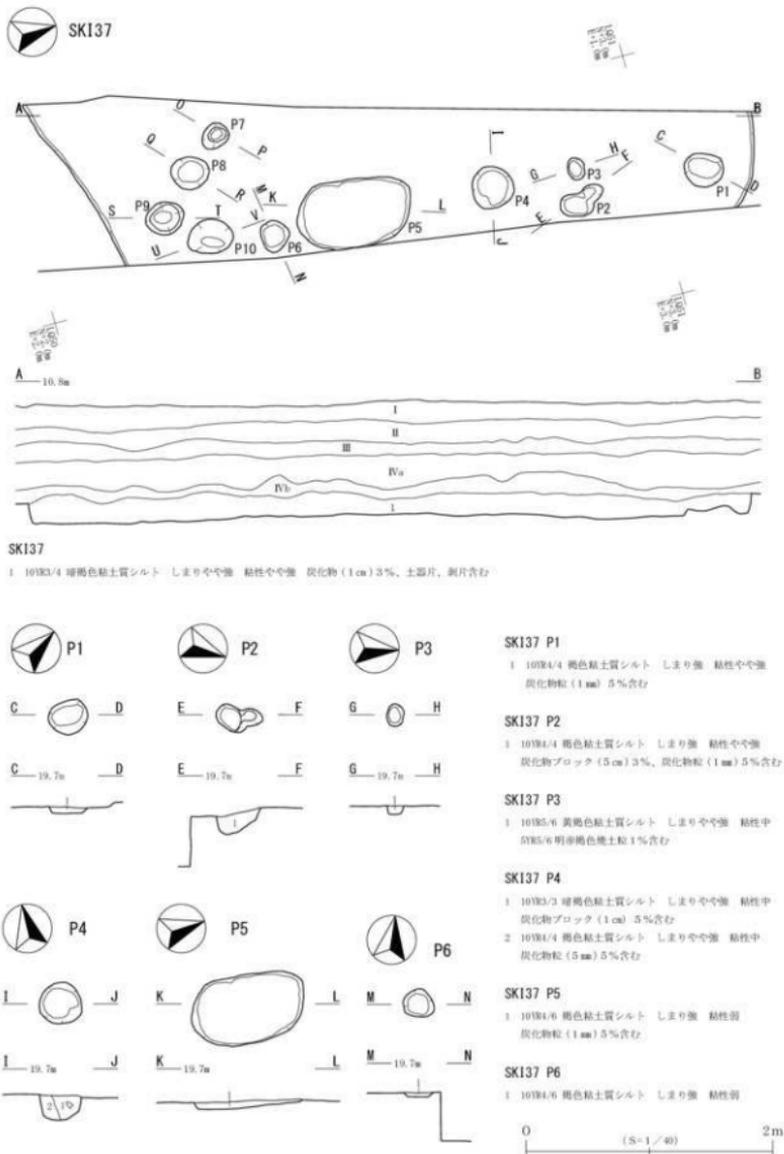
【位置・検出状況】LQ46区に位置する。IVc層上面で、地山由来の黄褐色粘土ブロックを含む褐色シルトの楕円状のプランを確認し、その後の精査で底面と立ち上がりを確認し遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】遺構南側でSK38と重複し、本遺構が古い。東側には同じIVc層検出のSKI43が位置する。

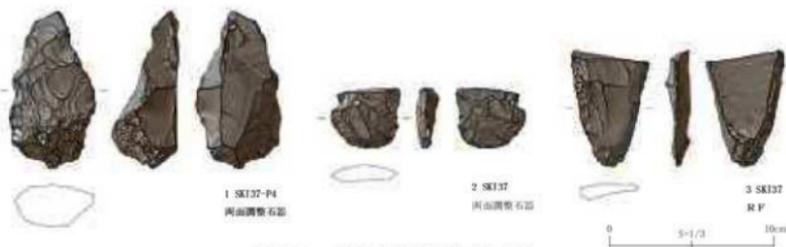
【規模・形態】南東側が擾乱のため、本来の形状が不明であるが、残存形状は、長軸4.25m、短軸2.35m、主軸方位N-51°-Wの東西に長い楕円形状を呈する。確認面から底面までの深さは、0.1mである。底面には凹凸が確認できる。床面は、北・西から南・東南に向けて約6cm高くなっている。壁は全体的に急角度で外傾しながら立ち上がる。

床面中央付近より褐色砂の楕円形プランを確認し、P1とした。規模は、長軸1.07m、短軸0.45mの東西に長い楕円形を呈する。主軸方位は、建物跡とほぼ同じN-67°-Wである。底面は凹凸が確認できる。大きく東側が下がり、西側は浅い。深さは最大0.23mである。壁は、いずれもやや緩やかな角度で外傾しながら立ち上がるが、途中でほぼ垂直気味に立ち上がる。埋土は1～3層に分けた。褐色砂や粘土質シルトと明褐色砂が交互に堆積する。1・3層には炭化物が含まれ、3層からは土器片が出土している。竪穴埋土に先行して埋め戻されたと考えられる。

【埋土】単層である。黄褐色粘土ブロックを全体に含んでいる。壁際に三角堆積も認められず、人為的に埋め戻されたと推定される。



第81図 SK137 竈穴状遺構



第82図 SK137 竪穴状遺構出土遺物

【出土遺物】(第80図、図版20～21)

埋土から土器、石器が少量出土した。土器は縄文時代中期を主体とする。文様の全体像が判然とし
ない小片もあるが、Ⅲ群A類が主体と思われる。

石器は、残核2点、RF 4点、UF 7点、剥片8点が出土した。

【所見】遺物から詳細な時期は特定できなかったが、検出面から縄文時代中期中頃と思われる。

SK137竪穴状遺構(第81図、図版10)

【位置・検出状況等】LP50・51区に位置する。調査区上段西端の断面で竪穴建物様の立ち上がり
を確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。

【規模・形態】西側は調査区外に広がり、東側は確認調査のトレンチによって損失している。トレン
チの対壁では本遺構の立ち上がり柱穴などの床面施設は確認できなかった。残存形状は、長軸5.85m、
短軸1.47m、主軸方向は、N-185° -Eである。調査区境界の断面で、確認面から底面までの深さは
0.16mである。底面はほぼ平坦であるが、北端で凹凸が認められる。壁は南北いずれも急角度で外傾
しながら立ち上がる。

床面から柱穴を10基確認した。北側に4基、南側に5基とまって分布する。規模は、P 5以外で
は長軸が0.3m前後と比較的まとまる。中央付近のP 5は長軸0.95mと規模が大きい。各柱穴の堆積土
P 3・4以外は地山土由来の褐色シルトに炭化物が混入する。P 4では東西2層に分けられ、1層か
らは石器が出土した。

【埋土】調査区境界の土層断面観察より、IVc層から掘り込まれ、土器片や剥片、炭化物を含む暗褐色
シルトの単層であることを確認した。壁際に三角堆積が認められないことから人為堆積と考えられる。

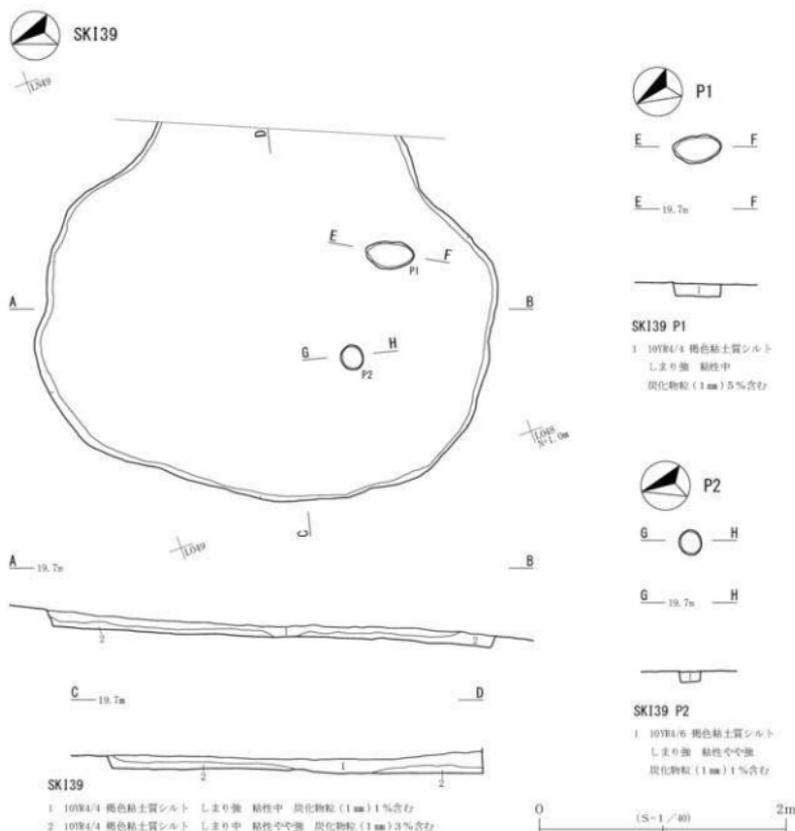
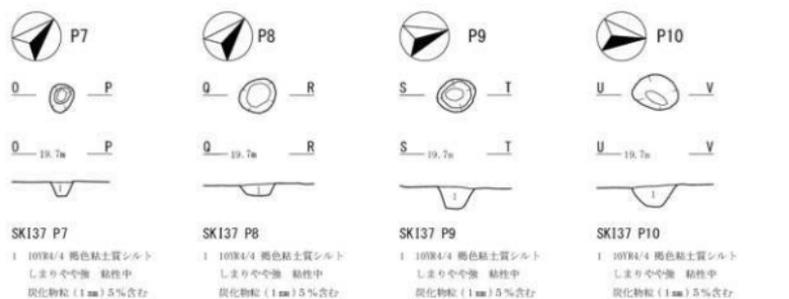
【出土遺物】(第82図、図版21)

埋土から土器、石器が少量出土した。土器は縄文橙色を呈し、縄文中期と考えられる土器片である。
遺構埋土として取り上げた遺物は少ないが、確認前の段階で遺構上の範囲から多くの遺物が出土して
いたため、その中に本遺構の遺物も含まれている可能性がある。

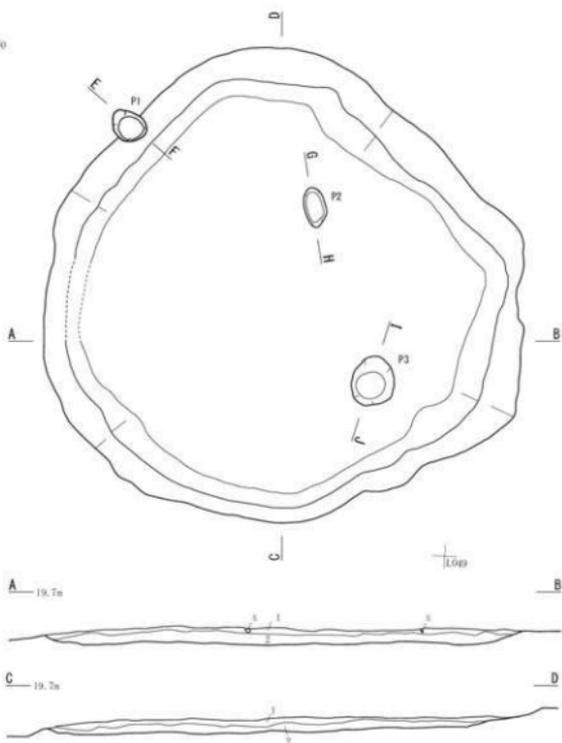
石器は、両面調整石器(第82図2)、RF(第82図3)の他5点、UF 7点、剥片10点が出土した。
P 4からは両面調整石器(第82図1)が出土している。

【所見】複数の柱穴様ビットを確認したことや当該グリッドの掘り下げ時に遺物が多く出土したこと
や炉が調査区外に存在する可能性も否定できないことから竪穴建物跡の可能性がある。時期の特定可
能な遺物の出土がないために詳細な時期は不明であるが、遺構の検出面がIVc層であることから縄文
時代中期と推測される。

第3章 調査の方法と成果



第 83 図 SK139 竪穴状遺構



SK141

- 1 10R4/6 褐色砂質シルト しまり強 粘性弱 炭化物 (0.5～10mm) 粒状5%, 中礫 (4～64mm) 粒状5%, 堆積砂 (1～2mm) 粒状3%含む
- 2 10R4/6 褐色粘土質シルト しまり強 粘性強 中礫 (4～64mm) 粒状3%, 粗粒砂 (0.5～1mm) 粒状10%, 堆積砂 (1～2mm) 粒状3%含む



SK141
P1



E—19.7m—F



SK141
P2



G—19.7m—H



SK141
P3



I—19.7m—J



SK141 P1

- 1 10R4/3 にふい黄褐色シルト しまり強 粘性中 炭化物 (5～10mm) 粒状10%含む

SK141 P2

- 1 10R4/3 にふい黄褐色シルト しまり強 粘性中 炭化物 (5～10mm) 粒状10%含む

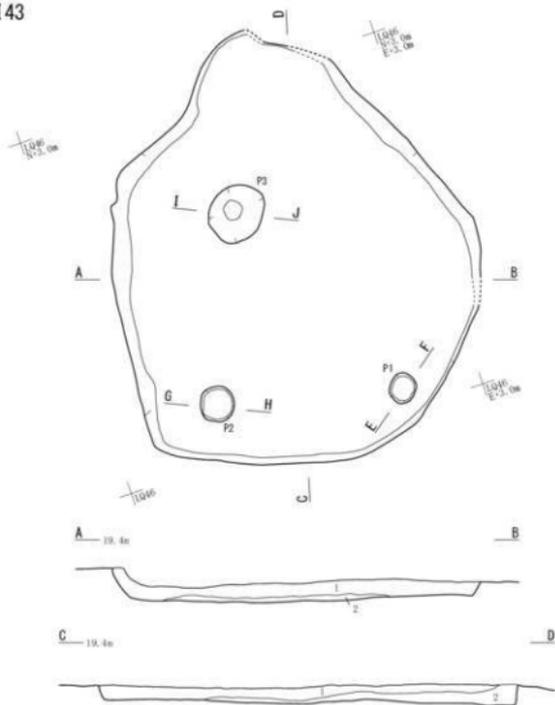
SK141 P3

- 1 10R4/3 にふい黄褐色シルト しまり強 粘性中 炭化物 (5～10mm) 粒状10%含む



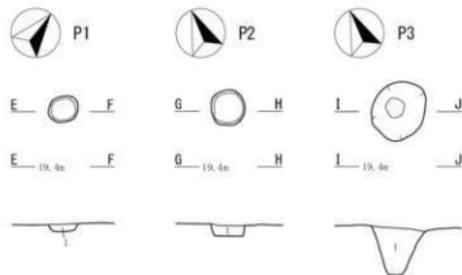
第84図 SK141 竖穴状遺構

SK143



SK143

- 1 10R3/6 黄褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化物(1cm)5%含む
- 2 10R5/4 にごい黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強 含む



SK143 P1

- 1 10R3/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強 炭化物(1mm)1%含む

SK143 P2

- 1 10R3/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強 土器片、炭化物(1mm)1%含む

SK143 P3

- 1 10R3/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強 粘土板、炭化物(1mm)1%含む



第85図 SK143 竪穴状遺構



第86図 SKI43 竪穴状遺構出土遺物

SKI39竪穴状遺構 (第83図、図版10)

【位置・検出状況】LN48・49区に位置する。IVc層中で、周辺よりも炭化物を含む褐色土の円形プランを確認した。その後の精査により底面と壁の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。西側にSKI41、南側にSI40が位置する。

【規模・形態】遺構の東端が調査区外に広がるが、調査区内での大きさは、長軸3.8m、短軸2.95m、主軸方位はN-10°-Eの東側がすばみ、帆立貝形を呈する。確認面から底面までの深さは0.12mである。床面は平坦ではあるが、地形の傾斜に沿うように北から南にかけて2cmほど下傾する。調査区内の南北壁と西壁は急角度で外傾しながら立ち上がる。

床面の南側から柱穴を2基確認した。いずれも床面から0.1m前後の深さであり、底面は平坦である。立ち上がりは僅かに外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、いずれも炭化物を含む褐色粘土質シルトの単層で2層と類似するため、ともに廃絶に伴う埋め戻しと考えられる。

【埋土】1～2層に分けた。2層は壁際および床面に堆積している。1・2層いずれも地山土由来の褐色粘土質シルトで炭化物が僅かに含まれていることから、人為堆積と考えられる。

【出土遺物】埋土から、石器が出土した。内訳はRF 1点、UF 1点、剥片 2点である。

【所見】検出面から縄文時代中期と考えられる。

SKI41竪穴状遺構 (第84図、図版10)

【位置・検出状況】LN49区、LO49区に位置する。IVc層上面で褐色土の円形プランを確認した。その後の精査により底面と壁の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南東にSKI39が位置する。

【規模・形態】長軸3.87m、短軸3.74m、主軸方位はN-50°-Wの楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.14mである。壁は緩やかに外傾し立ち上がる。床面は南側に向かって緩やかに傾斜しており、北側と南側の高低差は最大で0.09mである。

床面に2基、壁面に1基のピットが設けられる。P 1は長軸0.32m、短軸0.24m、深さ0.07mである。P 2は長軸0.32m、短軸0.17m、深さは0.1mである。P 3は長軸0.5m、短軸0.25m、深さは0.17mである。

【埋土】1～2層に分けた。いずれも中礫を含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。床面、壁面に設けられたピットの埋土は単層で、SI41埋土とは若干土質が異なり、炭化物を含む。

【出土遺物】

縄文時代中期と考えられる土器、石器が比較的多く出土した。縄文土器は、橙色を呈し摩耗が激し

く脆弱なものが多い。胎土、周辺から出土している土器から縄文時代中期中葉～末葉と考える。

石器は、RF 2点、UF 1点、剥片 1点が出土した。

【所見】 出土した土器、検出面から縄文時代中期中葉～末葉と考えられる。

SKI43竪穴状遺構（第85図、図版10）

【位置・検出状況】 LP45・46区に位置する。Ivc層上面で炭化物を含む黄褐色粘土質シルトの円形プランを確認した。その後の精査により底面と壁の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】 重複遺構はない。東側にはSI40が位置する。

【規模・形態】 南西側は確認調査のトレンチによって削平されている。残存形状は、長軸3.52m、短軸2.98m、主軸方位はN-95°-Eの隅丸方形を呈する。確認面から底面までの深さは0.15mである。底面には細かな凹凸があり、中央が僅かに窪む。壁はいずれも外傾しながら立ち上がる。

床面から柱穴を3基確認した。南東隅、南西隅、北西側の3基である。北東側からは柱穴は確認できなかった。南側の柱穴2基の規模は0.3m前後、床面からの深さも0.1m未満と酷似する。一方で、北西側のP3の規模は0.5mと約一回り大きい。床面からの深さも0.38mと深い。壁は大きく外傾しながら立ち上がる。これらは屋根を支えるための主柱穴であると考えられる。北東側では柱穴を直接据えた可能性が考えられる。床面からは埴は確認できなかった。

【埋土】 1～2層に分けた。2層は北壁付近に厚く堆積し、南方向にレンズ状堆積をしている。これは地形の傾斜と同じであり、2層が検出面であるIvc層土を基調とすることから、自然堆積と考えられる。1層も同様に自然堆積したと考えられる。

【出土遺物】（第86図、図版21）

埋土から縄文土器、石器が出土した。縄文土器は橙色を呈し、摩耗が激しく脆弱なものが多い。胎土、僅かに確認できる文様、周辺から出土している土器等から縄文時代中期中葉と考える。土器には少量ではあるが前期のものも含まれる。

石器は、石鐮（第86図1、2）、筥状石器（第86図3）、スクレイパー（第86図4）、RF 9点、UF 5点、剥片 1点が出土した。第86図3の筥状石器の表面器体中央には、アスファルトと推定される黒色付着物が認められる。

【所見】 検出面から縄文時代中期中葉の可能性が考えられる。

（3）土坑

SK02土坑（第87図、図版10）

【位置・検出状況等】 LT47区に位置する。Iva層中で土器片の円弧状の広がりや周囲の暗褐色土の広がりを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】 ST62を掘り込んでいるため本遺構が新しい。周辺に遺構はない。

【規模・形態】 長軸0.53m、短軸0.48m、主軸方位は不明である。東西方向が僅かに窪む楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは最大0.18mであり、床面は平坦である。壁は、東側の立ち上がりは明瞭であり、外傾しながら立ち上がる。

【埋土】 混入物で1～2層に分けた。遺物は両層に含まれるが1層に多い。1層には僅かに炭化物が含まれる。1層に含まれる土器は、埋土の中位から下位にかけて横位で、外面を下にした状態で検出された。検出面で確認された部分は縄文土器胴部の割れ口である。土器が横位の状態で出土したことから人為堆積と推定される。

【出土遺物】（第92図1～3、図版21）

土器、石器が出土した。土器は北東側埋土中から胴部破片が出土した。全て地文もしくは沈線のみ

のもので、Ⅱ群C2類、G5類、G6類に該当する。全て繊維が混入しており、縄文時代前期に属すると考えられる。

石器は楔形石器1点、残核1点、RF15点、UF7点、剥片18点が出土した。

【所見】出土遺物から縄文時代前期後葉と考えられる。

SK12土坑（第87図、図版10）

【位置・検出状況】MB・MC45区に位置する。Ⅱ層上面で土器片を含む暗褐色土の不整形の広がりを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。北側に同じⅡ層面検出のSK15が位置する。

【規模・形態】長軸0.88m、短軸0.82m、主軸方位はN-60°-Wの不整形円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.15mで、底面は平坦である。西壁は外傾しながら立ち上がり、半分ほどの高さでさらに大きく外傾する。東壁は外傾しながら立ち上がる。

【埋土】混入物により1～2層に分けた。1層は西側を中心に堆積し、遺物を多く含む。2層は地山由来のブロックを全体に含む。いずれも締まりが強い。埋土の特徴から人為堆積と考えられる。

【出土遺物】（第92図11～16、図版21）

土器、石器が1層から出土した。土器は、地文もしくは沈線のみのもので、Ⅱ群C2類、G6類に該当する。全て繊維が混入しており、縄文時代前期に属すると考えられる。

石器は石匙（第92図16）、石錐1点、RF1点、UF2点、剥片6点、破片1点が出土した。

【所見】出土土器の特徴から、縄文時代前期と考えられる。

SK13土坑（第87図、図版10）

【位置・検出状況等】LS42区に位置する。Ⅳa層上面相当の高さで黒褐色土の楕円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SI28の埋土を掘り込んでいると考えられる。東にSK46が近接する。

【規模・形態】南側の上部は削平されている。長軸1.04m、短軸0.74m、主軸方位N-67°-Wの隅丸方形を呈する。確認面から底面までの深さは最大で0.6mで、底面は平坦である。北壁は傾斜を変えながら外傾し立ち上がる。南壁は上部が削平されているが、外傾しながら立ち上がる。

【埋土】1～7層に分けた。1・2層は上部に水平に堆積する。4～7層は、北から南側に向かってレンズ状の堆積を呈する。4～7層は、黄褐や褐色、黒褐色が互層となっており、北側の斜面からの崩落と周辺からの流れ込みで形成された自然堆積と思われる。3層は、4～7層の堆積を切るように確認されている。そのため、窪み地形への自然堆積後に何らかの形で掘り込みがなされたと考えられる。3層は地山土を主体とし、1層と同様の黒褐色土が全体に含まれており、レンズ状の堆積が認められないことから人為的に埋め戻されたと考えられる。1・2層は水平に堆積しており、1層は黒褐色土、2層は褐色土を主体としている。2層は固く締まっており、1層土を帯状に含むことから人為的に堆積したと考えられる。1層も地山由来土をブロック状に含み、レンズ状の堆積が認められなかったことから人為堆積と考えられる。

【出土遺物】（第92図9、図版21）

埋土から土器、石器が少量出土した。土器は、Ⅲ群A1類に該当するものが出土している。波頂部に沈線で渦巻文が描かれる。その他、Ⅱ群土器も含まれる。

石器はRF2点、剥片1点が出土した。

【所見】出土土器から大木8b式期の土坑と考えられる。

SK15土坑（第87図、図版11）

【位置・検出状況等】MB46区の調査区西端付近に位置する。Ⅱ層上面で極暗褐色の長楕円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺の遺構はない。

【規模・形態】長軸1.21m、短軸0.60m、主軸方向はN-9°-Eの長楕円形である。確認面から底面までの深さは0.71mである。壁はやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であるが、中心から北東にかけて長楕円形の浅い掘り込みがなされる。

【埋土】1～4層に分けた。1、2、4層はⅡ層由来の黄褐色土、黄褐色土、浅黄褐色土を含み、3層は地山由来土を主体としつつ2、4層由来の黒色土を含む。人為堆積と判断される。

【所見】遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から縄文中期以前と考えられる。

SK19土坑（第88図、図版11）

【位置・検出状況】LP49区に位置する。Ⅳb層上面で褐色の円形プランを確認した。西側が確認調査トレンチで切られており、トレンチの断面で南北方向の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】南側でSKP1074と重複し、本遺構の方が新しい。東にSKI41が位置する。

【規模・形態】長軸1.50m、短軸1.17mの円形、主軸方位はN-20°-Eである。確認面から底面までの深さは0.41mで、V層まで掘り込まれている。北壁、東壁、西壁に中端を有しており、北西側では中端からピット様の掘り込みが垂直方向になされる。北東側と南東側では、中端からオーバーハング気味に掘り込まれている。底面は平坦で、南西側と南東側に掘り込みがなされる。これらの掘り込みは上屋構造に伴う可能性が考えられる。西壁は外傾しながら立ち上がるが、ほかは垂直に立ち上がる。

【埋土】1～3層に分けた。いずれも水平堆積で、褐色シルトとV層由来の中礫と礫を全体に含む。本遺構はV層まで掘り込まれていることから、本遺構を掘り込んだ際に生じた土でそのまま人為的に埋め戻されたものと考えられる。本遺構に構築されたピットの埋土は同質で、いずれも単層である。1～3層同様に褐色シルトを含むことから、一括埋め戻された可能性が高い。

【出土遺物】（第92図6～8、図版21）

土器、石器が少量埋土中より出土した。土器片の多くは摩滅しているが、一部隆帯を持つものがあり、縄文中期中葉頃と考えられる。石器は、珪質頁岩製UFが2点出土している。

【所見】検出面と出土遺物から縄文中期中葉頃と推定される。

SK26土坑（第88図、図版11）

【位置・検出状況】MA・MB44区に位置する。Ⅳb層上面で暗褐色土の円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。検出段階で南東側上面の一部を削ってしまっている。当初土器がまとまって出土したことから土器埋設遺構と考えたが、完掘の結果、上部に土器片が数点まとまるだけであったことから土坑と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。東にSN21、南東にSN44が位置する。

【規模・形態】長軸0.65m、短軸0.5m、主軸方位はN-40.5°-Wで円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.12mである。底面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。長軸側の壁面は垂直気味に立ち上がるが、短軸側の壁面は緩やかに立ち上がる。

【埋土】炭化物を含む。単層である。人為堆積か自然堆積か判然としない。

【出土遺物】（第92図10、図版21）

埋土上部から土器片が数点、剥片が1点出土した。

【所見】検出面、出土土器から縄文中期中葉から末葉と考えられる。

SK36土坑（第88図、図版11）

【位置・検出状況】LP44区に位置する。Ivc層上面で褐色土の円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。西にSN32が位置する。

【規模・形態】長軸1.05m、短軸0.80m、主軸方位はN-9°-Wで中央部分が僅かにくぼむ南北に長い楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.22mである。北壁と南壁は床面から外反するようになり立ち上がるが、確認面から0.1mほどの深さからは内湾するように立ち上がる。東壁は外傾しながら立ち上がる。床面は中心やや北側が盛り上がる。

【埋土】単層である。しまり、粘性ともに強く炭化物をわずかに含む。人為堆積か自然堆積かは判然としない。

【出土遺物】埋土から珪質頁岩製切片が1点出土した。

【所見】検出面から縄文中期中葉から末葉と考えられる。周辺にはSN30・32が存在するが、関係性は不明である。

SK38土坑（第89図、図版11）

【位置・検出状況】LQ45・46区に位置する。黄褐色ブロックを含む不明瞭なプランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】遺構北側でSI33と重複し、本遺構が新しい。東側にSI40が位置する。

【規模・形態】長軸2.2m、短軸1.85m、主軸方位はN-51°-Wで楕円形状を呈する。確認面から底面までの深さは、0.5mである。底面は平坦で、中央が僅かに窪む。壁は南北壁では、僅かに外傾しながら立ち上がり、底面から0.3m付近で大きく外傾しながら立ち上がる。この外傾部分は、自然崩落の可能性が考えられる。西壁は上部が調査で大きく削平されているが、底面から0.3mまでは外傾しながら立ち上がる。東壁も大きく削平されているが、外傾しながら立ち上がることが確認できる。

【埋土】1～5層に分けた。3～5層はレンズ状堆積を示し、いずれも地山を主体とし、壁面や上部が崩落したもので自然に堆積したものと思われる。1・2層には基本層序には含まれない風化礫が混入していることから、埋め戻されたものと思われる。廃絶後、自然に埋没し窪地になっていた部分を一括で埋め戻したものと考えられる。

【所見】遺物は出土しなかったが、検出面から縄文時代中期中葉以降と考えられる。

SK42土坑（第89図、図版11）

【位置・検出状況】LS42区に位置する。Ivc層上面で褐色土の円形プランを確認し、調査区上段南端斜面で遺構南半の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SKP1022と重複する。北にSKI29、東にSI28が位置する。

【規模・形態】長軸1.20m（残存）、短軸1.39m、主軸方位N-44°-Eの円形プランを呈する。確認面から底面までの深さは0.18mである。壁は外傾しながら立ち上がる。北半部にはテラス状の平坦面を有する。底面は平坦である。

【埋土】単層である。炭化物、中礫を含むことから人為堆積の可能性が高い。

【出土遺物】（第93図1～6、図版22）

埋土から比較的多量の土器、石器が出土した。土器は西側壁面付近から土器片がまとまって出土した。1個体のものである可能性が高い。摩滅し脆弱なものが多く、縄文中期中葉と思われる土器には、Ⅱ群土器も少量含まれる。

石器は、残核（第93図6）、RF1点、UF3点、剥片20点、砕片3点が出土した。

【所見】出土した土器、検出面から縄文中期中葉と考えられる。

SK46土坑（第89図、図版11）

【位置・検出状況】LR42区に位置する。IVc層上面相当の高さで暗褐色の不整形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SI28の埋土を掘り込んでいると考えられる。西にSK13が位置する。

【規模・形態】長軸0.67m、短軸0.50m、主軸方位はN-26°-Eで南北に長く、東側に張り出しを二か所もつ楕円形プランを呈する確認面から底面までの深さは0.09mと浅い。南壁は底面から外傾しながら0.02m立ち上がった後、緩やかに立ち上がる。その他は直立気味に外傾しながら立ち上がる。底面には掘り込みが4ヵ所ある。中心の掘り込みは確認面から最大で0.12mの深さに達する。立ち上がりは緩やかである。その他の掘り込みは規模が小さく、立ち上がりも比較的急である。

【埋土】単層である。遺物や炭化物を比較的多く含むことから人為堆積の可能性が高い。

【出土遺物】（第93図7～13、図版22）

底面直上で比較的多くの遺物が出土した。土器は大木8b式期が主体であるが、II群土器も含む。

石器は残核（第93図13）、RF3点、UF2点、剥片5点が出土した。

【所見】出土した土器、検出面から縄文中期中葉と考えられる。

SK50土坑（第90図、図版11）

【位置・検出状況等】MC44区の調査区南西端に位置する。XI層直上で黒褐色の円形プランを確認し、断面の観察の結果、遺構と判断した。検出時にすでに上部30cm程を掘りすぎてしまっている。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺の遺構はない。

【規模・形態】長軸0.7m、短軸0.53mで東西に伸びる長楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.26mである。底面は平坦であるが、中心部が底面から最大0.07m掘り込まれている。壁は垂直気味に外傾しながら立ち上がる。

【埋土】単層である。地山ブロックがまとまって含まれていることから人為堆積の可能性が高い。

【所見】出土遺物はないが、埋土にXI層由来土を含むことから縄文中期以前と考えられる。

SK51土坑（第90図）

【位置・検出状況】SI28の1層直下で黒褐色プランを確認し、精査の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SI28と重複し、本遺構のほうが新しい。

【規模・形態】長軸0.76m、短軸0.56m、主軸方位はN-25°-Eで長楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.18mである。北壁は直立気味に外傾しながら立ち上がる。南壁は緩やかに外反しながら立ち上がる。底面は平坦である。検出段階で南西上面を掘りすぎてしまっている。

【埋土】単層である。SI28の1層に比べると暗めで粘性が強い。壁面の崩落の痕跡が認められないことから人為の可能性が高い。

【所見】出土遺物はないが、SI28の1層より掘り込まれることから縄文中期中葉～末葉と考えられる。

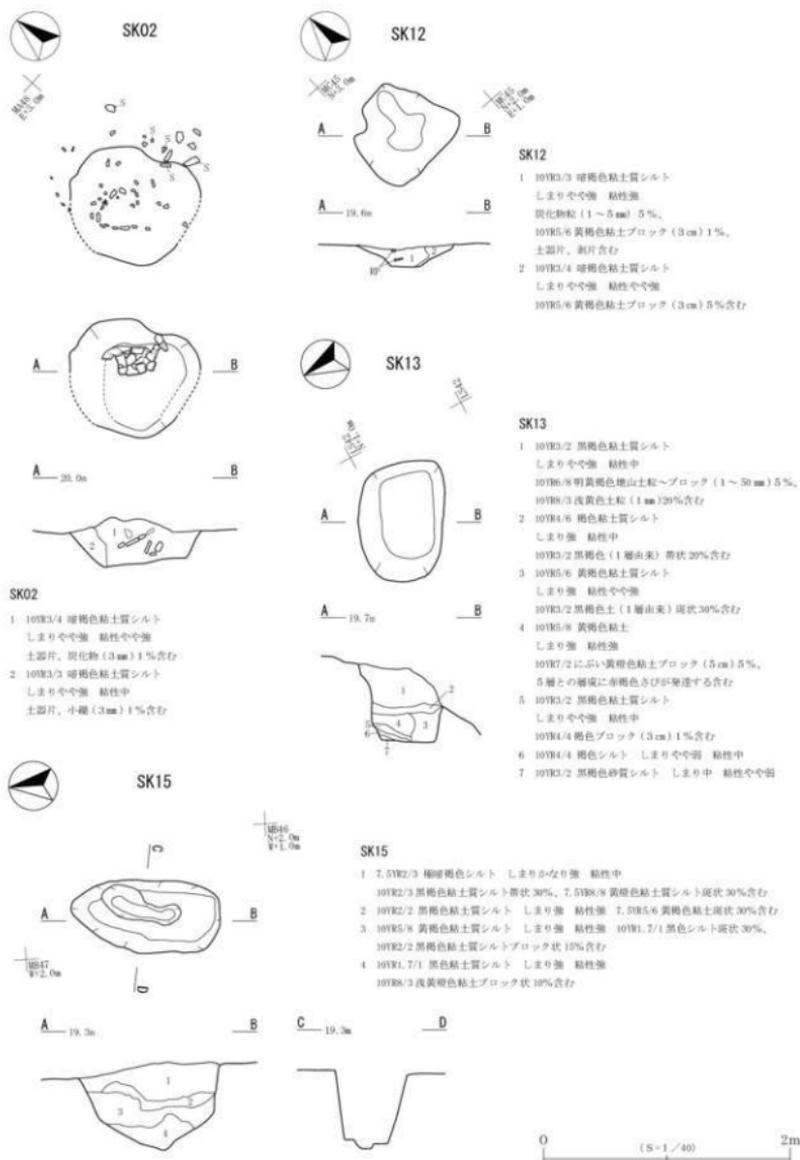
SK52土坑（第90図）

【位置・検出状況等】SI28の1層直下で黒褐色プランを確認し、精査の結果、遺構と判断した。

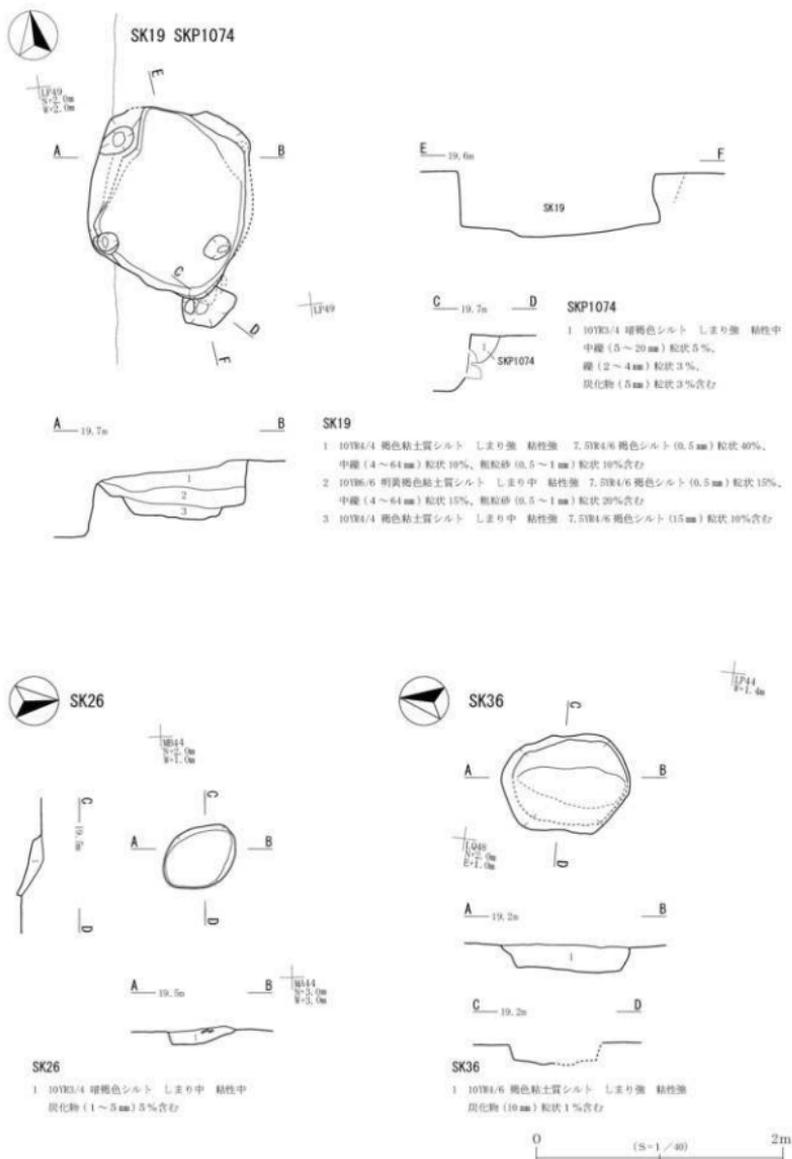
【重複遺構・周辺遺構】SI28埋土を掘り込んでいるため本遺構が新しい。

【規模・形態】長軸1.28m、短軸0.97mで北西から南東にのびる楕円形を呈する。主軸方位はN-41°-Wである。確認面から底面までの深さは0.2mである。南北の壁は垂直気味に外傾しながら立ち上がる。西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。検出段階で南半部を削りすぎている

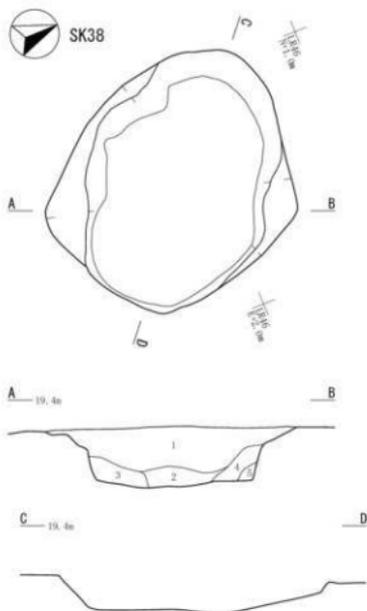
【埋土】単層である。SI28の1層と色調は類似するが、炭化物が多く含まれる点が異なる。人為堆積か自然堆積か判然としないうもの、単層かつ炭化物を多く含むことから前者の可能性が高い。



第 87 図 SK02・12・13・15 土坑

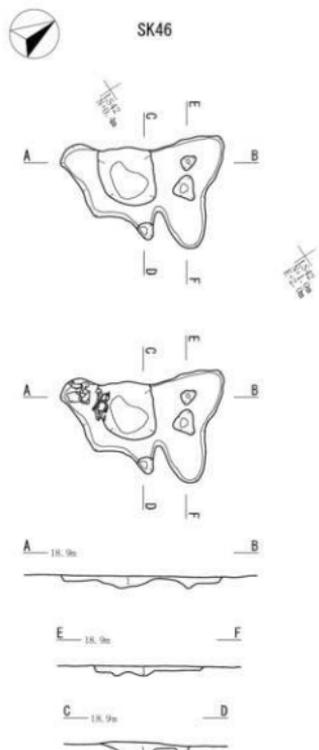


第88図 SK19・26・36土坑・SKP1074柱穴様ビット



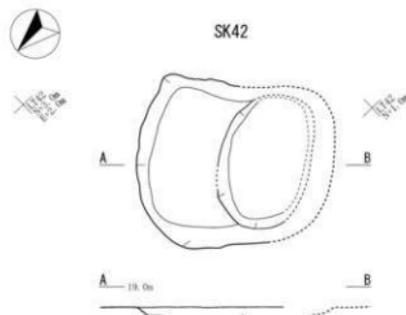
SK38

- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや弱 粘性やや強
- 10YR5/6 黄褐色ブロック (5 cm) 1%含む
- 2 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまり弱 粘性やや強 炭化層 (1 cm) 1%含む
- 3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
- 4 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
- 5 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強



SK46

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト しまり強 粘性中
炭化物 (0.5 ~ 10 mm) 粒状 10%、
燻炭粒砂 (1 ~ 2 mm) 粒状 10%含む



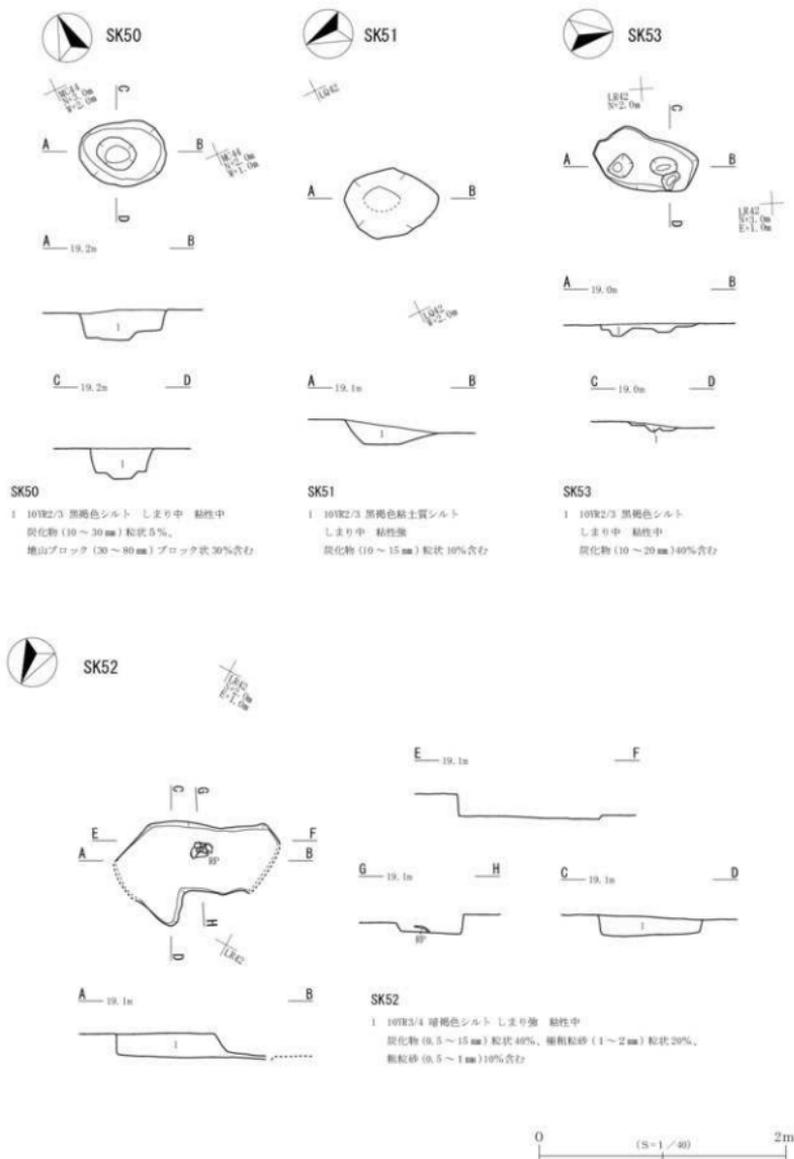
SK42

- 1 10YR4/6 褐色シルト しまり強 粘性中
炭化物 (5 mm) 粒状 5%、燻炭粒砂 (2 ~ 5 mm) 塊状 10%、
中礫 (4 ~ 64 mm) 粒状 2%含む

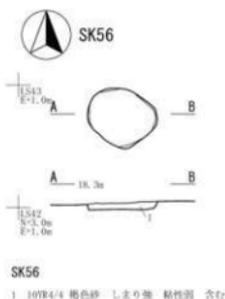


第89図 SK38・42・46 土坑

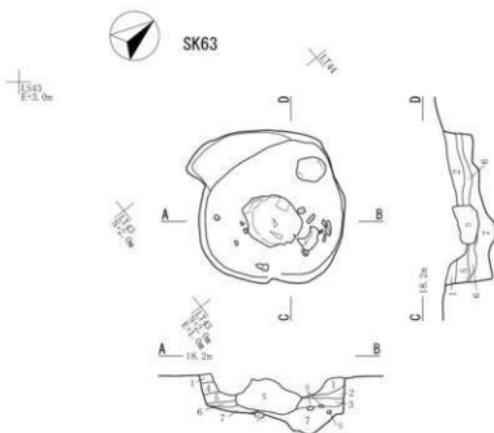
第3章 調査の方法と成果



第90図 SK50・51・52・53土坑

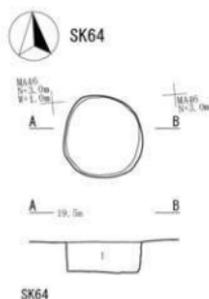


1 10YR4/4 褐色砂 しまり強 粘性弱 含む

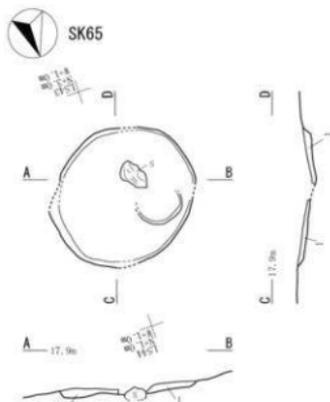


SK63

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強 炭化物粒 (1~3mm) 0%含む
- 2 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性強 含む
- 3 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性強 含む
- 4 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強 含む
- 5 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり強 粘性強 黄褐色地山土粒 (1mm) 3%含む
- 6 10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルト しまり強 粘性強 5層ブロック 2%含む
- 7 10YR6/6 明黄褐色シルト しまり強 粘性やや弱

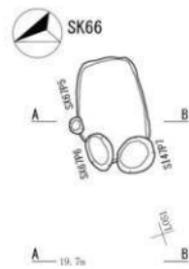


- 1 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中 炭化物粒 (5mm) 0%含む



SK65

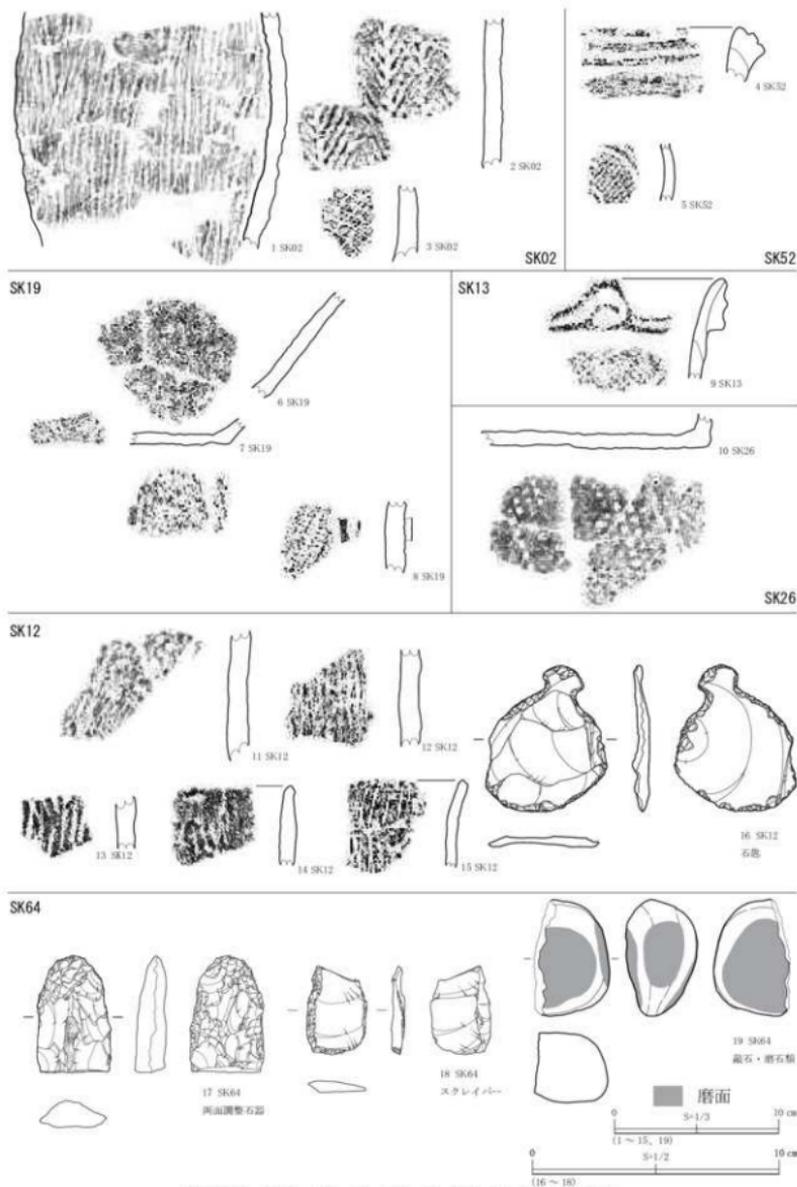
- 1 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性弱 炭化物粒 (3mm) 10%、炭化物ブロック (3cm) 5%含む



- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト しまり強 粘性中 炭化物 (3mm) 1%、灰白色ブロック 10%含む

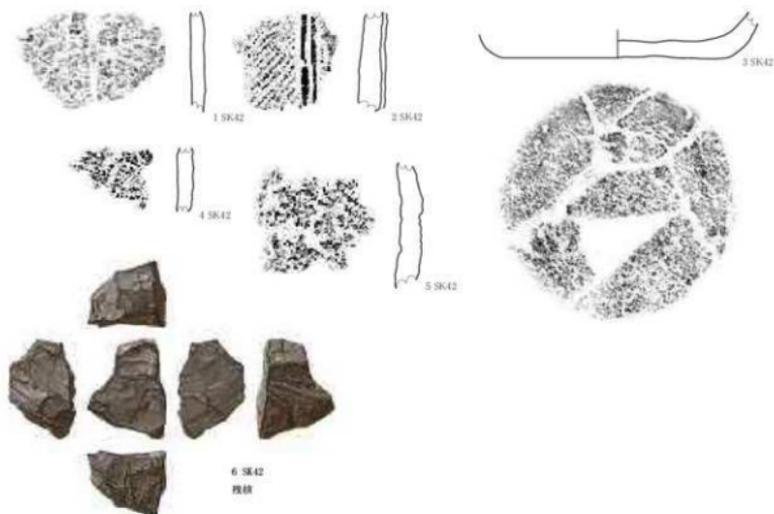


第91図 SK56・63・64・65・66土坑

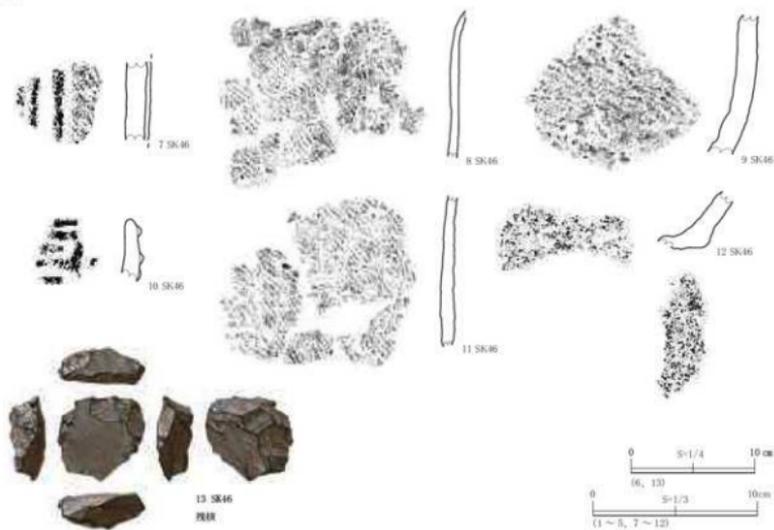


第92図 SK02・12・13・19・26・52・64土坑出土遺物

SK42



SK46



第93図 SK42・46 土坑出土遺物

【遺物】(第92図4・5、図版21)

底面直上から縄文土器片数点が出土し、2点図示した。第92図4は口縁部に横位の隆帯を貼付し、その上に沈線が引かれる。Ⅲ群D1類に該当する。第92図5は渦巻文の破片で、Ⅲ群A1類に該当すると思われる。

【所見】SI28の1層より掘り込まれることと、出土土器から縄文中期中葉と考えられる。

SK53土坑(第90図)

【位置・検出状況等】SI28の1層直下で黒褐色ブランを確認し、精査の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SI28埋土を掘り込んでいるため本遺構が新しい。

【規模・形態】長軸0.86m、短軸0.50m、主軸方位はN-4°-Eで不整楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.1mである。南壁は垂直気味に外傾しながら立ち上がる。それ以外は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。底面には3か所の掘り込みを有するが、いずれも浅く、SI28床面までは到達していない。南側の掘り込みは長軸0.21m、短軸0.18mである。北側に2か所確認された掘り込みは重複しており、西側の方が新しい。西側の掘り込みは長軸0.16m、短軸0.13m、東側の掘り込みは長軸0.22m、短軸0.14mである。

【埋土】単層である。炭化物を多く含むことから人為堆積と考えられる。

【遺物】口唇上端に沈線が施された土器片が1点出土した。

【所見】SI28の1層から掘り込まれることから縄文中期中葉と考えられる。

SK56土坑(第91図、図版12)

【位置・検出状況等】LR42区に位置する。Ⅶb層で確認し、断面等の観察結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南にSI28が位置する。

【規模・形態】長軸0.57m、短軸0.45m、主軸方位はN-16°-Eの楕円形である。確認面から底面までの深さは0.11mである。底面は平坦で、壁は一部で垂直気味のほかに外傾しながら立ち上がる。

【埋土】V層由来土による単層で混入物は認められなかった。自然堆積と考えられる。

【所見】出土遺物が出土しなかったため詳細な所属時期は不明であるが、V層が自然堆積していることから縄文時代中期以前の遺構と考えられる。

SK63土坑(第91図、図版12)

【位置・検出状況等】LS43区に位置する。Ⅶc層で確認した。Ⅶc層掘削中に巨大な礫が出土し、礫周辺を精査したところ、円形のブランを検出し、掘り下げによる断面等の観察結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】SI29の下で確認した。本遺構の方が古い。

【規模・形態】長軸1.38m、短軸1.32m、主軸方位はN-5°-Wの西側が大きく張り出す円形である。確認面から底面までの深さは0.45mである。底面には凹凸があり、東側は大きく窪む。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

【埋土】1～7層に分けた。3層と7層の層境には礫が多く認められる。埋土の中央に巨礫が含まれている。礫の下にある7層は礫の投入前に堆積したと考えられる。1～3、5・6層は、褐～にぶい黄褐色土で1層のみ炭化物を含んでいる。4層は暗褐色土で混入物は認められない。1～6層は自然堆積と考えられる。7層はⅧ層(地山)の再堆積と考えられる。

【遺物】巨礫のみ出土した。巨礫は縦50cm、横40cm、高さ30cm、重量80kgの珪質頁岩である。全体的に節理を多く含み、ラミナの発達も著しい。人為的な剥離の痕跡はなく、河川でローリングした際に生じたと推定される破砕痕跡が認められる。破砕痕跡の根拠は、剥離面に明確な打点がなく、剥離に規則性がないことが挙げられる。また、剥離面に自然面と同様の乱反射する光沢が見られることから、

河川で強い衝撃によって剥離し、その後、ローリングによって円磨された結果であると考えられる。

【所見】土器の出土がないため詳細な所属時期は不明である。しかし検出層位から縄文時代前期に所属すると考えられる。当初土壌墓を想定していたが、貯蔵目的の可能性も考えられる。

SK64土坑 (第91図、図版12)

【位置・検出状況等】MA46区に位置する。IX層で確認し断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】ST62下で検出した。本遺構が古い。

【規模・形態】長軸0.73m、短軸0.66m、主軸方位はN-32°-Wの南西にやや張り出す楕円形である。確認面から床面までの深さは0.24mである。底面は平坦で、壁はやや垂直気味に立ち上がる。

【埋土】単層である。炭化物粒をわずかに含む暗褐色土である。人為堆積か自然堆積かは不明である。

【遺物】(第92図17～19、図版22)

埋土から土器、石器が少量出土した。土器は、摩耗しており文様が判然としないため、図示しなかった。胎土には繊維が含まれているため縄文時代前期の所産である。

石器は両面調整石器(第92図1)、スクレイパー(第92図2)、敲石・磨石類(第92図3)、RF3点が出土した。

【所見】出土遺物と出土層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。

SK65土坑 (第91図、図版12)

【位置・検出状況等】LS43・44区に位置する。IX～XI層で、礫を中心に炭化物を含む褐色土の広がり確認し、掘り下げによる断面等の観察結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。周辺に主な遺構はない。

【規模・形態】トレンチにより一部損失する。長軸1.20m、短軸1.09m、主軸方位はN-18°-Wの楕円形である。である。確認面から底面までの深さは0.08mである。底面には凹凸があり、中心部がやや窪む。底面の北西側には7cmの窪みがある。壁は外傾しながら立ち上がる。

【埋土】炭化物を含む褐色土の単層である。人為堆積か自然堆積かは不明である。

【所見】遺物は出土しなかったが、検出層位から縄文時代早期～前期に所属すると考えられる。土坑の中央にある礫は地山であるXI層にめり込んでいるため本遺構には伴わないと判断した。

SK66土坑 (第91図)

【位置・検出状況】LN51区SX67プラン内南西側Vc層で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】SX67のP5・6・7と重複し、本遺構が古い。SN47が北に近接する。

【規模・形態】長軸0.85m、短軸0.57mの隅丸方形である。主軸方位はN-80°-Wである。確認面から底面までの深さは0.11mである。

【埋土】記録できなかったが、埋土はSX67P5～7に切られている状況を確認した。

【遺物】埋土から石器(UF)1点が出土した。

【所見】検出面から縄文中期中葉と考えられる。

(4) 土器埋設遺構

SR16土器埋設遺構 (第94図、図版12)

【位置・検出状況】LQ43区に位置する。IVb～IVc層中で、土器口縁部とそれを取り囲む円形の暗褐色土プランを確認した。半裁により、掘方と正位に据えられた土器を確認し土器埋設遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。SI28が南側に位置する。

【規模・形態】掘方は、長軸0.67m、短軸0.67m、主軸方位N-68°-Eの北東-南西に僅かに長い楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26mである。底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

東側の掘り込み下端は、調査の段階で掘り抜いてしまい確認できなかった。

【埋土】単層である。5 cm大の礫をわずかに含む褐色粘土質シルトである。土器内・外とも同一の堆積土である。埋土中には炭化物は認められなかった。

【出土遺物】（第97図1、図版22）

埋土中より、土器、石器が出土した。埋設土器は、口縁部から胴部上半部まで残存している。胴部側の割れ口は摩滅しており、据える段階で打ち欠いたものと考えられる。口縁部がやや内傾し、頸部に2条の隆帯と8単位の橋状把手が貼付される。そのうち4つの把手が穿孔され、されるものは側面に、されないものは上面に沈線で渦巻文が描かれる。橋状把手からは縦位区画文と思われる2条の垂下隆帯が確認できる。形態、文様から大木8b式期に東北地方北部で見られる壺形土器と考えられる。また、口縁部の外面に赤色顔料の付着した痕跡が確認できる。

石器はRF3点、UF3点、剥片3点が出土した。

【所見】埋設土器の特徴から大木8b式と考えられる。土器に赤色顔料が付着していたことから、土坑墓の可能性が考えられる。

（5）焼土遺構

SN06焼土遺構（第94図、図版12）

【位置・検出状況】LR47区に位置する。IVa層上面で焼土や炭化物粒を含む褐色土の広がりを確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南西方向にSKP1010・1011・1012・1014が位置する。

【規模・形態】長径0.5m、短径0.28mの中央部分が窪む不整楕円形を呈する。南北端に被熱痕が確認できた。主軸方位はN-32°-Eである。

【断面観察】炭化物、焼土粒を含む単層である。底面が被熱で1cmほど赤変している。また埋土中に焼土ブロックを含んでいる。

【所見】窪地で火を焚いた跡と判断する。検出層位から縄文時代中期中葉以降の遺構と考えられる。

SN20焼土遺構（第94図、図版12）

【位置・検出状況等】LT45区に位置する。IVb層上面で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南西方向の直線上にSN21・44が位置する。

【規模・形態】長軸0.92m、短軸0.73mの東西に長い楕円形である。主軸方位はN-75°-Eである。

【断面観察】被熱度合いにより、1～3層に分けた。被熱赤変化の深度は0.13mである。

【出土遺物】遺構範囲内から、II群土器と考えられる土器片2点と剥片が2点出土した。

【所見】検出面から縄文中期中葉～末葉の遺構と考えられる。本遺構の一部とSN21の一部を検出した段階で、竪穴建物跡の可能性を考えたが、立ち上がりは確認されず、周囲にビットが企画的に並ぶ様子も確認されなかった。

SN21焼土遺構（第94図、図版13）

【位置・検出状況等】MA44区に位置する。IVc層上面で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。北東のSN20と南西のSN40の間に本遺構が位置する。

【規模・形態】長軸1.86m、短軸0.7mの不整楕円形を呈する。主軸方位N-77°-Wである。

【断面観察】被熱の度合いにより、1～3層に分けた。被熱赤変化の深度は0.11mである。

【出土遺物】遺構範囲内からII群土器と考えられる土器片5点とRFが1点出土した。

【所見】検出面から縄文中期中葉から末葉の遺構と考えられる。

SN27焼土遺構（第94図、図版13）

【位置・検出状況等】LR48区に位置する。IVc層上で焼土粒を含む暗褐色土の楕円状範囲を確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺に遺構はない。

【規模・形態】長軸0.52m、短軸0.35mの不整楕円形を呈する。主軸方位はN-23°-Eである。

【断面観察】被熱度合いにより1～3層に分けた。被熱赤変化の深度は0.06mである。

【所見】遺物は出土しなかったが、検出面から縄文時代中期の遺構と考えられる。

SN30焼土遺構（第95図、図版13）

【位置・検出状況等】LP43区に位置する。IVc層上面で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。北西にSK36が位置する。

【規模・形態】東側の一部は調査区外へ広がるが、長軸0.58m、短軸0.46m、楕円形を呈するものと推測される。主軸方位は特定できない。

【断面観察】被熱度合いにより1～2層に分けた。1層に比べ、2層の方が炭化物を多く含む。被熱赤変化の深度は0.09mである。東側に行くにつれ焼土は厚く形成されており、本遺構の中心部は調査区外に存在する可能性が高い。

【所見】遺物は出土しなかったが、検出面から縄文中期中葉から末葉の遺構と考えられる。

SN32焼土遺構（第95図、図版13）

【位置・検出状況】LQ44区に位置する。IVc層上面で極暗褐色焼土の不整形プランを確認した。

【規模・形態】長軸1.80m、短軸0.86m、東西に長い不整形を呈する。主軸方位はN-81°-Wである。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。東にはSN30、北にSK36が位置する。

【断面観察】被熱度合いにより1～2層に分けた。2層上半部にシルトが比較的厚く堆積する。被熱赤変化の深度は0.22mである。

【出土遺物】橙色を呈する土器片2点、RF1点、剥片1点が出土した。

【所見】窪地もしくは不整形の掘り込みの埋土上に形成された焼土と考えられる。遺物は出土しなかったが、検出面から縄文中期中葉から末葉の遺構と考えられる。

SN44焼土遺構（第95図、図版13）

【位置・検出状況】MA43・44区に位置する。IVc層上面を確認した。北側は一部攪乱を受けている。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。本遺構北東直線上にSN20・21が位置する。

【規模・形態】長軸0.59m、短軸0.49mの不整形を呈する。主軸方位は特定できない。

【断面観察】1～2層に分けた。被熱の様子から1層に火種があったものと思われ、その周囲が被熱し、炭化物が堆積した結果、2層が形成されたと考えられる。被熱赤変化の深度は、0.2mである。

【所見】遺物は出土しなかったが、検出面から縄文中期中葉～末葉の遺構と考えられる。

SN47焼土遺構（第95図、図版13）

【位置・検出状況】LN51区に位置する。IVc層上で検出した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南にSK66が位置する。

【規模・形態】長軸0.46m、短軸0.3mの南北方向に長い楕円形を呈する。主軸方位はN-2°-Wである。被熱赤変化の深度は0.06mである。

【断面観察】周辺には焼土の掻き出しによって堆積した暗褐色土が確認できた。

【出土遺物】埋土から、RF2点、UF5点、剥片3点が出土した。

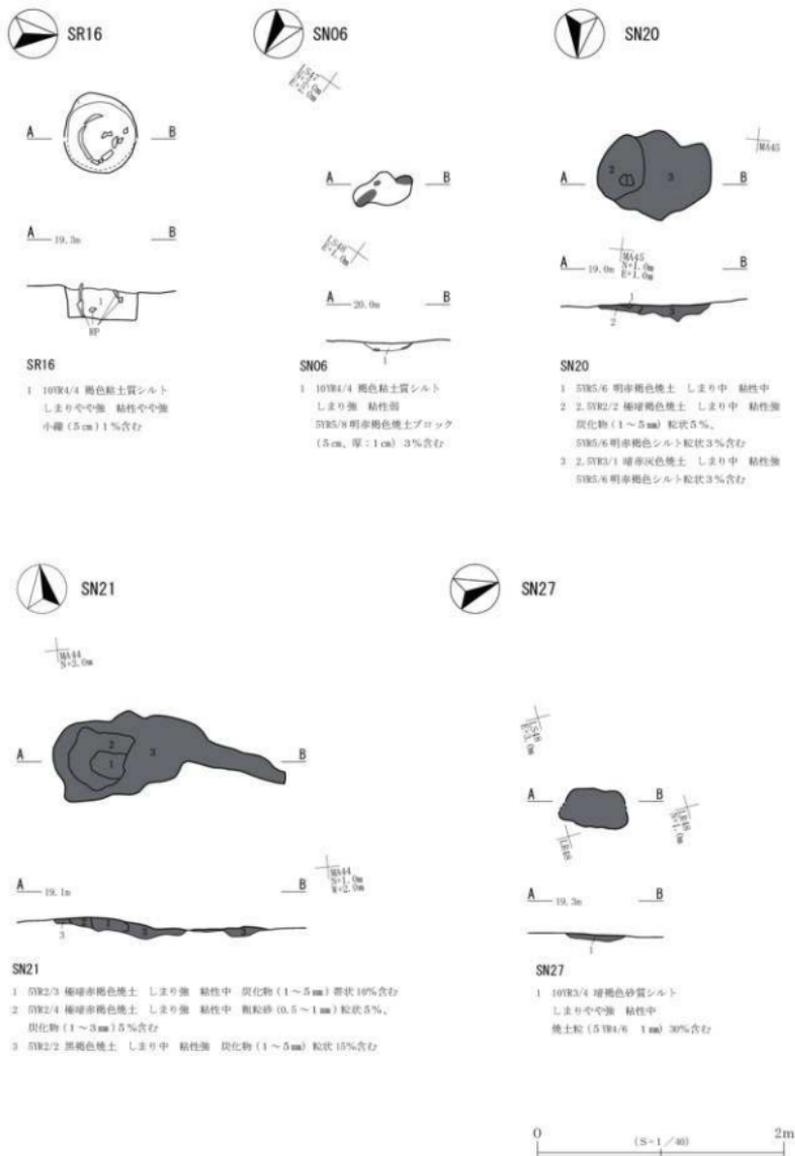
【所見】検出面から縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。

SN48焼土遺構（第95図、図版14）

【位置・検出状況等】LM50区の調査区北東端に位置する。IVc層上面で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺遺構はない。

第3章 調査の方法と成果



第 94 図 SR16 土器埋設遺構、SN06・20・21・27 焼土遺構

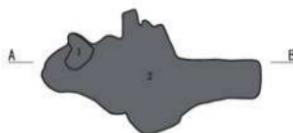


1cm
=1.0m



SN30

1. 7.0R2/1 赤褐色焼土 しまり中 粘性中 焼土含む
2. 7.0R1.7/1 赤褐色焼土 しまり中 粘性中 炭化物(0.5mm)粒状5%含む



SN32

1. 7.0R2/2 緑褐色焼土 しまり中 粘性中 粗粒砂(0.5~1mm)粒状5%含む
2. 5YR2/3 緑褐色焼土 しまり中 粘性中 5YR3/6 緑褐色シルト混状10%、炭化物(1~2mm)10%含む



SN44

1. 5YR3/6 緑褐色焼土 しまり中 粘性中 含む
2. 5YR2/2 緑褐色焼土 しまり中 粘性中 炭化物(5~10mm)粒状5%含む



SN48

1. 7.0R4/3 褐色シルト しまりやや強 粘性中 炭化物(3mm)5%含む



SN47

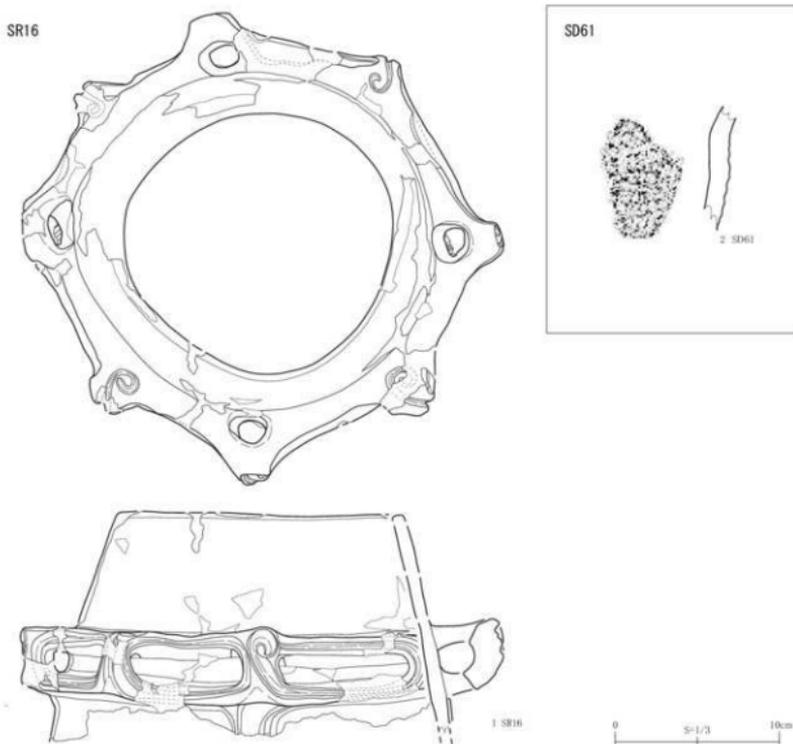
1. 5YR4/6 赤褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 炭化物ブロック(1cm)1%含む
2. 10YR3/3 増褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中 炭化物(5mm)3%含む
3. 10YR3/3 増褐色粘土質シルト しまり強 粘性中 炭化物粒(3mm)5%含む

第95図 SN30・32・44・47・48 焼土遺構

第3章 調査の方法と成果



第 96 図 SN55・58・59 焼土遺構、SD61 溝状遺構



第97図 SR16 土器埋設遺構・SD61 溝状遺構出土遺物

【規模・形態】遺構の東側が調査区外に位置するため、本来の形状は不明である。確認できた範囲では長軸0.7m、短軸0.76mの北西側が大きく張り出す不整形を呈する。主軸方位は特定できない。

【断面観察】被熱赤変下の深度は0.08mである。

【出土遺物】口縁部土器片1点が出土した。

【所見】検出面から縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。

SN55焼土遺構（第96図、図版14）

【位置・検出状況等】LP・LQ43区に位置する。VIIb層で焼土を含む褐色土の広がりを確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。南西にSI28が近接する。

【規模・形態】長軸0.48m、短軸0.38m、の三角形形状を呈する。主軸方位は特定できない。底面はほぼ平坦であるが、西側に段がつく。壁は緩やかに立ち上がる。底面に被熱痕跡は確認できなかった。

【断面観察】明赤褐色ブロックと炭化物を含む褐色土の単層である。

【所見】遺物の出土がないが、検出層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。また、被熱土がブロック状であることから、窪地等に再堆積したものと考えられる。

SN58焼土遺構 (第96図、図版14)

【位置・検出状況】LQ47区に位置する。VIIc層で炭化物と焼土を含む黒褐色土の広がりを確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺遺構はない。

【規模・形態】長軸0.44m、短軸0.12mの半円形である。西側は削平されているが、本来は円形～楕円形と考えられる。主軸方位は特定できない。確認面から底面までの深さは0.05mである。

【断面観察】1～2層に分けた。1層は炭化物を含む黒褐色土、2層は炭化物を含むにぶい黄褐色土である。自然堆積と考えられる。

【所見】埋土中には炭化物が含まれているが、明確な焼土が少ないため、窪地等で火を焚いた跡と推測される。使用后、自然に埋没したと考えられる。遺物は出土しなかったが、検出層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。

SN59焼土遺構 (第96図、図版14)

【位置・検出状況】LQ41区に位置する。VIIc層で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】SI28下で検出した。本遺構が古い。

【規模・形態】長軸0.45m、短軸0.30m、西側中央がくぼむ円形である。確認面から底面までの深さは、0.08mである。主軸方位は特定できない。

【断面観察】1～2層に分けた。1層はにぶい黄褐色砂質シルトである。2層は黒褐色ブロックや焼土、炭化物が微量含まれた褐色粘土質シルトである。自然堆積と考えられる。

【所見】窪地に焼土が流れ込んだものと考えられる。検出層位から縄文時代前期の遺構と考えられる。

(6) 溝状遺構

SD61溝状遺構 (第96図、図版14)

【位置・検出状況】LS49、LT48・49区に位置する。IX層で確認した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構、周辺遺構はない。

【規模・形態】北側は攪乱により削平され、また南端は不明瞭である。長軸2.65m、短軸0.5m、主軸方位はN-34°-Eである。確認面から底面までの深さは0.05mである。底面は平坦で東から西へ下傾する。壁は外傾しながら立ち上がる。

【埋土】地山由来の灰白色粒を含むにぶい黄褐色土の単層で、人為堆積か自然堆積かは不明である。

【遺物】(第97図2、図版22)

埋土から微細な土器片7点と石器が出土した。土器には頸～胴部の縦維含む複節縄文が施文された土器片が含まれる(第97図2)。頸部は僅かに外傾する。

石器は、RF 2点、UF 3点、剥片20点が出土した。

【所見】確認面からの掘り込みが浅く、南端は確認できなかった。出土遺物と検出層位より縄文時代前期の遺構と考えられる。

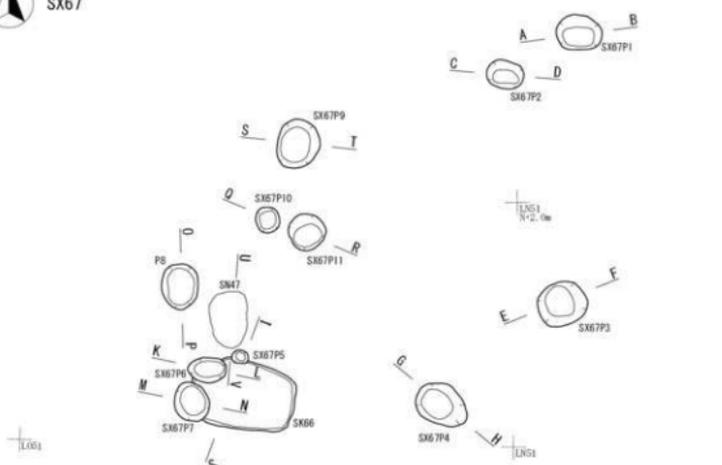
(7) 性格不明遺構

SX67性格不明遺構 (第98図)

【位置・検出状況】LN51区に位置する。IVc層上で検出した焼土遺構周辺で柱穴群を確認した。

【重複遺構・周辺遺構】SK66とP5・6・7が重複し、本遺構柱穴が新しい。周辺には同じ層で確認されたSN47が遺構範囲内、SN48が東側、SKI41が南側、SKI37が西側に位置している。

【規模・形態】11基のビット群のまとまりを遺構範囲とした。主軸方位はN-46°-Eである。遺構範囲長軸方向のP1-P7間は4.35m、短軸方向のP3-P9間は2.5mの間隔がある。主柱穴と思われる柱穴6基は、直径0.3～0.4mの円～楕円形を呈しており、確認面から底面までの深さは0.2m前後



A 19.7m B



SX67P1

1 10YR4/4 褐色砂質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 5%含む

C 19.7m D



SX67P2

1 10YR4/4 褐色砂質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 5%含む

E 19.7m F



SX67P3

1 10YR4/4 褐色砂質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 5%含む

G 19.7m H



SX67P4

1 10YR4/4 褐色粘土質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 5%含む



SX67P6

1 10YR4/4 褐色砂質シルト
しまり強 粘性中
炭化物 (3mm) 1%
灰白色ブロック 10%含む



SX67P7

1 10YR4/4 褐色砂質シルト
しまり強 粘性中
炭化物 (3mm) 1%
灰白色ブロック 10%含む



SX67P8

1 10YR4/4 褐色粘土質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 1%含む



SX67P9

1 10YR4/4 褐色粘土質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 5%含む



Q 19.7m R

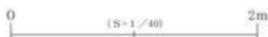
SX67P10

1 10YR4/4 褐色粘土質シルト
しまり強 粘性中
炭化物粒 (3mm) 1%含む



SX67P11

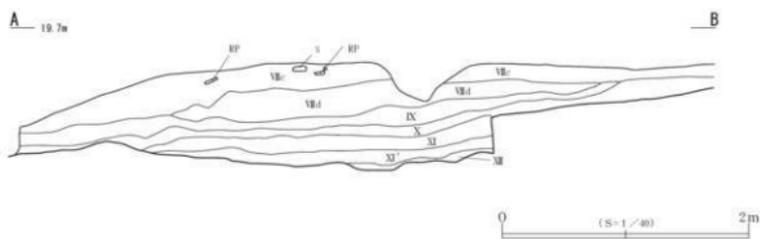
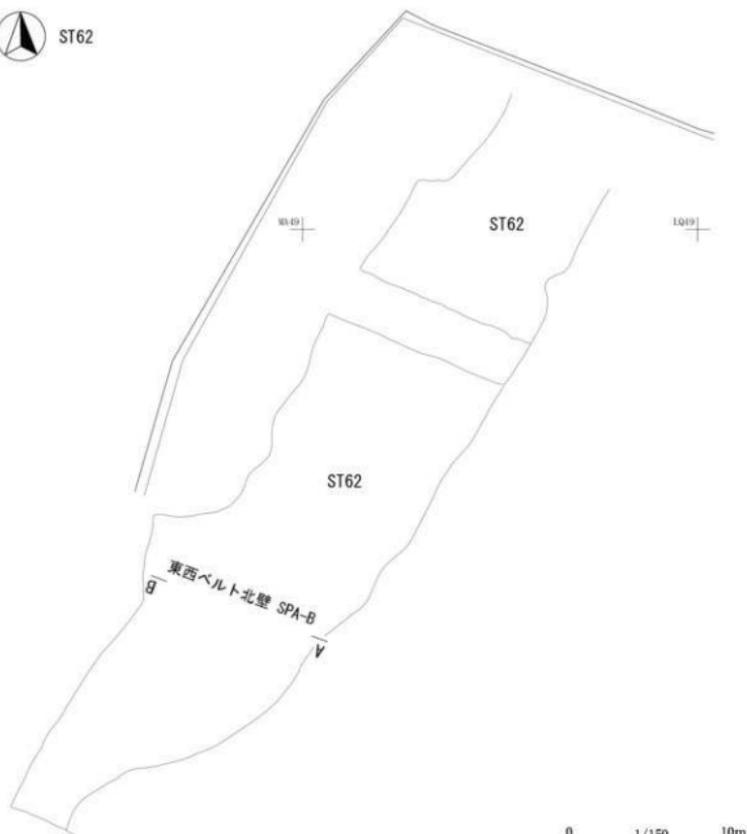
1 10YR4/4 褐色粘土質シルト
しまり強 粘性中
遺物。炭化物粒 (3mm) 1%含む



第98図 SX67 性格不明遺構



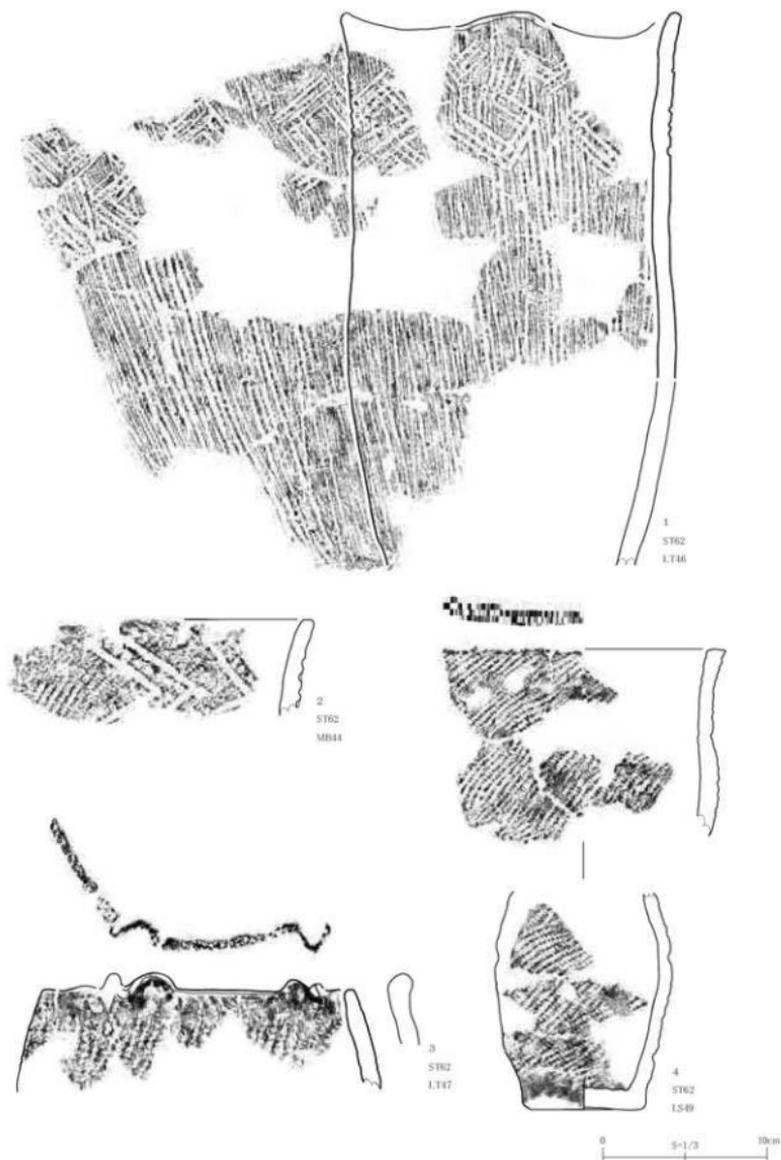
ST62



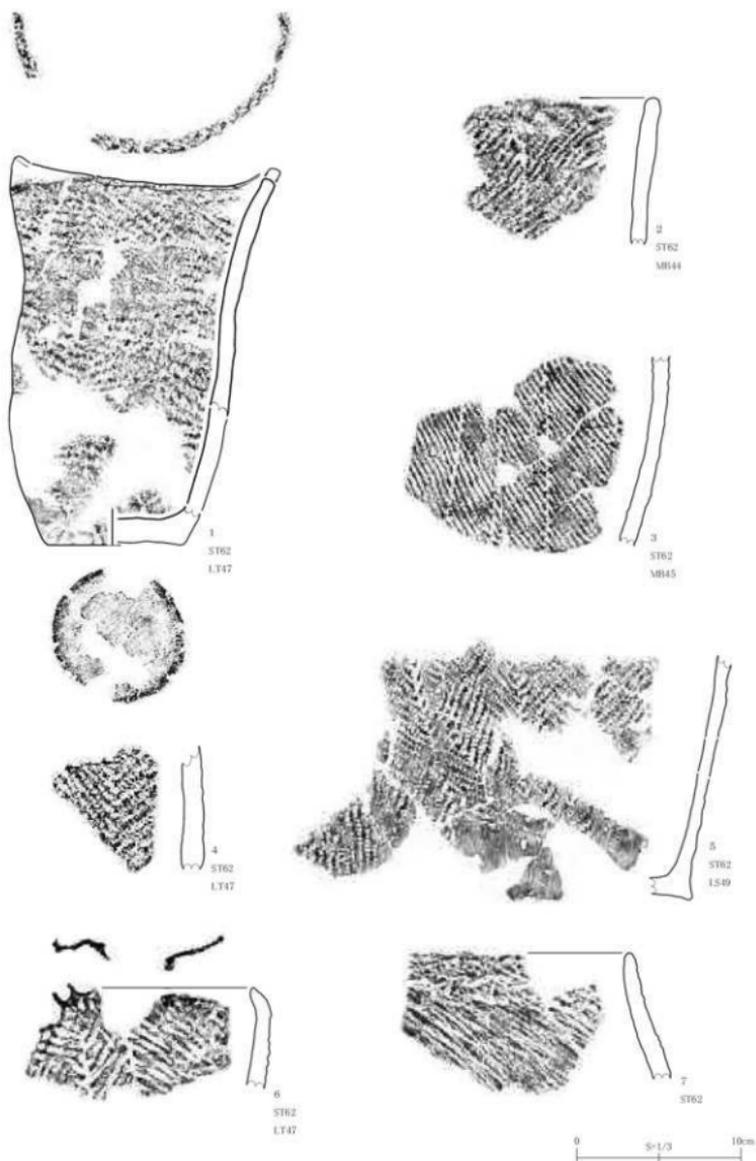
第99図 ST62 土器集中範囲



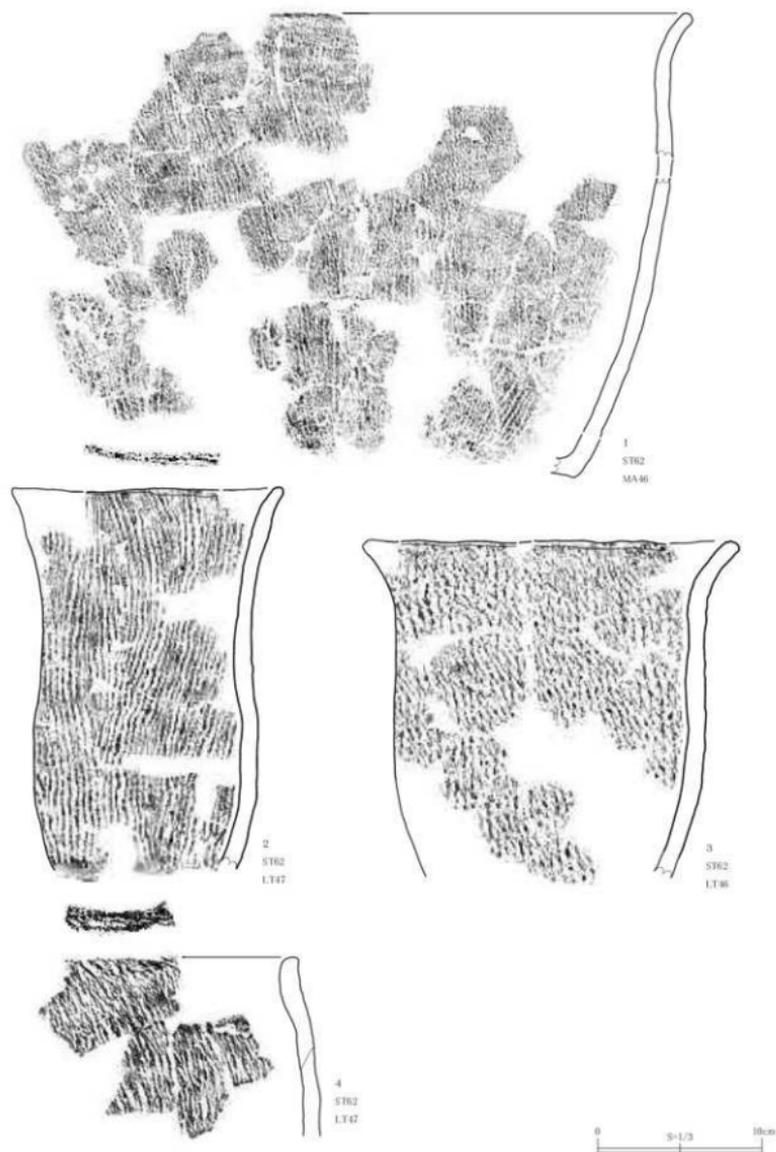
第100図 ST62 土器集中範囲出土遺物(1)



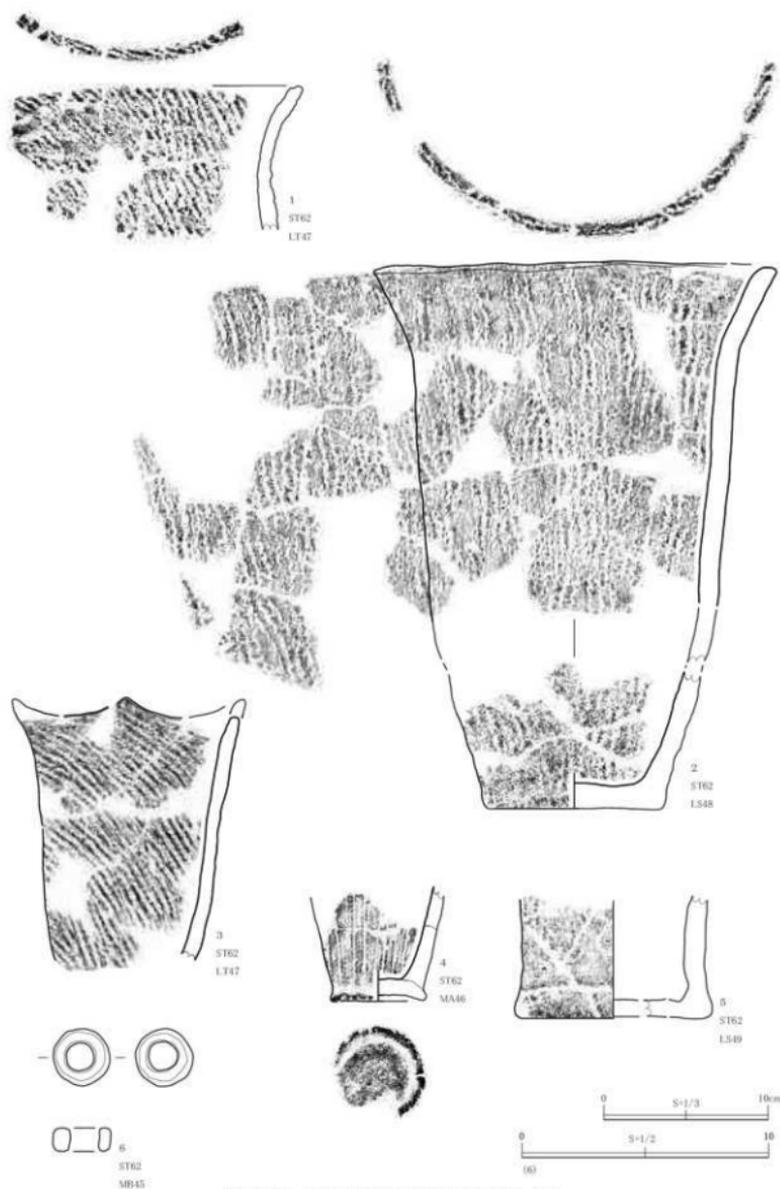
第101図 ST62土器集中範囲出土遺物(2)



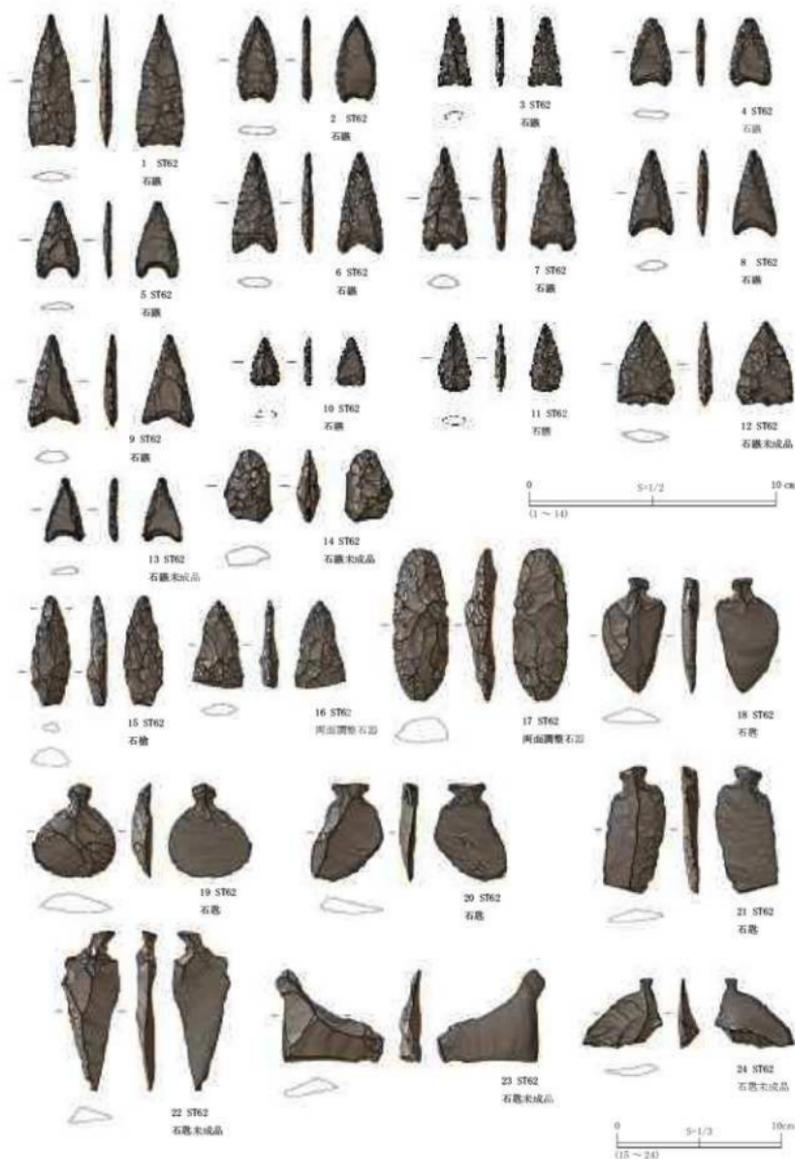
第102図 ST62 土器集中範囲出土遺物(3)



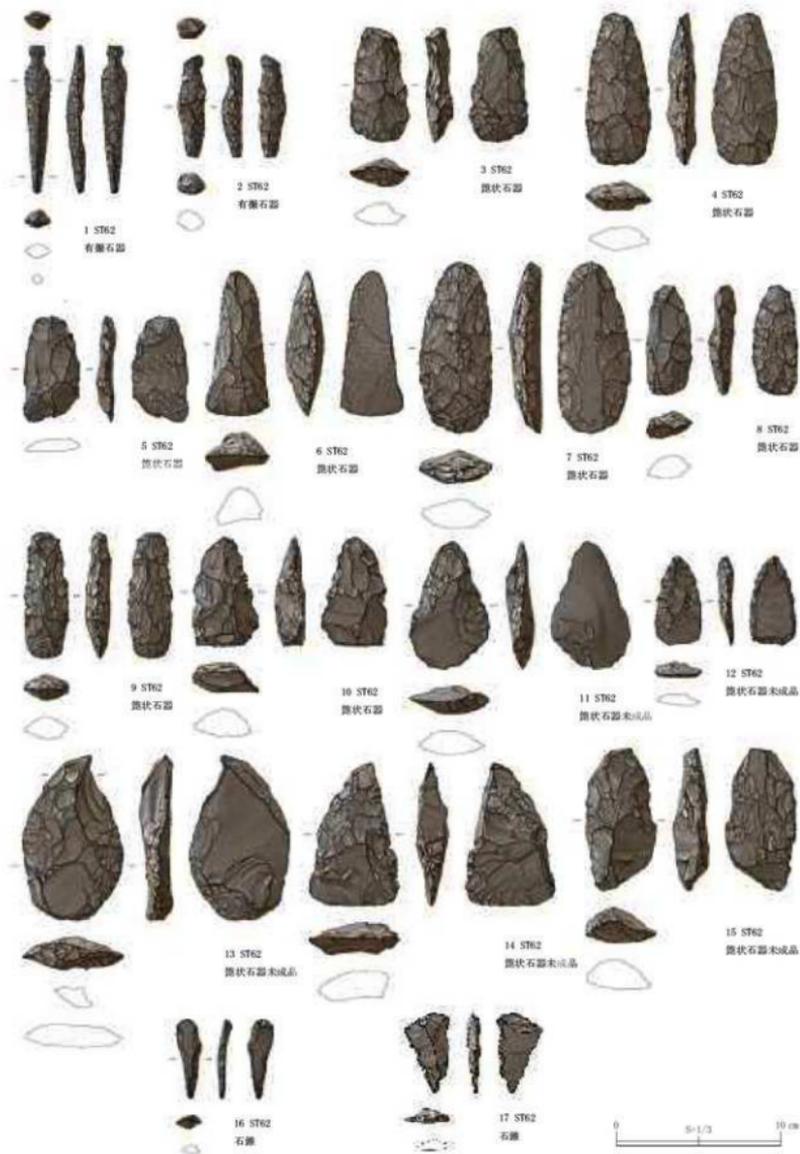
第103図 ST62 土器集中範囲出土遺物(4)



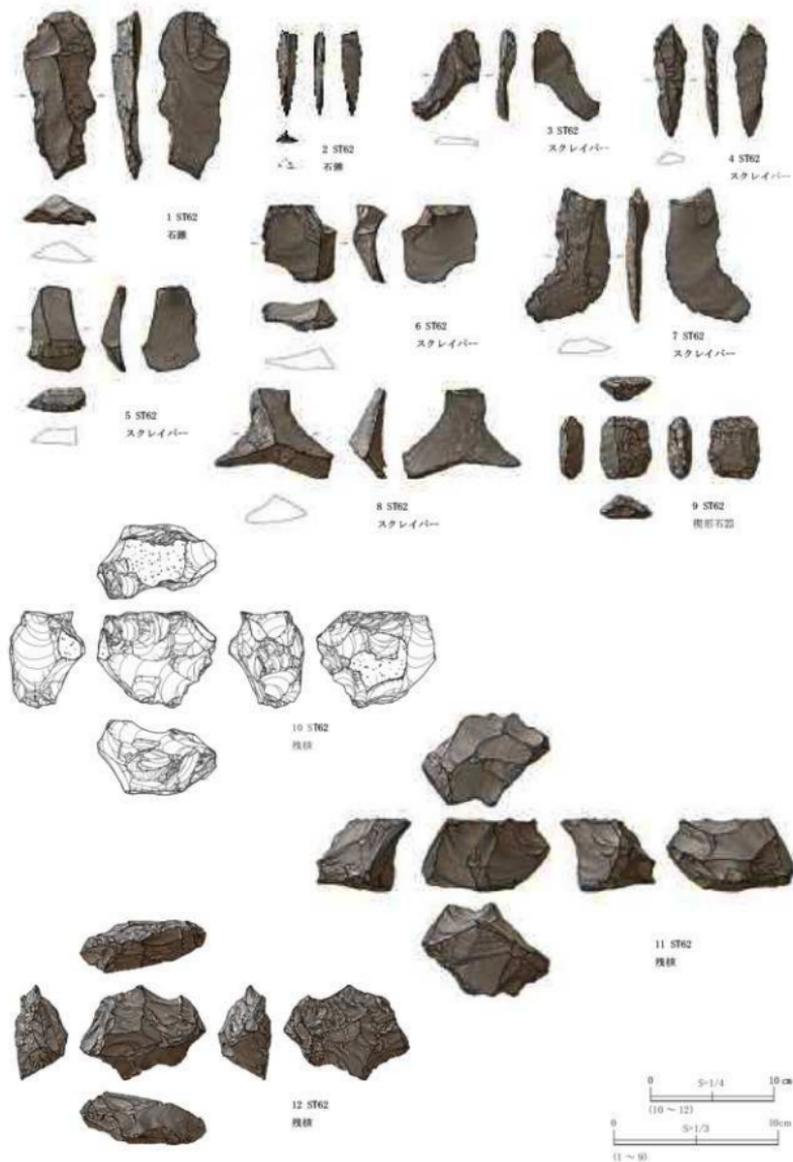
第104図 ST62土器集中範囲出土遺物(5)



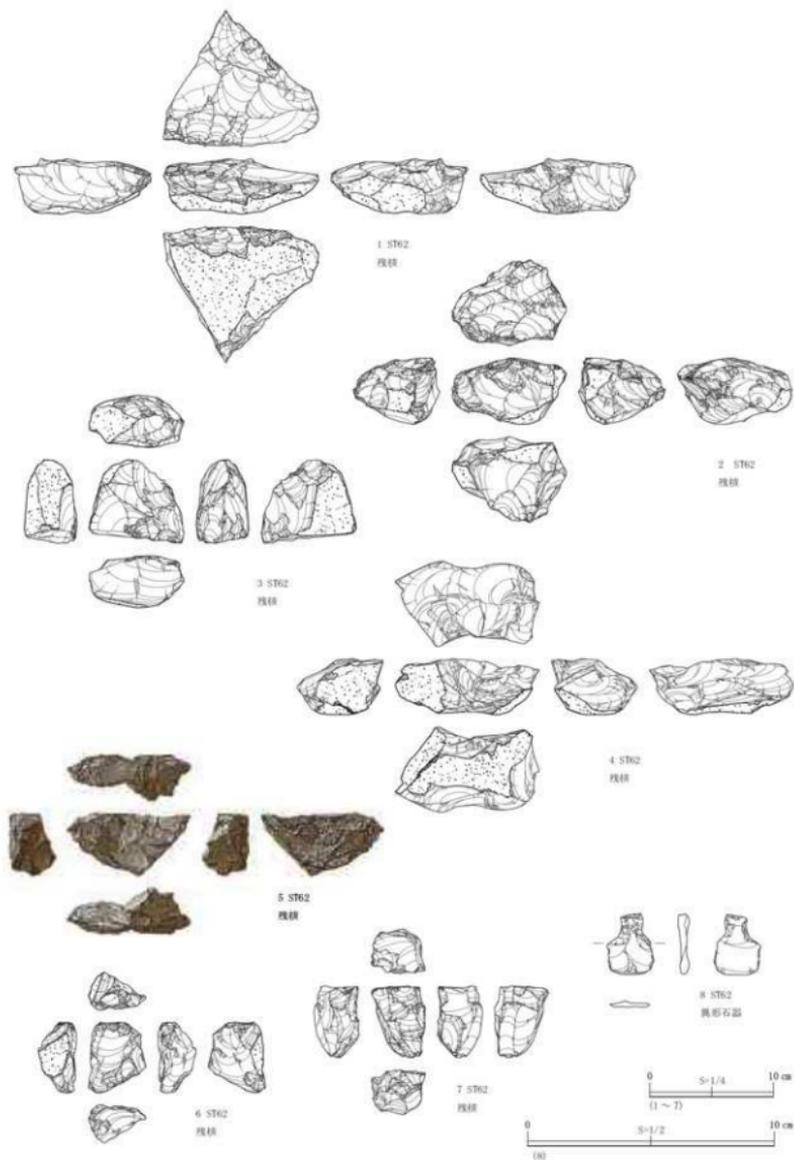
第105図 ST62 土器集中範囲出土遺物(6)



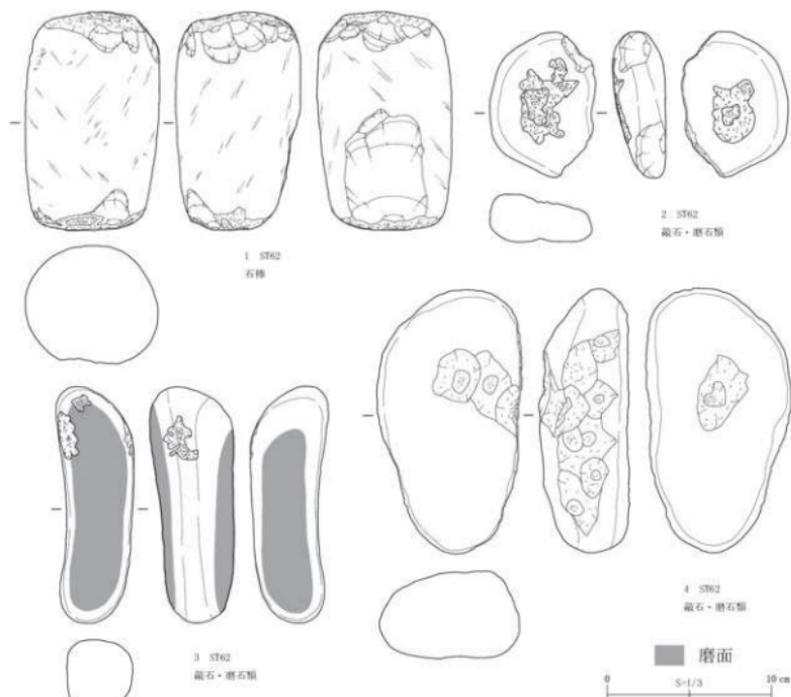
第106図 ST62土器集中範囲出土遺物(7)



第107図 ST62土器集中範囲出土遺物(8)



第 108 図 ST62 土器集中範囲出土遺物 (9)



第109図 ST62土器集中範囲出土遺物(10)

が多い。その中では南端に当たるP7が0.42mと深い。柱穴の壁はいずれも垂直気味に立ち上がる。

【埋土】柱穴の埋土は褐色粘土質シルトを主体とし、炭化物を含む。南側ではさらに灰白色炉ブロックが含まれている。

【出土遺物】P7から縄文土器小片が2点出土した。

【所見】P1(P2)、P3、P4、P7(P6)、P8、P9で亀甲形に配置されるようにも受け取れる。長軸方向を桁方向と考えた場合、両端に位置するP6とP7、P1とP2は、近接するため柱の更新に伴う可能性がある。遺構範囲内にあるSN47は、柱穴との距離が近すぎるため、同時期と考えるには問題がある無理がある。本遺構は何らかの建物跡を構成していた可能性が高い。検出面から縄文時代中期中葉と思われる。

(8) 土器集中範囲

ST62土器集中範囲(第99図、図版15)

【位置・検出状況等】令和元年度調査中に調査区西側の標高が高い部分で縄文時代前期の土器を中心とする高密度の遺物の広がりを確認した。その後の精査により斜面地に形成された捨て場と判断した。

【規模・形態】南北26m、東西5.5m、南北に長く、調査区中央を南北に走る沢状地形に向かって東に下る斜面上部のVIIc層に形成された捨て場である。南端は旧道工事の際に削平されたと考えられる。

【重複遺構・周辺遺構】本遺構上にSN20・21・44が位置する。本遺構が古い。

【遺物】(第100～109図、図版23～27)

土器や石器などが出土している。土器は同一個体がまとまって出土している。ほとんどの土器に繊維を含み、縄文時代前期に所属すると考えられる。僅かに縄文時代中期の土器が出土しているが、Ⅱc層中に掘り込まれた遺構などに含まれる可能性が考えられる。

土器は18ℓコンテナ16箱分出土し、Ⅱ群が主体である。接合状況が良好なもの、各分類の文様要素を有するものを選定し、図示した。

第97図1はⅡ群A類に該当する。底部の側面と底面に横位の絡条体圧痕文を数条巡らす。黄褐色を呈し、繊維を少量含む砂質胎土である。

同図2～4はⅡ群B類に該当する。半裁竹管による数条の連続刺突文が施される。同図2は底部の側面と底面に合わせて3条の連続刺突文が施され、底面の中心に十字の連続刺突文が施される。同図3・4は地文施文後、半裁竹管による数条の平行沈線間に半裁竹管による連続刺突文が充填される。

同図5・6はⅡ群E2類、同図7はⅡ群E4類に該当する。同図5は横位の隆帯を貼付し、棒状工具による刺突文を付加する。同図6は縦位に連続する菱形の隆帯とその内部に粘土を貼付し、それぞれに棒状工具による刺突文を付加する。同時期と考えられる他の土器とは異なって褐色～黄褐色を呈し、繊維を少量含む砂質胎土である。同図7は縦位の燃糸文を地文とし、口縁部に縦位の短隆帯を貼付する。隆帯には地文を付加する。

同図8・9はⅡ群F1類、同図10、第98図1はⅡ群F2類に該当する。第97図8は左右対照の縦位の鋸歯文やカメレオン尾状の沈線文が描かれる。同図9は文様の全体像は判然としなが、曲線的な沈線文が描かれる。同図10は単節縄文を地文に、口縁部から複数の沈線を垂下させる。第98図1は縦位の条線上に3～4本を1単位とする短沈線で幾何学文を口縁部に描く。ST62出土のⅡ群F類のほとんどが繊維を多く含み、内面のミガキ調整が顕著である。

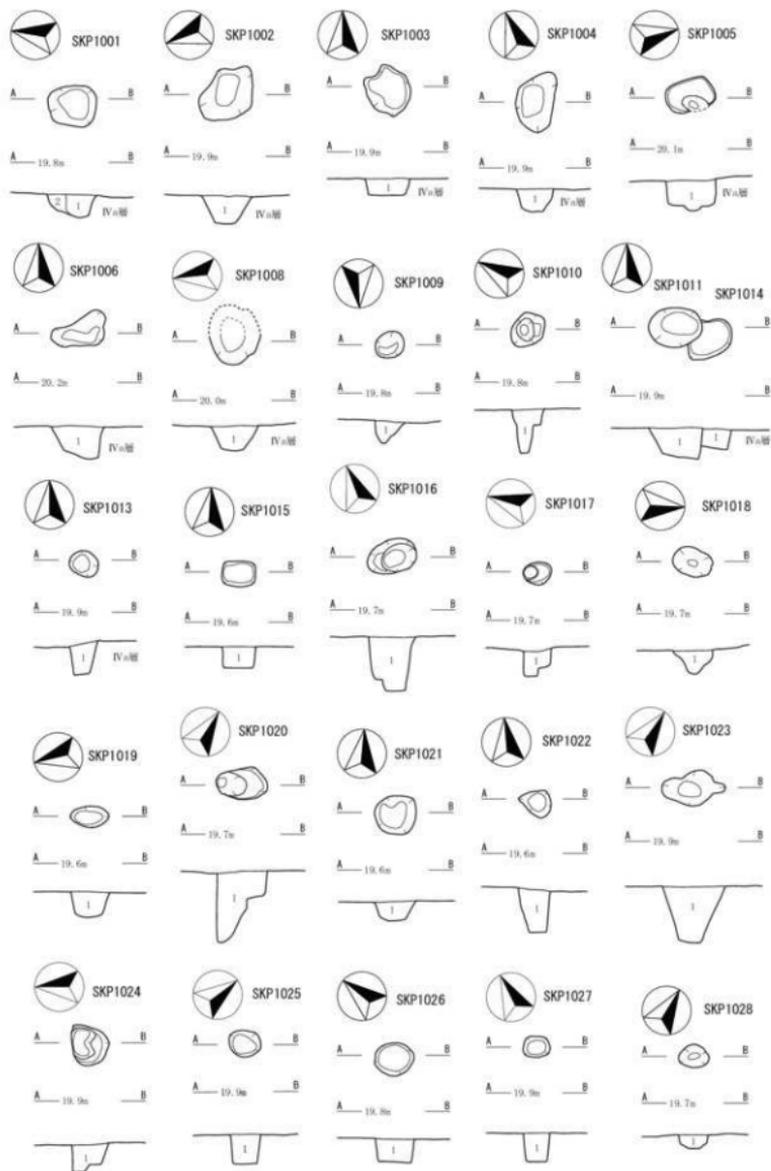
同図2はⅡ群G類に該当する。縦位単節縄文を地文とし、屈曲する平行沈線間に刺突文を充填する。

同図3・4、第99図1～3はⅡ群H4類、同図4～6はⅡ群H5類、同図7、第100図、第101図1～3はⅡ群H6類に該当する。第98図3は口唇部へ隆帯を貼付し、隆帯が波状になるよう内外から指頭押圧を加える。同図4は口縁部～胴部片と頸部～底部片である。第99図1は2単位の緩やかな波状口縁が認められる。同図3は縦位の結束第1種単節斜縄文を地文とする。同図4～6は縦位の結束第1種羽状縄文を地文とする。同図6は口唇部へ内外から指頭押圧が加えられている。同図7は斜位の燃糸文を地文とし、口縁部に横位の不整燃糸文が施される。第100図、第101図1～3は縦位または斜位の燃糸文を地文とする。

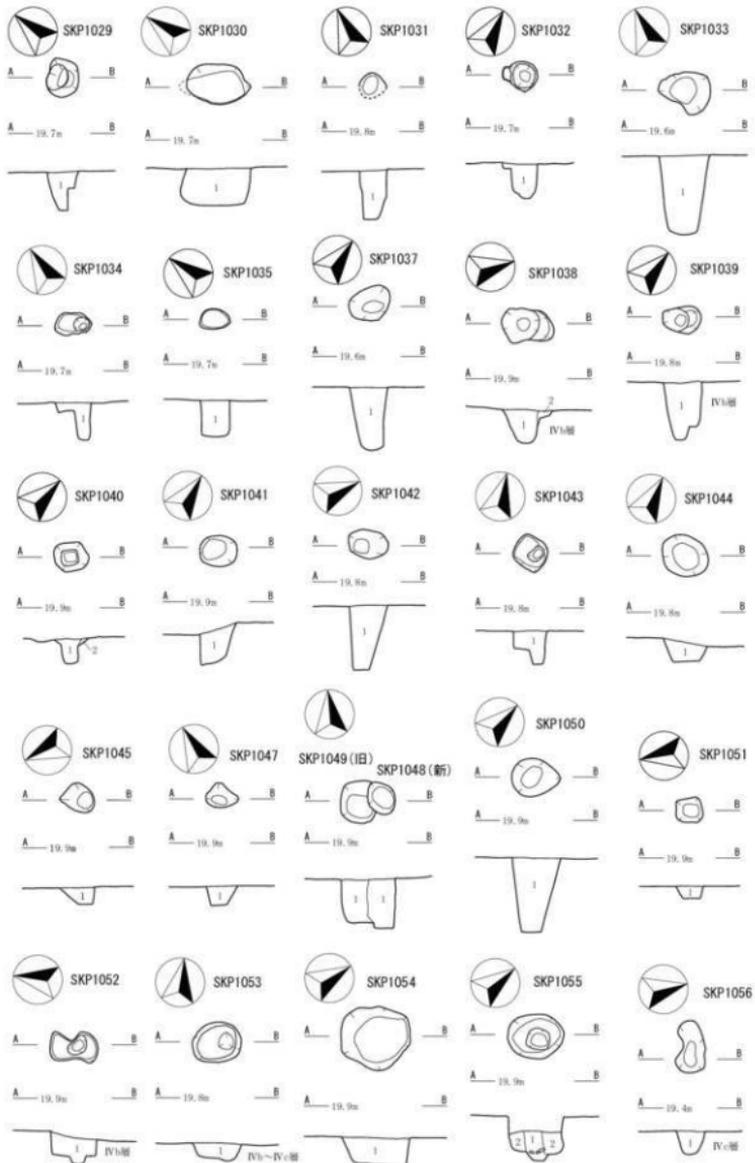
同図4・5は底部資料である。同図4は上げ底の底部で、縦位の条線が施される。同図5は平底の底部で、胴部下半から底部にかけて外反する。第98図4、第99図1・5・6、第100図3・4は繊維を多く含み、内面のミガキ調整が顕著である。

第101図6は円形土製品である。ST62からの出土となっているが、胎土が土師質であることから縄文時代より新しい時代の所産の可能性がある。

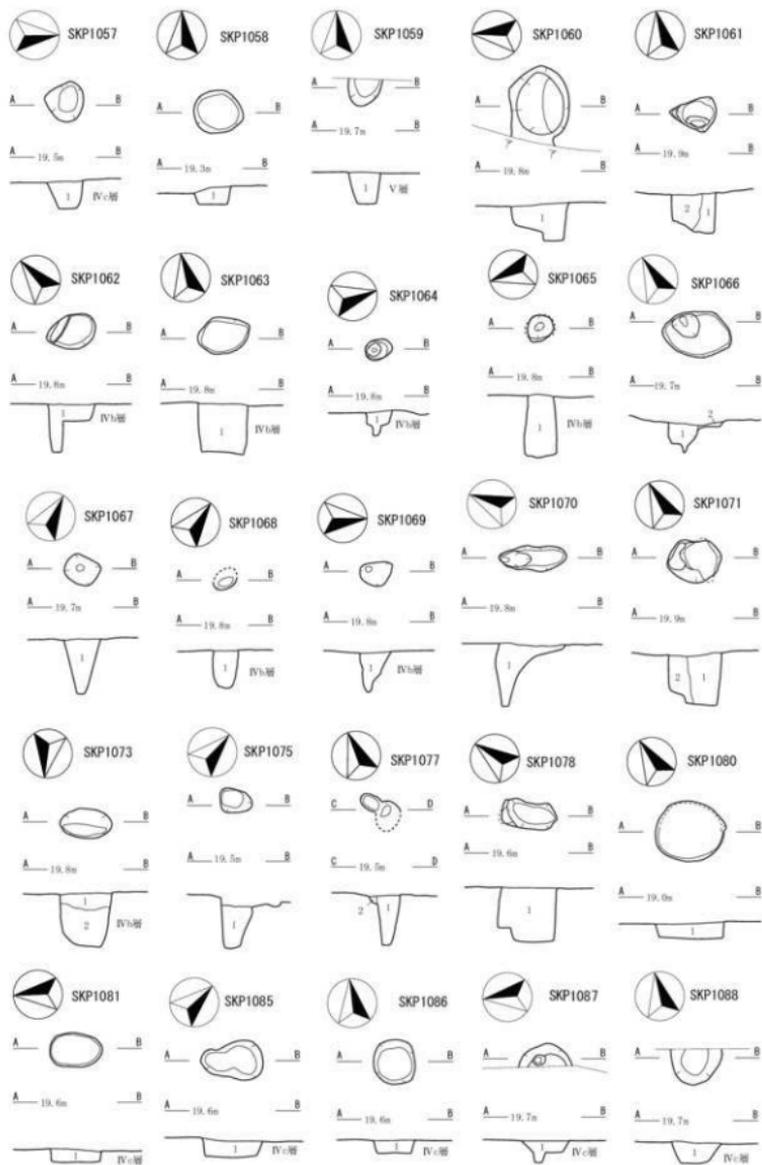
石器は、石鏃(第105図1～11)、石鏃未成品(第105図12～14)、石槍(第105図15)、両面調整石器(第105図16、17)、石匙(第105図18～21)、石匙未成品(第105図22～24)、有掘石器(第106図1、2) 筥状石器(第106図3～10)、筥状石器未成品(第106図11～15)、石錐(第106図16、17、第107図1、2)、スクレイパー(第107図3～8)、楔形石器(第107図9)、残核(第107図10～12、第108図1～7)、石製品のうち異形石器(第108図8)と石棒(第109図1)、敲石・磨石類(第109図2～



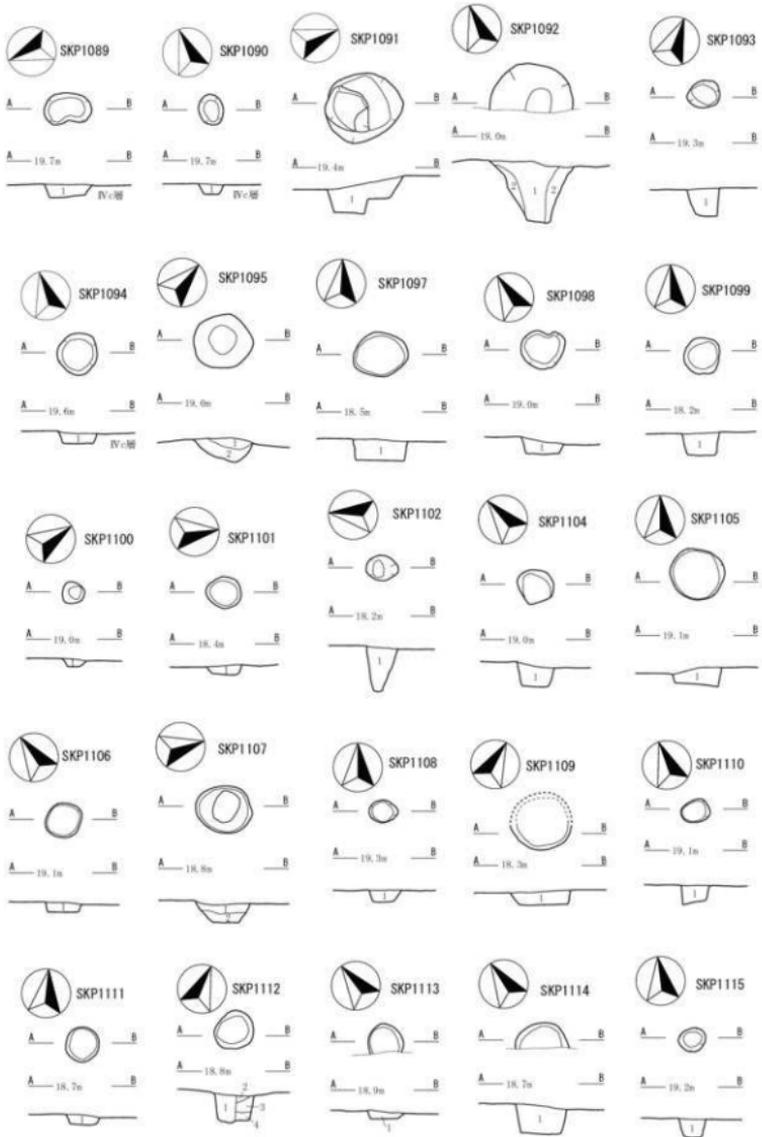
第110図 柱穴様ビット(1)



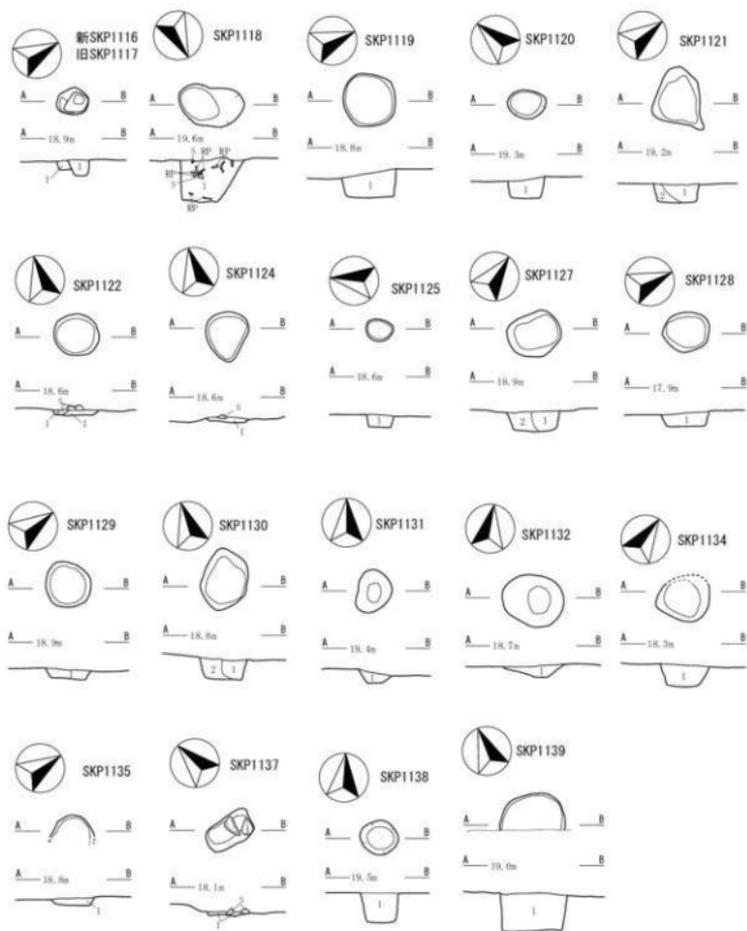
第111図 柱穴様ビット (2)



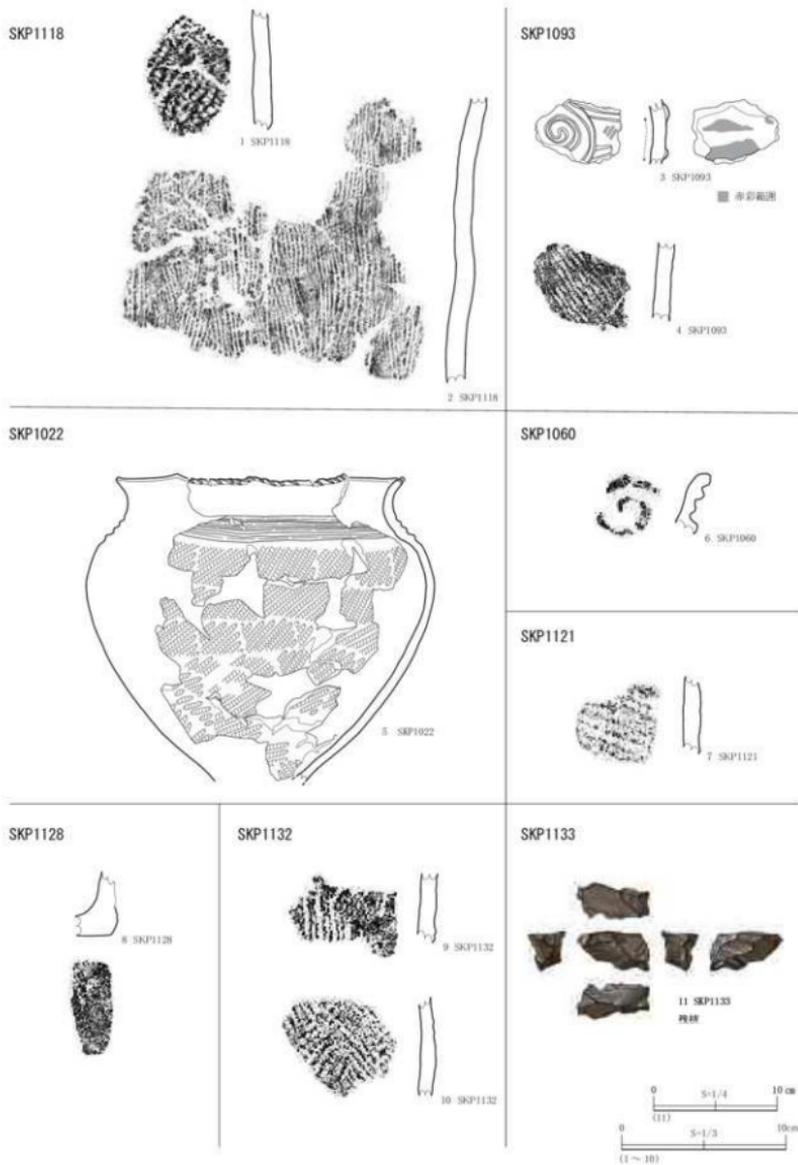
第 112 図 柱穴様ビット (3)



第113図 柱穴様ビット(4)



第114図 柱穴様ビット (5)



第115図 SKP1022・1060・1093・1118・1121・1128・1132・1133 柱穴様ビット出土遺物

第8表 柱穴様ビット一覧表(1)

S&P No.	位置	層位	色番号 (100%)	色調	土性	しまり	結性	混入物
1001	1544	1	3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	浅黄褐色粒5%
1002	1549	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	強	やや強	赤黄緑(2cm)1%
1003	1547	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや強	中	灰白色小礫(5mm)5%
1004	1408	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや強	中	灰白色小礫(5mm)5%
1005	1051	1	2/3	黒褐色	シルト	弱	強	粗粒砂(0.5~1mm)3%
1006	1351	1	3/4	暗褐色	粘土質シルト	中	強	炭化物粒状3%
1008	1950	1	2/3	黒褐色	シルト	強	中	炭化物粒状3%、黄褐色豆状3%、偽磁石10%、中礫(5~15mm)底状10%
1009	1406	1	3/4	暗褐色	シルト	強	中	炭化物粒状3%
1010	1845	1	4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	中	弱	炭化物粒状5%、粗粒砂(0.5~1mm)底状1%
1011	1547	1	3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(φ1cm)20%、褐色土ブロック(5cm)5%
1012	1847	1	3/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(φ1cm)20%、褐色土ブロック(5cm)5%
1014	1547	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	灰白色小礫(1cm)3%
1015	1544	1	4/6	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	黄褐色ブロック(5cm)5%
1016	1944	1	3/4	暗褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物粒状5%
1017	1944	1	3/4	暗褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物粒状5%、中粒砂(0.5mm)底状1%
1018	1943	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	炭化物粒状3%、中粒砂(0.5mm)底状3%
1019	1843	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	炭化物粒状30%、にぶい黄褐色シルト底状20%
1020	1442	1	3/4	暗褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物粒状3%
1021	1544	1	4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	礫1%
1022	1542	1	4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中	中	
1023	1047	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1cm)5%
1024	1047	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
1025	1047	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1~5mm)5%、黄褐色ブロック(3cm)3%
1026	10-1846	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1mm)1%
1027	1047	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
1028	1943	1	4/3	にぶい黄褐色	シルト	強	弱	炭化物粒状5%
1029	1443	1	4/3	にぶい黄褐色	シルト	強	強	炭化物粒状3%、粗粒砂(0.5mm)1%
1030	1842	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	粗粒砂(0.5~1mm)1%
1031	1445	1	4/6	褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物粒状1%、中粒砂粒状3%
1032	1443	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	
1033	1444	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	炭化物粒状5%
1034	1842	1	3/4	暗褐色	シルト	強	強	中粒砂粒状3%
1035	1842-43	1	2/3	黒褐色	シルト	強	強	炭化物粒状5%
1037	1843	1	3/4	暗褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物ブロック状10%、中粒砂(0.25mm)粒状3%
1038	1051	1	4/3	にぶい黄褐色	シルト	弱	弱	褐色シルト帯状30%、炭化物粒状5%
1039	1408	1	3/4	暗褐色	シルト	中	中	炭化物粒状5%、粗粒砂粒状2%
1040	1846	1	2/2	黒褐色	シルト	強	強	礫(5~60mm)30%
1041	1048	1	3/3	暗褐色	シルト	中	やや強	炭化物(1mm)3%、礫5%
1042	1048	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
1043	1547	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1mm)5%
1044	1548	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
1045	1947	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1mm)5%
1047	1047	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1mm)5%
1048	1548	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	黒褐色ブロック(1cm)10%
1049	1048	1	4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中	中	褐色ブロック(1cm)10%
1050	1048	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1mm)5%
1051	1049	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1mm)5%
1052	1050	1	3/3	暗褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物(1~5mm)5%、黄褐色ブロック(3cm)3%
1053	1949	1	3/3	暗褐色	シルト質粘土	中	やや強	炭化物ブロック(2cm)3%、褐色ブロック(1cm)1%
1054	1946	1	3/3	暗褐色	砂質シルト	強	中	褐色ブロック(10cm)10%
1055	1048	1	3/3	暗褐色	砂質シルト	やや弱	中	底面に付随
1056	1950	1	4/4	褐色	砂質シルト	やや強	中	炭化物粒(5mm)5%
1057	1951	1	4/4	褐色	砂質シルト	やや強	中	炭化物粒(5mm)5%
1058	1948	1	4/4	褐色	砂質シルト	やや強	中	炭化物粒(5mm)5%
1059	1951	1	4/1	暗灰色	砂質シルト	中	中	炭化物ブロック20%
1060	10-1951	1	4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	炭化物粒(φ1cm)5%
1061	1546	1	3/4	暗褐色	シルト	中	中	粗粒砂(0.5~1mm)底状3%、黒褐色土底状40%
1062	1847	1	3/4	暗褐色	砂質シルト	中	弱	
1063	1547	1	3/4	暗褐色	シルト	中	中	炭化物3%、粗粒砂(1~2mm)粒状3%
1064	1847	1	4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	強	礫(2~4mm)粒状5%
1064	1847	1	3/4	暗褐色	シルト	強	中	炭化物粒状1%、礫(2~4mm)粒状3%
1065	1547	1	3/4	暗褐色	シルト	中	中	炭化物粒状5%
1066	MA45	1	3/4	暗褐色	シルト	強	中	炭化物粒状5%、褐色シルト底状30%
1067	MA45	2	4/6	褐色	シルト	中	強	粗粒砂(0.5~1mm)10%
1067	MA45	1	3/4	暗褐色	シルト	中	中	炭化物粒状3%、粗粒砂(1~2mm)粒状5%
1068	1847-48	1	3/4	暗褐色	シルト	強	中	炭化物粒状10%

第9表 柱穴様ビット一覧表(2)

SRP No.	位置	層位	色番号(10X)	色調	土性	しまり	粘性	混入物
1069	L846	1	3/4	緑褐色	砂質シルト	強	弱	粗粒砂(0.5~1mm)粒状2%
1070	MA45	1	2/3	黒褐色	シルト	強	中	炭化物(5~10mm)粒状10%
1071	LS96	1	3/4	緑褐色	シルト	弱	中	炭化物粒状10%, 黄褐色ブロッ状5%
		2	4/4	褐色	シルト	弱	中	炭化物粒状2%, 粗粒砂0.5~1mm粒状1%
1073	LS47	1	4/6	褐色	シルト	やや弱	中	炭化物(0.5~10mm)粒状20%
		2	3/4	緑褐色	粘土質シルト	強	強	粗粒砂(0.5~1mm)粒状30%
1074	LF49	1	3/4	緑褐色	シルト	強	中	中酸(5~20mm)粒状5%, 礫(2~4mm)粒状3%, 炭化物(5mm)粒状3%
1075	MA45	1	3/3	緑褐色	粘土質シルト	中	強	炭化物(5mm)粒状5%
1077	MB44	1	3/3	緑褐色	シルト	弱	弱	炭化物(1~5mm)粒状5%
1078	MB44	1	3/3	緑褐色	シルト	中	中	炭化物(5~10mm)10%
1080	LT44	1	3/4	緑褐色	シルト	強	中	炭化物(5mm)粒状3%
1081	LN49	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1mm)5%
1085	L050	1	4/4	褐色	砂質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)5%
1086	L050	1	4/4	褐色	砂質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)3%
1088	L052	1	4/4	褐色	砂質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)5%
1089	L051	1	4/4	褐色	砂質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)3%
1090	L051	1	4/4	褐色	砂質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)3%
1092	L042	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物粒(5mm)3%, 遺物
1093	LF42	1	3/4	緑褐色	シルト	中	中	炭化物粒(3~20mm)3%
1094	L050	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)5%
1095	LT43	1	6/6	明黄褐色	粘土質シルト	中	弱	黒褐色土ブロッ状(10cm)3%
1097	LR44	1	5/6	黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	V層土3%
1098	LQ49	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物(1mm)5%
1099	LR42	1	5/6	黄褐色	砂質シルト	強	弱	V層由表土
1100	MA45	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	
1101	LS44	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物粒(5mm)3%, 灰白色土粒3%
1102	LR49	1	4/4	褐色	シルト質粘土	やや強	中	炭化物(3mm)1%
1104	MB44	1	4/3	にがい黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	明黄褐色土粒(5mm)10%
1105	LS51	1	5/6	黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1~3mm)3%, 灰白色粒(1mm)5%
1106	LS51	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	灰白色砂5%
1107	LR46	1	5/6	黄褐色	粘土質シルト	強	強	炭化物粒(1mm)3%
1108	LS51	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	灰白色砂粒(1mm)5%
1109	LQ41	1	4/6	褐色	粘土質シルト	強	中	
1110	LS51	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物粒(1mm)3%
1111	MA43	1	5/6	褐色	粘土質シルト	やや強	中	灰白色土粒(1mm)5%
1		4/6	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物粒(1~3mm)1%	
2		5/8	黄褐色	粘土質シルト	強	やや強	にがい黄褐色シルトブロッ状(5cm)帯状3%	
3		5/8	黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	にがい黄褐色シルトブロッ状(5cm)帯状10%	
1113	LS49	1	4/6	褐色	強	やや強	炭化物粒(1mm)3%	
1114	MA43	1	4/4	褐色	シルト	強	やや強	炭化物ブロッ状(1cm)5%
1115	LR49	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物粒(1mm)3%
1116	MA44	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	中	にがい黄褐色粘土ブロッ状(1~2cm)5%
1117	MA44	1	4/6	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(5mm)3%
1118	LS49	1	3/3	緑褐色	粘土質シルト	強	中	炭化物粒(1cm)3%, 土器・土片
1119	LT45	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	中	炭化物粒(1mm)1%, 灰白色粒(5mm)5%
1120	LS48	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物粒(1cm)1%
1121	LT96	1	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	強	緑褐色ブロッ状(1cm)5%, 炭化物ブロッ状(5cm)5%
		2	4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1cm)1%
1122	LN49	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物粒(1mm)1%
1124	LF49	1	2/3	黒褐色	粘土	やや強	強	炭化物粒(1mm)3%
1125	LP48	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	やや強	炭化物粒(1mm)3%, にがい黄褐色粘土ブロッ状(5cm)1%
1127	MA44	1	4/3	にがい黄褐色	シルト	中	強	炭化物粒(1mm)5%
2		4/4	褐色	シルト質粘土	やや強	やや強	炭化物粒(3mm)3%	
1128	MA44	1	6/4	にがい黄褐色	シルト	強	やや弱	炭化物粒(1~5mm)3%, 灰白色土粒(1mm)1%
1129	LT45	1	4/4	褐色	シルト	強	やや弱	炭化物粒(1mm)5%
1130	MA45	1	4/3	にがい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(5mm)10%
1131	MB45	1	3/4	緑褐色	粘土質シルト	やや強	中	炭化物粒(1mm)5%, 黄褐色ブロッ状(5cm)5%
1132	LS49	1	3/3	緑褐色	粘土	強	強	礫山ブロッ状(0.3~0.5cm)3%, 礫(0.2~1cm)5%
1134	LD46-47	1	2/2	緑褐色	粘土質シルト	強	やや強	礫山ブロッ状(0.2~1cm)5%, 礫(0.2~0.5cm)3%, 炭化物粒(0.1~0.3cm)2%
1135	LT46	1	2/2	にがい黄褐色	粘土質シルト	やや強	中	褐色ブロッ状(5cm)5%, 土器片・土片
1137	LR47	1	3/2	緑褐色	砂質シルト	やや弱	弱	明黄褐色ブロッ状(1cm)5%
1138	LN50	1	4/4	褐色	粘土質シルト	強	中	炭化物粒(3mm)5%
1139	LD-1844	1	5/6	黄褐色	シルト	強	やや強	炭化物粒(1mm)5%

4)、石刃7点(うち2点が二次加工あり)、RF626点、UF299点、調整剥片7点、剥片412点が出土した。第105図6の石鏃には、アスファルトと推定される黒色附着物が認められる。第108図7の残核は、上下両端に打面を設定し、打面調整が施され、複数の石刃が剥離されている。

【所見】斜面に形成された縄文時代前期に所属する捨て場である。

(9) 柱穴様ピット(第110～114図)

120基の柱穴様ピットが検出された。これらはIV層、VII層で確認された。埋土は単層が多いが、中には柱痕跡と掘り方埋土を確認できるもの(SKPI055・1061・1071・1092・112・1127・1130)、そのほか当たりとみられる凹みや一段深い掘り込みをもつもの(SKPI005・1010・1016・1017・1020・1024・1028・1029・1034・1039・1043・1052・1060・1062・1064・1078・1067・1091・1116・)もある。

4 近世の遺構と遺物

SK03土坑(第116図)

【位置・検出状況】LQ44区に位置する。IVa層上面で東西方向の楕円形状の広がりを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。SK05が北側に位置する。

【規模・形態】長軸1.6m、短軸0.74m、主軸方位N-68°-Wの楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは最大で0.54mである。南北方向には中端を持つ。底面は平坦で、長軸方向で中心部分が僅かに窪む。北から東壁は、外傾しながら立ち上がり、南から西壁はやや垂直気味に立ち上がり、検出面から約0.2m付近で外傾しながら立ち上がる。

【埋土】1～4層に分けた。最下層の4層には、炭化物と地山由来の褐色ブロックが全体に含まれている。また、1～3層にはII層由来と考えられる黒褐色土が全体に含まれている。レンズ状の堆積が認められないこと、いずれの層にも混入物が満遍なく含まれていることから人為堆積と推定される。

【所見】遺物は出土しなかったが、1～3層にII層由来の黒褐色土が含まれていることから、近世以降の可能性が考えられる。

SK04土坑(第116図)

【位置・検出状況】LQ45区に位置する。IVa層上面で褐色の楕円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。SK05が南側に位置する。

【規模・形態】長軸1.94m、短軸0.9m、主軸方位N-74°-Wの中央がややくびれる楕円形を呈する。底面の中央部は北西-南東方向に溝状に0.3mほど掘り込まれ、底面は僅かな凹凸が確認されるが、ほぼ平坦である。壁は外傾しながら立ち上がる。確認面から底面までの深さは、最大で0.62mである。

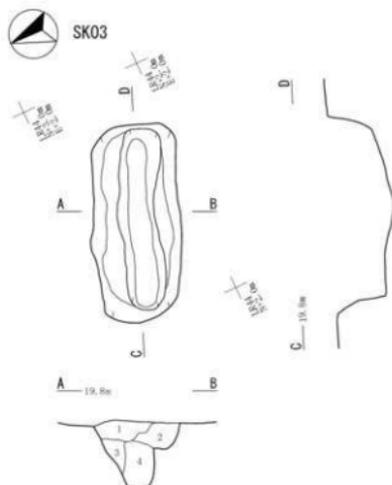
【埋土】1～3層に分けた。3層は底面の溝状の掘り込みに堆積した黒褐色ブロックを含む褐色粘土質シルトで、1・2層は溝状掘り込みの埋没後に堆積したものである。1・2層とも地山由来の褐色粘土質シルトを主体とし、黒褐色ブロックを含んでいる。1層中からは陶磁器などが、1層底面からは礫が出土している。各層とも黒褐色ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。

【出土遺物】埋土から摩滅した縄文土器片2点と陶磁器が出土した。1層から陶磁器が出土している。

【所見】出土遺物と1～3層にII層由来の黒褐色土が含まれていることから、近世以降と推測される。

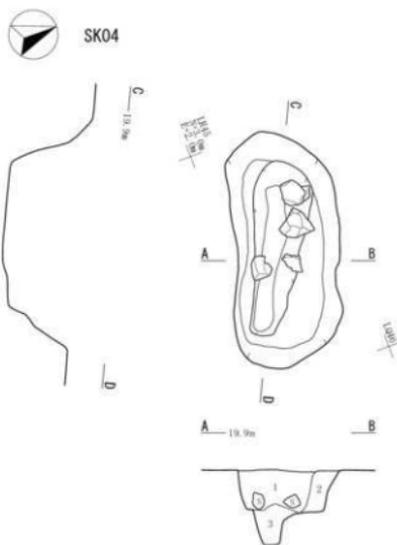
SK05土坑(第117図)

【位置・検出状況】LQ45区に位置する。IVa層上面で小礫を含む褐色粘質シルトの楕円状の広がりを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。



SK03

- 1 10R4/4 褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強
- 10R2/2 黒褐色ブロック (10 cm) 5%, 炭化物粒 (5 mm) 2%,
円礫 (1~2 cm) 2%含む
- 2 10R4/3 に近い黄褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強
- 10R2/2 黒褐色ブロック (10 cm) 10%, 円礫 (1~5 cm) 1%含む
- 3 10R4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強
- 10R2/2 黒褐色ブロック (10 cm) 5%含む
- 4 10R3/3 暗褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強
- 10R4/4 褐色粘土質シルトブロック (10 cm) 10%,
炭化物粒 (5 mm) 1%含む

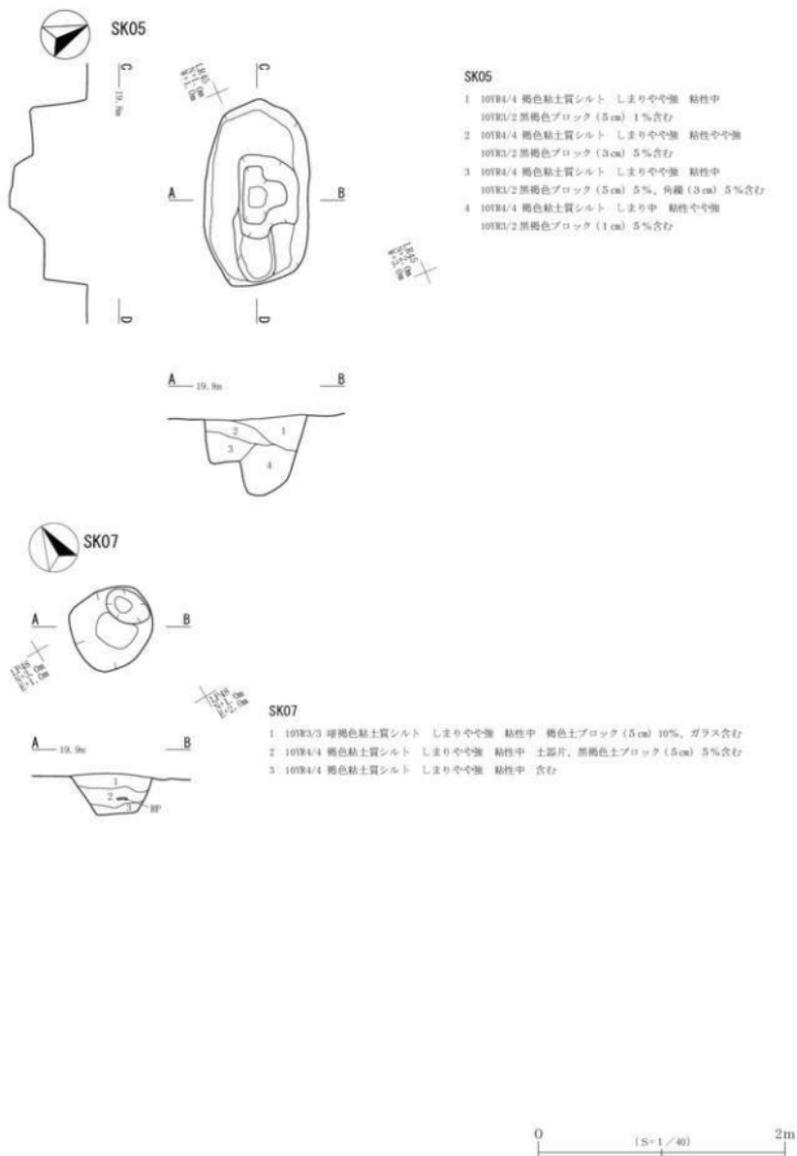


SK04

- 1 10R4/4 褐色粘土質シルト しまり強 粘性やや強
- 亜角礫 (15 cm大) 1%, 角礫 (5 cm大) 3%,
10R3/2 黒褐色土ブロック (10 cm大) 20%含む
- 2 10R4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中
- 黒褐色ブロック (10 cm大) 15%含む
- 3 10R4/4 褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中
- 黒褐色ブロック (5 cm大) 7%含む



第116図 SK03・04土坑



第 117 図 SK05・07 土坑

【重複遺構・周辺遺構】重複する遺構はない。形状が類似するSK03が南に、SK04が北に位置する。

【規模・形態】長軸1.48m、短軸0.84m、主軸方位N-68°-Wの楕円形状を呈する。確認面から底面までの深さは0.68mである。底面は平坦であるが、底面は中央北側と東側がさらに掘り込まれている。また、東から西へ緩やかに傾斜し、最大約0.1mの標高差が生じる。壁は外傾しながら立ち上がる。

【埋土】1～4層に分けた。いずれの層にもⅡ層由来の黒褐色土ブロックが含まれている。全体的に混入物が含まれていることから、人為堆積と推定される。

【所見】出土遺物がないが、SK03・04と形状や主軸方位が類似することから近世以降と考えられる。

SK07土坑（第117図）

【位置・検出状況等】LO48区に位置する。IVa層上面で暗褐色粘土質シルトの楕円形プランを確認し、掘り下げによる断面等の観察の結果、遺構と判断した。

【重複遺構・周辺遺構】重複遺構はない。北にSKI41、東にSKI39が位置する。

【規模・形態】遺構上部は攪乱を受けている。長軸0.72m、短軸0.66m、主軸方位N-60°-Eの北側が張り出す不整楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.35mである。底面は平坦である。壁は、北東壁は中端を形成し外傾しながら立ち上がるが、他は大きく外傾しながら立ち上がる。

【埋土】1～3層に分けた。1層は、ガラス等を含む攪乱土である。2・3層は地山由来の褐色粘土質シルトである。2層にはⅡ層の黒褐色土がブロック状で全体に含まれ、人為堆積と考えられる。

【出土遺物・所見】埋土からRF2点、2層から陶磁器片が出土した。近世以降の遺構と考えられる。

5 遺構外出土遺物

遺構外出土土器（第118～125図、写真図版28～34）

遺構外から出土した土器は18ℓコンテナ45箱分出土した。主体は前期と中期の土器群である。早期～前期の土器は基本層序のⅦ～Ⅸ層にかけて多く出土した。中期の土器はⅣ層で多く出土し、Ⅶ層以下からの出土は認められなかった。氾濫性堆積物で構成されるⅤ～Ⅵ層からの出土量は僅少であった。ここでは接合状況が良好なもの、摩耗せず文様が分かるものを図示した。図示した個別資料の詳細については第20・21表に掲載した。

I群A類（第118図1～3）

外面全体に地文を施し、口縁部内面にも施す。繊維を極めて多く含み、他の土器より軽い。内外面に地文が認められることから早期後葉に位置付けた。

II群A類（第118図4・5）

同図4は波頂部下に原体を雷文状に押捺し、各角に刺突文を施す。同図5は口縁部に3条の原体側面圧根文を施す。撚りの違う原体を交互に押捺する。

II群B類（第118図6～9）

数条の連続刺突文が施される。同図6・7は横位のコンパス文によって口縁部文様帯と胴部地文帯を区画する。同図7は押し文が施される。同図9は渦巻状に連続刺突文が施される。

II群C類（第118図10）

S字状連鎖沈文を地文に、棒状工具による2段の刺突文を横位に巡らす。

II群D類（第118図11・12）

横位の半裁竹管による沈線で口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。同図11は半裁竹管による鋸歯状の沈線を2条引き、その間に円形竹管文を充填する。同図12も横位の半裁竹管による沈線を引き、

その上部に半裁竹管による鋸歯状の沈線を引く。

Ⅱ群E 1類 (第118図13)

同図13は刻目付粘土紐貼付文を有し、太い棒状工具によって刺突文が施される。

Ⅱ群E 2類 (第118図14)

同図14は横位の太い隆帯に指頭押圧が付加される。

Ⅱ群E 4類 (第118図15・16)

同図15は地文上に網目状に隆帯を貼付する。同図16は口縁部の突起から鋸歯状もしくは波状の隆帯を垂下させる。

Ⅱ群F 1類 (第119図1)

縦位の燃糸文を地文とする深鉢形土器である。口唇部に鋸歯状の隆帯を貼付する。口縁部には横位の鋸歯状沈線とその両端部から派生する渦巻状の沈線が描かれる。繊維を多量に含み、内面にはミガキ調整が認められる。

Ⅱ群F 2類 (第119図2～8、第120図、第121図1)

同図2は横位の平行沈線間に上下対照となる横位の鋸歯状沈線文を引く。同図3・4は横位の鋸歯状沈線文を引く。同図5・6は沈線によって幾何学文が描かれる。同図7・8、第120図1は縦位の鋸歯状沈線文が複数引かれる。同図2、第121図1は口唇部に波状の隆帯を貼付し、口縁部に横位の鋸歯状沈線文を施す。第119図5～8、第120図1は繊維を多量に含み、ミガキ調整が認められる。

Ⅱ群F 3類 (第121図2～8)

第121図2～5は細い沈線による格子目状が施される。これらは横位の網目状燃糸文か迷ったが、摩耗により節等が確認できなかったためⅡ群F 3類に含めた。網目状燃糸文であるならば、縄文時代前期初頭～前葉に属する可能性がある。同図6～8は縦位の格子目状沈線文が施される。

Ⅱ群H 1類 (第121図9)

下施文幅が狭い非結束の羽状縄文が施される。ループ文の巻きは弱い。

Ⅱ群H 2類 (第121図10)

内湾する波状口縁を有し、口縁部に横位の綾絡文、胴部に横位の側面環付回転文が施される。

Ⅱ群H 3類 (第121図11・12)

横位のS字状連鎖沈線文が施される。

Ⅱ群H 4類 (第121図13、第122図1・2)

単節縄文を器面全体に施す。第122図1・2の底部は少し張り出し、胎土はやや砂質である。

Ⅱ群H 5類 (第122図3)

縦位の結束第1種羽状縄文が施され、口縁部がやや外反する。

Ⅱ群H 6類 (第122図4・5、第123図1・2)

縦位もしくは斜位の燃糸文を器面全体に施す。第118図4は口唇部に隆帯を貼付した後、外面から指頭押圧が加えられる。同図5は円筒形を呈する。

Ⅱ群H 7類 (第123図3・4)

縦位の網目状燃糸文を施す。

Ⅱ群H 8類 (第123図5)

地文は不規則で判然としない。繊維を多量に含むため、縄文時代前期に属すると考えられる。

Ⅲ群A 1類 (第123図6～13、第124図1)

第119図6・7は胴部に沈線で渦巻文が描かれる。同図8～13は突起もしくは把手に沈線で渦巻文

が描かれる。同図11は大型の把手で、正面と両側面に渦巻文が描かれ、上面、正面、両側面の4箇所に透かし穴を施す。第124図1は口縁部の波長部に沈線で渦巻文を描く。

Ⅲ群A 2類 (第124図2・3)

同図2は口縁部文様帯を設けず、器面に隆帯で渦巻文を描く。同図3は口縁部の波長部に隆帯で渦巻文を描く。

Ⅲ群A 3類 (第124図4～6)

同図4～6は隆沈線によって渦巻文を描く。同図5は口縁部に推定6～8単位の突起を有し、頸部無文帯を設ける。

Ⅲ群B 1類 (第124図7)

楕円形の沈線で地文を区画し、その外部の地文を磨り消す。

Ⅲ群C 1類 (第124図8)

縄文帯の幅が一定で、無文帯の幅がやや広がっていくことからⅢ群C 1類に収まるを判断した。縄文帯で描かれるアルファベット文の一部と思われる。

Ⅲ群D 1類 (第124図9・10)

口縁部に1条の太い隆帯を横走させ、樽形を呈すると思われる。

Ⅲ群D 2類 (第124図11～16、第125図1～10)

文様の全体像が判然としないが、器形や残存する文様から大木8b式期のものと考えられる。第124図14～16は口縁部に刺突文を横走させる。第125図10は橋状把手片である。

Ⅲ群D 3類 (第125図11)

口縁部が外反し、波状口縁を有する深鉢形土器である。縦位の単節縄文を器面全体に施す。

V群A類 (第125図12)

縦位の条線を施し、底面が上げ底となる。

V群B類 (第125図13・14)

同図13は器面に横位、縦位の条線を施し、底面に敷物圧痕を有する。胎土に繊維を含むため、縄文時代前期のものと考えられる。同図14はござ目の敷物圧痕を有する底部である。胎土から縄文時代中期後半のものと考えられる。

V群C類 (第125図15～19)

同図15は底形が楕円形を呈する。底部付近で湾曲する隆帯から大木8b式期のものとする。同図16～19は小型の深鉢形もしくは鉢形土器の底部と思われる。

赤彩資料 (第125図20)

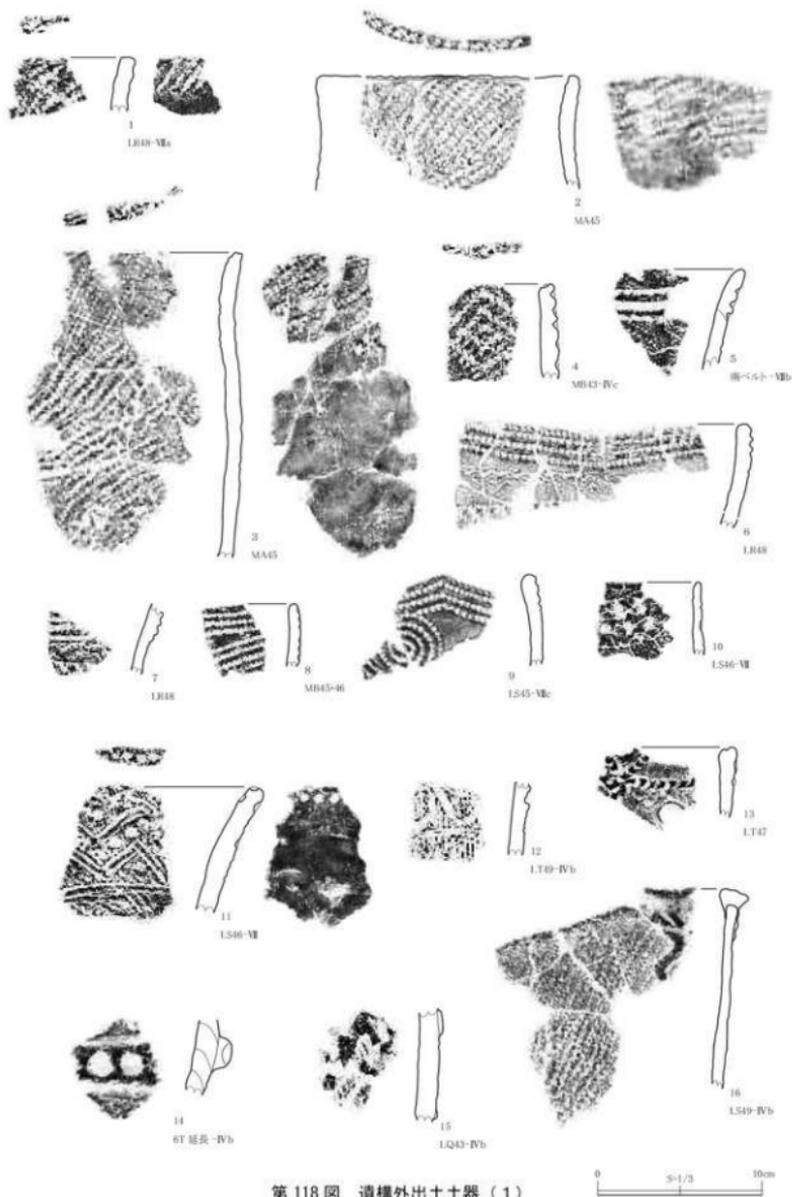
同図20は内面に赤彩が認められる。微細な破片であるため外面の文様は判然としないが、胎土から縄文時代中期のものと考えられる。

遺構外土製品 (第126図、図版34)

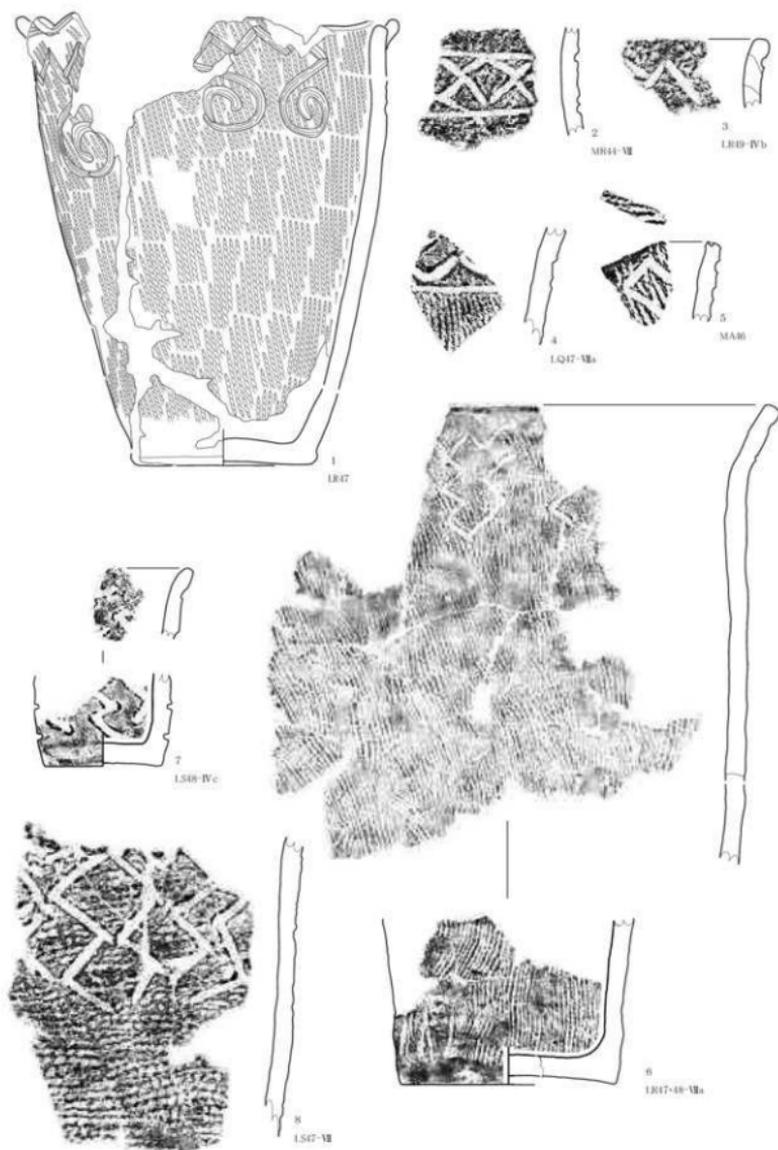
第126図1～10は三角形土製品である。同図1～6は隆帯が貼付されるもので、それらの多くが隆帯に刺突文を付加する。同図3には乳房状の粘土粒が貼付される。同図6の割れ口にはアスファルトが付着している。同図7は単節縄文が施される。同図8～10は素文の三角形土製品である。

同図11は板状土偶の肩部と判断した。一部剝離しているが、V字状の隆帯が貼付されている。

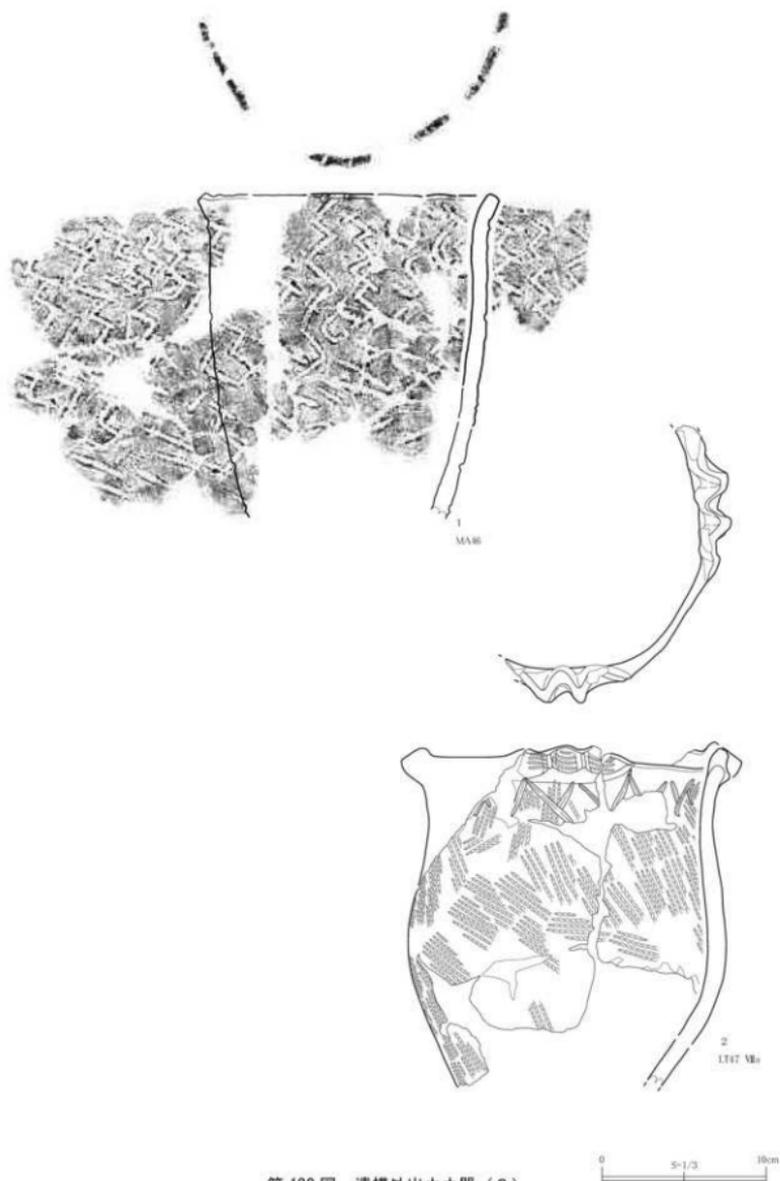
同図12は円形土製品である。第104図6と同様に胎土から縄文時代より新しい時代の所産の可能性がある。



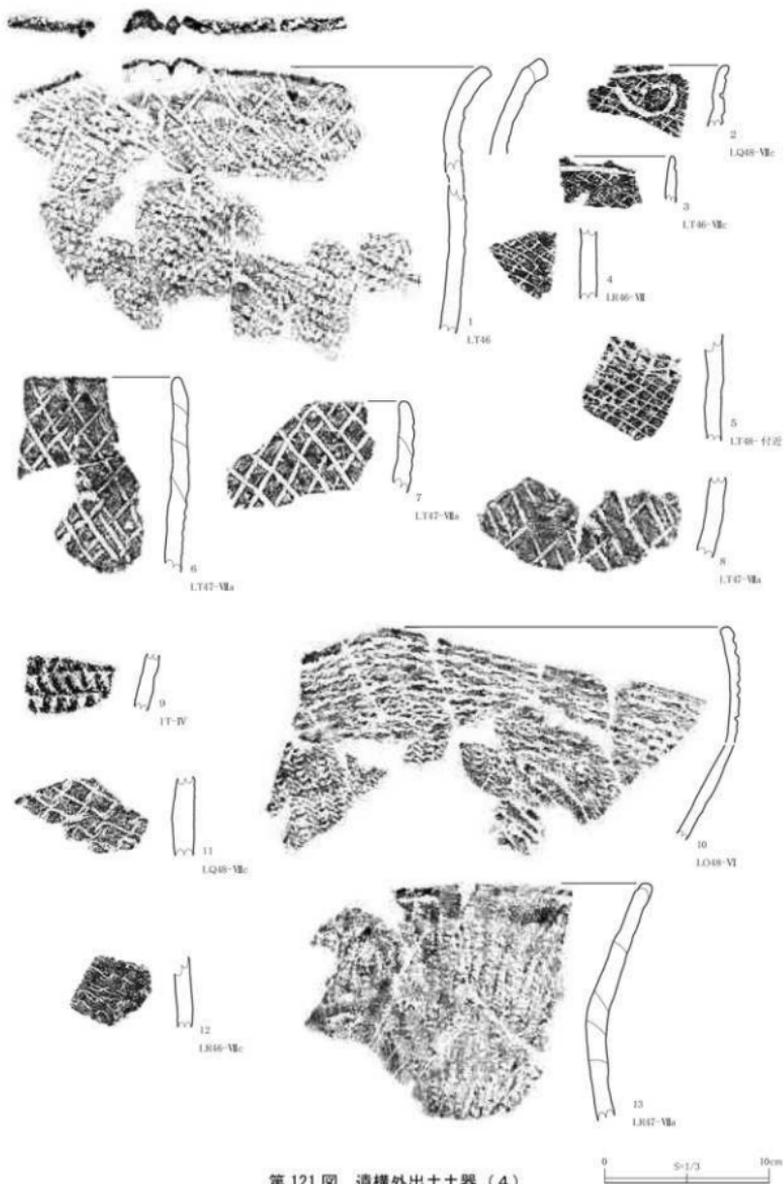
第118図 遺構外出土土器(1)



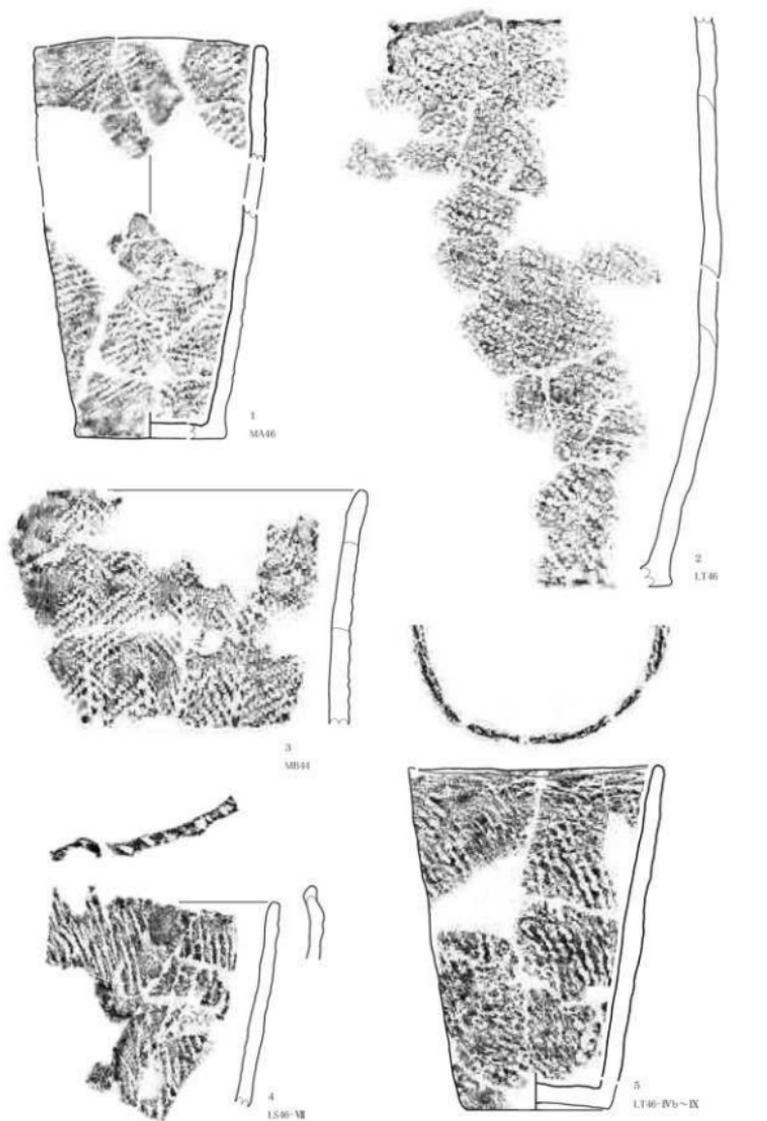
第119図 遺構外出土器(2)



第 120 図 遺構外出土土器 (3)

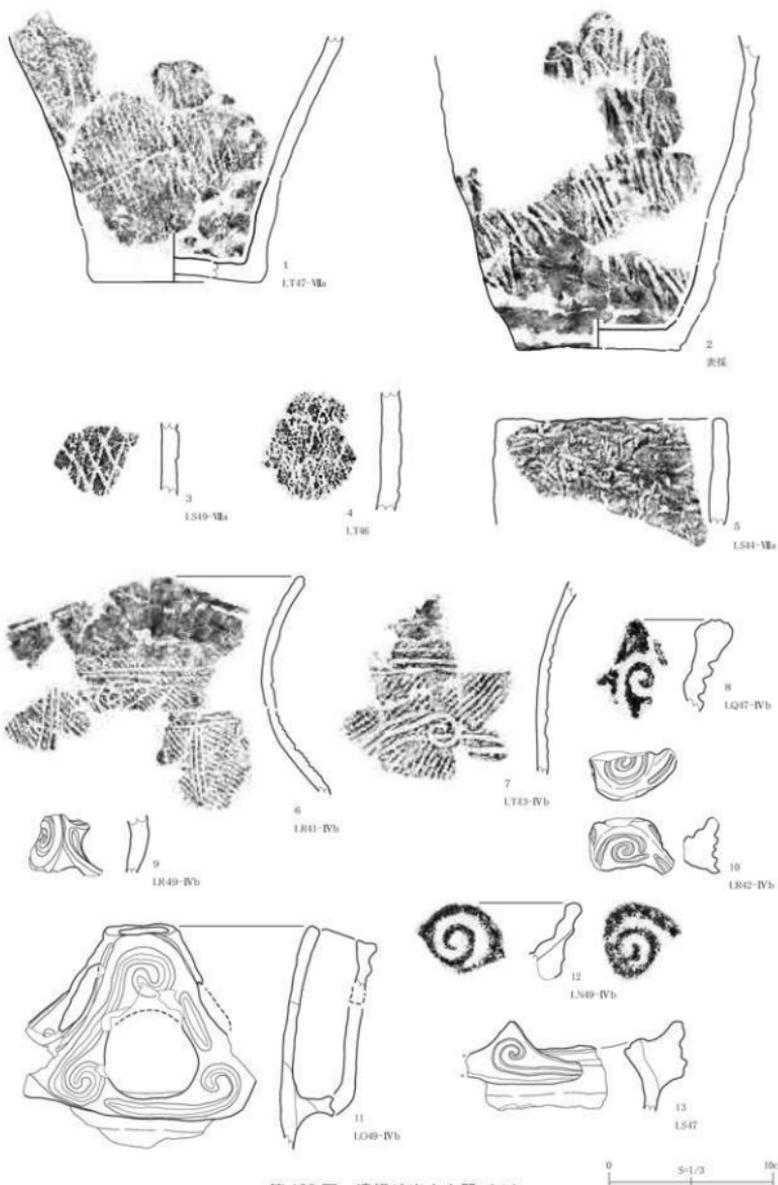


第121図 遺構外出土器(4)

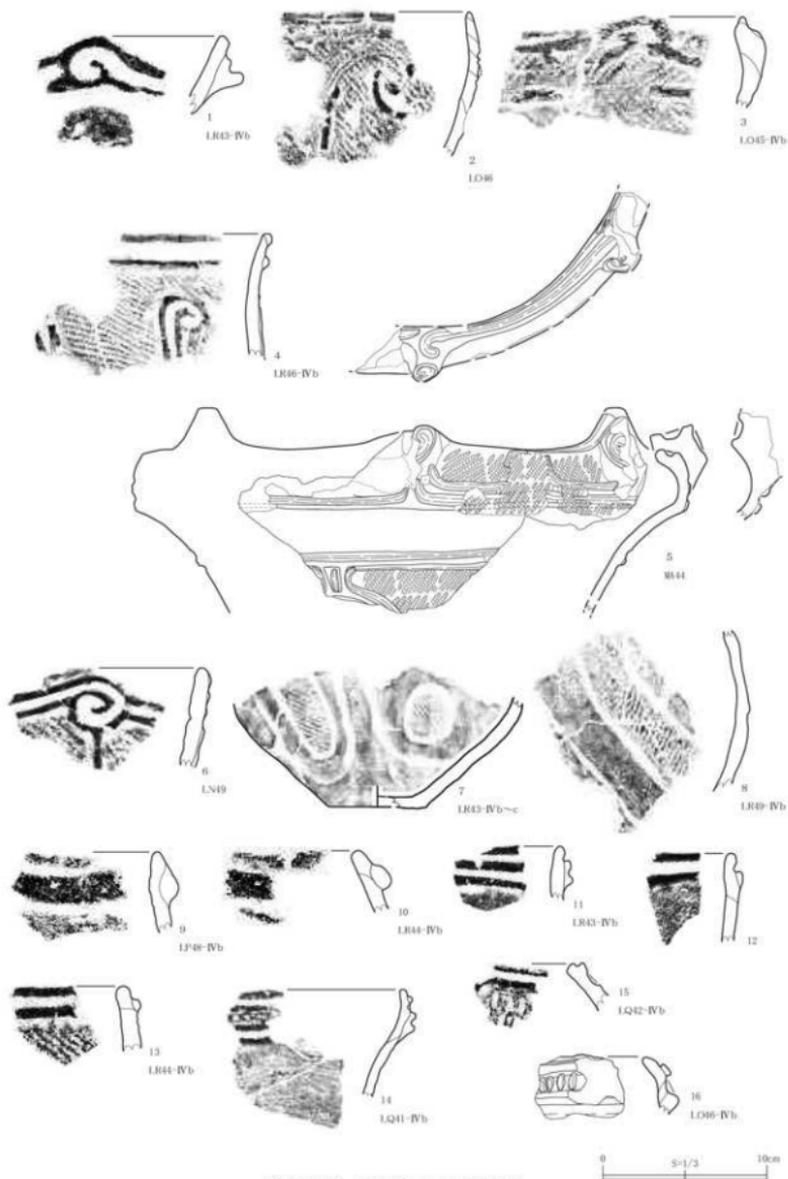


第122図 遺構外出土土器(5)

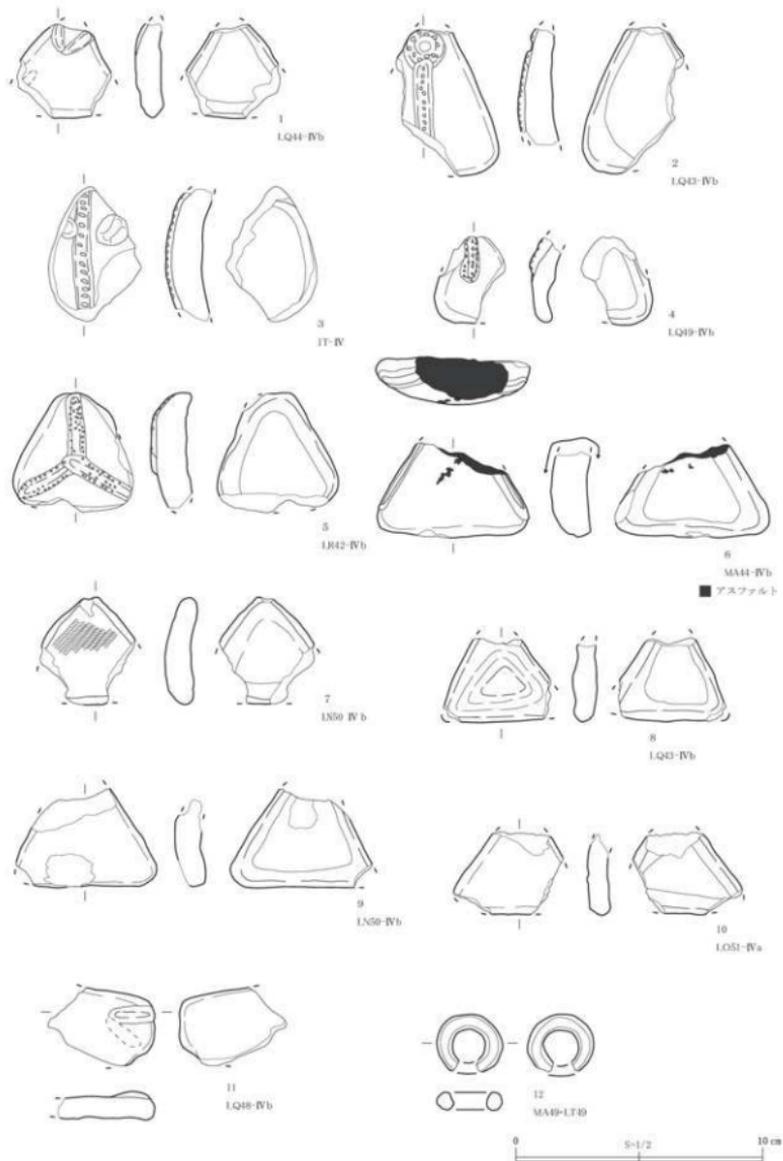
0 5=1/3 10cm



第123図 遺構外出土土器(6)



第124図 遺構外出土土器(7)



第126図 遺構外出土土製品

遺構外出土石器類 (第129～138図、写真図版35、36)

出土総点数を第10表に、剥片石器の分布状況を第127図に、残核と礫石器の分布状況を第128図に示した。剥片石器の分布状況は、Ⅳ層では調査区南側 (LQ・LR42・43、LT・MA44・45付近) と北側の一部 (LO50・51) に集中し、Ⅶ層では土器集中範囲 (ST62) 周辺に密集する。Ⅸ層は、調査区南側 (LR43、MA・MB45周辺) に集中し、Ⅹ層は、調査区北側を中心に散漫に分布する。

残核は、剥片石器の分布と同様、Ⅳ層では調査区南側 (LQ・LR42) や調査区西側 (LT・MA44、LT46・47) に、Ⅶ層では、土器集中地点 (ST62) 周辺に多く見られる。礫石器 (敲石・磨石類、石皿) は、Ⅳ層、Ⅶ層ともに調査区西側 (LR～LT47・48付近) を中心に散漫に分布する。

これらの分布傾向から調査区西側は、各層位において石器分布が認められ、この範囲はⅦ層では土器集中範囲 (ST62) があり、Ⅳ層では集落の外縁部にあたる。珪質頁岩を含む女川層が浅い位置で確認できることから石材採取に適しており、石器製作の場として通時的に利用されたと考えられる。

以下では、器種別に資料の内容について記載した後、剥片石器類の中の珪質頁岩以外の石材と磨製石斧に利用された遠隔地石材について記載する。

石鏃 (第129図1～12) Ⅶ層から9点、Ⅳ層から19点が出土。形態分類では、34点中23点が凹基無茎鏃 (Ⅰ類) で最も多く、次に3点の平基無茎鏃 (Ⅱ類)、1点の円基鏃 (Ⅲ類) となる。凹基無茎鏃 (Ⅰ類) の中には長狭なもの (第129図1、2) や小形のもの (第129図9) が含まれる。石材は、珪質頁岩が30点で最も多く、次に玉髓質頁岩4点、石英1点である。第129図2が玉髓製、6、7、9は玉髓質頁岩製、10が石英製である。

石鏃未成品 (第129図13～17) Ⅸ層から1点、Ⅶ層から2点、Ⅳ層から7点が出土。周縁加工の途上で素材剥片の厚みが残っているもの (第129図13、15) や両面に加工が施されるが、器体中央の一部に瘤状の厚みを残すもの (第129図14、17) がある。石材は、珪質頁岩が7点で最も多く、次に玉髓質頁岩3点である。第129図16が玉髓質頁岩製。

石槍 (第129図18～22) Ⅶ層から1点、Ⅳ層から3点が出土。第129図19は、先端部がやや左側に傾いており、器体上部の側縁は微細剥離によって丁寧な調整加工が施されている。器体中央から下部には瘤状の厚みが部分的に残され、側面形は凹凸がある。

両面調整石器 (第129図23、24、第130図1～10) Ⅸ層から1点、Ⅶ層から17点、Ⅴ層から1点、Ⅳ層から47点が出土。第129図23は、平坦加工による器体整形を行った後、右側縁と左側縁上部の裏面にのみ押圧剥離による調整加工が認められる。第130図3は、右側縁上部と左側縁下部にのみ平坦加工による整形加工が認められる。これらの石器は、未加工の部分を残しているため製作途中のものとして推定される。第130図1、4は玉髓質頁岩製。

石匙 (第130図11～21) Ⅹ層から3点、Ⅸ層から2点、Ⅶ層から8点、Ⅳ層から20点が出土。形態分類では、54点中19点で縦型 (Ⅰ類) が最も多く、次に13点の刃部が斜めのもの (Ⅲ類)、7点の横型 (Ⅱ類) となる。縦型の中には、裏面に二次加工を施し、そこを打面として表面に平坦加工を施すものがある (第130図11、13、14) 第130図15は玉髓製。

石匙未成品 (第130図22、第131図1、2) Ⅹ～Ⅹ層から1点、Ⅶ層から7点、Ⅳ層から7点が出土。素材剥片の打面側を縦方向に配置するもの (第130図22、第131図1) と横方向に配置するもの (第131図2) がある。

トランシェ椽石器 (第131図3) 横長幅広剥片素材を利用し、左右側縁に平坦加工が施されている。刃部には素材面を残し、縁辺には連続した二次加工痕が認められる。珪質頁岩製。

第10表 出土石器一覧

	石 鏃	石 鏃 未 成 品	両 面 調 整 石 器	有 墨 石 器	石 匙	石 匙 未 成 品	石 槍	鼠 状 石 器	鼠 状 石 器 未 成 品	石 錐	ス タ レ イ バ ー 類	楔 形 石 器	石 刀	残 核	ト ラ ン シ エ 礫 石 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 離 痕 の あ る 剥 片	剥 片	砕 片	調 整 剥 片	礫 石 器	合 計
遺構内	22	4	14	2	13	10	3	12	10	9	29	4	8	74	0	1010	616	939	14	4	18	2815
遺構外	34	10	81	0	54	21	5	39	27	30	99	10	27	268	1	4341	2330	2647	341	11	61	10437
I								1								1	5					7
II										1						20	11	10	1			43
III						1		1		1	2			7		111	50	20	1			194
III～IV a					1											13	5	1				20
IV	1				1					1				1		5	6					15
IV a	1		3		1				1	1	4			6		80	40	38	3	1	2	181
IV b	11	7	34		16	5	1	9	9	8	33	1	103		1382	859	670	48	2	24	3224	
IV c	6		7		2	2	2	11		1	16	4		37		253	181	285	87	1	3	898
IV b～IV c			3					1	1				2			29	15	3				54
IV～V																8	6					14
IV b～VI c			3		1								1			16	5	12				36
IV b～IX	1		1		2							2	2			64	47	35				154
IV b～X																1						1
IV c～VI																2	1					3
IV c～VII																	1					1
IV c～VII b					1																	1
V			1													2		5				8
VI														2		2		2	2			8
VII	1		3					1	1							79	21	28			1	135
VII a	2	1	6		3	6	1	2	2	7	15		4	20		473	264	391	1	2	7	1207
VII b	1		5					3	1	1	4		6	10		170	69	89			1	360
VII c	5	1	3		5			5	3	2	2		5	11		287	138	238	151	3	4	863
VII d																8	3	1				12
VII a～VII c						1							1			18	16	19				55
VII c～VII																2						2
VII～IX																143	60	77	4	1		285
VII b～IX													1									1
VII c～IX																1		1				2
VIII													1			6		1				8
IX		1	1		2			2	3		2		4	20	1	187	106	224	17		4	576
IX～X										1	1					25	7	20				54
IX～XI																7	2	3				12
X					3					2	7	1	2	6		58	10	25			2	116
X～XI						1							1			11	7	26			1	47
XI										2			4			61	27	89	8			191
部位不明	5		12		17	5	1	4	5	2	13	2	1	37		817	367	334	18	1	8	1649
合 計	56	14	95	2	67	31	8	51	37	39	128	14	35	342	1	5351	2946	3596	355	15	79	13252

第11表 各種石器分類別一覧(1)

石楯分類別一覧

	成品				計	II	III	IV	V	合計	未成品
	I Ia	Ib									
遺構内	4	14	18	2	0	1	1	22	4		
遺構外	12	11	23	3	1	0	7	34	30		
IV	1	0	1	0	0	0	0	1	0		
IVa	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
IVb	2	7	9	0	1	0	1	11	7		
IVc	0	2	2	1	0	0	3	6	0		
VII	1	0	1	0	0	0	0	1	0		
VIIa	1	0	1	1	0	0	0	2	1		
VIIb	1	0	1	0	0	0	0	1	0		
VIIc	3	1	4	0	0	0	1	5	1		
IX	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
IVb-IX	1	0	1	0	0	0	0	1	0		
層位不明	2	1	3	1	0	0	1	5	0		
合計	16	25	41	5	1	1	9	56	14		

トランシェ椀石器、蓋状石器分類別一覧

	成品				計	II	III	IV	V	合計	未成品
	I Ia	Ib	Ic								
遺構内	0	2	1	2	2	3	1	1	12	10	
遺構外	1	16	4	3	5	4	5	2	36	27	
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
II	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	
IVa	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
IVb	0	5	1	0	1	1	0	0	9	9	
IVc	0	2	1	1	2	2	3	0	11	0	
IVb-IVc	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
VII	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
VIIa	0	0	1	1	0	0	0	0	2	2	
VIIb	0	1	0	0	0	1	1	3	1		
VIIc	0	2	0	1	1	0	1	0	5	3	
IX	1	0	1	0	1	0	0	0	2	3	
層位不明	0	4	0	0	0	0	0	0	4	5	
合計	1	18	5	5	7	7	6	3	51	33	

石楯分類別一覧

	I		II	合計
	Ia	Ib		
遺構内	1	2	3	
遺構外	2	2	0	
IVb	0	1	1	
IVc	1	1	2	
VIIa	1	0	1	
層位不明	1	0	1	
合計	4	4	8	

両面調整石器分類別一覧

	I				II	III	IIIa	IIIb	計	合計
	Ia	Ib	Ic							
遺構内	2	2	8	2	10	14				
遺構外	9	8	41	23	64	81				
IVa	1	0	1	1	3	3				
IVb	3	4	18	9	27	34				
IVc	0	1	5	1	6	7				
IVb-IVc	0	0	1	2	3	3				
IVb-VIIc	1	0	0	0	0	1				
IVb-IX	0	0	1	0	1	1				
IVc-VIIb	0	0	0	1	1	1				
V	0	0	1	0	1	1				
VII	1	1	1	0	1	3				
VIIa	1	0	4	1	6	6				
VIIb	2	1	0	2	2	5				
VIIc	0	0	2	1	3	3				
IX	0	0	0	1	1	1				
層位不明	0	1	7	4	11	12				
合計	11	10	49	25	74	95				

石楯分類別一覧

	成品				計	合計	未成品
	I	II	III	IV			
遺構内	3	3	3	4	13	10	
遺構外	19	7	13	15	54	23	
III	0	0	0	0	0	1	
III-IVa	0	0	0	1	1	0	
IV	0	0	0	1	1	0	
IVa	1	0	0	0	1	0	
IVb	5	2	6	2	16	5	
IVc	1	1	0	0	2	2	
IVb-VIIc	0	1	0	0	1	0	
IVb-IX	2	0	0	0	2	0	
VIIa	0	0	1	2	3	6	
VIIc	3	0	1	1	5	0	
VIIb-VIIc	0	0	0	0	0	1	
IX	0	0	1	1	2	0	
X	2	0	0	1	3	0	
X-XI	0	0	0	0	0	1	
層位不明	5	2	4	6	17	5	
合計	22	10	16	19	67	33	

スクレイパー分類別一覧

	I			計	II	III	IV	合計
	Ia	Ib	Ic					
遺構内	9	5	6	19	4	3	3	29
遺構外	36	25	16	75	18	3	3	99
III	1	0	0	1	1	0	0	2
IVa	1	0	1	2	2	0	0	4
IVb	13	8	3	26	6	0	1	33
IVc	5	4	3	10	3	1	2	16
VIIa	8	5	1	14	1	0	0	15
VIIb	0	3	0	3	1	0	0	4
VIIc	0	0	3	2	0	0	0	2
IX	1	1	0	2	0	0	0	2
X	4	2	0	6	0	1	0	7
IX-X	1	0	0	1	0	0	0	1
層位不明	4	2	2	8	4	1	0	13
合計	45	30	19	94	22	6	6	128

第12表 各種石器分類別一覧(2)

石鐘分類別一覧

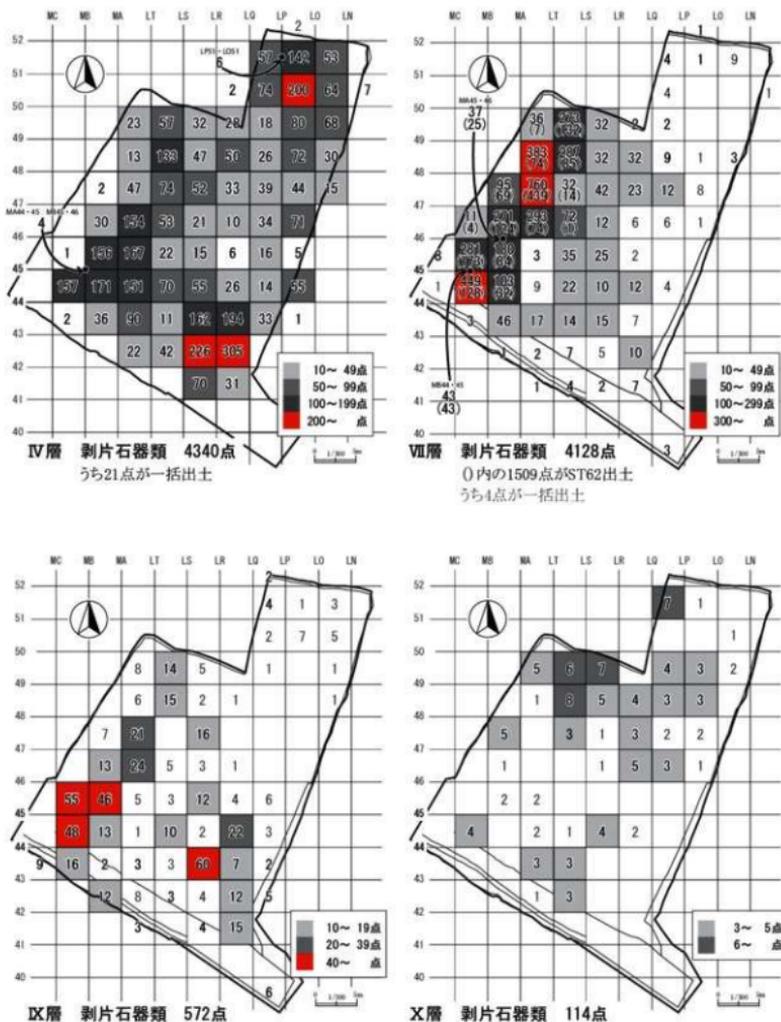
	I			II			合計
	Ia	Ib	計	IIa	IIb	計	
遺構内	3	1	4	3	2	5	9
遺構外	2	10	12	12	6	18	30
II	0	0	0	1	0	1	1
III	0	0	0	0	1	1	1
IV	0	1	1	0	0	0	1
IVa	0	1	1	0	0	0	1
IVb	1	3	4	2	2	4	8
IVc	0	0	0	1	0	1	1
VIIa	1	2	3	4	0	4	7
VIIb	0	0	0	1	0	1	1
VIIc	0	2	2	0	0	0	2
X	0	0	0	1	1	2	2
XI	0	0	0	1	1	2	2
IX-X	0	0	0	0	1	1	1
層位不明	0	1	1	1	0	1	2
合計	5	11	16	15	8	23	39

礫石器分類別一覧

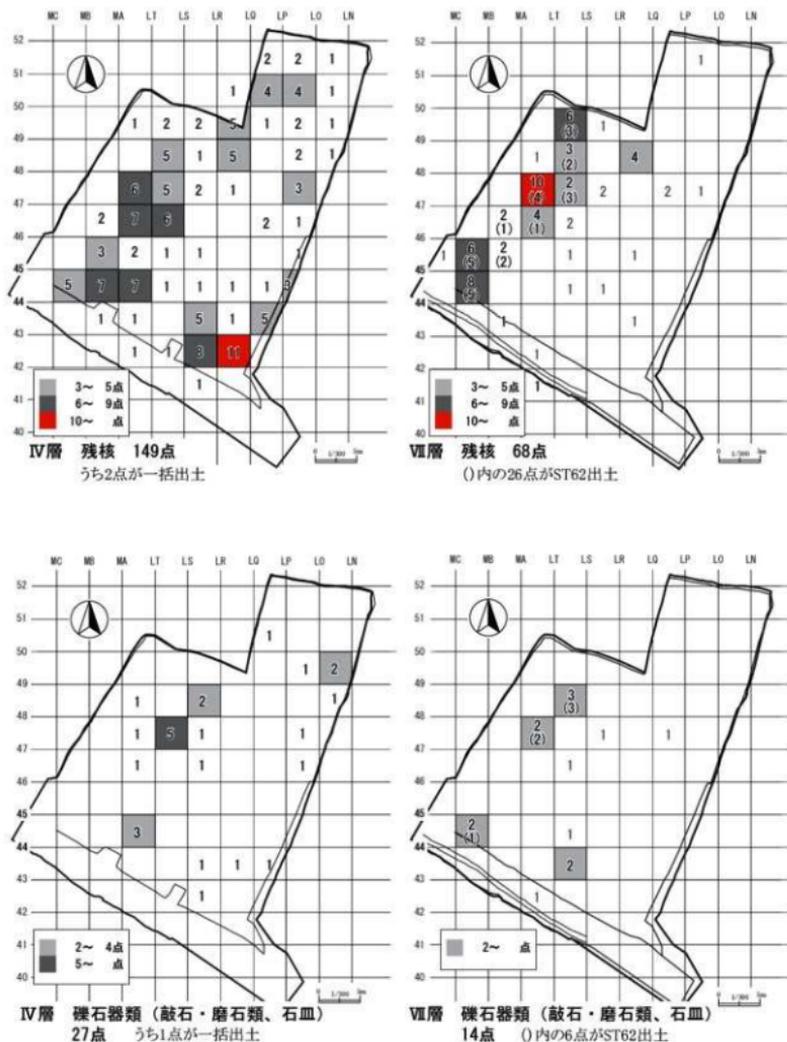
	礫石・磨石類	石皿	磨製石斧	磨製石斧調整剝片	半円状扁平打製石器	石錘	合計
遺構内	12	4	0	0	1	1	18
遺構外	43	7	5	3	1	2	61
IVa	2	0	0	0	0	0	2
IVb	20	2	1	2	0	1	26
IVc	2	1	0	0	0	0	3
VII	0	0	1	0	0	0	1
VIIa	5	1	0	1	0	0	7
VIIb	0	0	1	0	0	0	1
VIIc	2	0	1	0	0	1	4
IX	5	0	0	0	1	0	6
X	0	1	1	0	0	0	2
X-XI	1	0	0	0	0	0	1
層位不明	6	2	0	0	0	0	8
合計	55	11	5	3	2	3	79

残核分類別一覧

	I			II			III	IV	合計		
	A	B		計	A	B				計	
		a	b			計					計
遺構内	8	6	7	21	9	6	15	24	14	74	
遺構外	17	14	25	56	46	34	80	95	37	268	
III	1	0	1	2	2	1	3	2	0	7	
IV	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
IVa	0	0	0	0	1	2	3	2	1	6	
IVb	7	9	10	26	16	10	26	41	10	103	
IVc	0	2	3	5	6	7	13	11	8	37	
IVb-IVc	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	
VI	1	0	0	1	0	1	1	0	0	2	
VIIa	1	1	4	6	3	3	6	5	3	20	
VIIb	1	2	1	4	1	0	1	5	0	10	
VIIc	0	0	0	0	4	2	6	4	1	11	
VIIa-VIIc	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
IX	3	0	3	6	3	3	6	6	2	20	
X	0	0	0	0	3	0	3	3	0	6	
IVb-VIIc	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
IVb-IX	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	
VIIb-IX	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
X-XI	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	
層位不明	3	0	3	6	7	4	11	13	7	37	
合計	25	20	32	77	55	40	95	119	51	342	



第127図 剥片石器層別分布図



第128図 残核・礫石器分布図

筒状石器（第131図4～18）IX層から2点、VII層から11点、IV層から21点が出土。形態分類では、39点中23点が撥形（Ⅰ類）が最も多く、次に5点の楕円形（Ⅱ類）、4点の棒状（Ⅲ類）となる。再加工品（Ⅴ類）の中には、刃部側の折損部分に対し、再加工を施すもの（第131図17）や器形全体に再加工を施し、撥型から棒状に形態を変化させたもの（第131図18）がある。

筒状石器未成品（第131図19、第132図1～6）IX層から3点、VII層から7点、IV層から11点が出土。表裏に自然面を残しており、扁平礫素材と推定されるもの（第132図3、4）や素材剥片の主剥離面側を残し、小形の横長幅広剥片素材と推定されるもの（第132図1、2）がある。

石錐（第132図7～12）XI層から2点、X層から2点、VII層から10点、IV層から11点が出土。第132図10は、左側縁と裏面のみ整形加工が施され、先端部も折損しているため製作途上の可能性がある。

石材は、珪質頁岩が26点で最も多く、次に玉髓3点、玉髓質頁岩1点である。

スクレイパー（第132図13～19、第133図1～8）X層から7点、IX層から2点、VII層から21点、IV層から53点が出土。形態分類では、99点中75点でサイドスクレイパー（Ⅰ類）が最も多く、次に18点のエンドスクレイパー（Ⅱ類）、3点のノッチドスクレイパー（Ⅲ類）となる。X層出土のスクレイパー（第132図13～15、19、第133図1、8）は、共通して扁平礫素材を利用しており、縁辺に連続した急斜度の二次加工痕が認められる。第132図17、第133図5は玉髓質頁岩製。

二次加工のある剥片（RF）（第133図9、10）（第10表）X層から58点、IX層から187点、VII層から1035点、IV層から1749点が出土。第133図10は黒曜石製。

微細剥離痕のある剥片（UF）（第10表）X層から10点、IX層から106点、VII層から511点、IV層から1101点が出土。

剥片（F）と砕片（C）（第10表）剥片はX層から25点、IX層から224点、VII層から766点、IV層から996点が出土。砕片はIX層から17点、VII層から152点、IV層から138点が出土。

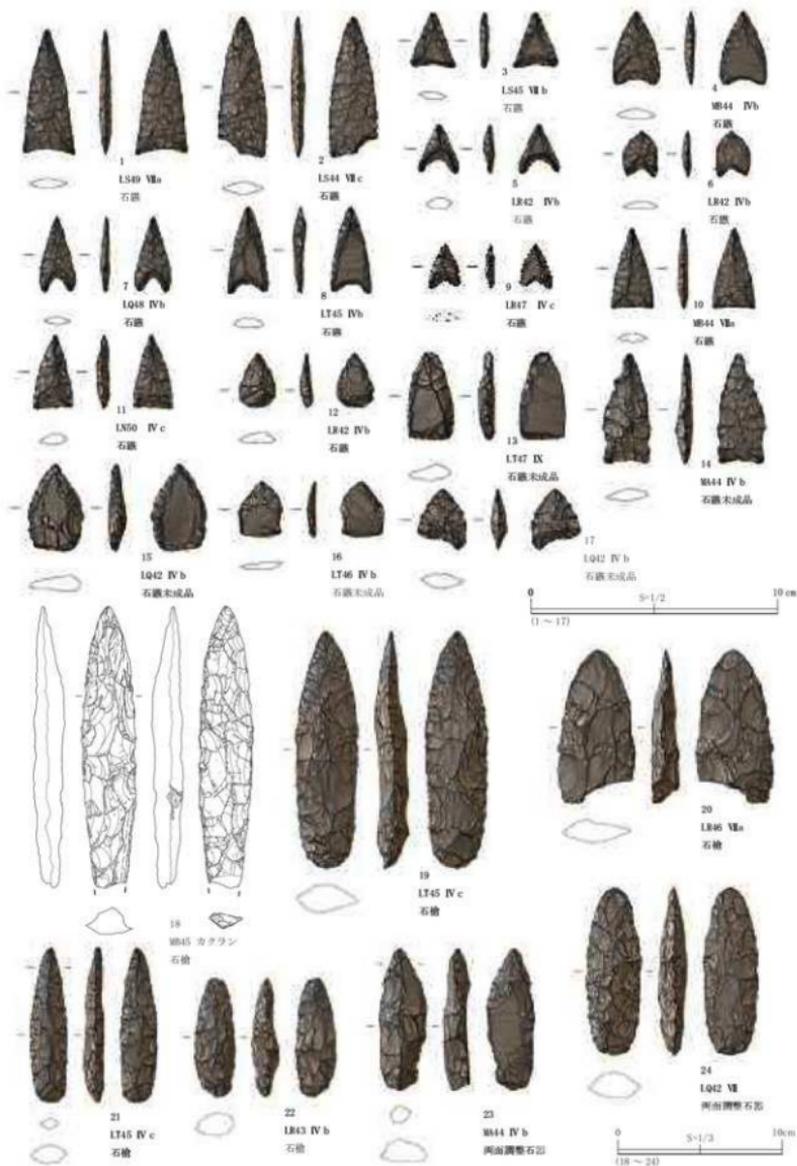
楔形石器（第133図11～13）X層から1点、IV層から5点が出土。両極打法による剥離が長軸方向の一对のもの（第133図11、13）と長軸方向と短軸方向の二対のもの（第133図12）がある。第133図12、13は玉髓質頁岩製。

石刃（第133図14）打面は平坦打面で、打面縁調整が認められる。背面構成では、打面と同一方向から連続して縦長剥片が剥離されたと推定される。珪質頁岩製。

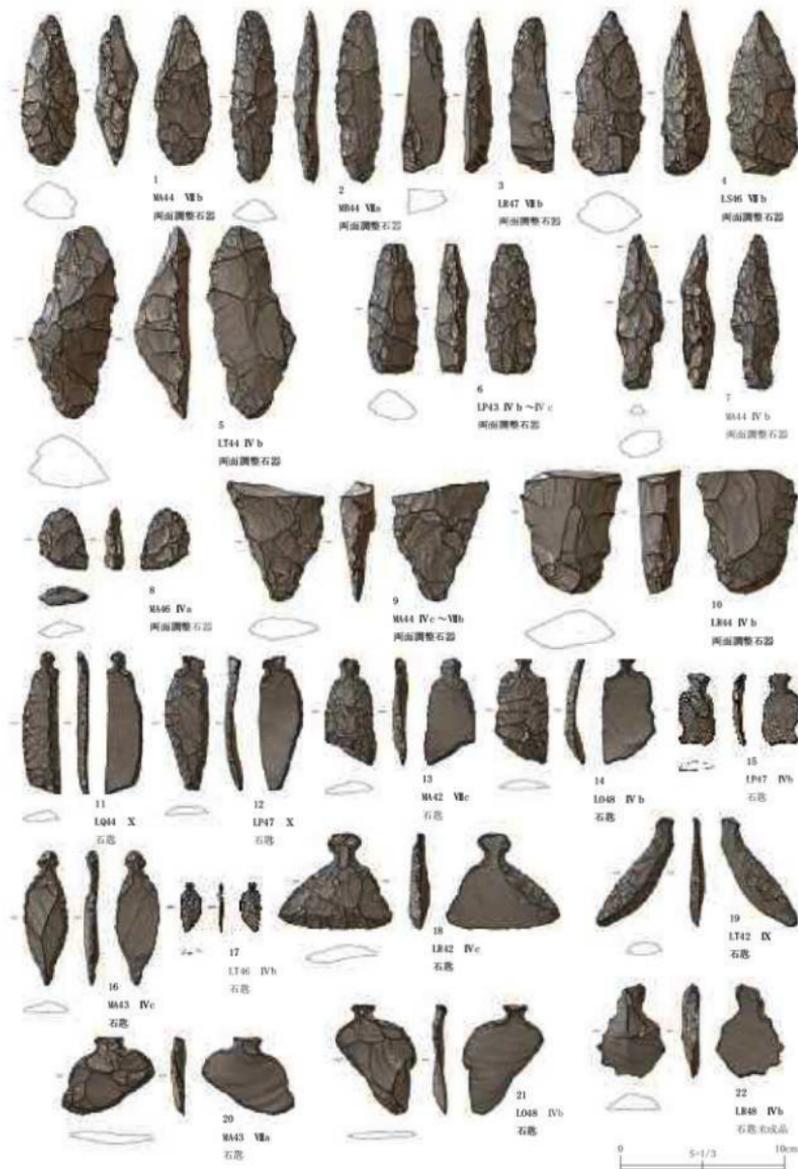
接合資料（第133図15）同一方向から剥離された二次加工のある剥片1点と剥片1点が接合している。どちらも入念な打面縁調整が認められる。珪質頁岩製。

残核（第133図16、第134図～第137図）残核はX層から6点、IX層から20点、VII層から42点、VI層から2点、IV層から149点が出土。分類別では、268点中95点が原石形状不明の剥片素材（Ⅲ類）で最も多く、次に80点の小形原石素材（Ⅱ類）、56点の大形原石素材（Ⅰ類）、37点の素材形状不明（Ⅳ類）となる。全体の傾向としては、石核の消費が進んだものが多く、原石形状が大きく、石核の消費が進んでいないものが少ない傾向にある。また、石核として利用した後に、敲石に転用されたもの（第137図14）やアスファルトと推定される黒色付着物が付いているもの（第25表、写真図版36①）もある。石材は、珪質頁岩が245点で最も多く、次に玉髓質頁岩15点、玉髓3点、石英3点、鉄石英1点、碧玉1点である。第133図16、第136図7、13、第137図5、9、12は玉髓質頁岩製。第134図3、第136図8は石英製。第136図10は鉄石英製。写真図版36②は碧玉製。

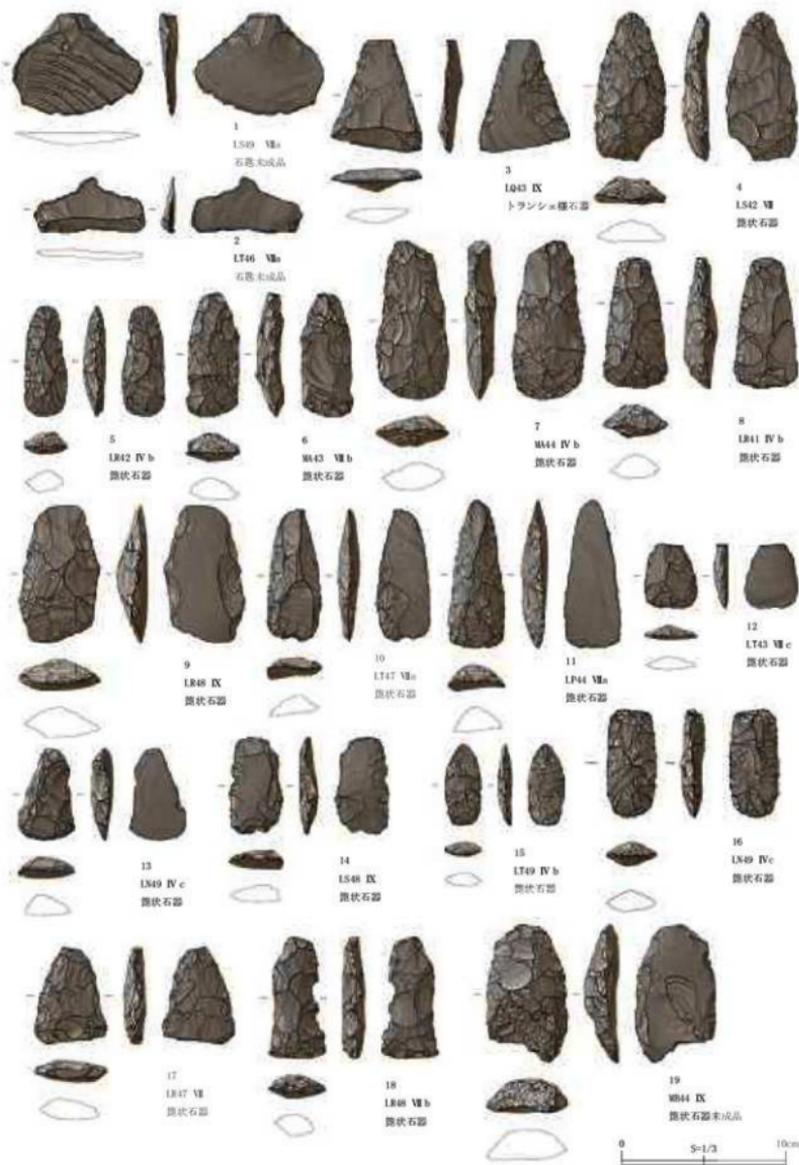
磨製石斧（第138図1～3）VII層から3点、IV層から1点が出土。第138図1は、器体の表裏面に研磨より新しい敲打痕があり、敲石として転用された可能性がある。安山岩製。第138図2、3は、磨製石斧の刃部破片。2は透閃石岩製。3は緑色岩（アオトラ石）製。



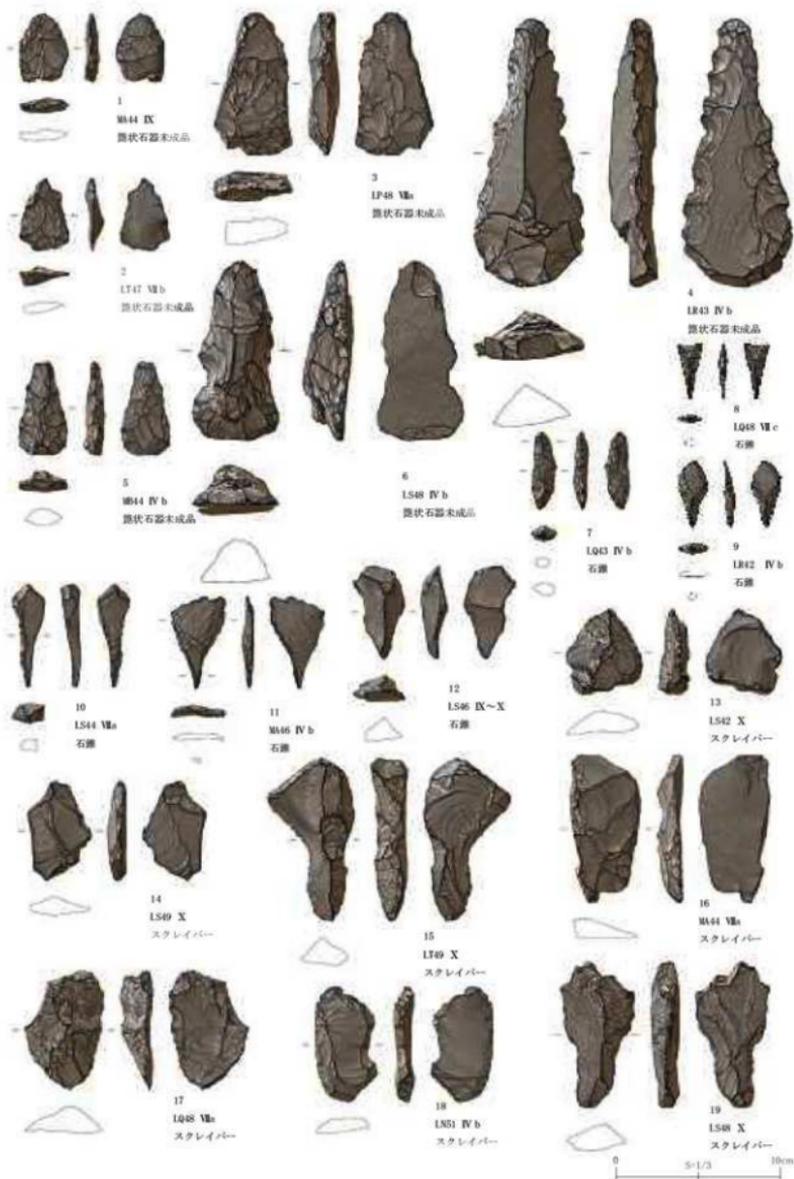
第129図 遺構外出土石器（1）



第130図 遺構外出土石器(2)



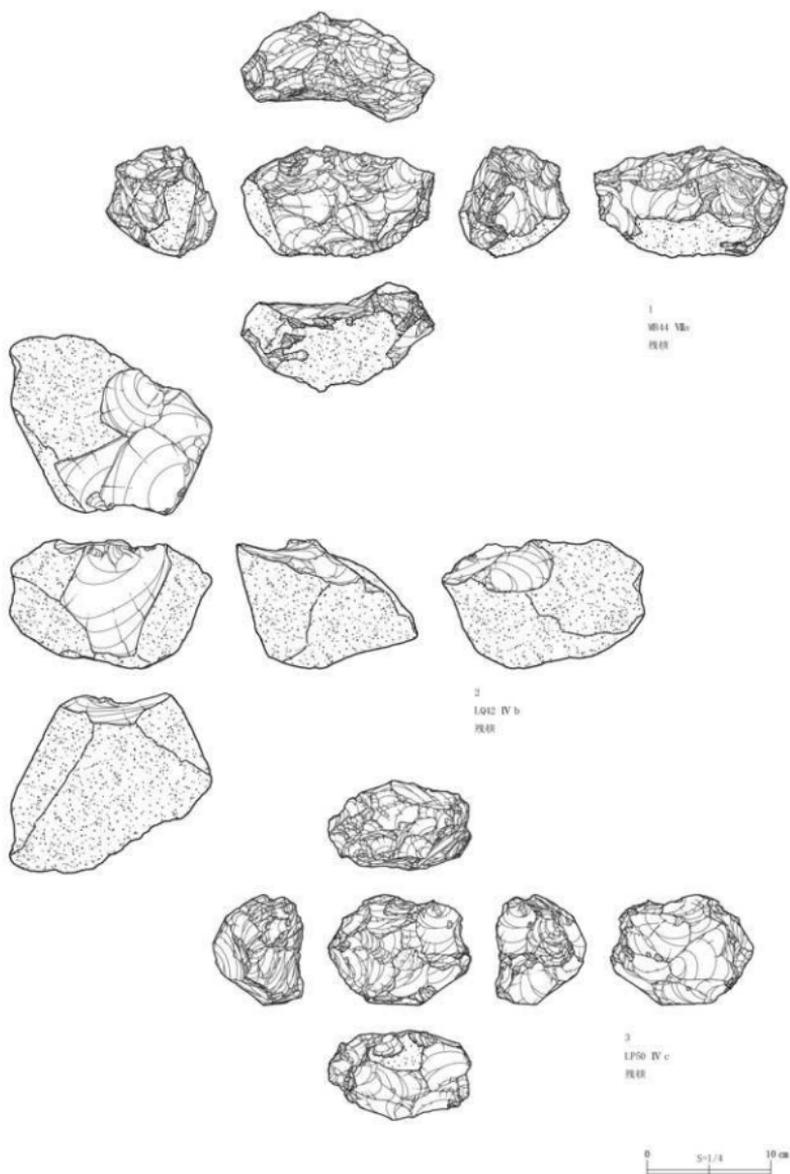
第131図 遺構外出土石器(3)



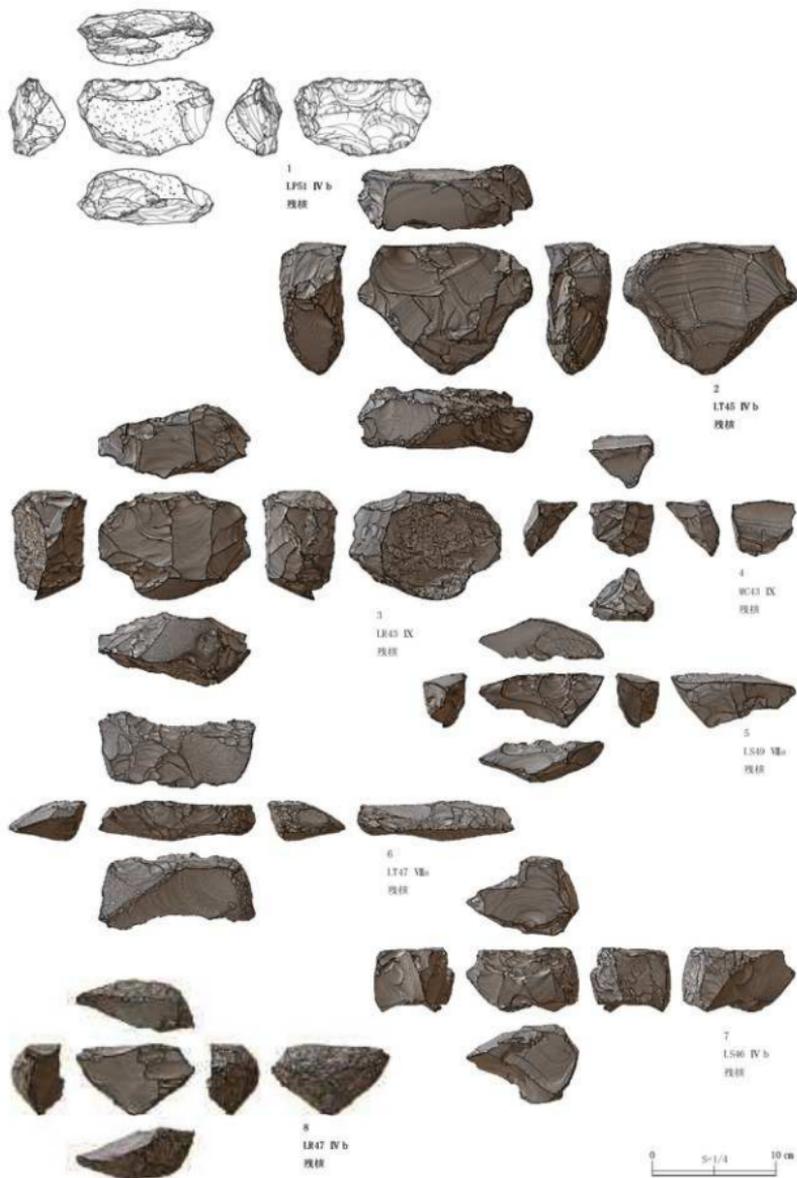
第132図 遺構外出土石器(4)



第133図 遺構外出土石器(5)



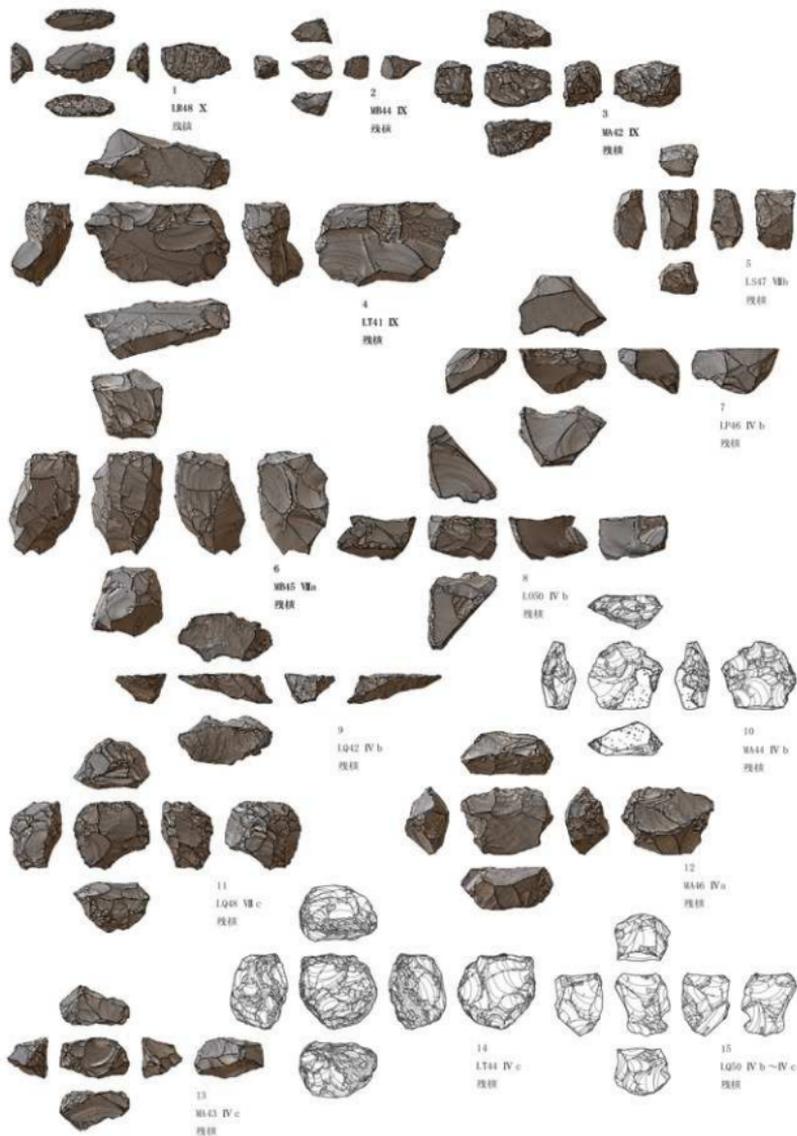
第134図 遺構外出土石器(6)



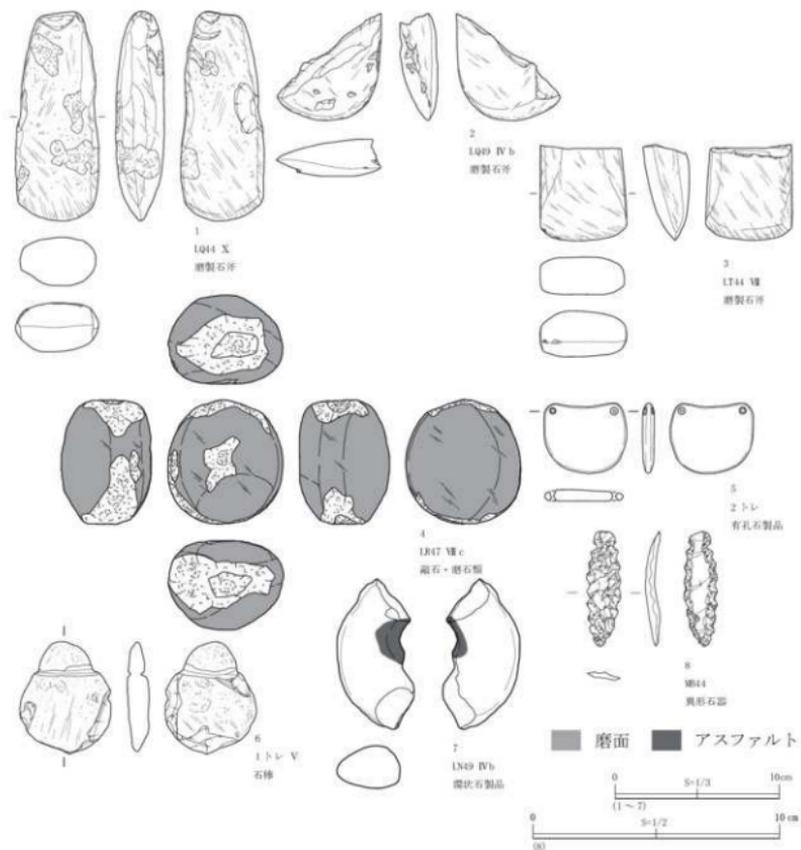
第135図 遺構外出土石器（7）



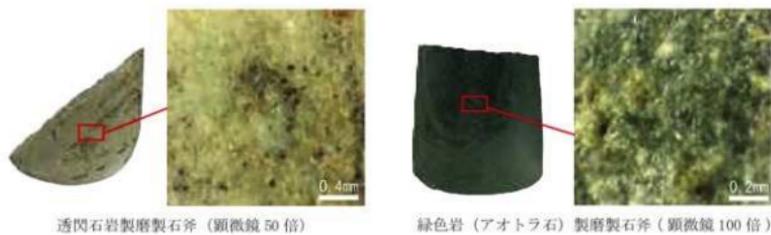
第136図 遺構外出土石器(8)



第 137 図 遺構外出土石器 (9)



第138図 遺構外出土石器 (10)



第139図 顕微鏡写真

敲石・磨石類 (第138図4) 敲石・磨石類は、IX層から5点、VII層から7点、IV層から24点が出土。使用痕跡の内訳は、敲打痕跡のみが13点、敲打痕跡と磨面の併存が12点、磨面のみが18点である。また、敲石・磨石類の中には赤色顔料が付着しているもの(第25表、写真図版36③)もある。

石製品 (第138図5～8) 合計7点で、このうち4点を掲載した。掲載外には、環状石製品2点、石棒破片1点を含む。第138図5は、泥岩製の有孔石製品。2つの貫通孔は表裏両側から穿孔されている。第138図6は、安山岩製の石棒。上部の表裏面には、擦り切りによる沈線が施されている。第138図7は、流紋岩製の環状石製品。内縁部に黒色付着物が付着している。第138図8は、珪質頁岩製の異形石器。薄手の剥片素材を利用して、表面に平坦加工が行われた後、裏面に押圧剝離による急斜度加工が施されている。上部につまみを有することから石匙を模した形態である。

玉髄質頁岩製石器 (第13表) 暗褐色～灰白色で透明感があり、弱い光沢をもつ石材である。放散虫化石などの微化石を含む部分には、透明～白色の玉髄が認められる。色調と放散虫化石を含有するという特徴から玉髄と区別した。遺構内出土も合わせて、342点出土した。遺構外では、IX層から7点、VII層から53点、IV層から167点出土した。器種は遺構内出土も含めて、石鏃6点、石鏃未成品5点、石槍2点、両面調整石器4点、石匙未成品3点、篋状石器2点、篋状石器未成品2点、石錐2点、スクレイパー12点、楔形石器7点、残核27点、RF11点、UF41点、剥片102点、破片12点で構成される。このうち残核は、小形原石素材(Ⅱ類)が9点で最も多く、次に原石形状不明の剥片素材(Ⅲ類)が7点、大型原石素材(Ⅰ類)4点、素材形状不明(Ⅳ類)2点である。

玉髄製石器 (第13表) 石英の微小な結晶が網目状に集まった石材である。色調は橙色で、透明感が強い。遺構内出土も合わせて、148点出土した。遺構外では、IX層から5点、VII層から38点、IV層から35点出土した。器種は遺構内出土も含めて、石匙2点、石錐3点、楔形石器2点、残核4点、RF42点、UF33点、剥片58点、破片2点、石製品1点で構成される。

石英製石器 (第13表) 乳白色～白色不透明で、石英脈の結晶化が認められない石材である。ガラス質で極めて硬質である。遺構内出土も合わせて、122点出土した。遺構外では、IX層から4点、VII層から36点、IV層から38点出土した。器種は遺構内出土も含めて、石鏃2点、石錐1点、残核5点、RF39点、UF20点、剥片55点で構成される。

鉄石英・碧玉製石器 (第13表) 玉髄が酸化鉄などの不純物により、変成作用を受けた石材である。貝殻状の割れ口を呈し、不透明で光沢がある。赤色不透明のものを鉄石英、緑色不透明のものを碧玉として分類した。鉄石英は遺構外のIX層から1点、VII層から4点、IV層から7点出土した。器種は遺構内出土も含めて、スクレイパー1点、残核1点、RF4点、UF3点、剥片7点で構成される。碧玉は遺構外のIX層から1点出土した。残核1点、RF2点で構成される。

黒曜石製石器 (第133図10) 黒色で透明度が高く、夾雑物が見られない。産地推定分析を実施し(第IV章第6節)、男鹿産と推定された。

透閃石岩製石器 (第138図2、第139図) 透明～灰白色の透閃石(トレモライト)と緑色の緑閃石(アクチノライト)の結晶が集まった石材である。比重は2.9～3.0で、磁性が弱く、衝撃に対して極めて丈夫な岩石である(中村2019)。第138図2は、全体的な色調は不透明な緑色で、灰白色の透閃石が混入している。表面にはモザイク状、格子目のように見える模様があり、これはせん断変形を受けたものである。これらの特徴は、岩手県早池峰複合岩体由来のもので共通する。

緑色岩(アオトラ石)製石器 (第138図3、第139図) 暗緑灰色(細粒部)と暗灰色(粗粒部)が数cm単位で互層する特徴をもつ石材である。針状の緑閃石が入り組んで含まれており、衝撃に対して丈夫な組織となっている(中村・吉川2016、中村2019)。現在のところ、細粒部と粗粒部が層状になった

第13表 出土石器石材一覧

	遺構内	遺構外	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	XI層	
剥片石器	珪質頁岩	2778	8403	7	43	182	4092	8	9	2488	8	554	113	189
	玉髓質頁岩	98	244			7	167			53		7		
	玉髓	59	89			1	35			38		5	1	
	石英	33	89			3	38			36		4		1
	鉄石英	3	12				7			4		1		
	碧玉		3			1						1		
	黒曜石		1				1							
礫石器・石製品	安山岩	14	47				23	1		9		4	2	
	流紋岩	6	10				6			2		1		
	閃緑岩		1									1		
	玄武岩	1	3				3							
	粗粒玄武岩		2				1			1				
	泥岩		5				4							
	緑色凝灰岩		1				1							
	結晶片岩		2				1			1				
	緑色岩		1							1				
	透閃石岩		1				1							
合計	2992	8914	7	43	194	4380	9	9	2633	8	578	116	190	

	III~IV	IV~V	IV~VI	IV~VII	VII~VIII	IV~IX	IV~X	VII~IX	IX~X	IX~XI	X~XI	不明	合計	
剥片石器	珪質頁岩	19	14	3	37	2	152	1	274	54	12	45	97	11181
	玉髓質頁岩				1				3			1	5	342
	玉髓	1					2		4				2	148
	石英						1		6					122
	鉄石英													15
	碧玉												1	3
	黒曜石													1
礫石器・石製品	安山岩										1	7	61	
	流紋岩											1	16	
	閃緑岩												1	
	玄武岩												4	
	粗粒玄武岩												2	
	泥岩											1	5	
	緑色凝灰岩												1	
	結晶片岩												2	
	緑色岩												1	
	透閃石岩												1	
合計	20	14	3	38	2	155	1	287	54	12	47	114	11906	

緑色岩は、北海道沙流郡平取町の額平川流域でのみ確認されている。

剥片石器石材は、遺構内外ともに珪質頁岩が最も多く、全体の94.0%が占められている。層別別の石材利用割合では、X層では97.4%、IX層では95.8%、VII層では94.6%、IV層では93.5%となっており、時期が古くなるにつれて珪質頁岩の利用割合が高くなる傾向にある。その他の石材については、玉髓質頁岩が330点（2.8%）、玉髓148点（1.2%）、石英122点（1.0%）、鉄石英15点（0.1%）、碧玉3点、黒曜石1点の順で含まれている。

礫石器・石製品の石材は、安山岩が61点と最も多く、流紋岩、玄武岩、閃緑岩とともに、蔽石・磨石類の利用が多い。粗粒玄武岩や緑色凝灰岩、緑色岩、透閃石岩は磨製石斧に利用され、泥岩や結晶片岩は石製品への利用が認められる。

第14表 遺構内出土土器観察表(1)

調査番号	品名	形状	分類	記録番号/ナブ	施文(施文・文様)/調整	取土	付着物	備記事項
84-1	浅鉢	無文	縄紋中期	5122	紅(ナブ、ヨコ)、陸奥/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
84-2	浅鉢	無文	縄紋中期	5122	黒タテ/ナブ	中～縄紋中, 石瓦, 海磨青針	西面に灰化物	
84-3	浅鉢	口縁文	縄紋中期	5122-8993	沈黙/ナブ	中～縄紋中, 石瓦, 海磨青針	西面に灰化物	
84-4	浅鉢	無文	縄紋中期	5122-8997	赤黒施文(丸), 沈黙/ナブ	中～縄紋中, 石瓦, 海磨青針	西面に灰化物	
84-5	浅鉢	無文	縄紋中期	5122	赤黒施文(丸), 沈黙/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
84-6	浅鉢	胴部～底面	縄紋中期	5122	黒(ナブ、沈黙、黒縁起線)	縄～中縄紋, 石瓦, 黒縁起線		6a(900-6a-901)
85-1	浅鉢	口縁文	縄紋中期	5122-8993-04	赤黒施文(陸奥系), 沈黙/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
85-2	浅鉢	胴部～底面	縄紋中期	5122-8996	赤黒施文(丸ナブ), 沈黙, 黒縁起線/ナブ	縄～中縄紋, 石瓦, 黒縁起線	西面に灰化物	
86-1	浅鉢	無文	早期弥生	5126	陸奥, 円形調整文/ナブ	縄縄, 中～縄紋中, 海磨青針		
86-2	浅鉢	無文	早期弥生	5126	黒タテ, 沈黙/ナブ	中～縄紋中	西面に赤色顔料ク	
86-3	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	黒(ナブ、陸奥、沈黙/ナブ)	縄～縄紋中, 石瓦, 海磨青針		
86-4	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	陸奥, 沈黙/ナブ	中～縄紋中		
86-5	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	陸奥, 沈黙/ナブ	中～縄紋中, 石瓦	西面に灰化物	
86-6	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	陸奥, 沈黙/ナブ	中～縄紋中		
86-7	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	陸奥, 沈黙/ナブ	中～縄紋中		
86-8	浅鉢	底面	早期弥生	5126-8999	沈黙/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針		黒点瓦
86-9	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	黒(ナブ、陸奥、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に赤色顔料	
86-10	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	口縁部～赤黒文(丸), 円形調整文/ナブ	縄縄, 黒研粒		
86-11	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	黒(ナブ、陸奥, 沈黙, 円形調整文/ナブ)	縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
86-12	浅鉢	胴部～底面	早期弥生	5126	黒(ナブ、沈黙, 沈黙, 円形調整文/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
86-13	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126	沈黙/ナブ	中～縄紋中	西面に灰化物	
86-14	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126-5304	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
89-1	浅鉢	底面	V形	5126	ナブ	中～縄紋中, 海磨青針		
89-2	浅鉢	底面	V形	5126-8996	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	縄～中縄紋中, 海磨青針	底面に灰化物	
89-3	浅鉢	胴部～底面	V形	5126	ナブ	中～縄紋中	西面に砂粒状	沈黙
89-4	浅鉢	口縁文	早期弥生	5126-8996	黒(ナブ、沈黙, 陸奥, 突粒, 赤点状底面)	縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
74-1	浅鉢	無文	早期弥生	5126-8996	黒(ナブ、沈黙, 陸奥/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
74-2	浅鉢	無文	早期弥生	5K129	黒タテ/ナブ	縄～縄紋中		
74-3	浅鉢	無文	早期弥生	5K129	赤黒文(丸)/西面にワキ	縄縄, 中～縄紋中		
74-4	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K129	沈黙/西面にワキ	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
74-5	浅鉢	無文	早期弥生	5K129	黒(ナブ、陸奥、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
74-6	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K129	黒(ナブ、沈黙, 陸奥, 黒(ナブ)	中～縄紋中, 黒縁起線	西面に灰化物	
80-1	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133	黒(ナブ、沈黙、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
80-2	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133-5304	黒(ナブ、陸奥、沈黙/ナブ)	縄縄, 中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
80-3	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
80-4	浅鉢	無文	早期弥生	5K133-ベム5	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
80-5	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133	陸奥/ナブ	縄～中縄紋中, 海磨青針		
80-6	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
80-7	浅鉢	無文	早期弥生	5K133	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
80-8	浅鉢	胴部～底面	早期弥生	5K133	黒(ナブ、ナナム/沈黙)	中～縄紋中, 海磨青針		
80-9	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K133	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
82-1	浅鉢	無文	早期弥生	5K02	赤黒文(丸)/ナブ	縄縄, 黒研粒, 海磨青針		
82-2	浅鉢	口縁文～胴部	早期弥生	5K02	結果第1種円形調整文, 調整文/西面にワキ	縄縄, 赤黒研粒, 石瓦		
82-3	浅鉢	無文	早期弥生	5K02	沈黙/ナブ	縄縄, 黒研粒	西面に灰化物	
82-4	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K02	沈黙/ナブ	縄縄, 中～縄紋中, 海磨青針		
82-5	浅鉢	無文	早期弥生	5K02	黒(ナブ、沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
82-6	浅鉢	胴部ナブ	早期弥生	5K19	ナブ	縄～縄紋中, 海磨青針		
82-7	浅鉢	底面	V形	5K19	ナブ	縄～縄紋中, 海磨青針		
82-8	浅鉢	無文	早期弥生	5K19	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
82-9	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K13	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
82-10	浅鉢	底面	V形	5K26	ナブ	中～縄紋中, 石瓦, 海磨青針		新代瓦
82-11	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	緑黒文(丸)/ナブ	縄縄, 中～縄紋中, 石瓦		
82-12	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	赤黒文(丸)/ナブ	縄縄, 中～縄紋中, 石瓦		
82-13	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K12	赤黒文(丸)/ナブ	縄縄, 黒研粒	西面に灰化物	
82-14	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	赤黒文(丸)/ナブ	縄縄, 黒研粒	西面に灰化物	
82-15	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K12	沈黙/ナブ	縄縄, 黒研粒		
83-1	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	ナブ	中～縄紋中, 海磨青針	西面に灰化物	
83-2	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	中～縄紋中, 海磨青針		
83-3	浅鉢	底面	V形	5K12	ナブ	中～縄紋中		新代瓦
83-4	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	黒(ナブ)/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針		
83-5	浅鉢	無文	早期弥生	5K12	黒(ナブ)/ナブ	中～縄紋中, 海磨青針		
83-7	浅鉢	無文	早期弥生	5K06	黒(ナブ、陸奥, 沈黙/ナブ)	縄～縄紋中, 海磨青針		
83-8	浅鉢	口縁文～胴部	早期弥生	5K06-8991	黒(ナブ)/ナブ	縄～縄紋中, 海磨青針		
83-9	浅鉢	無文	早期弥生	5K16	不明/ナブ	縄～縄紋中, 石瓦		
83-10	浅鉢	口縁文	早期弥生	5K06	陸奥, 沈黙	縄～縄紋中, 海磨青針		
83-11	浅鉢	無文	早期弥生	5K06-8992	黒(ナブ)/ナブ	縄～縄紋中		遺跡区画内同一群様

第15表 遺構内出土土器観察表(2)

検出番号	品類	形状	分類	記録番号(1/2)	施文(施文・文様)/装飾	胎土	付着物	検出部位
92-12	深鉢	底高	V形胎	SR06	ナデ	中～細砂粒, 海綿骨針		
97-1	煮炊	口縁部	群群43胎	SR16	沈線, 隆帯, 輪郭筋ナデ	細砂粒, 海綿骨針	内面に赤色顔料	
97-2	深鉢	胴部	群群43胎	SR61	LRナメメ/内面ミダキ	縦線, 中～細砂粒		
100-1	深鉢	底高	群群43胎	SR72-176	最条板瓦風文(3)/ナデ	中～細砂粒		
100-2	深鉢	底高	群群43胎	SR72-836	最条板瓦文/ナデ	縦砂粒, 隆帯, 輪郭筋ナデ	内面に紅色物	
100-3	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1539	乳, 沈線, 刺突文/ナデ	縦線, 石片, 白色細砂粒, 縦砂粒		
100-4	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1547	LR・乳ナメ, 沈線, 刺突文/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 白色細砂粒, 石片		
100-5	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1738	沈線, 隆帯, 刺突文/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 白色細砂粒, 石片, 海綿骨針		
100-6	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1549	隆帯, 刺突文/ナデ	乳～細砂粒, 白色乳～細砂粒, 石片, 海綿骨針	内面に紅色物	
100-7	深鉢	口縁部～胴部	群群43胎	SR72-1736	施文(文), 隆帯/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 文様付, 海綿骨針	内面に紅色物	
100-8	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1816	施文(文), 沈線/内面ミダキ, ナデ	縦線, 石片, 白色細砂粒, 赤色顔料, 中～細砂粒		
100-9	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-1737	LRナメ, ナメメ/内面ミダキ	縦線, 細砂粒		
100-10	深鉢	口縁部～胴部	群群43胎	SR72-1737	LRナメメ, 沈線/ミダキ	縦線, 細砂粒	内面に紅色物	
101-1	深鉢	口縁部～胴部	群群43胎	SR72-1737	最条, 沈線/内面ミダキ	縦線, 細砂粒	内面に紅色物	
101-2	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-9814	乳ナメ, 沈線, 刺突	縦線, 中～細砂粒, 石片, 海綿骨針		
101-3	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-1737	施文(文), 隆帯/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 石片	内面に紅色物	
101-4	深鉢	口縁部～底高	群群43胎	SR72-1549	LRナメ/内面ミダキ	縦線, 細砂粒	内面に紅色物	
101-5	深鉢	口縁部～底高	群群43胎	SR72-1737	LRナメ, ナメ, ナメメ/ミダキ, ナデ	縦線, 細砂粒	内面に紅色物	
102-1	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-9814	LRナメ/ナデ	縦線, 乳～細砂粒, 石片		
102-3	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-9815	最条第1種斜線文(3)/ナデ	縦線, 乳～細砂粒	内面に紅色物	
102-4	深鉢	胴部～底高	群群43胎	SR72-1737	最条第1種斜線文(3)内面ミダキ, ナデ	縦線, 細砂粒, 海綿骨針	内面に紅色物	
102-5	深鉢	胴部	群群43胎	SR72-1549	最条第1種斜線文/ナデ	縦線, 細砂粒, 石片		
102-6	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-1737	隆帯, 最条第1種斜線文/ナデ	縦線, 中～細砂粒	内面に紅色物	
102-7	深鉢	口縁部	群群43胎	SR62	施文(文), 不整施文(3), 最条(文3)/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 石片		
103-1	深鉢	口縁部～底高	群群43胎	SR72-9816	施文(文)/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 海綿骨針	内面に紅色物	
103-2	深鉢	口縁部～底高	群群43胎	SR72-1747	施文(文)/ミダキ, ナデ	縦線, 細砂粒	内面に紅色物	
103-3	深鉢	口縁部～胴部	群群43胎	SR72-1736	施文(文)/ナデ, 内面ミダキ	縦線, 乳～細砂粒	内面に紅色物	
103-4	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-1747	施文(文)/ナデ	縦線, 中～細砂粒	内面に紅色物	
103-5	深鉢	口縁部	群群43胎	SR72-1747	施文(文)/ナデ	縦線, 中～細砂粒		
104-1	深鉢	口縁部～底高	群群43胎	SR72-1538	施文(文3)/ナデ	縦線, 白色中～細砂粒, 乳～細砂粒, 石片	内面に紅色物	
104-2	深鉢	口縁部～胴部	群群43胎	SR72-1747	施文(文)/ナデ	縦線, 細砂粒		
104-4	深鉢	底高	V形胎	SR72-9816	赤線/ナデ	縦線, 細砂粒, 海綿骨針		
104-5	煮炊	口縁部	V形胎	SR72-1549	施文(文)/ナデ	縦線, 白色中～細砂粒, 乳～細砂粒		
110-1	深鉢	胴部	群群43胎	SR7118	LRナメ/ナデ	縦線, 細砂粒, 文様付		
110-2	深鉢	胴部	群群43胎	SR7118	施文(文3)/内面ミダキ	縦線, 中～細砂粒, 石片		
110-3	深鉢	口縁部	群群43胎	SR7109	LRナメ, 隆帯/ナデ	中～細砂粒, 海綿骨針	内面に赤色顔料	
110-4	深鉢	胴部	群群43胎	SR7109	LRナメ, 沈線/ナデ	中～細砂粒, 海綿骨針		
110-5	煮炊	口縁部～胴部	群群43胎	SR7102	LRナメ, 沈線/ナデ	中～細砂粒, 石片, 海綿骨針	内面に紅色物	
110-6	深鉢	口縁部	群群43胎	SR7100	沈線/ナデ	中～細砂粒, 海綿骨針		
110-7	深鉢	胴部	群群43胎	SR7121	LRナメメ/内面ミダキ	縦線, 細砂粒, 石片, 最条板瓦筋		
110-8	深鉢	底高	V形胎	SR7110	ナデ	縦線, 中～細砂粒, 石片		
110-9	深鉢	胴部	群群43胎	SR7132	施文(文3)/ナデ	縦線, 白色細砂粒, 石片		
110-10	深鉢	胴部	群群43胎	SR7132	最条第1種 斜線文/ナデ	縦線, 中～細砂粒, 石片	内面に紅色物	

第16表 遺構内出土土器製品観察表

検出番号	出土遺構-グッド	文様	胎土	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
76-6	SK129	刺突文	中～細砂粒, 海綿骨針	(2.8)	(3.3)	1.3	(7.5)
76-7	SK129	隆帯	粗～細砂粒, 海綿骨針	(6.2)	(5.9)	1.7	(50.6)
76-8	SK129	—	中～細砂粒, 海綿骨針	(3.6)	(3.4)	1.4	(15.4)
104-6	ST62-MB45	—	細砂粒	2.3	2.3	1	4.2

第17表 遺構内出土石器観察表(1)

標記番号	器種	分類	出土遺構・層位・グリッド	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
65-3	ナイフ形石器	—	S122	珪質頁岩	63.0	25.0	7.0	7.1	焼熱痕跡
65-4	残核	IV	S122	珪質頁岩	18.1	34.0	23.0	19.8	油脂光沢
65-5	敲石・磨石類	—	S122-床直	安山岩	134.5	72.8	51.9	660.0	磨のみ
65-6	敲石・磨石類	—	S122-複式印上	安山岩	68.8	71.5	41.2	253.8	磨のみ
65-7	石皿	—	S122-印	流紋岩	194.8	81.7	91.2	1,167.0	
69-5	石鏝	I b	S128	珪質頁岩	17.5	14.3	2.9	0.7	
69-6	石鏝	I b	S128	石英	11.5	16.6	3.9	0.6	
69-7	石鏝	IV	S128	玉髄質頁岩	45.6	15.2	8.2	5.2	
69-8	石鏝未成品	—	S128	玉髄質頁岩	25.9	17.6	7.0	3.1	
69-9	石鏝	I	S128	玉髄質頁岩	105.4	33.6	10.2	44.0	
69-10	石鏝	II	S128	珪質頁岩	51.0	27.5	8.9	11.1	
69-11	石鏝未成品	—	S128	珪質頁岩	48.0	51.7	10.6	21.3	
69-12	両面調整石器	I	S128	珪質頁岩	90.7	27.8	16.1	38.4	床面直上出土
69-13	両面調整石器	III a	S128	珪質頁岩	95.8	28.8	19.6	51.9	
70-1	塊状石器	II	S128	珪質頁岩	85.8	38.9	22.9	69.9	
70-2	塊状石器未成品	—	S128	珪質頁岩	51.9	42.8	16.2	30.2	油脂光沢
70-3	塊状石器未成品	—	S128	珪質頁岩	88.3	49.8	27.4	133.4	油脂光沢
70-4	スクレイパー	I a	S128	玉髄質頁岩	42.4	45.3	21.9	37.8	
70-5	スクレイパー	I a	S128	珪質頁岩	64.2	79.7	24.4	90.4	油脂光沢
70-6	スクレイパー	I a	S128	珪質頁岩	49.2	82.6	14.1	46.0	
70-7	スクレイパー	I c	S128	珪質頁岩	48.6	43.9	15.8	29.7	
70-8	スクレイパー	IV	S128	珪質頁岩	53.2	34.4	12.8	20.5	
70-9	楔形石器	—	S128	玉髄質頁岩	34.5	31.8	12.2	13.6	
70-10	石刃	—	S128	珪質頁岩	95.0	29.5	14.7	29.1	
70-11	接合資料	—	S128	珪質頁岩	52.4	40.1	10.6	11.9	RF1点, F2点 油脂光沢
70-12	接合資料	—	S128+LR43-IV b	珪質頁岩	40.4	45.5	19.8	25.1	F2点 油脂光沢
70-13	接合資料	—	S128	珪質頁岩	41.9	52.4	69.0	11.2	RF2点
70-14	接合資料	—	S128	珪質頁岩	54.5	69.7	31.2	85.5	F1点, 残核1点
70-15	残核	III	S128	珪質頁岩	57.6	48.1	34.1	123.9	油脂光沢
70-16	残核	IB-a	S128	珪質頁岩	112.0	75.9	46.3	410.0	
71-1	残核	IB-b	S128	玉髄質頁岩	61.6	103.6	53.8	381.2	
71-2	残核	IB-b	S128	玉髄質頁岩	66.9	89.6	53.4	209.9	
71-3	残核	III	S128	珪質頁岩	28.6	56.5	26.8	30.1	
71-4	石鏝	—	S128	安山岩	60.0	62.6	20.2	90.0	
71-5	敲石・磨石類	—	S128	流紋岩	106.6	74.8	67.2	553.0	磨・敲
71-6	石皿	—	S128-SM04	安山岩	136.0	84.8	75.0	1,192.5	
74-2	石鏝	V	S140	珪質頁岩	15.0	13.1	4.9	1.0	印内土器内出土
74-3	石皿	—	S140	流紋岩	194.5	162.0	46.5	1,432.5	
76-9	石鏝	I b	SK129	珪質頁岩	23.4	16.1	4.8	1.7	F7X73付着 油脂光沢
76-10	石鏝	I b	SK129	珪質頁岩	22.8	13.9	3.6	1.1	油脂光沢
76-11	石鏝	I b	SK129	珪質頁岩	15.9	15.3	3.9	1.0	油脂光沢
76-12	石鏝	I b	SK129	珪質頁岩	16.1	16.1	3.6	0.9	油脂光沢
76-13	石鏝	III	SK129	珪質頁岩	50.9	33.8	8.9	14.7	
76-14	石鏝	IV	SK129	珪質頁岩	39.5	31.7	5.1	6.3	油脂光沢
76-15	石鏝未成品	—	SK129-床直	珪質頁岩	51.6	72.2	19.8	47.9	油脂光沢
76-16	塊状石器	I c	SK129	玉髄質頁岩	52.5	36.1	10.8	17.8	
76-17	塊状石器未成品	—	SK129	珪質頁岩	72.0	30.8	27.6	52.8	
76-18	塊状石器未成品	—	SK129	珪質頁岩	75.5	57.0	20.2	85.8	
76-19	塊状石器未成品	—	SK129	珪質頁岩	74.0	48.9	13.6	51.6	油脂光沢
76-20	スクレイパー	I c	SK129	珪質頁岩	72.6	21.6	8.6	11.0	
77-1	残核	IB-a	SK129	玉髄質頁岩	91.2	137.3	124.3	2,140.0	
77-2	残核	IB-a	SK129	珪質頁岩	57.9	116.5	41.5	226.9	
77-3	残核	II A	SK129	珪質頁岩	75.8	42.0	38.6	139.4	
77-4	残核	III	SK129	珪質頁岩	49.9	76.3	42.0	191.6	油脂光沢
77-5	残核	III	SK129	珪質頁岩	45.5	65.2	25.9	55.6	
77-6	残核	III	SK129	珪質頁岩	68.8	86.5	41.4	219.1	
77-7	残核	IV	SK129	珪質頁岩	66.0	82.8	53.9	304.4	
77-8	残核	IV	SK129	珪質頁岩	61.7	72.7	62.2	305.0	
78-1	半円状扁平打石器	—	SK129-床直	安山岩	80.1	116.8	29.8	376.0	
78-2	敲石・磨石類	—	SK129	玄武岩	105.8	77.2	44.9	447.5	磨のみ
78-3	敲石・磨石類	—	SK129-南ベルト	安山岩	125.7	74.8	46.5	472.0	磨・敲
82-1	両面調整石器	II	SK137-P4	珪質頁岩	95.5	50.9	39.4	149.2	

第18表 遺構内出土石器観察表(2)

標本番号	器種	分類	出土遺構・部位・グリッド	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
82-2	両面調整石器	Ⅲa	SK137	珪質頁岩	36.3	40.1	12.3	19.4	油断光沢
82-3	MP	—	SK137	珪質頁岩	67.3	47.4	14.3	32.0	
86-1	石鏃	I b	SK143	珪質頁岩	19.1	15.6	4.4	1.2	
86-2	石鏃	I b	SK143	珪質頁岩	19.6	17.4	4.2	1.5	油断光沢
86-3	塊状石器	Ⅲ	SK143	珪質頁岩	64.0	30.4	11.0	27.6	7374付着 油断光沢
86-4	スクレイパー	Ⅱ	SK143	玉髄質頁岩	39.1	26.1	11.3	10.6	
92-16	石鏃	I	SK12	珪質頁岩	59.1	48.8	6.8	14.5	
92-17	両面調整石器	Ⅲa	SK64	珪質頁岩	46.9	30.3	11.4	18.5	
92-18	スクレイパー	I b	SK64	珪質頁岩	34.9	24.8	4.8	4.5	
92-19	礫石・磨石類	—	SK64	安山岩	71.4	45.5	41.9	166.7	磨のみ
93-6	塊石	I B-b	SK42	珪質頁岩	80.0	62.9	53.1	258.5	油断光沢
93-13	塊石	Ⅲ	SK46	珪質頁岩	66.9	68.7	27.9	125.6	油断光沢
105-1	石鏃	I a	ST62-8A44	珪質頁岩	52.8	18.8	4.7	3.9	
105-2	石鏃	I a	ST62-L548	珪質頁岩	32.8	15.9	3.7	2.6	
105-3	石鏃	I a	ST62-8B45	珪質頁岩	27.1	13.0	3.4	1.1	
105-4	石鏃	I a	ST62-L547	珪質頁岩	25.7	16.6	3.5	1.7	
105-5	石鏃	I b	ST62-L548	珪質頁岩	26.5	16.9	3.0	1.3	
105-6	石鏃	I b	ST62-L746	珪質頁岩	36.8	17.9	4.5	2.8	7374付着
105-7	石鏃	I b	ST62-L746	玉髄質頁岩	38.8	17.9	5.5	3.4	
105-8	石鏃	I b	ST62-L747	珪質頁岩	31.1	17.6	4.0	2.1	
105-9	石鏃	I b	ST62-8A44	珪質頁岩	33.5	20.3	5.2	3.1	
105-10	石鏃	Ⅱ	ST62-L548	珪質頁岩	19.4	11.4	3.0	0.8	
105-11	石鏃	Ⅱ	ST62-8A47	珪質頁岩	27.4	12.9	4.0	1.2	
105-12	石鏃未成品	—	ST62-L746	珪質頁岩	33.8	22.7	5.1	2.3	
105-13	石鏃未成品	—	ST62-L747	珪質頁岩	23.2	15.5	3.3	1.2	
105-14	石鏃未成品	—	ST62-8B44	玉髄質頁岩	28.4	18.4	9.2	4.4	
105-15	石槍	Ⅱ	ST62-8B45	珪質頁岩	66.8	23.7	11.7	17.1	
105-16	両面調整石器	Ⅲa	ST62-8B45	珪質頁岩	52.4	30.2	10.9	12.8	
105-17	両面調整石器	I	ST62-L747	珪質頁岩	92.8	33.4	16.9	50.4	
105-18	石鏃	I	ST62-L747	珪質頁岩	70.0	36.8	10.2	22.0	
105-19	石鏃	Ⅱ	ST62-8B44	珪質頁岩	57.0	50.5	11.8	25.7	
105-20	石鏃	Ⅲ	ST62-L747	珪質頁岩	59.5	40.3	9.7	20.2	
105-21	石鏃	Ⅲ	ST62-L747	珪質頁岩	77.3	34.6	9.6	24.2	
105-22	石鏃未成品	—	ST62-L746	珪質頁岩	96.3	35.0	11.3	23.5	
105-23	石鏃未成品	—	ST62-8B44	珪質頁岩	56.5	61.2	12.4	25.5	
105-24	石鏃未成品	—	ST62-L747	珪質頁岩	38.5	42.0	11.7	10.8	
106-1	有縁石器	—	ST62-8B45	珪質頁岩	90.0	15.3	9.9	11.4	7374内出土
106-2	有縁石器	—	ST62-L749	珪質頁岩	62.5	15.8	12.2	12.6	
106-3	塊状石器	I a	ST62-8B45	珪質頁岩	69.2	35.5	15.9	36.2	
106-4	塊状石器	I a	ST62-8A46	珪質頁岩	93.2	39.2	16.6	61.1	
106-5	塊状石器	I b	ST62-L548	珪質頁岩	62.8	33.8	10.0	22.6	
106-6	塊状石器	I c	ST62-L548	珪質頁岩	88.8	38.0	23.4	61.7	
106-7	塊状石器	Ⅱ	ST62-8A44	珪質頁岩	105.1	44.1	19.4	93.6	
106-8	塊状石器	Ⅲ	ST62-L746	珪質頁岩	67.0	27.4	14.6	28.0	
106-9	塊状石器	Ⅲ	ST62-L548	珪質頁岩	76.8	26.6	14.9	32.1	
106-10	塊状石器	V	ST62-L747	珪質頁岩	66.4	40.0	17.9	47.0	
106-11	塊状石器未成品	—	ST62-L548	珪質頁岩	76.8	48.0	14.8	49.1	
106-12	塊状石器未成品	—	ST62-8B46	珪質頁岩	53.2	27.9	9.5	12.0	
106-13	塊状石器未成品	—	ST62-8B45	珪質頁岩	100.0	60.4	18.6	106.9	
106-14	塊状石器未成品	—	ST62-L547	珪質頁岩	87.3	54.7	18.9	72.8	
106-15	塊状石器未成品	—	ST62-L747	珪質頁岩	84.7	42.8	20.4	69.9	
106-16	石鏃	I a	ST62-8A46	珪質頁岩	48.0	14.2	5.2	3.3	
106-17	石鏃	Ⅱ a	ST62-8B44	珪質頁岩	48.5	25.8	8.2	7.4	
107-1	石鏃	Ⅱ a	ST62-L747	珪質頁岩	102.0	43.1	16.6	48.4	
107-2	石鏃	Ⅱ b	ST62-8A45-46	珪質頁岩	51.2	11.6	5.8	2.7	
107-3	スクレイパー	I b	ST62-L549	珪質頁岩	39.1	26.4	9.8	10.5	油断光沢
107-4	スクレイパー	I c	ST62-8A44	珪質頁岩	68.2	19.1	8.9	10.0	
107-5	スクレイパー	Ⅱ	ST62-L549	珪質頁岩	51.1	33.9	11.3	21.2	
107-6	スクレイパー	Ⅱ	ST62-L747	珪質頁岩	47.5	45.0	17.4	26.5	油断光沢
107-7	スクレイパー	Ⅲ	ST62-8B44	珪質頁岩	77.8	42.0	12.4	35.0	
107-8	スクレイパー	Ⅲ	ST62-8A44	玉髄質頁岩	47.4	70.7	19.9	36.6	
107-9	楔形石器	—	ST62-8B45	玉髄質頁岩	37.9	30.9	14.4	20.2	

第19表 遺構内出土石器観察表(3)

標図番号	器種	分類	出土遺構・層位・グリッド	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
107-10	残核	IA	ST62-LT47	珪質頁岩	78.6	94.8	60.9	450.0	
107-11	残核	IA	ST62-M644	珪質頁岩	58.5	97.3	61.7	397.7	
107-12	残核	IB-a	ST62-L547	珪質頁岩	72.7	95.7	42.8	251.0	曲削光沢
108-1	残核	IB-b	ST62-M646	珪質頁岩	44.5	125.5	108.7	510.0	
108-2	残核	IB-a	ST62-L547	珪質頁岩	53.5	89.2	69.7	343.8	油煎光沢
108-3	残核	IB-b	ST62-L548	珪質頁岩	63.5	76.1	42.4	243.5	
108-4	残核	IB-b	ST62-LT47	珪質頁岩	44.1	111.6	67.0	348.6	油煎光沢
108-5	残核	III	ST62-L549	玉髄質頁岩	49.8	95.5	36.5	134.3	
108-6	残核	III	ST62-L548	石英	57.4	44.0	30.1	67.2	
108-7	残核	IV	ST62-M644	珪質頁岩	58.3	39.4	35.4	104.5	油煎光沢
108-8	異形石器	—	ST62-M645	玉髓	24.2	18.0	3.3	1.8	
109-1	石棒	—	ST62-M644	安山岩	134.0	82.2	76.6	1,343.5	
109-2	敲石・磨石類	—	ST62-LT47	流紋岩	88.9	64.7	29.6	208.3	磨ノ藏
109-3	敲石・磨石類	—	ST62-L548	安山岩	144.9	50.1	44.8	535.5	磨ノ藏
109-4	敲石・磨石類	—	ST62-M644	安山岩	162.5	84.7	53.8	856.0	敲のみ
115-11	残核	IV	SRP1133	珪質頁岩	29.9	54.0	28.8	43.0	油煎光沢

第20表 遺構外出土石器観察表(1)

標図番号	器種	部位	分類	出土遺構・層位	施文(文・文様)調整	粘土	付着物	特記事項
68-15	深鉢	口縁部～胴部	群群45型	LQ42-IV c	1.8タテ、鎌倉、沈殿ノ内面ミガキ	中～細砂粒、微細光沢粒		内外面に炭化物
68-16	深鉢	口縁部～胴部	群群42型	LQ42-IV c	1.8タテ、鎌倉、沈殿ノ内面ミガキ	中～細砂粒、微細光沢粒		内外面に炭化物
118-1	深鉢	口縁部	I 群45型	M645-8P01	1.8タテノ内面ミガキ	細粒、中～細砂粒、石英		内面に織文
118-2	深鉢	口縁部	I 群45型	M645-8P01	1.8タテノナデ	細粒		内外面に炭化物
118-3	深鉢	口縁部～胴部	I 群45型	M645-8P01	1.8タテノナデ	細粒、細砂粒、海綿骨針		内外面に炭化物
118-4	深鉢	口縁部	II 群45型	M642-IV c	口縁部に凸形刺突文、口縁部に算珠形面取施文(文)、凸形刺突文ノナデ	細粒、細砂粒		内外面に炭化物
118-5	深鉢	口縁部	III 群45型	梅ノベトノM6	算珠形面取施文(文)、1.1、縦筋面取施文(文)、口ノナデ	細粒、中～細砂粒、石英		
118-6	深鉢	口縁部	II 群45型	3.848	ループズ文、連続刺突文、コンパス文ノナデ	中～細砂粒、石英		
118-7	深鉢	口縁部	II 群45型	3.848	ループズ文、連続刺突文、コンパス文ノナデ	中～細砂粒、微細光沢粒		
118-8	深鉢	口縁部	II 群45型	M645・46	連続刺突文ノナデ	細砂粒、石英		
118-9	深鉢	口縁部	II 群45型	15.45-M6	連続刺突文ノナデ	中～細砂粒、石英		
118-10	深鉢	口縁部	II 群45型	15.86-M6	5字連続刺突文、凸形刺突文ノナデ	細粒、細砂粒		
118-11	深鉢	口縁部	II 群45型	15.86-M6	燃木文(口)、沈殿、凸形刺突文ノナデ	細粒、中～細砂粒、石英		
118-12	深鉢	胴部	II 群45型	17.69-N6	燃木文(口)、沈殿ノナデ	細粒、細砂粒		
118-13	深鉢	口縁部	II 群45型	17.67	縦筋文(口)、羽付粘土貼付文、鎌倉ノナデ	白色中～細砂粒		
118-14	深鉢	胴部	II 群45型	67.66長-N6	鎌倉、微細刺突ノナデ	細粒、中～細砂粒		
118-15	深鉢	胴部	II 群45型	LQ43-IV b	1.8タテ、鎌倉ノナデ	細粒、中～細砂粒		
118-16	深鉢	口縁部	II 群45型	15.49-IV b	1.8タテノ鎌倉ノナデ	白色中～細砂粒		
119-1	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	L847-8P01～62	燃木文(口)、沈殿、鎌倉ノナデ	細粒、中～細砂粒、石英、赤雲母		内外面に炭化物
119-2	深鉢	胴部	II 群45型	M644-M6	1.8タテ、ナメ、沈殿ノナデ	細粒、白色細砂粒、石英、赤雲母		
119-3	深鉢	口縁部	II 群45型	L849-IV b	燃木文(口)、沈殿ノナデ	中～細砂粒、石英		
119-4	深鉢	胴部	II 群45型	LQ47-M6	燃木文(口)、沈殿ノ内面ミガキ	細粒、細砂粒		
119-5	深鉢	口縁部	II 群45型	M646-8P06	口唇・口縁部～燃木文(口)ノ内面ミガキ	細粒、細砂粒		
119-6	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	L847・48-M6	燃木文(口)、沈殿ノ内面ミガキ	細粒、中～細砂粒		内面に炭化物
119-7	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	15.49-IV c	沈殿ノ内面ミガキ	細粒、中～細砂粒		内面に炭化物
119-8	深鉢	胴部	II 群45型	15.47-M6	燃木文(口)、沈殿ノ内面ミガキ	細粒、中～細砂粒、石英、微細光沢粒		
120-1	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	M646-8P09	沈殿ノナデ、内面ミガキ	細粒、細砂粒、海綿骨針		
120-2	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	L747-M6 a	燃木文(口)、沈殿、鎌倉ノナデ	細粒、中～細砂粒、海綿骨針		内外面に炭化物
121-1	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	17.66	1.8タテ、ナメ、鎌倉、沈殿	細粒、中～細砂粒		
121-2	深鉢	口縁部	II 群45型	1.689-N6	沈殿、凸形刺突文ノナデ	細粒、細砂粒、雲母		
121-3	深鉢	口縁部	II 群45型	17.66-M6	沈殿ノ内面ミガキ	細粒、細砂粒、灰色光沢粒、海綿骨針		粘着孔
121-4	深鉢	胴部	II 群45型	1.846-M6	沈殿ノナデ	細粒、細砂粒、赤色炭物		
121-5	深鉢	胴部	II 群45型	17.69付定	沈殿ノナデ	細粒、細砂粒、赤色炭物、石英、雲母		
121-6	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	17.47-M6	沈殿ノナデ	細粒、中～細砂粒		内外面に炭化物
121-7	深鉢	口縁部	II 群45型	17.47-M6	沈殿ノナデ	細粒、中～細砂粒		内外面に炭化物
121-8	深鉢	胴部	II 群45型	17.47-M6	沈殿ノナデ	細粒、白色細砂粒		内面に炭化物
121-9	深鉢	胴部	II 群45型	17-IV	1.8タテ(未確認付)ノナデ	中～細砂粒、石英		
121-10	深鉢	口縁部	II 群45型	1.689-VI	縦筋文(口)、側面取付(取)ノナデ	細粒、中～細砂粒、海綿骨針		
121-11	深鉢	胴部	II 群45型	1.649-VI	5字連続刺突文ノナデ	細粒、中～細砂粒、海綿骨針		
121-12	深鉢	胴部	II 群45型	1.846-VI	5字連続刺突文ノナデ	細粒、細砂粒		内面に炭化物
121-13	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	1.847-M6	1.8タテノ内面ミガキ	細粒、中～細砂粒		
121-14	深鉢	口縁部～胴部	II 群45型	M646-8P01	1.8タテ、ナメノナデ	細粒、中～細砂粒、赤雲母		

第21表 遺構外出土土器観察表(2)

探検番号	遺構	部位	分期	出土地点・層位	原文(原文・文種)・調整	胎土	付着物	特記事項
122-2	深鉢	胴部～底部	Ⅱ群B4期	L746	1.8×タテ、ナメ、沈澱ノナゲ	織成、陶～細砂粒	内外面に炭化物	
122-3	深鉢	口縁部	Ⅱ群B5期	8044-8102	結衣第1種刺繍文ノ内面ニギキ	織成、中～細砂粒	内面	
122-4	深鉢	口縁部～胴部	Ⅱ群B5期	1.546-748	口唇部に浅紅の斑と稀軟工法による刺繍文、横糸文(内ノ内面ニギキ)	織成、細砂粒、海綿骨針		
122-5	深鉢	口縁部	Ⅱ群B5期	1.746-IVa～IX	横糸文(内ノ)ノナゲ	織成、中～細砂粒、海綿骨針	外面に炭化物	
122-1	深鉢	胴部～底部	Ⅱ群B6期	L747-78a	横糸文(内ノ)ノナゲ	織成、中～細砂粒、海綿骨針	内面に炭化物	
122-2	深鉢	胴部～底部	Ⅱ群B6期	表反	横糸文(内ノ)ノ内面ニギキ	織成、中～細砂粒	内面に炭化物	
122-3	深鉢	胴部	Ⅱ群B7期	1.549-78a	刺繍状横糸文(内ノ)ノナゲ	織成、中～細砂粒、石炭		
122-4	深鉢	胴部	Ⅱ群B7期	L746	刺繍状横糸文(内ノ)ノナゲ	織成、陶～細砂粒		
122-5	深鉢	口縁部	Ⅱ群B8期	1.544-78a	横文不明ノナゲ	織成、細砂粒、海綿骨針		
122-6	深鉢	口縁部～胴部	Ⅱ群A1期	L841-876	1.8×タテ、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-7	深鉢	胴部～胴部	Ⅱ群A1期	L743-876	1.8×タテ、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針	外面に炭化物	
122-8	深鉢	口縁部(突起部)	Ⅱ群A1期	1.947-876	沈澱ノナゲ	中～細砂粒		
122-9	深鉢?	把手部	Ⅱ群A1期	L840-876	沈澱ノナゲ	細砂粒、海綿骨針	外面に炭化物	
122-10	深鉢	把手部	Ⅱ群A1期	L842-876	沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-11	深鉢	把手部	Ⅱ群A1期	1.049-876	隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-12	深鉢?	口縁部	Ⅱ群A1期	1.540-876	沈澱ノナゲ	陶～細砂粒、石炭		
122-13	深鉢	口縁部	Ⅱ群A1期	L547	隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒		
122-1	深鉢	口縁部	Ⅱ群A1期	L843-876	隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-2	深鉢	口縁部～胴部	Ⅱ群A2期	L046	1.8×タテ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、雲母		
122-3	深鉢	胴部	Ⅱ群A2期	1.045-876	1.8×タテ、ナメ、隆帯ノナゲ	織成、海綿骨針		
122-4	深鉢	口縁部	Ⅱ群A3期	1.846-876	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	中～細砂粒、横線文(沈澱、海綿骨針)		
122-5	深鉢	口縁部	Ⅱ群A3期	8044-8101	1.8×タテ、沈澱、隆帯ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針	内外面に炭化物	
122-6	深鉢	口縁部	Ⅱ群A3期	1.549-8101	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	細砂粒	外面に炭化物	
122-7	深鉢	胴部～底部	Ⅱ群B1期	L843-876+8101	皿(突起)、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、石炭、雲母		
122-8	深鉢	胴部	Ⅱ群B1期	L849-876	口唇多量炭(口唇)付、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針	外面に炭化物	
122-9	深鉢	口縁部	Ⅱ群B1期	L745-876	隆帯ノナゲ	陶～中砂粒		
122-10	深鉢	口縁部	Ⅱ群B1期	L844-876	隆帯ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-11	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	L843-876	隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒		
122-12	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	カクラン	1.8×タテノ隆帯、沈澱	中～細砂粒、石炭、黒色文(沈澱、海綿骨針)		
122-13	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	L844-876	口唇コシ、隆帯、沈澱ノナゲ	陶～細砂粒		
122-14	深鉢	口縁部～胴部	Ⅱ群B2期	1.941-876	隆帯、沈澱、凸形刺繍文ノナゲ	織成、海綿骨針		
122-15	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	1.942-876	隆帯、沈澱、刺繍文ノナゲ	陶～細砂粒、海綿骨針		
122-16	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	1.046-876	隆帯、沈澱、刺繍文ノナゲ	中～細砂粒		
122-1	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	1.050-876	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-2	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	1.047-876	口唇コシ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-3	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	1.1-V	1.8×タテ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-4	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	1.941-876	口唇コシ・ナメ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-5	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	1.1	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-6	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	1.846-876	1.8×タテ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-7	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	L846-876	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-8	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	1.051-876	1.8×タテ、隆帯ノナゲ	細砂粒、海綿骨針		
122-9	深鉢	口縁部	Ⅱ群B2期	L743-876	隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針	外面に炭化物	
122-10	深鉢	胴部	Ⅱ群B2期	1.844-876	横線刺繍ノナゲ	陶～細砂粒	内面に炭化物	
122-11	深鉢	口縁部～底部	Ⅱ群B2期	1.549-8102	1.8×タテノナゲ	織成、細砂粒、石炭、海綿骨針	内外面に炭化物	
122-12	ミコトメ	底部	V群A8期	L848-876	沈澱ノナゲ	織成、細砂粒、石炭、海綿骨針		
122-13	深鉢	底部	V群B1期	表反	沈澱ノナゲ	織成、細砂粒	底面沈澱	
122-14	深鉢?	底部	V群B1期	1.942-876	刺繍(底面に)ノナゲ	陶～中砂粒		
122-15	深鉢?	底部	V群B1期	1.540-876	1.8×タテ、隆帯、沈澱ノナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-16	深鉢	底部	V群B1期	1.547-876	沈澱ノナゲ	織成、陶～細砂粒、石炭	内面に炭化物	
122-17	ミコトメ	底部	V群B1期	1.049-876	ナゲ	中～細砂粒、海綿骨針		
122-18	深鉢	底部	V群B1期	1.540-876	横糸文(内ノ)ノナゲ	陶～細砂粒		
122-19	深鉢	底部	V群B1期	1.544-876	1.8×タテノナゲ	中～細砂粒、雲母、海綿骨針		
122-20	深鉢?	胴部?	赤銅質料	カクラン	沈澱ノナゲ	細砂粒、石炭	内面に赤色顔料	

第22表 遺構外出土土製品観察表

標図番号	出土地点・層位	文様	胎土	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	付着物	備考
126-1	LQ44-IVb	毬帯	中～細砂粒、海綿骨針	(3.8)	(3.8)	1.1	(19.9)		
126-2	LQ43-IVb	毬帯、刺突文	粗～細砂粒、海綿骨針	(5.9)	(3.6)	1.4	(21.3)		
126-3	IT-IV	毬帯、刺突文	粗～細砂粒、海綿骨針	(5.5)	(3.8)	1.5	(19.5)		
126-4	LQ49-IVb	毬帯、刺突文	中～細砂粒、海綿骨針	(3.5)	(2.5)	1.1	(5.4)		
126-5	LR42-IVb	毬帯、刺突文	中～細砂粒	(4.9)	(4.9)	1.4	(24.0)		表面に炭化物
126-6	MB44-IVb	沈線、毬帯	中～細砂粒、海綿骨針	(3.8)	(4.6)	1.4	(28.4)		内外面、断面に アスファルト付着
126-7	LN50-IVb	鳳タテ、刺突文	粗～細砂粒、海綿骨針	4.4	(3.8)	1.1	(13.6)		
126-8	LQ43-IVb	—	中～細砂粒、海綿骨針	(3.4)	(4.3)	0.9	(12.5)		
126-9	LN50-IVb	—	中～細砂粒、海綿骨針	(4.0)	(5.3)	1.1	(19.2)		
126-10	LQ51-IVa	—	中～細砂粒、海綿骨針	(3.4)	(3.8)	0.8	(16.1)		
126-11	LQ48-IVb	毬帯	中～細砂粒	(3.2)	(4.4)	1.1	(18.6)		土師の厚部か
126-12	MA49・L149	—	細砂粒	2.7	(2.7)	0.7	(2.8)		

第23表 遺構外出土石器観察表(1)

標図番号	器種	分類	出土地点・層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
129-1	石鏃	I a	LS49-VIIa	珪質頁岩	48.3	20.7	4.5	3.8	
129-2	石鏃	I a	LS44-VIIc	玉髄	55.9	19.3	5.2	5.2	
129-3	石鏃	I a	LS45-VIIb	珪質頁岩	20.6	17.6	3.5	1.1	
129-4	石鏃	I a	MB44-IVb	珪質頁岩	27.5	18.9	4.0	2.1	
129-5	石鏃	I b	LR42-IVb	珪質頁岩	14.3	16.1	4.3	0.8	7×7×4付着 油脂光沢
129-6	石鏃	I b	LR42-IVb	玉髄質頁岩	15.0	13.7	3.3	0.9	
129-7	石鏃	I b	LQ48-IVb	玉髄質頁岩	24.6	14.4	3.8	1.1	
129-8	石鏃	I b	LT45-IVb	珪質頁岩	31.4	16.2	4.7	2.2	
129-9	石鏃	I b	LR47-IVc	玉髄質頁岩	14.8	13.0	3.7	0.7	
129-10	石鏃	II	MB44-VIIa	石英	31.9	16.9	4.1	1.8	
129-11	石鏃	II	LN50-IVc	珪質頁岩	29.4	15.3	4.8	2.0	
129-12	石鏃	III	LR42-IVb	珪質頁岩	21.9	14.6	4.7	1.3	
129-13	石鏃未成品	—	LT47-IX	珪質頁岩	35.5	18.6	6.4	4.5	
129-14	石鏃未成品	—	MA44-IVb	珪質頁岩	42.8	19.4	6.8	4.4	
129-15	石鏃未成品	—	LQ42-IVb	珪質頁岩	35.0	22.4	7.2	5.0	
129-16	石鏃未成品	—	LT46-IVb	玉髄質頁岩	22.6	17.2	3.4	1.4	
129-17	石鏃未成品	—	LQ42-IVb	珪質頁岩	20.5	19.4	6.3	2.3	
129-18	石槍	I	MB45-カクラン	珪質頁岩	173.0	33.8	16.6	104.0	カクラン内
129-19	石槍	I	LT45-IVc	珪質頁岩	144.9	38.0	18.9	103.7	油脂光沢
129-20	石槍	I	LR46-VIIa	珪質頁岩	85.0	46.5	16.6	62.4	
129-21	石槍	II	LT45-IVc	珪質頁岩	94.5	22.1	12.1	25.1	
129-22	石槍	II	LR43-IVb	玉髄質頁岩	72.0	24.5	15.8	27.8	
129-23	両面調整石器	I	MA44-IVb	珪質頁岩	86.5	28.9	14.4	38.8	
129-24	両面調整石器	I	LQ42-VII	珪質頁岩	102.6	32.9	16.5	57.3	
130-1	両面調整石器	I	MA44-VIIb	玉髄質頁岩	91.5	34.5	23.1	65.6	
130-2	両面調整石器	I	MB44-VIIa	珪質頁岩	105.0	27.7	14.0	39.1	
130-3	両面調整石器	I	LR47-VIIb	珪質頁岩	93.5	26.0	17.1	44.6	
130-4	両面調整石器	II	LS46-VIIb	玉髄質頁岩	98.3	41.0	28.6	105.5	
130-5	両面調整石器	II	LT44-IVb	珪質頁岩	115.5	48.8	32.8	151.6	
130-6	両面調整石器	IIIa	LP43-IVb～IVc	珪質頁岩	79.3	30.7	19.1	48.2	
130-7	両面調整石器	IIIa	MA44-IVb	珪質頁岩	94.5	28.5	19.4	41.8	
130-8	両面調整石器	IIIa	MA46-IVa	珪質頁岩	36.1	28.1	11.8	11.2	
130-9	両面調整石器	IIIb	MA44-IVc～VIIb	玉髄質頁岩	69.2	55.9	20.9	61.4	
130-10	両面調整石器	IIIb	LR44-IVb	珪質頁岩	75.2	58.4	25.1	117.2	
130-11	石匙	I	LQ44-X	珪質頁岩	85.2	21.4	6.8	14.6	
130-12	石匙	I	LP47-X	珪質頁岩	81.8	26.4	7.3	14.2	油脂光沢
130-13	石匙	I	MA42-VIIc	珪質頁岩	60.0	30.1	8.1	14.3	
130-14	石匙	I	LQ48-IVb	珪質頁岩	63.5	32.2	8.7	15.1	
130-15	石匙	I	LP47-IVb	玉髄	43.0	21.2	6.2	6.2	
130-16	石匙	I	MA43-IVc	珪質頁岩	81.5	26.4	8.2	14.9	
130-17	石匙	I	LT46-IVb	珪質頁岩	29.6	12.7	3.0	1.0	
130-18	石匙	II	LR42-IVc	珪質頁岩	58.6	69.1	12.0	29.1	油脂光沢
130-19	石匙	III	LT42-IX	珪質頁岩	37.2	24.4	8.6	11.9	表面稜線に微小光沢
130-20	石匙	III	MA43-VIIa	珪質頁岩	45.5	50.9	8.6	17.1	

第24表 遺構外出土石器観察表(2)

標頭番号	器種	分類	出土地点・層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
130-21	石匙	Ⅲ	L048-IVb	珪質頁岩	55.1	45.9	7.5	16.9	
130-22	石匙未成品	—	LR48-IVb	珪質頁岩	57.2	41.2	10.4	18.4	油脂光沢
131-1	石匙未成品	—	LS49-VIIa	珪質頁岩	62.1	78.4	11.2	37.3	
131-2	石匙未成品	—	LT46-VIIa	珪質頁岩	32.0	67.0	8.0	11.6	
131-3	トランシェ様石器	—	LQ43-IX	珪質頁岩	67.4	55.0	10.4	32.5	
131-4	鐮状石器	I a	LS42-VII	珪質頁岩	90.3	43.1	15.7	60.1	油脂光沢
131-5	鐮状石器	I a	LR42-IVb	珪質頁岩	67.0	25.5	13.3	23.9	
131-6	鐮状石器	I a	MA44-VIIb	珪質頁岩	75.5	31.1	15.1	40.1	油脂光沢
131-7	鐮状石器	I a	MA44-IVb	珪質頁岩	96.3	43.9	18.6	74.6	
131-8	鐮状石器	I a	LR41-IVb	珪質頁岩	80.0	38.8	19.4	51.8	
131-9	鐮状石器	I b	LR48-IX	珪質頁岩	83.0	46.3	18.9	73.5	
131-10	鐮状石器	I b	LT47-VIIa	珪質頁岩	80.5	32.5	12.8	28.8	油脂光沢
131-11	鐮状石器	I c	LP44-VIIa	珪質頁岩	90.7	33.9	15.8	45.2	油脂光沢
131-12	鐮状石器	I c	LT43-VIIc	珪質頁岩	39.5	32.1	8.8	11.0	
131-13	鐮状石器	I c	LN49-IVc	珪質頁岩	56.2	33.8	12.8	24.6	
131-14	鐮状石器	II	LS48-IX	珪質頁岩	59.0	32.4	11.2	20.9	
131-15	鐮状石器	II	LT49-IVb	玉髄質頁岩	49.5	22.1	8.7	9.8	
131-16	鐮状石器	III	LN49-IVc	珪質頁岩	43.9	20.1	8.5	9.5	油脂光沢
131-17	鐮状石器	V	LR47-VII	珪質頁岩	57.9	44.0	13.1	34.5	
131-18	鐮状石器	V	LR48-VIIb	珪質頁岩	74.2	34.1	13.9	36.9	油脂光沢
131-19	鐮状石器未成品	—	MB44-IX	珪質頁岩	80.5	49.1	19.6	77.0	
132-1	鐮状石器未成品	—	MA44-IX	珪質頁岩	40.3	29.4	7.8	10.3	
132-2	鐮状石器未成品	—	LT47-VIIb	珪質頁岩	43.3	29.5	8.4	8.4	油脂光沢
132-3	鐮状石器未成品	—	LP48-VIIa	珪質頁岩	87.0	45.4	17.2	76.4	扁平礫素材
132-4	鐮状石器未成品	—	LR43-IVb	珪質頁岩	109.0	44.4	18.1	61.8	
132-5	鐮状石器未成品	—	MB44-IVb	珪質頁岩	57.1	29.1	11.0	18.0	
132-6	鐮状石器未成品	—	LS48-IVb	珪質頁岩	73.0	34.7	18.4	40.3	油脂光沢
132-7	石鏟	I a	LQ43-IVb	珪質頁岩	47.0	13.7	8.3	5.6	先端に磨耗痕
132-8	石鏟	I b	LQ48-VIIc	珪質頁岩	32.3	15.1	5.1	1.5	油脂光沢
132-9	石鏟	I b	LR42-IVb	珪質頁岩	39.8	17.8	6.2	3.3	
132-10	石鏟	II a	LS44-VIIa	珪質頁岩	63.0	19.3	11.5	9.4	
132-11	石鏟	II a	MA46-IVb	珪質頁岩	54.0	32.5	7.0	7.2	
132-12	石鏟	II b	LS46-IX-X	珪質頁岩	55.5	27.9	15.7	17.0	
132-13	スクレイパー	I a	LS42-X	珪質頁岩	49.5	45.6	17.9	34.9	扁平礫素材
132-14	スクレイパー	I a	LS49-X	珪質頁岩	58.4	36.0	11.5	22.3	扁平礫素材
132-15	スクレイパー	I a	LT49-X	珪質頁岩	98.0	52.1	21.9	73.2	扁平礫素材
132-16	スクレイパー	I a	MA44-VIIa	珪質頁岩	89.8	42.9	14.8	51.7	
132-17	スクレイパー	I a	LQ48-VIIa	玉髄質頁岩	69.8	47.1	19.4	51.4	
132-18	スクレイパー	I a	LN51-IVb	珪質頁岩	68.8	35.9	11.3	32.6	油脂光沢
132-19	スクレイパー	I b	LS48-X	珪質頁岩	89.0	43.9	17.1	58.4	扁平礫素材
133-1	スクレイパー	I b	LR49-X	珪質頁岩	84.2	49.2	27.6	84.5	
133-2	スクレイパー	I b	MB45-IX	珪質頁岩	103.5	37.5	17.1	71.2	油脂光沢
133-3	スクレイパー	I b	L047-IVc	珪質頁岩	76.5	30.3	13.8	22.9	油脂光沢
133-4	スクレイパー	I c	MB44-VIIa	珪質頁岩	61.5	73.8	18.4	54.0	
133-5	スクレイパー	I c	LN50-IVc	玉髄質頁岩	52.2	45.5	11.7	20.6	
133-6	スクレイパー	II	LQ49-VIIb	珪質頁岩	47.5	29.4	14.4	17.5	油脂光沢
133-7	スクレイパー	II	LR43-IVb	珪質頁岩	35.0	39.9	11.8	15.5	油脂光沢
133-8	スクレイパー	III	LR47-X	珪質頁岩	86.7	53.7	16.2	59.8	扁平礫素材
133-9	RF	—	LS44-X	珪質頁岩	37.0	30.9	16.0	19.9	
133-10	RF	—	LQ42-IVc	黒曜石	12.0	26.1	8.7	2.0	産地推定分析試料
133-11	楔形石器	—	LR48-X	珪質頁岩	42.9	23.9	23.2	24.1	
133-12	楔形石器	—	LP50-IVb	玉髄質頁岩	42.6	57.6	29.9	76.2	
133-13	楔形石器	—	LR49-IVc	玉髄質頁岩	50.2	47.5	27.4	56.6	
133-14	石刃	—	MA44-VIIb	珪質頁岩	60.0	26.0	7.0	14.6	
133-15	接合資料	—	LR43-IX	珪質頁岩	60.9	57.8	29.4	58.4	F1+RF1
133-16	残核	I A	LT46-VIIb	玉髄質頁岩	56.6	109.4	64.9	480.0	
134-1	残核	I A	MB44-VIIa	珪質頁岩	89.1	155.4	89.2	1,080.0	
134-2	残核	I A	LQ42-IVb	珪質頁岩	103.4	161.3	130.5	1,960.0	
134-3	残核	I A	LP50-IVc	石英	89.1	113.9	71.1	820.0	
135-1	残核	IB-a	LP51-IVb	珪質頁岩	62.6	110.4	42.9	283.9	
135-2	残核	IB-a	LT45-IVb	珪質頁岩	107.2	141.0	49.8	880.0	
135-3	残核	IB-b	LR43-IX	珪質頁岩	87.4	122.6	58.0	630.0	

第25表 遺構外出土石器観察表(3)

標図番号	器種	分類	出土地点・層位	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
135-4	残核	IB-b	MC43-IX	珪質頁岩	44.0	51.6	35.2	72.9	油脂光沢
135-5	残核	IB-b	LS49-VIIa	珪質頁岩	43.4	95.8	33.5	114.7	
135-6	残核	IB-b	LT47-VIIa	珪質頁岩	32.0	124.3	56.4	235.2	
135-7	残核	IB-b	LS46-IVb	珪質頁岩	51.5	90.2	64.3	314.6	
135-8	残核	IB-b	LR47-IVb	珪質頁岩	66.4	91.1	41.5	177.1	
136-1	残核	IB-b	LR43-IVb	珪質頁岩	48.2	101.0	58.6	230.8	油脂光沢
136-2	残核	IIA	LS49-IVb	珪質頁岩	52.4	91.2	45.6	197.2	油脂光沢
136-3	残核	IIA	LS49-X	珪質頁岩	30.6	42.0	25.4	32.9	油脂光沢
136-4	残核	IIA	MA42-IX	珪質頁岩	49.8	92.0	57.0	202.3	
136-5	残核	IIA	LQ43-VIIc	珪質頁岩	33.2	25.1	34.9	28.0	油脂光沢
136-6	残核	IIA	LT46-VIIIb	珪質頁岩	63.1	70.8	20.2	96.7	油脂光沢
136-7	残核	IIA	LQ47-IVc	玉髄質頁岩	28.6	45.5	14.8	25.7	
136-8	残核	IIA	LT47-IVa	石英	50.3	75.8	47.1	158.4	
136-9	残核	IIA	LQ42-IVb	珪質頁岩	79.5	71.8	23.4	129.5	
136-10	残核	IIb	LS43-IX	鉄石英	39.8	59.6	40.8	78.0	
136-11	残核	IIb	LQ48-VIIc	珪質頁岩	55.4	90.0	44.5	224.8	
136-12	残核	IIb	3Ⅰ-IVa	珪質頁岩	30.1	73.5	42.1	115.5	確認調査 油脂光沢
136-13	残核	IIb	LT49-IVa	玉髄質頁岩	38.1	43.8	23.2	27.5	
136-14	残核	III	LR46-X	珪質頁岩	19.4	30.9	21.6	10.4	
137-1	残核	III	LR48-X	珪質頁岩	31.9	54.8	17.5	32.3	油脂光沢
137-2	残核	III	MB44-IX	珪質頁岩	19.1	31.1	19.4	11.1	油脂光沢
137-3	残核	III	MA42-IX	珪質頁岩	37.2	53.8	30.4	68.2	油脂光沢
137-4	残核	III	LT41-IX	珪質頁岩	67.2	112.4	38.4	302.9	
137-5	残核	III	LS47-VIIb	玉髄質頁岩	48.4	31.3	26.4	50.2	
137-6	残核	III	MB45-VIIa	珪質頁岩	83.5	55.4	51.9	292.6	
137-7	残核	III	LP46-IVb	珪質頁岩	26.5	66.5	44.6	106.4	
137-8	残核	III	LO50-IVb	珪質頁岩	34.4	55.1	57.0	109.1	
137-9	残核	III	LQ42-IVb	玉髄質頁岩	22.8	66.3	39.2	47.5	
137-10	残核	III	MA44-IVb	珪質頁岩	55.1	57.7	27.6	82.2	油脂光沢
137-11	残核	IV	LQ48-VIIc	珪質頁岩	55.3	60.6	41.2	135.9	
137-12	残核	IV	MA46-IVa	玉髄質頁岩	54.9	72.0	33.9	140.3	
137-13	残核	IV	MA43-IVc	珪質頁岩	33.0	56.0	31.3	47.5	油脂光沢
137-14	残核	IV	LT44-IVc	珪質頁岩	61.2	62.4	44.4	207.9	
137-15	残核	IV	LQ50-IVb~IVc	珪質頁岩	49.5	41.5	38.1	61.9	油脂光沢
138-1	磨製石斧	—	LQ44-X	安山岩	128.9	50.8	29.2	273.9	
138-2	磨製石斧	—	LQ49-IVb	透閃石岩	56.5	56.0	9.2	56.0	
138-3	磨製石斧	—	LT44-VII	緑色岩	60.2	52.4	23.4	144.8	
138-4	敲石・磨石類	—	LR47-VIIc	安山岩	76.5	69.8	55.0	412.0	磨+敲
138-5	有孔石製品	—	2Ⅰ	泥岩	43.7	50.5	7.5	19.6	確認調査
138-6	石棒	—	1Ⅰ-V	安山岩	68.5	55.9	14.3	51.1	確認調査
138-7	塊状石製品	—	LN49-IVb	流紋岩	92.4	46.5	26.9	87.4	7A74付着
138-8	塊形石器	—	MB44	珪質頁岩	46.9	13.3	4.0	2.7	
国版36-①	残核	IV	LP52-IX	珪質頁岩	64.6	67.9	37.3	162.4	7A74付着
国版36-②	残核	IIb	表採	碧玉	22.7	30.4	21.2	9.6	
国版36-③	敲石・磨石類	—	LR48-IVb	流紋岩	110.2	78.1	62.4	837.0	磨+敲 赤色顔料付着

第4章 理化学的分析

第1節 放射性炭素年代測定（1）

1 はじめに

由利本荘市のオノ神遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第26表のとおりである。試料は、縄文時代中期後葉～末葉（大木10式期）の竪穴建物跡SI22と、時期不明の焼土遺構SN20とSN21、縄文時代中期中葉の竪穴建物跡SI28・SN04から出土した炭化材4点である。SI22とSN20、SI28・SN04から出土した炭化材は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。SN21の試料は樹皮であった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第26表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-40471	遺構：SI22 位置：RC46 試料No.3	種類：炭化材（トチノキ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40472	遺構：SN20 層位：2層 試料No.6	種類：炭化材（カエデ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40473	遺構：SN21 層位：3層 試料No.7	種類：炭化材（針葉樹樹皮） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40474	遺構：SI28・SN04 層位：2層 試料No.8	種類：炭化材（アサダ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

3 結果

第27表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第140図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第27表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-40471 SI22 試料No. 3	-25.14 \pm 0.19	4023 \pm 21	4025 \pm 20	2573-2559 cal BC (15.9%) 2536-2491 cal BC (52.3%)	2580-2475 cal BC (95.4%)
PLD-40472 SN20 試料No. 6	-24.83 \pm 0.21	4986 \pm 23	4985 \pm 25	3784-3713 cal BC (68.2%)	3906-3880 cal BC (4.5%) 3801-3702 cal BC (90.9%)
PLD-40473 SN21 試料No. 7	-23.21 \pm 0.16	1455 \pm 21	1455 \pm 20	594-638 cal AD (68.2%)	569-645 cal AD (95.4%)
PLD-40474 SI28・SN04 試料No. 8	-26.82 \pm 0.21	4389 \pm 22	4390 \pm 20	3079-3072 cal BC (4.7%) 3024-3003 cal BC (16.1%) 2992-2930 cal BC (47.4%)	3090-3051 cal BC (16.2%) 3033-2919 cal BC (79.2%)

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%)に着目して結果を整理する。

なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林 (2017)を参照した。

竪穴建物跡SI22から出土した炭化材 (PLD-40471)は、2580-2475 cal BC (95.4%)であった。これは、縄文時代中期後半～後期初頭の暦年代に相当する。測定結果は、調査所見による推定時期の縄文時代後期後葉～末葉 (大木10式期)に対して整合的であった。

焼土遺構SN20から出土した炭化材 (PLD-40472)は、3906-3880 cal BC (4.5%)および3801-3702 cal BC (90.9%)であった。これは、縄文時代前期後葉の暦年代に相当する。

焼土遺構SN21から出土した炭化材 (PLD-40473)は、569-645 cal AD (95.4%)であった。これは6世紀後半～7世紀中頃で、古墳時代後期～飛鳥時代の暦年代である。

竪穴建物跡SI28・SN04から出土した炭化材 (PLD-40474)は、3090-3051 cal BC (16.2%)および3033-2919 cal BC (79.2%)であった。これは、縄文時代中期中葉の暦年代に相当する。測定結果は、調査所見による推定時期の縄文時代中期中葉に対して整合的であった。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。SI22とSN20、SI28・SN04から出土した炭化材は最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。SN21から出土した炭化材は樹皮であり、測定結果は枯死もしくは伐採された年代に比較的近い年代を示していると考えられる。

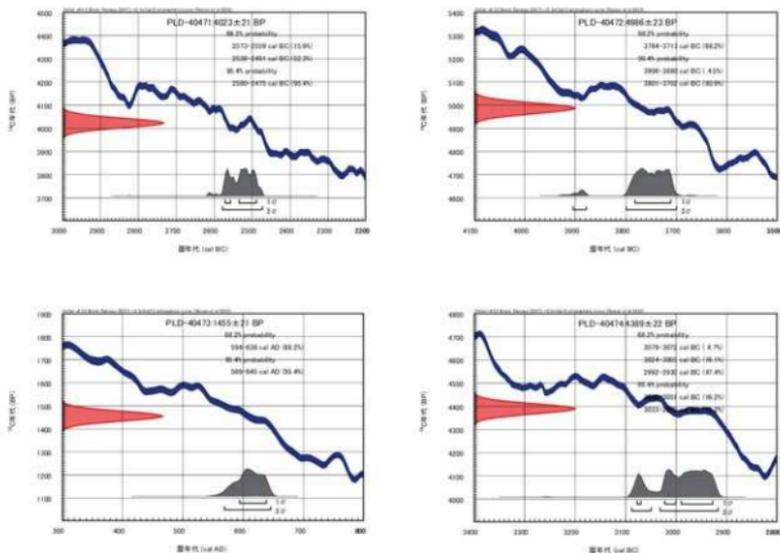
引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

小林謙一(2017)縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p. 同成社.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafldason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.



第140図 暦年校正結果

第2節 炭化材樹種同定(1)

1 はじめに

由利本荘市に所在するオノ神遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、縄文中期後葉～末葉(大木10式)の竪穴建物跡SI22から出土した炭化材5点と、時期不明の焼土遺構SN20とSN21から出土した炭化材が各1点、縄文時代中期中頃の竪穴建物跡SI28・SN04から出土した炭化材1点の、合計8点である。なお、年代測定の結果、SI22のNo.3は縄文時代中期後半～後期初頭、SN20のNo.6は縄文時代前期後葉、SN21のNo.7は古墳時代後期～飛鳥時代、SI28・SN04のNo.8は縄文時代中期中葉に相当する暦年代を示した。

樹種同定では、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスバッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VHX-D510)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のケヤキとアサダ、ヌルデ、カエデ属、トチノキの5分類群と、分類群不明の針葉樹樹皮の、合計6分類群が確認された。結果を第28表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第141図 1a-1c (No.5)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3～5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

(2) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 第141図 2a-2c (No.8)

径が中型の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～4列幅である。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木である。材は極めて重硬であり、切削加工および割裂は困難である。

第28表 樹種同定結果一覧

No.	遺構	層位	位置	樹種	推定時期	年代測定番号
1	SI22	-	RC3	ヌルデ	縄文中期後葉～末葉 (大木10式)	-
2	SI22	-	RC24	トチノキ		-
3	SI22	-	RC46	トチノキ		PLD-40471
4	SI22	-	RC78	トチノキ		-
5	SI22	-	RC94	ケヤキ		-
6	SN20	2層	-	カエデ属	不明	PLD-40472
7	SN21	3層	-	針葉樹樹皮	不明	PLD-40473
8	SI28 SN04	2層	-	アサダ	縄文中期中葉	PLD-40474

(3) ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *chinensis* (Mill) T. Yamaz. ウルシ科 第141図 3a-3c (No.1)

大型の道管が、年輪のはじめに単独もしくは数個複合して配列する半環孔材である。晩材部では道管の大きさが徐々に減じ、年輪の終わりでは小道管が集団をなして接線状～斜線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は平伏細胞と直立細胞が混在する異性で、1～3列幅である。

ヌルデは熱帯から温帯に分布する落葉高木である。材は、耐朽性および保存性はあまり高くないが、吸水しにくく、切削および加工が容易である。

(4) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 第141図 4a-4c (No.6)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様が見られる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。木材組織からはチドリノキーカジカエデ以外は識別困難なため、この2種を除いたカエデ属とする。材は全体的に緻密で、靱性がある。

(5) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 第141図 5a-5c (No.3)

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において、放射組織は層状に配列する。

トチノキは暖帯から温帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

(6) 針葉樹樹皮 *Coniferous wood Bark* 第141図 6a (No.7)

篩細胞および篩部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

4 考察

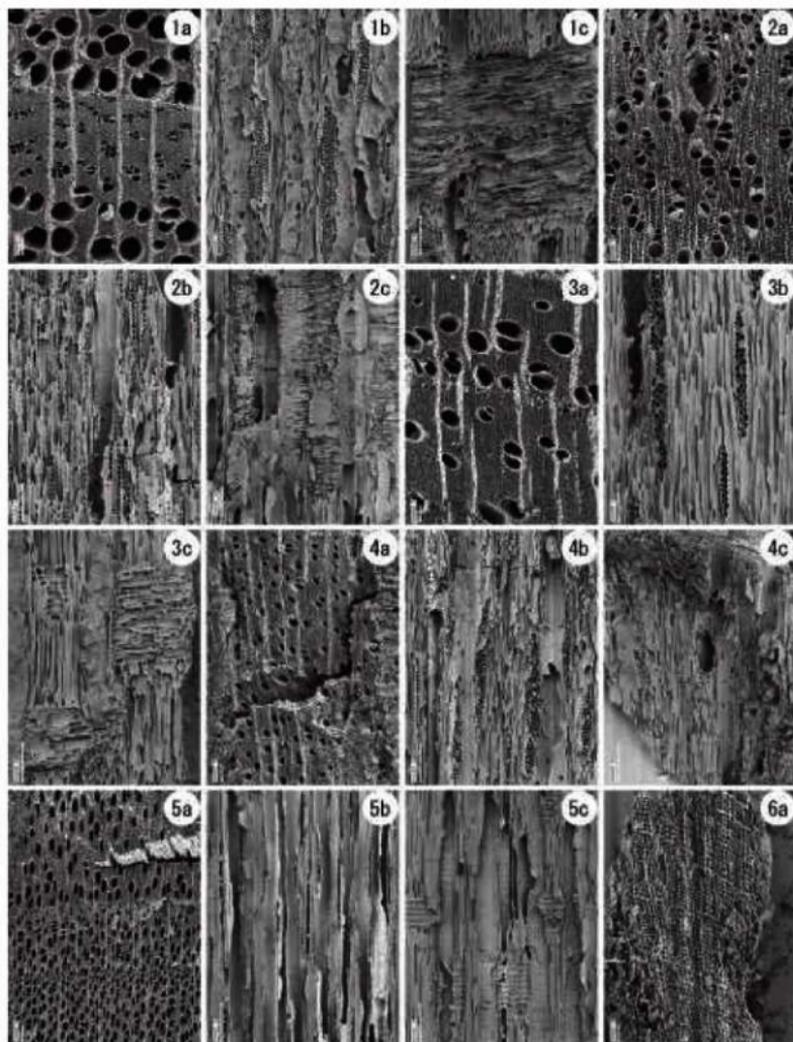
縄文時代中期後葉～末葉の竪穴建物跡SI22から出土した炭化材はトチノキとヌルデ、ケヤキ、縄文時代中期中葉のSI28・SN04から出土した炭化材はアサダであった。いずれも用途は不明であるが、建築部材や燃料材などが考えられる。秋田県で確認されている縄文時代中期の建築部材ではクリが多く、燃料材ではクリを中心とした落葉広葉樹が多く確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回確認された樹種も落葉広葉樹であり、遺跡周辺に生育していた樹木と推測される。

焼土遺構の試料は、縄文時代前期後葉の年代が得られたSN20出土の炭化材がカエデ属、古墳時代後期～飛鳥時代の年代が得られたSN21が針葉樹樹皮であった。どちらも燃料材であったと推測される。

引用・参考文献

平井信二(1996) 木の百科。394p, 朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編(2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—。449p, 海書社。



第141図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. ケヤキ (No. 5)、2a-2c. アサダ (No. 8)、3a-3c. スルダ (No. 1)、4a-4c. カエデ属 (No. 6)、5a-5c. トチノキ (No. 3)、
6a. 針葉樹樹皮 (No. 7)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第3節 放射性炭素年代測定(2)

1 試料

試料は、炭-1 (SK65覆土)、炭-2 (LR46 XII-3層)、炭-27 (LR46 RC01 XII層下) の3点である。

2 方法

試料を実体顕微鏡で観察し、周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg程度に調整する。削り落とした試料で炭化材同定を実施する。なお、炭-2は分解が進んでおり、組織が認められなかったため、土壌化した黒色部分を拾い出して分析を行う。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。なお、試料が脆弱な場合、炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため、試料によってはアルカリの濃度を薄めて処理を行う(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementarのvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk,2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer *et al.*2020)である。

3 結果・考察

結果を第28表に示す。炭-2は分解が進んでおり、分析に必要な炭素量が得られず、測定不能であった。同位体補正を行った値は、炭-1が $6235 \pm 30\text{BP}$ 、炭-27が $54000 \pm 1700\text{BP}$ である。なお、炭-27は ^{14}C の濃度が非常に低く、測定限界に近いため、数値の信頼度は低い。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer *et al.*2020)を用いる。2σの値は、炭-1が $7255 \sim 7010\text{calBP}$ 、炭-27が $59246 \sim 51319\text{calBP}$ である。以上のことから、SK65の年代観は暦年代で7100～7200年前頃といえる。また、炭-27は測定限界に近く、数値の信頼度は低いことから、少なくとも55000年前よりも古い堆積物である。

第29表 放射性炭素年代測定・樹種同定結果

No.	遺構等	性状	試法	測定年代 (暦年校正前) BP	Δ 13C (‰)	暦年校正年代		Code No.	
						年代幅	確率%		
目-1	SK65 覆土	同化材 クワ属?	AAA (100)	8230±30 (9230±33)	-20.32	1708 - 7306 ca1BP	18.3	70-	pat-
						7171 - 7136 ca1BP	10.1		
						7111 - 7060 ca1BP	22.4		
						7045 - 7020 ca1BP	7.4		
						7205 - 7196 ca1BP	25.0		
7180 - 7131 ca1BP	13.5								
7130 - 7010 ca1BP	17.0								
目-2	LR46 Ⅱ-3層	同化物 小葉	Asb (90.10)	測定不能				70-	pat-
目-27	LR46 RC01 Ⅱ層下	同化材 針葉樹	AAA (100)	5400±1700 (5430±1737)	-25.29 -9.58	156124 - 52061 ca1BP	48.2	70-	pat-
						52108 - 51113 ca1BP	35.1	70-	pat-
						463. of orange		14723	13738

1) 年代幅の算出には、1 Liby の半減期(569年)を使用。

2) 暦年校正値は、1950年を基準として暦年値であることを示す。

3) 付記した書名は、測定装置名・測定数(400, 200)に入る範囲) 暦年校正に換算した値。

4) AAAE、樹・アルカリ・樹脂類、Asbはアルカリの濃度を下げたことを示す。

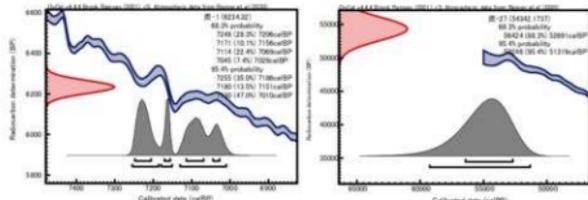
5) 暦年の計算には、 $\delta_{13}C$ (‰) を使用。

6) 暦年の計算には1 σ 幅を示した暦年値を使用。

7) 測定データシートは、1stCa(20)を使用。

8) 経路別に異なるとは、 $\delta_{13}C$ 2‰、2 σ ± 39‰、4‰である。

9) 付記した測定装置名に近く、値の信頼度が低い。



第142図 暦年校正結果

第4節 炭化材樹種同定(2)

1 試料

試料は、炭-1 (SK65覆土)、炭-2 (LR46 Ⅱ-3層)、炭-27 (LR46 RC01 Ⅱ層下) の3点である。

2 方法

炭化材同定は、年代測定の試料調整の際に削り落とした部分を用いる。ただし、炭-2に関しては分解が進んで、組織がみられなかったため、同定不能とした。木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、高地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果・考察

結果を年代測定結果と併せて第29表に示す。いずれの試料も保存状態が悪い。炭-1は年輪界がなく、単年の幅が広いことから樹心に近いか、若年枝である。形状からおそらくクワ属?と思われる。炭-27は、針葉樹材であるが、変形が著しいあて材(斜めに育つなど偏った重力の作用で組織が変形した木材)のため、細胞壁が大きく裂けており、種類の特定が難しい。以下に同定できた種類の解剖学的特徴を述べる。

・クワ属?(Morus) クワ科

環孔材で、孔圈部は不明。晩材部では単独または2～4個が複合して斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、10～50細胞高。

縄文時代の土坑から検出された炭化材はクワ属?である。クワ属は本州各地でみられ、川沿い、林縁、人里など明るい林地を好むことから、遺跡周辺に普通に生育していたものを燃料材等として用いたとみられる。5500年前を示す木材は、組織の変形が著しく、針葉樹としかわからない。試料は硬く脆いが、古い木材であることから、経年変化の影響も考えられるため、炭化しているかどうかは不明である。年代測定結果が示す時期は、最終氷期のなかでも比較的寒冷とされる時期であるため(MIS4)、針葉樹のような寒冷地に強い植物が生育していたと思われる。

第5節 花粉分析

1 試料

試料は、基盤サンプルから採取した7点である。No.1とNo.4がIVc層、No.14がVIIa層、No.15がVIIb層、No.16がIX層、No.11がX層、No.12がXI-1層に相当する。

2 方法

試料を適量秤量し、水酸化カリウムによる泥化、篩別と沈降法による砂分、粘土分の除去、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製し、同定・計数する。

3 結果・考察

分析結果を第30表に示す。いずれの試料も分析残渣が少なく、花粉化石も少ない。一部のイネ科やヨモギ属、シダ類胞子がわずかに認められる程度である。シダ類胞子が多いのは、花粉化石に比べて風化に強いことが理由と考えられる。土壤中にみられる花粉・胞子化石は、多い試料で

第30表 花粉分析結果

種 類	基盤サンプル						
	1	4	14	15	16	11	12
草本花粉							
イネ科	-	-	1	-	-	1	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	1	-
シダ類胞子							
シダ類単条溝胞子	-	-	6	-	2	-	-
合 計							
木本花粉	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉	0	0	1	0	0	2	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	0	0	6	0	2	0	0
合計(不明を除く)	0	0	7	0	2	2	0
試料1cm ³ 中の花粉密度	-	-	63	-	14	14	-

も数十個/cm程度と、一般的に花粉化石が多く含まれる堆積物の数千分の1以下である。花粉は、空中や地表にも多数存在するため、生物による堆積物の擾乱や、試料採取時などに、これらが混入することは避けられない。堆積物に花粉化石が多量に含まれる場合は、堆積物に元々含まれる花粉化石に比べ、後代に混入する花粉の量が非常に少ないため、汚染の影響は無視しても良い。しかし、堆積物中に花粉化石がほとんど含まれない場合は、微量の影響は無視しても良い。堆積物の花粉組成に大きく影響する。今回検出された花粉化石は後代に混入した花粉の組成の可能性が高いため、考察は差し控える。

K)である。

一方、産地推定に必要な原産地の資料に関しては、望月(2004)で用いられている原産地試料の分析データを使い、原産地判定用資料を作成する。今回産地推定に用いた黒曜石原産地を第143図に示す。

原産地試料のデータを、Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率とLog(Fe/K)についてグラフ化する。また、グラフを元に作成した二次元正規密度分布、ならびに判別指標値から作成した多次元密度分布の結果から、原産地を元にした判別群を設定する。その名称ならびに判別群と原産地との関係を第31表に示す。

Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率とLog(Fe/K)のグラフ中に、各判別群の重心より2σ(約95%)の範囲を示す楕円を書く(原産地試料の各分析データは図が煩雑になるため割愛する)。これに、遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせることで、産地推定の指標の一つとなる。



第143図 黒曜石産地一覧(淡色産地は今回の判定対象外地域)

一方、各判別群の5つの判別指標値について、それぞれの基本統計量(平均値や分散、共分散など)を求める。この値をもとに、遺跡出土試料と各判別群とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は、先に述べた5つの判別指標値を使う方法(望月,2004など)と、基本的にZr分率を除くグラフに使った4つの判別指標値を使うが、群間の判別が難しい場合にZr分率を加える方法(明治大学古文化財研究所,2009,2011、明治大学文学部,2014a,b)がある。今回は、4成分、5成分双方の結果を掲載する。測定試料と各判別群全てについて、4成分、5成分のマハラノビス平方距離を求め、測定試料に近いものから3判別群を表に示す。これらについてカイ二乗検定を行い、99.5%の範囲に入った場合を「True」、入らなかった場合を「False」とする。

3 結果・考察

元素X線強度(cps)および判別指標値を第32表に示す。また、Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率とLog(Fe/K)について、原産地試料の重心から2σ(95%)の範囲を記したグラフに、各試料の結果を重ね合わせた結果を、第144・145図に記す。第33表には、測定試料に近いものから3原産地分のマハラノビス平方距離を示し、これらについてカイ二乗検定を行なった結果を示す。

分析の結果、No.15は男鹿半島産と思われる。秋田県内から出土した黒曜石の産地同定は複数の遺跡で実施されている(明治大学文学部,2014a,b)。これらの結果は、明治大学古文化財研究所

(2009)、吉川ほか(2011)、吉川ほか(2015)で公表されている。秋田県周辺の主要な黒曜石原産地は、青森県深浦、秋田県男鹿、先述した岩手県北上山地、山形県月山、宮城県湯ノ倉がある。これまでの成果から基本的に遺跡近傍の黒曜石が最もよく利用されている傾向があるといわれており(吉川ほか2011)、これまでの結果と調和的である。

第32表 スペクトル強度と判別指標値

No.	強度(cps)											判別指標					注記等
	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mo*100 /Fe	log (Fe/K)	
15	60.33	475.77	60.91	23.65	3.77	13.79	78.64	16.12	9.78	6.32	10.77	37.51	22.75	25.05	17.53	0.111	L042 IVc層

第33表 黒曜石判定結果

No.	4成分									5成分								
	第1候補			第2候補			第3候補			第1候補		第2候補		第3候補				
	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定			
15	男鹿1	3.3	TRUE	月山1	154.4	FALSE	男鹿2	218.6	FALSE	男鹿1	3.6	TRUE	月山1	154.4	FALSE	男鹿2	222.3	FALSE

距離:マハラノビス平方距離 判定はχ²乗検定(3σ)の結果

第7節 テフラ分析

1 試料

試料は基盤サンプルNo.11~16までの6点である。試料の詳細は地点名および層位は結果を呈示した表に併記する。

2 方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

3 結果・考察

結果を第34表に示す。火山ガラスが、No.11と12から極めて微量、No.15と16から微量検出された。No.11の火山ガラスは無色透明のバブル型と褐色の中間型、No.12の火山ガラスは褐色の軽石型、No.15と16の火山ガラスは、無色透明のバブル型と褐色のバブル型および無色透明の軽石型と褐色の軽石型が混在する。

火山ガラスの色調および形態の特徴さらには才ノ神遺跡の地理的位置と今回の分析で得られたXII層の年代観なども考慮すると、火山ガラスは、阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4テフラ(Aso-4:町

第34表 テフラ分析結果

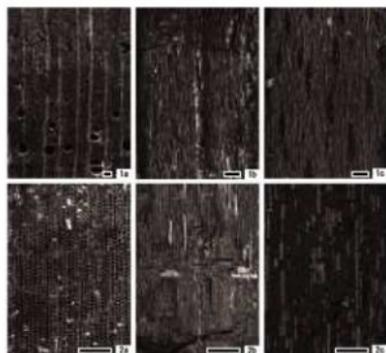
番号	層位	スコリア	火山ガラス		軽石
		量	量	色調・形態	
11	X層	—	(+)	cl・bw・br・nd	—
12	XII-1層	—	(+)	br・pm	—
13	XII-1層	—	—	—	—
14	(XII-2層)	—	—	—	—
15	XII-3層	—	+	cl・bw, cl・pm, br・bw, br・pm	—
16	XII-4層	—	+	cl・bw, cl・pm, br・bw, br・pm	—

凡例 —:含まれない, (+):さわめて微量, +:微量,
cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, nd:中間型, pm:軽石型。

田ほか,1985)に由来する可能性があると考えられる。Aso-4の噴出年代は、町田・新井(2003)では8.5-9.0万年前とされ、町田(2008)では8.8万年前とされている。いずれにしても、今回の刈屋中における火山ガラスの産状は、テフラ降灰後の攪乱再堆積を示すものと考えられ、詳細な年代の指標とはならない。

引用・参考文献

- Bronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991. 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31. 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32. 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33. 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34. 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35. 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 明治大学古文化財研究所, 2009. 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 -基礎データ集1- 明治大学古文化財研究所, 294p.
- 明治大学古文化財研究所, 2011. 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 -基礎データ集2- 明治大学古文化財研究所, 294p.
- 明治大学文学部, 2014a. 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 -基礎データ集3- 杉原重夫, 編. 義勝監修. 明治大学文学部, 170p.
- 明治大学文学部, 2014b. 日本における黒曜石の産状と理化学分析-資料集-75. 杉原重夫, 編. 義勝監修. 明治大学文学部, 170p.
- 望月明彦, 2004. 第5節 和野1遺跡出土の黒曜石製石鏃の石材原産地分析. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書452 集和野1遺跡発掘調査報告書, 476-480.
- 能城修一・佐々木由香, 2014. 遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の森林資源利用. 国立歴史民俗博物館研究報告, 187, 15-47.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas L., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosse D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修) 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosse D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach A.H. 1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野 浩 (日本語版監修) 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 吉川耕太郎・金成太郎・杉原重夫, 2011. 秋田県内出土黒曜石製遺物の原産地推定-新選1遺跡・柏木岱2遺跡・鳥野遺跡- 秋田県立博物館研究報告, 36, 61-72.
- 吉川耕太郎・佐藤 隆・黒田久子・柴田 徹・杉原重夫, 2015. 秋田県田沢湖産出黒曜石の岩石学的特徴・形成年代と湯前・黒倉B遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地推定. 秋田県立博物館研究報告, 40, 25-46.
- 町田 洋, 2008. 大磯丘陵から下総台地までの第四系. 日本地質学会編 日本地方地質誌 関東地方, 299-315.
- 町田 洋・新井房夫, 2003. 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・百瀬 貞, 1985. 阿蘇4火山灰-分布の広域性と後期更新世標層としての意義-. 火山, 30, 49-70.



1. クワ属?(炭-1)
2. 針葉樹(炭-27)

a:木口 b:柾目 c:板目
スケールは100 μ m



スケールは50 μ m

1. イネ科(No. 14)
2. シダ類単条溝胞子(No. 14)
3. シダ類単条溝胞子(No. 14)

第144図 炭化材・花粉化石



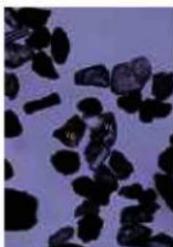
1. 砂分の状況
(基盤サンプル11(XI層):9)



2. 砂分の状況
(基盤サンプル14(XII-3層):12)



3. 砂分の状況
(基盤サンプル16(XII-5層):14)



4. 火山ガラス
(基盤サンプル16(XII-5層):14)

Vg: 火山ガラス.



第145図 テフラ

第5章 総括

2年間にわたる調査の結果、旧石器時代の石器ブロックと縄文時代の遺構及び遺物が多数確認された。旧石器時代については、地表面下約3mの深い位置に遺物包含層があったことや分布範囲が狭く限定的なことから、事前の確認調査では予測することができず、調査期間を延長し対応にあたることになった。結果としては、これが子吉川水系において、初の旧石器時代の本発掘調査成果となった。

縄文時代では、昭和の調査範囲からの続きと見られる縄文時代中期の集落跡や新たに縄文前期の後半の土器の集中範囲が確認された。以下、それぞれの時代毎に特筆される点に触れ総括としたい。

第1節 旧石器時代

1 石器群の編年の位置づけ

東北地方における後期旧石器時代編年は、吉川(2014)によって8時期に区分されている。後期旧石器時代前半期にあたる第1期前半は不定形の小型剥片石器群、第1期後半～第3期(始良丹沢火山灰降灰期)は台形石器と基部加工形態のナイフ形石器を特徴とする石器群が相当する。後半期は、東山系ナイフ形石器と関東地方以南の影響を受けた国府系・切出系ナイフ形石器群が出現する第4期に始まり、東山系に加えて杉久保系・茂呂系ナイフ形石器を特徴とする石器群が鼎立する第5期前半、小型ナイフ形石器と周辺加工・片面・両面加工を中心とした中・小型槍先形尖頭器が伴う第5期後半、両面調整の中・大型槍先形尖頭器石器群の第6期、削片系・非削片系細石核石器群が両立する第7期、長者久保系石器群の第8期への変遷が考えられている。各時期の放射性炭素年代測定による較正年代値のおおよそは、第1期(37,000～35,000 cal BP)、第2期(35,000～32,000 cal BP)、第3期(32,000～30,000 cal BP)、第4期(30,000～24,000 cal BP)、第5・6期(24,000～22,000 cal BP)、第7期(22,000～16,000 cal BP)、第8期(16,000～14,000 cal BP)である(吉川前掲、森先2022)。

ここでは以上の編年観に基づいて当該石器群の編年の位置付けを検討する。遺跡からは放射性炭素年代測定に供することのできる炭化物試料や広域火山灰等の噴火年代が特定できる火山灰が石器群に伴って検出されなかったため、ナイフ形石器の形態・型式学的特徴と石器製作技術のあり方及び他遺跡との比較から帰属時期について考える。

ナイフ形石器Ⅰ類は、石刃を断ち切るように急斜度な二側縁加工が施された二側縁加工形態ナイフ形石器で、関東・中部地方のいわゆる「砂川期」(武蔵野台地立川ローム層Ⅳ層中部段階)の茂呂系ナイフ形石器に対比される。如上の東北旧石器編年第5期前半(後期旧石器時代後半期中葉)に位置付けられる。ナイフ形石器Ⅱ類は、石刃の打面を上位に用いて基部が尖鋭となるように二次加工が施された基部加工形態ナイフ形石器で、杉久保系ナイフ形石器の範疇で捉えられる。Ⅰ類と同様、東北旧石器編年第5期前半に位置付けられる。ナイフ形石器Ⅰ・Ⅱ類が共存するのかどうかについては、製品のみ単独出土であるため言及はできない。本県では同時期の遺跡として、能代市鴨子台遺跡(秋田県教育委員会1992)・同市芹川館跡(秋田県教育委員会2006)・三種町堂の下遺跡(秋田県教育委員会2003)・由利本荘市龍門寺茶畑遺跡(秋田県教育委員会2004)等が挙げられる。

本石器群の主体となるのはナイフ形石器Ⅲ類とその製作過程を示す一連の資料群である。ナイフ形石器Ⅲ類は、単設打面石核を中心に得られた石刃の打面を下位に用い、基部や先端部に微細な二次加

工が施された基部加工形態ナイフ形石器である。このナイフ形石器Ⅲ類を特徴付ける微細加工は、秋田市松木台Ⅲ遺跡（秋田県教育委員会1986）や岩手県北上市南部工業団地内遺跡（北上市教育委員会1997）、福島県会津若松市笹山原No.10遺跡、同No.16遺跡のナイフ形石器に類例が認められる。剥片剥離技術をみると、石刃剥離技術 a・b 類は秋田市風無台1遺跡（秋田県教育委員会1985）、同 c 類は秋田市松木台Ⅲ遺跡や三種町家の下遺跡（秋田県教育委員会1998）など、後期旧石器時代前半期石器群において特徴的に認められる。ただ、オノ神遺跡では接合個体1が示すように、同一打面からの連続剥離により多数の石刃が剥離されており、他の石器群に抜きんでた技術の高さを伺うことができる。

以上から、本石器群は後期旧石器時代前半期初頭、台形石器を伴わない初期ナイフ形石器文化期の石器群であり、東北旧石器編年第1期後半（後期旧石器時代前半期前葉）に位置付けられる。ここで、第3章で述べた特徴を有する微細加工のナイフ形石器Ⅲ類を「オノ神型ナイフ形石器」と便宜的に命名しておく。また、本遺跡のナイフ形石器のうち第54図7も、松木台Ⅲ遺跡のナイフ形石器（報告書第7図3・4：318頁）に対比し得る特徴的な形態である。編年上の基準となるかどうかは一層の類例を待ちたい。なお、近年、長野県香坂山遺跡で後期旧石器時代初頭期の石刃石器群が検出されており、その特徴として大型石刃、小石刃、斜軸尖頭器の組成が挙げられている（国武2023、須藤2023）。今回図示していないが、本石器群にも小石刃（第56図の長軸30mm以下の石刃）のほか、「斜軸尖頭器」とも分類しうるナイフ形石器2点（第54図2・9）と剥片1点（実測図未掲載、石器No.329）がある。また、香坂山遺跡では石刃集積が報告されているが、オノ神遺跡の第1号ブロックのあり方と関連し、後期旧石器時代初頭における人々の共通した行動形態の可能性がある。今後、列島の後期旧石器時代初頭期石器群との対比は重要な課題となろう。

2 石材資源の獲得と消費からみた遺跡の性格

石器原料には珪質頁岩が専ら利用されている。肉眼観察からは、色調や珪化度合い、ラミナ・節理・玉髓化等の有無において石質差を見出すことができる。珪化度合いについて吉川（2012）の分類枠を用いると、本石器群には、珪質頁岩A類（玉髓質の珪質頁岩）、同B類（珪化作用が進行し油脂光沢の発達するもの）、同C類（珪化作用が弱く油脂光沢が見られないもの）の三者が認められる。また、後半期中葉のナイフ形石器3点は、珪質頁岩B類である。

本石器群のうち、前半期前葉石器群を見てみると、珪質頁岩A類はナイフ形石器（第55図3）、珪質頁岩B類は接合個体2・3・4・6・9・10・26等、珪質頁岩C類は接合個体1・5・8・19・28・30等である。原石にまで還元される9例の接合個体を見ると、遺跡内に持ち込まれている原石は、長軸15cm程度のC類の垂角礫～垂円礫が中心であり、原石形状は多面体・扁平板状・砲弾状を呈する。外皮はクレーター状の礫面か滑らかな風化面が形成されている。剥離面の色調は灰褐色～茶褐色で節理が挟在するものが多い。

本遺跡の眼下を流れる子吉川支流芋川流域の石材調査の結果、本石器群にみられたような珪質頁岩B・C類の原石分布を確認することができた。また、縄文時代の包含層からは直径50cmを超える大型の珪質頁岩A類原石が出土しており、近隣で獲得、遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。今後さらなる入念な石材調査が必要ではあるが、遺跡周辺で珪質頁岩A～C類の原石入手がなされたものと推測される。なお、本石器群の珪質頁岩B類にはラミナが見られるものもあるが、そうした原石は今のところ遺跡近隣では確認されていない。そうした石材は、より沿岸部でこれまでに確認されていることから、一層広い範囲を対象とした石材入手の検討が今後必要である。

今後、流域全体を対象としたさらなる石材環境調査が必要であるが、ナイフ形石器Ⅲ類（オノ神型）

石器群は、芋川流域で主に珪質頁岩B・C類を入手し遺跡内に搬入後、石刃剥離からナイフ形石器製作までの一連の作業を行い、製品や素材を使用・保管した結果、形成されたものと理解される。本遺跡は珪質頁岩分布領域内において一定期間生活が営まれた回帰的キャンプ地の性格を有するものと考えられる。原石を一括搬入・一括消費するあり方は、三種町家の下遺跡・秋田市地蔵田遺跡・同市七曲台遺跡群・大仙市小出I遺跡等の前半期石器群の特徴であり、「原料の二重構成と時差消費」(安藤1992)の典型的なパターンを示す接合資料を持つ能代市鴨子台遺跡・由利本荘市龍門寺茶畑遺跡等の後半期ナイフ形石器文化期石器群とは、原料消費の遺跡間連鎖のあり方において大きく一線を画す。

ナイフ形石器I・II類(茂呂系・杉久保系)石器群は、ナイフ形石器の単独出土であることから短期的な野営地もしくは狩猟地であったことを示すと推測されるが、遺跡は調査区外へと広がる可能性があることも留意しておきたい。

第2節 縄文時代

1 縄文時代の使用領域の変遷

オノ神遺跡のこれまでの発掘調査成果から、縄文時代における遺跡内の使用領域の変遷を推測してみる。

①堆積層と集落の形成

縄文時代の遺物包含層は、埋没沢周辺で広がりを確認したIX層が最古である。IX層は、平成29年の由利本荘市教育委員会(以下市教委)による発掘調査で確認された層序との比較から、早期遺物包含層に比定され、主に埋没沢から東方に広がると推測される。したがって、集落の中心部は今次調査区よりも東側にあると考えられる。

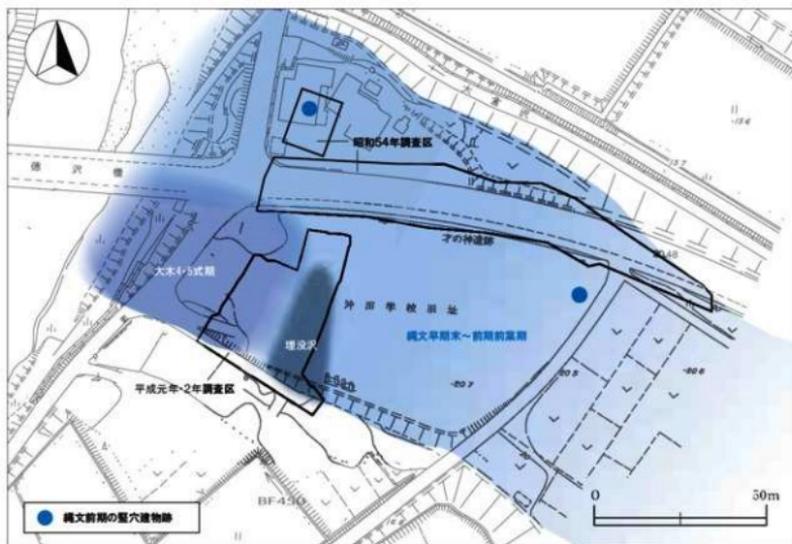
遺跡内堆積層の精査によって、縄文時代には度々大規模な河川氾濫に見舞われたことが判明した。前期VII層と中期IV層間には氾濫性堆積物で構成されるV・VI層が介在する。両層の堆積によって沢(埋没沢)の平坦化が進み、中期の集落形成が可能になったと推測される。

②前期 居住域(第146図)

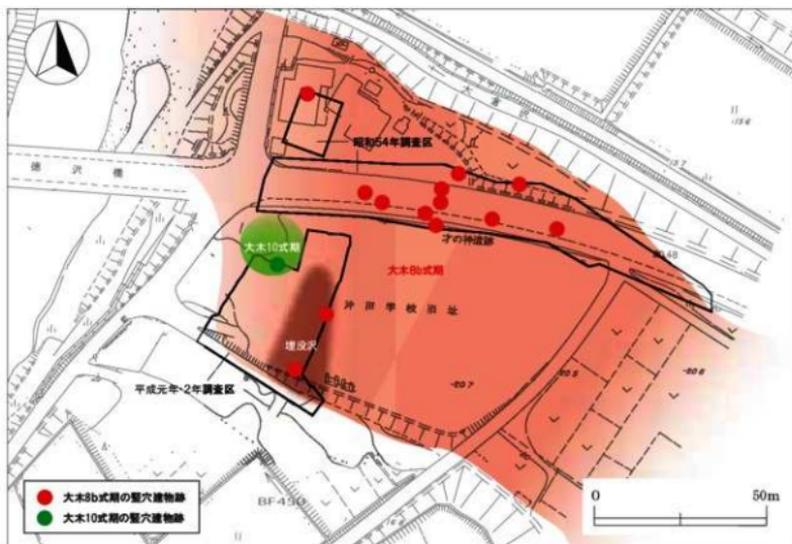
埋没沢の上方(北側)では、昭和54年調査で前期前葉の竪穴建物跡(SII7竪穴建物跡)が1棟検出されていることや、埋没沢東側の市教委による調査地点でも竪穴建物跡が検出されていることから、南北方向に走る埋没沢を囲むように集落が形成されていたと考えられる。ただし、大木4・5式期については、出土資料は今次調査区内西側に集中するようであるため、当期はこれより西側の現芋川流路方向に集落の中心域があったと推測される。

③中期前葉 居住域と墓域(第147図)

氾濫性堆積物で構成されるV・VI層の堆積後、広範囲にわたり竪穴建物跡が分布することから、大規模な集落を形成していた可能性があり、人々の営みが最も活性化した時期と考えられる。このうち大木8b式期は、竪穴建物の分布が埋没沢の西側に及ばないことや西側に向かうほど土器の出土量が減る傾向にあることから、埋没沢沢頭方向から埋没沢東側にかけてが集落の中心域と推測される。なお、石器については西側に出土のピークが見られ土器と様相を異にするが、当地では頁岩原石を含む女川層が浅い位置で確認できる(第7図XⅢ層)ことから、石材採取地周辺での石器製作も考慮する必要がある。先の調査では、立石を伴う土坑墓が確認されているが、今次調査でそれに類する遺構は確認されていない。この大木8b式期を最後に大木10式期に至るまでは、遺構ともに確認できない。



第146図 遺跡内使用領域の変遷（1）



第147図 遺跡内使用領域の変遷（2）

④ 中期末葉（第147図）

中期末の大木10式期については、竪穴建物跡1棟のみの検出であり、人々の積極的な活動の痕跡は見い出せない。遺跡内の未調査部分に集落が形成されている可能性があるが、当該期の遺物量が少ないため、小規模なものに留まると推測される。

2 土器の特徴

出土した各時期の土器数は18ℓコンテナ換算で、早期が0.5箱、前期が46.5箱、中期が24箱、晩期はSKP1022出土の1点であった。

ST62やその周辺で出土した早期の土器は表裏縄文の施文により、早期後葉の赤御堂式に比定される。前期の土器は複数の型式が混在する。前期の出土地点はST62を含め、西から東の埋没沢へ下る緩斜面のLSライン以西に集中しており、LRライン以東からの出土は少量である。また、昭和54年の調査（北～北東側）や平成29年の市教委による調査区（東側）においても大木4、5式土器の出土は希薄であるため、当該期の集落は調査区西側に形成されていた可能性が高い。中期の土器のほとんどは大木8b式に比定され、大木9、10式は掲載した土器のみであった。土製品についてもSI29の出土土器や昭和54年の調査で出土した同様の土製品と共伴する土器から大木8b式期の所産と考えられる。前期とは逆に中期の出土地点はLRライン以東に集中し、LSライン以西からの出土は少量である。さらに、昭和54年の調査で検出された大木8b式期の住居が調査区の北東に広がっているため、第147図の通り、今回の調査区の北から東側にかけて大木8b式期の集落が広がっていたと推測される。晩期の土器は肩部に数条の沈線が引かれていることから、大洞A式期の所産と考える。

以下、今回出土した土器の中で出土量が多く、複数の型式が混在するⅡ群土器（前期）について、類別ごとに特徴を述べ、型式比定を行っていく。

【Ⅱ群A類】異なる型式が混在する。第100図1は底部に同心円状の絡条体圧痕文が認められることから表館式に比定され、Ⅱ群B類の連続刺突文の代わりに絡条体圧痕文を用いたと考えられる。第118図4は無節の原体側面圧痕文と円形刺突文は、花積下層式の直線、曲線、蕨手状などの原体側面圧痕文が変容したものと捉えた。同図5は大木2a式に相当すると考える。

【Ⅱ群B類】連続刺突文が特徴的である。これらは新海和広氏が上川名Ⅱ式と表館式の過渡期に当てた土器群（新海2007）に類似するため、同様の時期の所産と考えられる。

【Ⅱ群C類】1点のみであった。S字状連鎖沈文を有することから大木2b式に比定される。

【Ⅱ群D類】地文上に半裁竹管による沈線文を描き、沈線文は口縁部に限定される。本県において前期の土器の中で半裁竹管による沈線文を施文するのは大木3・6式である。今回の調査で大木6式が確認されていないことから大木3式と考える。口縁部まで地文が及んでいるため、湯沢市白館跡の大木3式古相に該当する（小松2021）。しかし、半裁竹管による横位の沈線で口縁部文様帯を区画していることから、古相の中でも新しい段階と考える。

【Ⅱ群E類】Ⅱ群E1類は1点のみであった。第118図13は刻目付粘土紐貼付文と錐状工具による焼成後の刺突文である。同様の文様を有する土器が白館跡で出土しており、大木2b式古相に位置付けられている（小松2021）ため、当資料も同時期に該当すると考えられる。E2類は異なる型式が混在する。第100図5、第118図14は口縁部を区画する横位の太い隆帯に指頭押圧もしくは刺突文と付加するのが特徴である。本県では円筒下層b式に同様の土器が多く見られるため、当資料は円筒下層b式に比定される。近年調査された岩手県沢田Ⅲ遺跡では同様の土器と大木5式が同一住居から出土し、まとめて大木5式と報告されているため、大木5式の可能性もある。第100図6は縦位に連続する菱

形状の隆帯を貼付し、隆帯状に刺突文を付加する。同様の土器は大仙市協和の上ノ山Ⅱ遺跡（秋田県教育委員会1988）の第Ⅰ群第6類に見られ、大木4式に比定されている。また、松田光太郎氏は大木4式新段階には「太線隆文の存在も目立つ」（松田2020：324頁）と述べているため、第100図6は大木4式新段階と考えられる。E3類は1点のみであり、文様要素が乏しいため型式比定に至らなかった。E4類は太い隆帯や波状の隆帯の存在から大木4式に比定する。大木4式のメルクマールである粘土組または隆線や隆帯を有するⅡ群E2、E4類が極めて少ない。胎土はⅡ群F類と異なって繊維の比率が少なく砂質であるため、これらは搬入品の可能性がある。

【Ⅱ群F類】Ⅱ群F1類と同様の土器は上ノ山Ⅱ遺跡の第Ⅰ群第9類に見られ、大木4式に比定されている。興野義一氏も「大木4式は動線が曲線的」であることを指摘している（興野1969：6頁）。曲線的な沈線文を描く大木5式の事例は少ないため、それらの沈線文は興野氏が指摘した大木4式期に見られる曲線的な隆線が沈線化したものと考え、大木4式に比定する。F2類と同様の土器は上ノ山Ⅱ遺跡の第Ⅰ群第8類に見られ、大木5a式に比定されている。また、松田氏によっても鋸歯状沈線文を有するものは大木5a式に比定されている（松田2020）ため、当類も大木5a式と考えられる。F1類、F2類の中には大木4、5式にあまり見られない繊維が多量に含まれ、とくに内面のミガキ調整が顕著な土器が多数あり、地域性の強いものと考えられる。F3類の第121図6～8は大木5a式に比定される。同様の格子目状沈線文とF2類と同様の鋸歯状沈線文を有する土器が岩手県内で複数出土し、いずれも大木5a式に比定されている。同図2～5は判断に迷う。網目状燃糸文であるならば、縄文時代前期初頭～中葉に属する可能性がある。F4類は繊維を多く含む内面にミガキ調整が施され、直線的な沈線文を有していることから、F2類と同様に大木5a式と考える。

【Ⅱ群G類】梯子状というよりは興野氏（1969）の言う「電光線」にモチーフが近いため、大木5a式と考える。

【Ⅱ群H類】Ⅱ群H1類は上下施文幅が狭い非結束の羽状縄文が施されており、同様の地文を有する土器は新海氏が上川名Ⅱ式と表館式の過渡期に当てた土器群（新海2007）に類似するため、同様の時期の所産と考えられる。H2類は内湾する大波状口縁を有し、口縁部文様帯を設ける深鉢形土器である。同様の器形が白館跡から出土しているが、当類にはS字状連鎖沈文や隆帯が認められないため、前段階の大木2a式と考える。H3類は特徴的な地文から大木2b式に比定される。Ⅱ群H4、H5、H6類は上ノ山Ⅱ遺跡で似たような土器が出土していることから大木4、5式と考えられるが、器形、胎土、調整から型式が異なる可能性を指摘しておく。第104図2、第122図1・2は口縁部文様帯を設けず器面全体に地文が施され、底面と胴部下端の接合部分が外側に張り出すことから、円筒下層式に先行するいわゆる深鉢田式（白崎1941）の可能性もある。文様は単節縄文や燃糸文などの地文のみで、装飾性に乏しく、底面と胴部下端の接合部分が外側に張り出すのが特徴である（武藤1990）。上記の土器の胎土は砂質でミガキ調整が認められない。第104図3、第122図5は円筒形で燃糸文を横位から斜位に施し、口縁部文様帯を設け始めていることから、深鉢田式と円筒下層a式の過渡期のものかもしれない。H7類は大木5a式に比定される。同様の地文を有する土器が岩手県沢田Ⅲ遺跡で出土しており、大木5式に比定されている（岩手県文化振興事業団2021）ことから、当類も同時期の所産と考える。H8類は地文が判然とせず、型式比定が難しい。

今回の調査で出土したⅡ群土器の多くが大木4、5式に比定される。しかし、隆帯や隆線を有するものが極めて少なく、沈線文がほとんどであることや胎土に繊維を多量に含むなど、従来の大木4、5式とは異なる土器群が存在する。これは当該期におけるオノ神遺跡の特徴を表す資料となるであろう。

3 石器 縄文時代における石材利用からみたヒトの移動とモノの流通

オノ神遺跡では、在地石材と遠隔地石材の2種類の石器石材が出土している。在地石材については、珪質頁岩や玉髄質頁岩、玉髄、石英、鉄石英がある。9割以上の剥片石器には珪質頁岩が利用され、遺跡周辺には珪質頁岩の原石を含む女川層の露頭が確認されている。また、珪質頁岩や石英、鉄石英は遺跡近傍の子吉川支流芋川で採取可能である。出土層位ごとに石器石材を整理すると、縄文時代早期（IX層）には、ごく少量の玉髄質頁岩や玉髄、石英、鉄石英等がRFやUFで限定的に利用され、前期（VII層）では石鉄、石錐等の小形剥片石器に利用が広がる（第148図、第35表）。中期（IV層）になると、小形剥片石器製作に伴う楔形石器や残核も出土し、これらの在地石材はさらに普及する。特に、玉髄質頁岩については、小形剥片石器以外にも石槍や筥状石器などの大形剥片石器にも使われている。これらの特徴は、遺構内出土の石材利用においても共通する（第149図、第36表）。

珪質頁岩以外の在地石材は、縄文時代中期末以降に一般化すると指摘されているが（吉川2020b）、オノ神遺跡では縄文時代早期から利用が開始されている。その理由には、内陸部よりも産地から近いことが石材資源の利用が可能となった原因であると推定される。

遠隔地石材については、縄文時代前期（VII層）に緑色岩（アオトラ石）製磨製石斧が出土している。緑色岩（アオトラ石）は、北海道日高地方の額平川流域で産出され、県内では、縄文時代前期に東成瀬村上掬遺跡（中村・吉川2016）や大仙市上ノ山Ⅱ遺跡（吉川2020b）に類例がある。中期（IV層）では、男鹿産黒曜石製剥片石器や岩手県早池峰産透閃石岩製磨製石斧が出土している。黒曜石は、遺跡近傍の産地利用が指摘されており（吉川ほか2011、2015）、男鹿産黒曜石については県内沿岸部に出土量が多い傾向がある（赤星2018）。一方、早池峰産透閃石岩は、縄文時代後期の横手市八木遺跡（赤星・中村2022）や後・晩期の湯沢市堀ノ内遺跡（中村2019）で確認されている。

第35表 層別別石材利用一覧

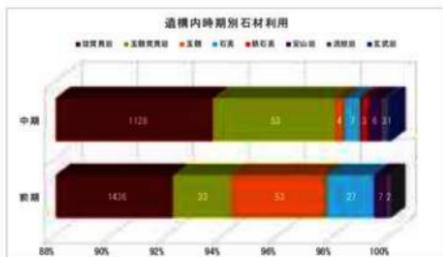
	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層	合計
珪質頁岩	313	554	2488	4895	7247
玉髄質頁岩		7	53	167	227
玉髄	1	5	38	35	79
石英		4	36	38	78
鉄石英		1	4	7	12
碧玉		1			1
黒曜石				1	1
安山岩	2	4	9	23	38
流紋岩		1	2	6	9
閃緑岩		1			1
玄武岩				3	3
粗粒玄武岩			1	1	2
花崗岩				4	4
緑色緑閃岩				1	1
結晶片岩			1	1	2
緑色岩			1	1	1
透閃石岩				1	1
合計	316	578	2623	4380	7297

第36表 遺構内時期別石材利用一覧

	前期	中期	合計
珪質頁岩	1436	1128	2564
玉髄質頁岩	33	53	86
玉髄	53	4	57
石英	27	7	34
鉄石英		3	3
安山岩	7	6	13
流紋岩	2	3	5
玄武岩		1	1
合計	1558	1263	2763



第148図 層別別石材利用



第149図 遺構内時期別石材利用

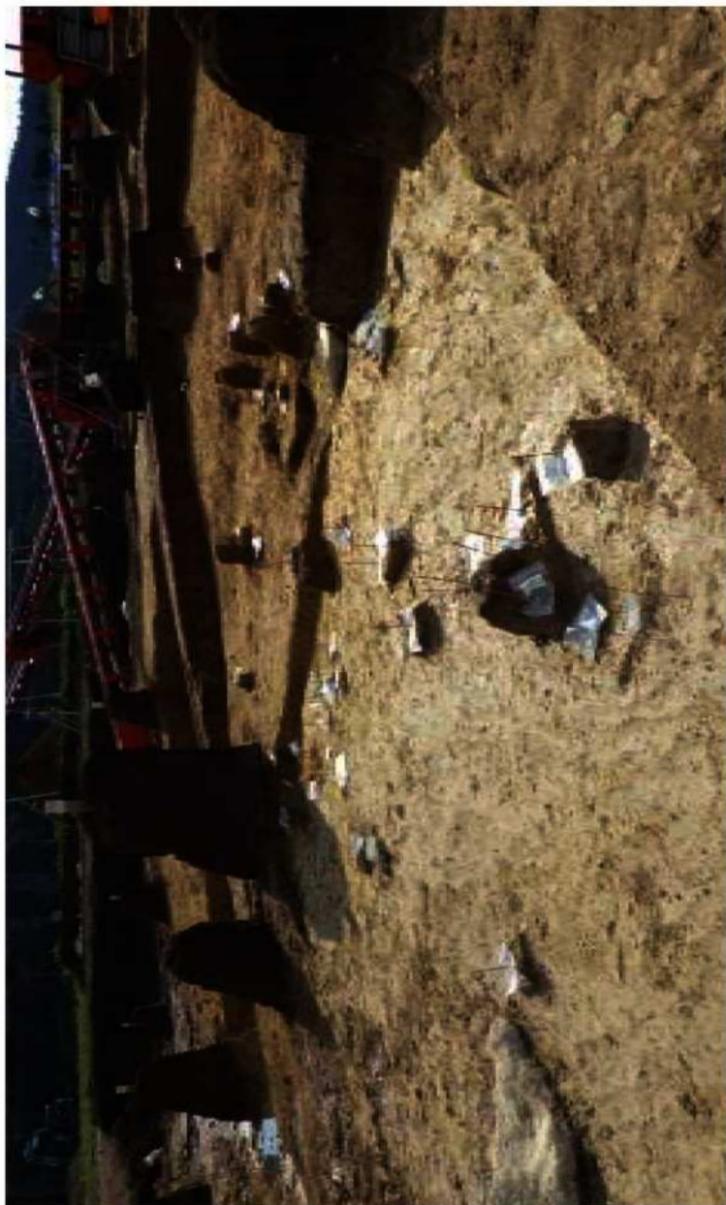
遠隔地石材を中心に見ていくと、オノ神遺跡は製品を搬入する消費地遺跡となる。視点を変えて在地石材を中心にみると、産地に近い生産地遺跡となり、オノ神遺跡で製作された石器は移動や交換によって他の遺跡へ搬出された可能性が想定される。すなわち、縄文時代前期では津軽海峡をまたいで石器石材の流入が見られ、中期になると、日本海沿岸を南下する経路と奥羽山脈を越える経路から石材の搬入が認められる。これら2つの時期に3つの経路が交わる場所がオノ神遺跡であり、この経路上およびその先には在地石材の搬出先となる遺跡が想定できるだろう。

参考文献

- 赤星純平2018「縄文時代の黒曜石産地分析集成-秋田県域を中心に-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第32号
 赤星純平・中村由克2022「縄文時代後期における磨製石斧の形態と石材利用」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第36号
 秋田県教育委員会1985「七曲山遺跡群発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第125集
 秋田県教育委員会1986「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ」秋田県文化財調査報告書第150集
 秋田県教育委員会1988「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ-上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡-」秋田県文化財調査報告書第166集
 秋田県教育委員会1991「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ」秋田県文化財調査報告書第206集
 秋田県教育委員会1992「一般国道7号琴丘能代建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」秋田県文化財調査報告書第230集
 秋田県教育委員会1998「家の遺跡(2)旧石器時代編-県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-」秋田県文化財調査報告書第275集
 秋田県教育委員会2003「堂の下遺跡Ⅰ旧石器時代-弥生時代編-日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-」秋田県文化財調査報告書第356集
 秋田県教育委員会2004「龍門寺茶畑遺跡 向山遺跡-主要地方道本荘若城線ふるさとづくり推進事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」秋田県文化財調査報告書第373集
 秋田県教育委員会2006「芹川遺跡-一般国道7号琴丘能代建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-」秋田県文化財調査報告書第405集
 秋田県教育委員会2006「郷手下遺跡-一般国道7号琴丘能代建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ-」秋田県文化財調査報告書第410集
 安藤政雄1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『考古学』第86号 職台史学会
 五十嵐彰1998「考古資料の複合-石器研究における母岩・個体問題-」『史学』第67巻3・4号 三田史学会
 五十嵐彰2002「旧石器資料関係論-旧石器資料報告の現状(Ⅱ)-」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要』第19号
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2021「岩手山遺跡発掘調査報告書 三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第722集
 岩手県教育委員会1997「南部工業団地内遺跡Ⅲ」北上市埋蔵文化財調査報告 27
 国武貞志2023「香取山遺跡の石器群と中央アジアの初期後期旧石器時代遺跡」『考古学ジャーナル』No.777 ニューサイエンス社
 興野真一1969「大木式土器理解のために(V)」『考古学ジャーナル』No.32 ニューサイエンス社
 小松和幸2021「横手盆地南部における縄文時代前期の土器様相-臼館跡からみる大木2b~3式土器」『秋田考古学』第64・65合併号 秋田考古学協会
 佐原真1985「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
 白崎高俊1941「青森県中里村出土の条痕土器」『古代文化』第12巻第7号 日本古代文化学会
 新海和広2007「秋田県内の縄文時代前期初頭-前集期土器群の様相再検討-鳥野上信遺跡Ⅱ群土器の再分類-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第21号
 須藤隆司2023「香取山遺跡の石打システム」『考古学ジャーナル』No.777 ニューサイエンス社
 田中英司2001「日本先史時代におけるデボの研究」千葉大学考古学叢書1
 中村由克2019「秋田県湯沢市堀ノ内遺跡における縄文時代の石器石材」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第33号
 中村由克・吉川耕太郎2016「秋田県東成瀬川上輪跡出土の大型磨製石斧の石材について」『秋田県立博物館研究報告』第41号
 松田光太郎2020「縄文時代前期の広域土器編年とその展望 諸磯式土器を中心として」六一書房
 武藤康弘1991「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究Ⅱ-円筒下層a式直前の土器群をめぐって-」『考古学雑誌』第76巻第3号
 森先一貴2022「旧石器社会の人類生態学」同成社
 吉川耕太郎2003「個体別資料分析の再検討-琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号
 吉川耕太郎2007「石器原料の獲得・消費と移動領域の編成-後期旧石器時代前半期における珪質頁岩地帯からの一試論-」『旧石器研究』第3号 日本旧石器学会
 吉川耕太郎2010「東北地方のナイフ形石器」『考古学研究』第57巻第3号 考古学研究所
 吉川耕太郎・金成太郎・杉原茂夫2011「秋田県内出土黒曜石製遺物の原産地推定-新旭Ⅰ遺跡・柏木信Ⅱ遺跡・鳥野遺跡-」『秋田県立博物館研究報告』第36号
 吉川耕太郎2012「北の縄文鉱山 上岩川遺跡群」新泉社
 吉川耕太郎2014「東北地方における旧石器時代の編年と年代」『旧石器研究』第10号 日本旧石器学会
 吉川耕太郎・佐藤 隆・黒田久子・柴田 徹・杉原重夫2015「秋田県田沢湖産出黒曜石の岩石学的特徴・形成年代と湯前・黒倉B遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地推定」『秋田県立博物館研究報告』第40号
 吉川耕太郎2017「郷手下遺跡にみる石器原料の獲得消費活動と遺跡形成」『安藤政雄先生古希記念論文集 旧石器時代の知恵と技術の考古学』鎌山閣
 吉川耕太郎2020a「秋田県南部内陸域における珪質頁岩産地分布調査-石器石材産地特性の理解に向けて-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第34号
 吉川耕太郎2020b「東北地方の石器石材」『考古学調査ハンドブック20 縄文石器試論』株式会社ニューサイエンス社
 吉川耕太郎2022「なぜ石器は集積されたのか-秋田県の石器集積遺構理解のための一試論-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第36号

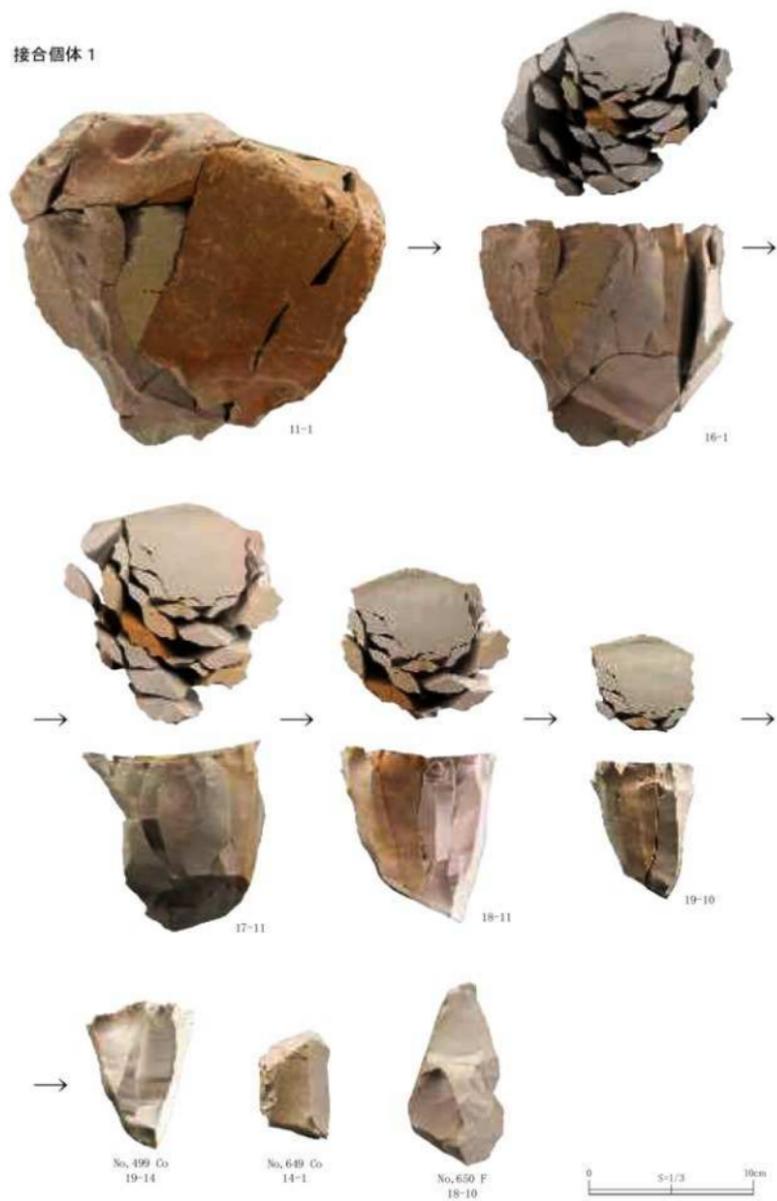


旧石器時代の石器集中部（2）（南西から）

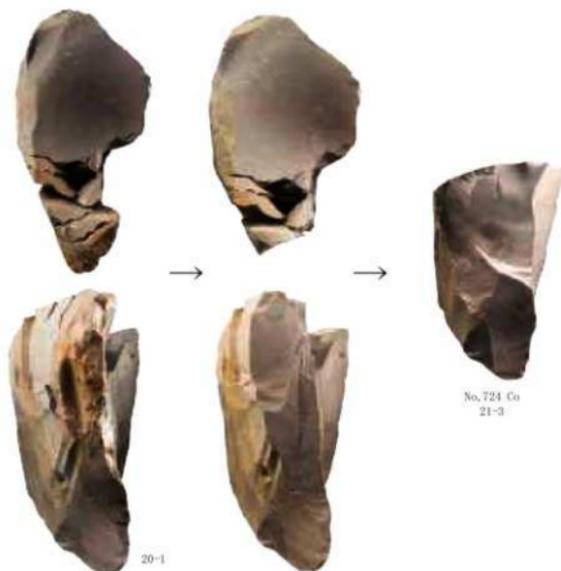


旧石器時代の石器集中部(3)(北東から)

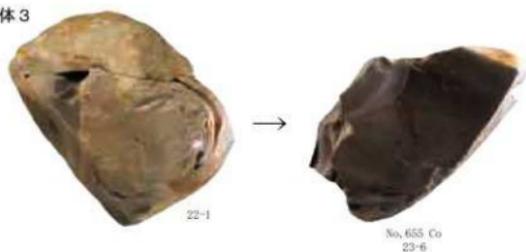
接合個体 1



接合個体 2



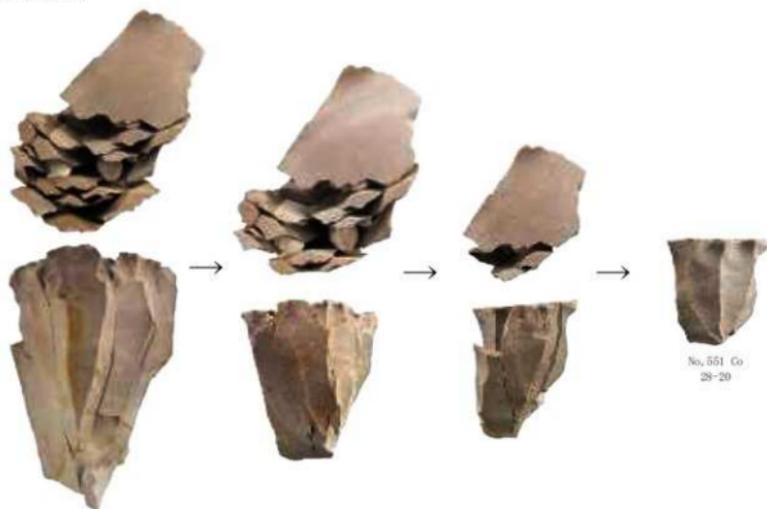
接合個体 3



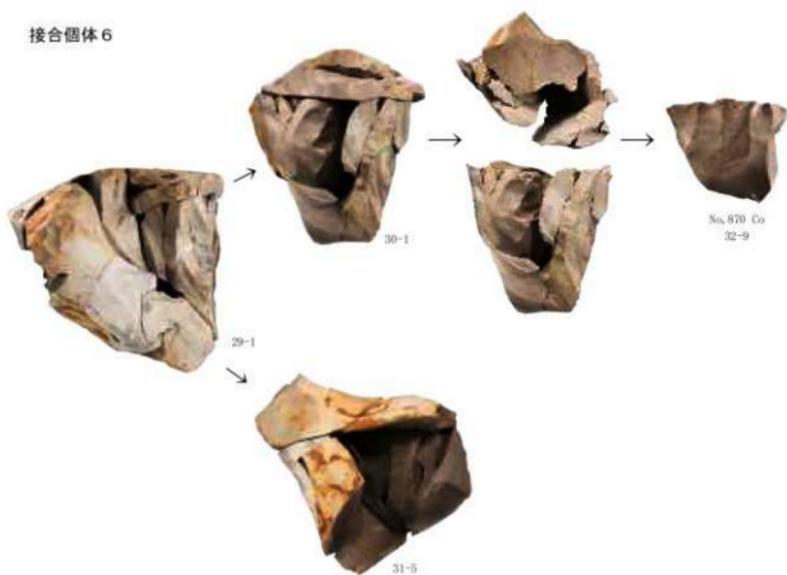
接合個体 4



接合個体 5



接合個体 6



接合個體 8



接合個體 9



接合個體 10



接合個體 19



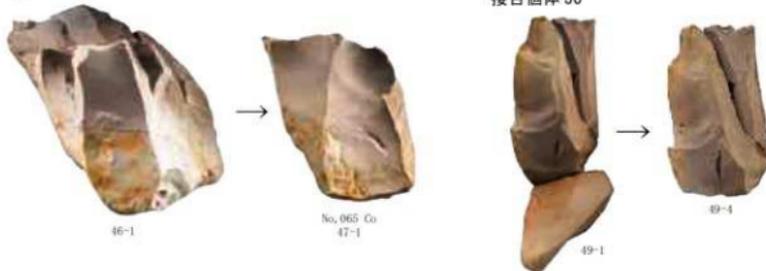
接合個体 14 接合個体 15 接合個体 16 接合個体 17 接合個体 18 接合個体 20 接合個体 21



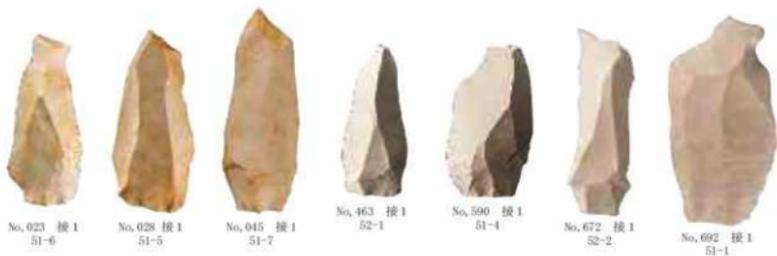
接合個体 22 接合個体 23 接合個体 24 接合個体 28



接合個体 26 接合個体 30



接合個体 33 接合個体 34 接合個体 37 接合個体 39 接合個体 40







SI22 複式炉確認状況（西から）



SI22 完掘（南西から）



SI28 石囲炉確認状況（南西から）



SI28 半掘（西から）



SI40 土器埋設炉土層断面（南から）



SI40 完掘（西から）



SKI29 完掘（北東から）



SKI33 完掘（東から）



SK137 完掘 (南から)



SK139 完掘 (南から)



SK141 完掘 (南から)



SK143 完掘 (南から)



SK02 遺物出土状況 (南西から)



SK02 完掘 (南西から)



SK12 完掘 (南から)



SK13 完掘 (西から)



SK15 完掘 (東から)



SK19 完掘 (北東から)



SK26 完掘 (東から)



SK36 完掘 (南西から)



SK38 完掘 (東から)



SK42 完掘 (北東から)



SK46 完掘 (東から)



SK50 完掘 (南西から)



SK56 完掘（南から）



SK63 遺物出土状況（東から）



SK64 完掘（南から）



SK65 完掘（北から）



SR16 遺物出土状況（東から）



SR16 土層断面（東から）



SN06 土層断面（北から）



SN20 土層断面（北から）



SN21 確認状況（西から）



SN21 土層断面（西から）



SN27 土層断面（東から）



SN30 土層断面（北から）



SN32 確認状況（南西から）



SN32 土層断面（北から）



SN44 土層断面（南から）



SN47 確認状況（南から）



SN48 確認状況（南から）



SN55 土層断面（南西から）



SN58 土層断面（西から）



SN59 確認状況（東から）



SD61 完掘（南西から）



ST62 確認状況（南西から）



ST62 遺物出土状況（北東から）

S122



64-1



64-2



64-3



64-4



64-5



64-6

S122



65-1



65-2



65-3

65-4



65-5



65-7



65-6



S128



68-1



68-2



68-3



68-4



68-5



68-6



68-7



68-8



68-9



68-10



68-11

S128



68-12



69-1



68-13



68-14



69-1



69-2



69-3

遺構外 (S128 北側)



68-15



68-16

S128



S140



SK129



76-1



76-2



76-3



76-4



76-5



76-6



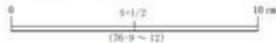
76-7



76-8



76-9 76-10 76-11 76-12



(76-9 ~ 12)



76-13



76-14



76-15



76-16



76-17



77-1



76-18



76-20



76-19



78-1



77-4



77-2



77-5



77-3



77-6



77-7



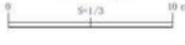
78-2



78-3



(77-1 ~ 8)



SK133



80-1



80-2



80-3



80-4



80-5



80-6



80-7



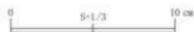
SK42



SK46



SK64



SR16



SD61



ST62



100-1



100-2



100-3



100-4



100-5



100-6



100-7



100-8



100-9



100-10



101-1

ST62



101-2



101-3



101-4



102-1



102-2



102-4



102-3



102-5



102-6



102-7

ST62



ST62



104-1



104-2

SKP1118



115-1



115-2



104-6

SKP1093



115-3



115-4

SKP1060



115-6

SKP1121



115-7

SKP1022



115-5

SKP1132



115-9



115-10

SKP1128

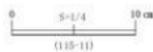


115-8

SKP1133



115-11



ST62





118-1



118-2



118-3



118-4

118-5



118-6



118-7



118-8



118-9



118-10



118-11



118-12



118-13



118-14



118-15



118-16



119-1



119-2



119-3



119-4



119-5



119-6



119-7



119-8



120-1



120-2





122-2



122-3



122-4



122-5



123-1



123-2



123-3



123-4



123-5



123-6



123-7



123-8



123-9



123-10



123-11



123-12



123-13



124-1



124-2



124-4



124-3



124-5



124-6



124-7



124-8



124-9



124-10



124-11



124-12



124-13



124-14



124-15



124-16



126-1



126-2



126-3



126-4



126-5



126-6



126-7



126-8



126-9



126-10



126-11



126-12





報 告 書 抄 録

ふりがな	さいのかみいせき							
書名	才ノ神遺跡							
副書名	河川改修事業(芋川)に係る埋蔵文化財文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第527集							
編著者名	村上義直 赤星純平 小松和平 吉川耕太郎 巴亜子 赤上秀人 大上立朗							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2023年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
才ノ神遺跡	秋田県由利本荘市徳沢字才ノ神63-2外	05210	210-44-30	39°26′23″	140°14′08″	20190701 20190926 20200512 20200930	1,250㎡	河川改修事業(芋川)に係る埋蔵文化財事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
才ノ神遺跡	キャンプ地	旧石器時代	石器ブロック	3か所	ナイフ形石器 削器 彫刻刀形石器 錐状石器 石刃・剥片類 石核	旧石器時代 後期旧石器時代前半期初頭のナイフ形石器を伴う石器ブロックを検出した。		
	集落遺跡	縄文時代	竪穴建物跡 竪穴状遺構 土坑 土器埋設遺構 焼土遺構 溝状遺構 土器集中範囲 柱穴ビット 性格不明遺構	3軒 6基 23基 1基 12基 1条 1か所 120基 2基	縄文土器 土製品 石器 石製品	縄文時代 当遺跡のこれまでの調査では認識されていなかった大木4～5式期の遺物集中範囲が検出され、多くの土器・石器が出土した。		
	集落遺跡	近世	土坑	4基	陶磁器			
要約	<p>旧石器時代は、芋川流域で珪質頁岩を入手し、遺跡内に搬入後、石刃剥離からナイフ形石器製作を行い、製品や素材を使用、保管した結果、石器ブロックが形成された。本遺跡の性格は、一定期間生活が営まれた回帰的キャンプ地である。</p> <p>縄文時代は、度々河川の氾濫に見舞われながらも、早期から晩期にかけて断続的に使用された遺跡であることが判明した。先行調査も勘案すると、平坦化した埋没沼上まで集落が拡大する中期が盛期となる。</p>							

秋田県文化財調査報告書第527集

才ノ神遺跡

—河川改修事業(芋川)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 令和5年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市弘田字牛嶋20番地
電話 (0187) 69-3331
FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社三森印刷

